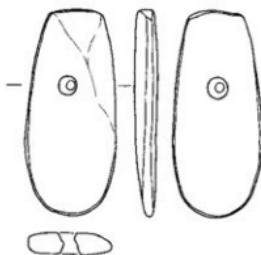


一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅱ

上ノ垣外遺跡



1 9 9 6 · 3

三重県埋蔵文化財センター



遠跡遠景（南から）



第2次調査（中地区）全景(東から)



S X 3 (東から)



大珠

序

櫛田川が中流から下流域へと、その景観を変えようとする多気町一帯には、古くは旧石器時代から、営々とした人間の営みがありました。それらは、土地に埋もれた遺跡として今に残り、住居の跡や彼らが使った土器などの多数の遺物が、遠い昔のひとびとの暮らしぶりを思いおこさせてくれます。

いうまでもなく、これらの遺跡・遺物（埋蔵文化財）は、地域固有の歴史遺産として私たち祖先の生活の一端を知る唯一の手掛かりとなるもので、一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものです。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設などの各種開発との調和をはかるべく努力しておりますが、工事などによってどうしても保存ができないものについては、当埋蔵文化財センターで発掘調査を行い、記録を保存することにしております。

ここに報告いたします上ノ垣外遺跡は、国道42号松阪・多気バイパスの建設に伴って、平成5・6年度に発掘調査を実施した遺跡で、松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書の第2分冊にあたります。

詳しくは報告書本文にゆずりますが、古くは縄文時代の土器や石器をはじめとして、弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町と、ほとんど絶え間なく人々が生活を営んだ場であったことがわかりました。この発掘調査の成果が、歴史研究のみならず地域文化の理解と向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、社団法人中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位や地元の方々などから、ひとかたならぬご理解とご協力をいただきましたことに対しまして厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成6・7年度に整理・報告書作成業務を実施した、上ノ垣外遺跡の発掘調査報告書である。

なお、発掘調査時点では巢護遺跡としていた一部分についても、遺構のつながりから上ノ垣外遺跡に含めて扱った。

2. 現地発掘調査および整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3. 本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』IV・Vおよび『国道42号バイパス　松阪・多気　発掘調査だより』№9・11で紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。

4. 卷頭図版および写真図版に使用した航空写真の一部は、建設省紀勢国道工事事務所より提供を受けたものである。

5. 本書に使用した地図は、建設省紀勢国道工事事務所作成の松阪・多気バイパス平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000）、多気町作成の都市計画図（1：2,500）を使用した。

6. 現地調査は第1次調査と、巢護遺跡として調査した部分を西村修久が、第2次調査を東良樹と下平康弘が担当した。

7. 本書執筆の分担については、目次に示したほか文末にも記した。編集・校正を田村がを行い、伊藤克幸が全体を校閲した。本書に掲載した遺構写真は東、西村、下平が、遺物写真は田村、西村が撮影した。

8. 本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。

9. 発掘調査および報告書作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

赤塚次郎	石井 寛	泉 択良	磯部 克	一瀬和夫	伊藤正人	岩瀬彰利	岩野見司
大下 明	岡田 登	奥 義次	加納 実	河瀬信幸	久保勝正	菅谷通保	秋田かな子
鈴木徳男	千葉 豊	富井 真	外山秀一	成瀬正和	西田泰民	野口哲也	服部信博
藤澤良祐	家根祥多	矢野健一					

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

凡　　例

1. 調査区の位置は、国土座標第VI系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。
なお、真北は座標北のN 0° 18' 44" W、磁北は座標北のN 6° 48' 44" Wである。

2. 発掘調査および整理作業は、『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関する基本マニュアル』(三重県埋蔵文化財センター 1993)に基づき実施した。本報告書で使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。

S H	堅穴住居	S B	掘立柱建物	S A	槽	S X	墓
S Z	性格不明遺構	S D	溝	S E	井戸	S K	土坑
Pit	ピット						

3. 本報告書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。当該箇所のキャプションに記した。

1) 地形図	1:50,000、1:25,000
遺跡地形図	1:5,000
調査区位置図	1:2,000
2) 遺構実測図	
遺構平面図	1:200
遺構実測図	1:20、1:50、1:100
3) 遺物実測図	
土器	原則として1:4　ただし拓影は1:3
石器	原則として2:3

4. 本報告書では、土層および遺物の色調を、小山・竹原編『新版標準土色帖』(9版1989)を使用した。

5. 本報告書に掲載した遺物写真的縮尺は概ね1:3もしくは1:2である。

6. 本報告書では、用語の漢字表記を次のように統一した。

どころか……その性格が墓と認められるものについては「土」「墓」とし、それ以外のものは「土坑」とした。

わん…………「碗」「塊」「椀」があるが、「椀」を用いた。

つき…………「杯」「杯」があるが、「杯」を用いた。

なべ…………「鍋」「鍋」があるが、「鍋」を用いた。

7. 山茶椀の時期については、瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏の直接の御教示や氏の論考(「穴田南窯址群発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」瀬戸市歴史民俗資料館 1983、「山茶椀と中世集落」「尾呂」瀬戸市教育委員会1990、「山茶椀研究の現状と課題」「研究紀要」第3号 三重県埋蔵文化財センター1994等)を参考にし、氏の編年観の何型式の時期にあてはまるかという意味で、「藤澤編年〇型式」という表記を用いた。

目 次

I. 前 言

1. 調査の経過 (田村陽一) 1

II. 上ノ垣外遺跡

1. 位置と環境 (タ) 6
2. 層序 (タ) 11
3. 遺構と遺物
(1) 遺構の分布概要 (タ) 11
(2) 縄文時代の遺構と遺物 (田村陽一・西村修久) 11
(3) 弥生～古墳時代の遺構と遺物 (タ) 18
(4) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物 (タ) 24
(5) 平安～鎌倉時代の遺構と遺物 (タ) 29
(6) 鎌倉末期～室町時代の遺構と遺物 (タ) 51
(7) ピット出土の遺物 (田村陽一) 54
(8) 遺物包含層出土の遺物 (タ) 56
4. 自然科学分析 (パリノ・サーベイ) 70

- III. 結 語 (田村陽一・西村修久) 74

- 遺構番号対照表 77
写真図版 78
遺物観察表 137
報告書抄録 165

◆ 表紙カット 大珠（上ノ垣外遺跡出土）

図版目次

PL 1. 昭和23年極東米軍撮影空中写真	78
PL 2. 遺跡遠景（西上空から）	
調査前全景（北から）	79
PL 3. 調査後全景（北上空から）	
調査後全景（南上空から）	80
PL 4. 第1次調査（北地区、西上空から）	
第1次調査（北地区、北から）	81
PL 5. 第2次調査（中地区、西上空から）	
第2次調査（中地区、北から）	82
PL 6. 巢籠遺跡区（南地区、西上空から）	
巣籠遺跡区（南地区）調査風景	83
PL 7. SK 1（北から）	
SK 1 繩文土器出土状況（東から）	84
PL 8. SX 2 検出状況（南から）	
SX 2 埋設状況（東から）	85
PL 9. SX 3（東から）	
SX 3（北から）	86
PL10. SX 3 南周溝遺物出土状況（東から）	
SX 3 南周溝遺物出土状況（西から）	87
PL11. SX 3 北周溝遺物出土状況（東から）	
SX 3 西周溝・SD 9 断面（南から）	88
PL12. SX 4（東から）	
第2次調査（中地区）調査風景	89
PL13. SH 10（南から）	
SH 11・12（北から）	90
PL14. SX 13（南西から）	
Pit.66 遺物出土状況	91
PL15. SZ 16（南から）	
SZ 17（北西から）	92
PL16. Pit.67 検出状況	
Pit.67 遺物出土状況	93
PL17. SK 48 遺物出土状況（北から）	
SD 8 発掘区東壁断面（南西から）	94
PL18. SE 42上部遺物出土状況（北から）	
SE 42下部遺物出土状況（南から）	95
PL19. SE 42下部遺物出土状況（南から）	
SE 44曲物出土状況（南から）	96
PL20. Pit.68（南から）	
Pit.71（西から）	97
PL21. SB 20・21・22ほか（南から）	
SB 23・24・25・26ほか（東から）	98
PL22. SB 33・34・35・36ほか（南から）	
SB 23・24・SA 38ほか（南から）	99
PL23. SB 23・24・SA 38ほか（東から）	
SB 20・21ほか（東から）	100
PL24. 第1次調査（北地区）主要遺構（西から）	
SX 53（西から）	101
PL25. SZ 54（西から）	
SZ 54（北から）	102
PL26. SZ 55（南から）	
SD 56（西から）	103
PL27. SZ 69（西から）	
第1次調査（北地区）調査風景	104
PL28. 繩文土器（479）出土状況	
繩文土器（489）出土状況	105
PL29. 出土遺物	
PL30. 出土遺物	
PL31. 出土遺物	
PL32. 出土遺物	
PL33. 出土遺物	
PL34. 出土遺物	
PL35. 出土遺物	
PL36. 出土遺物	
PL37. 出土遺物	
PL38. 出土遺物	
PL39. 出土遺物	
PL40. 出土遺物	
PL41. 出土遺物	
PL42. 出土遺物	
PL43. 出土遺物	
PL44. 出土遺物	
PL45. 出土遺物	
PL46. 出土遺物	
PL47. 出土遺物	
PL48. 出土遺物	
PL49. 出土遺物	
PL50. 出土遺物	
PL51. 出土遺物	
PL52. 出土遺物	
PL53. 出土遺物	
PL54. 出土遺物	
PL55. 出土遺物	
PL56. 出土遺物	
PL57. 出土遺物	
PL58. 出土遺物	
PL59. 出土遺物	

挿図目次

第1図	路線・工区・遺跡位置図 (1:50,000)	… 2
第2図	遺跡地形図 (1:5,000)	… 6
第3図	明治期の遺跡周辺地形図 (1:20,000)	… 8
第4図	遺跡位置図 (1:25,000)	… 9
第5図	調査区位置図 (1:2,000)	… 10
第6図	地区割図 (1:800)	… 10
第7図	発掘区東壁土層断面図 (1:40)	… 12
第8図	遺構平面図 (1:400)	… 13・14
第9図	SK 1 実測図 (1:50)	… 15
第10図	SK 1 出土遺物実測図 (1:4) 拓影 (1:3)	… 16
第11図	SX 2 実測図 (1:10), 遺物実測図 (1:4)	… 17
第12図	SK05実測図 (1:50), 遺物拓影 (1:3)	… 17
第13図	SX 3 実測図 (1:200), 計測図 (1:400)	… 19
第14図	SX 3 周溝断面図 (1:40)	… 20
第15図	SX 3 周溝遺物出土状況図 (1:40)	… 21
第16図	SX 3 出土遺物実測図 (1:4)	… 22
第17図	SX 4 実測図 (1:100), 遺物拓影 (1:3)	… 23
第18図	Pit.64, Pit.65出土遺物実測図 (1:4)	… 24
第19図	SH10実測図 (1:50), 出土遺物実測図 (1:4)	… 25
第20図	SH11・12実測図 (1:50), 出土遺物実測図 (1:4)	… 26
第21図	SX13実測図 (1:50), 出土遺物実測図 (1:4)	… 27
第22図	SD 7・8 出土遺物実測図 (1:4)	… 28
第23図	Pit.66, Pit.67出土遺物実測図 (1:4)	… 29
第24図	SD14出土遺物実測図 (1:4)	… 30
第25図	SD14出土縄文土器拓影 (1:3)	… 31
第26図	SD15出土遺物実測図 (1:4) 拓影 (1:3)	… 32
第27図	SZ16実測図 (1:50)	… 32
第28図	SZ17実測図 (1:20), 出土遺物実測図・拓影 (1:4)	… 33
第29図	SB18・19・20・21・22実測図 (1:100)	… 35
第30図	SB23・24・25・26実測図 (1:100)	… 36
第31図	SB27・28・29・30実測図 (1:100)	… 38
第32図	SB33・34・35・36実測図 (1:100)	… 39
第33図	SB31・32・37実測図 (1:100)	… 40
第34図	掘立柱建物出土遺物実測図 (1:4)	… 41
第35図	SD40出土遺物実測図 (1:4)	… 41
第36図	Pit.68実測図 (1:20), 出土遺物実測図 (1:4)	… 42
第37図	SE42遺物出土状況実測図 (1:20)	… 43
第38図	SE42出土遺物実測図 (1:4ほか)	… 44
第39図	SE46実測図 (1:40), 出土遺物実測図 (1:4)	… 46
第40図	SD41, SE43, SE47, SK49 出土遺物実測図 (1:4)	… 48
第41図	SK48実測図 (1:50), 出土遺物実測図 (1:4)	… 50
第42図	SX53実測図 (1:20), 出土遺物実測図 (1:4)	… 51
第43図	SZ54実測図 (1:50), 出土遺物実測図 (1:4)	… 53
第44図	SZ55出土遺物実測図 (1:4)	… 54
第45図	SD56・57・58出土遺物実測図 (1:4)	… 55
第46図	ピット出土遺物実測図 (1:4)	… 57
第47図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 58
第48図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 59
第49図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 60
第50図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 61
第51図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 62
第52図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 63
第53図	包含層出土縄文土器実測図 (1:4)	… 63
第54図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 64
第55図	包含層出土縄文土器拓影 (1:3)	… 65
第56図	包含層出土縄文土器実測図, 拓影 (1:3)	… 65
第57図	包含層出土遺物実測図 (1:4)	… 66
第58図	大珠実測図 (1:1)	… 67
第59図	打製石斧実測図 (1:4)	… 67
第60図	石器実測図 (2:3)	… 68
第61図	石器実測図 (1:2)	… 69

表 目 次

第1表	遺跡概況	… 3
第2表	調査経過および予定	… 4
第3表	発掘調査遺跡一覧	… 5
第4表	掘立柱建物・欄列一覧	… 42
第5表	石器一覧	… 67
第6表	SX3, SE42土壤分析試料	… 73
第7表	SX3, SE42リン・カルシウム分析結果	… 73
第8表	SZ54リン・カルシウム分析結果	… 73
第9表	遺構番号对照表	… 77
第10表	遺物観察表(1)	… 137
第11表	遺物観察表(2)	… 138
第12表	遺物観察表(3)	… 139
第13表	遺物観察表(4)	… 140
第14表	遺物観察表(5)	… 141
第15表	遺物観察表(6)	… 142
第16表	遺物観察表(7)	… 143
第17表	遺物観察表(8)	… 144
第18表	遺物観察表(9)	… 145
第19表	遺物観察表(10)	… 146
第20表	遺物観察表(11)	… 147
第21表	遺物観察表(12)	… 148
第22表	遺物観察表(13)	… 149
第23表	遺物観察表(14)	… 150
第24表	遺物観察表(15)	… 151
第25表	遺物観察表(16)	… 152
第26表	遺物観察表(17)	… 153
第27表	遺物観察表(18)	… 154
第28表	遺物観察表(19)	… 155
第29表	遺物観察表(20)	… 156
第30表	遺物観察表(21)	… 157
第31表	遺物観察表(22)	… 158
第32表	遺物観察表(23)	… 159
第33表	遺物観察表(24)	… 160
第34表	遺物観察表(25)	… 161
第35表	遺物観察表(26)	… 162
第36表	遺物観察表(27)	… 163
第37表	遺物観察表(28)	… 164

I. 前　　言

1. 調査の経過

当事業の全体についての調査にいたる経過等については、第1分冊に詳述しているので省略する。

上ノ垣外遺跡の現地発掘調査については、平成2年度に一部を除き試掘調査を実施し、本調査面積(5,000m²)を確定した。平成4年度にも残った一部分について試掘調査を行い、平成5年度に1,950m²を、同6年度に3,050m²の本調査を行った。

また平成7年度には県道とのループ部分の試掘調査を行った。

第1次調査は、平成5(1993)年8月23日～平成6年(1994)年1月27日まで行った。調査面積は1,950m²であったが、一部下層の縄文時代遺物包含層の確認のために、試掘調査をおこなったが、包含層および遺構・遺物は確認できなかった。この調査で検出した遺構は中世後期を主体とするものであったが、住居跡は確認されず、遺跡の縁辺部にあたることが判明した。また、上ノ垣外遺跡と平行して調査が行われていた巣護遺跡では、上ノ垣外遺跡に南接し、字上ノ垣外に属するところから古墳時代初頭の前方後方型周溝墓が検出された。

当初、この地は地形的にみて上ノ垣外遺跡とは明確に区別されたため、巣護遺跡として調査を行ってきたが、検出される遺構は上ノ垣外遺跡の延長の色彩が濃くなつたため、字上ノ垣外に属する部分については、上ノ垣外遺跡に組み込んで報告することにした。

空中写真測量を平成5年12月3日に実施し、翌日の12月4日に現地説明会を実施し、約140名の熱心な一般市民の参加を得た。

平成6年度は、第2次調査として第1次調査区に統く南北分の3,050m²を調査した。平成6(1994)年4月18日から調査に入った。

第2次調査で検出した主な遺構は、奈良時代の堅穴住居跡をはじめ、平安～鎌倉時代の掘立柱建物な

どである。このほか、縄文時代後期の土坑や埋設土器、方形周溝墓などがある。また、遺物では縄文後期の土器の量が多くみられた。

現地説明会は7月31日に、北に隣接して調査していた新徳寺遺跡とともに実施し、攝氏40度という酷暑の中、約120名の参加者を得て盛会裏に終了した。また、空中写真測量を8月11日に実施し、その後下層の縄文時代遺物包含層の有無などの確認調査を実施し、酷暑にあいだ夏がようやく去ろうとする8月31日に終了することができた。

第2次調査と平行して第1次調査の遺物整理を行い、7年度に第2次調査の遺物整理とともに、報告書作成を実施した。平成6年度までの調査および整理の体制等については、既刊の第1分冊に示したので省略し、ここでは平成7年度の体制を以下に記しておく。

【平成7年度】

所長	川村政敬
次長	田中 守
次長	山澤義貴
主幹兼	
調査第二課長	伊藤克幸
主査兼第二係長	田村陽一
主事	下平康弘
主事	松本美先
主事	小林 秀
主事	西村修久(多気町より派遣)
主事	小浜 学(松阪市より派遣)
調査補助員	瀬野弥知世(皇學館大学生)
	塙田幸子(皇學館大学生)
	松井理栄子(橋女子大学生)
総務課長	中西勝之
総務課主査	中川カツミ
総務課主事	伊藤直樹、橋川 功



第1図 路線・工区・遺跡位置図 (1 : 50,000)

番号	遺跡名	所在地	確認面積m ²	現状	種類	時代	概要	工区
1	多気古墳群	多気町相可字多気	2,000	山林	散布地 古墳	古墳	平成4～5年度調査。須恵器竪5基、堅穴住居等を確認。	9 工 区
2	多気古墳群	多気町相可字多気	900	山林	古墳	古墳	平成3年度多気町教委試掘で7号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施。	
3	甘糟遺跡	多気町荒岸字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成3年度試掘調査。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	氣賀遺跡	多気町荒岸字氣賀	7,500	水田	散布地 整理	古墳～中世	平成5年度調査。旧称【多気郡条里遺構】。明確な条里遺構は確認できず。	
5	上ノ延外遺跡	多気町荒岸字上ノ延外	6,000	畑 水田	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	平成5～6年度調査。縄文～中世の遺構・遺物を検出	
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文・中世	平成6年度第1次調査。縄文時代後期前葉の堅穴住居や土坑を多数確認。同時代の遺物多量に出土。	
7	薄ノ木遺跡	松阪市射和町字薄ノ木・水引場・久保田ほか	11,200	水田 宅地	集落跡	縄文 古墳～中世	平成2～6年度調査。縄文時代早期、弥生、古墳、奈良～平安時代の集落跡、墓塚等を確認。	
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	5,200	水田	集落跡	縄文 古墳～中世	平成3年度調査。奈良～平安時代の集落跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成2年度試掘調査。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器筒形埴、壺片、円筒埴輪片が出土。	
10	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前八王子	4,200	水田	散布地	中世	平成6年度試掘調査。遺構はなく、遺物は客土からのため、本調査に至らず。旧称石津遺跡。	11 工 区
11	廿子遺跡	松阪市上川町字廿子ほか	3,700	水田	散布地	中世	平成7年度調査。ピット・溝などを検出。ほ場整備事業時にかなり削平か。旧称牛込遺跡。	12 工 区
12	朝町遺跡	松阪市朝町字施町・平田・豪宮	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成6・7年度調査。弥生～家町時代の遺構を多数確認。銅鏡形土製品などの遺物が出土。	
13	御室山遺跡	松阪市西野々町字御室山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成4年度試掘調査。遺構・遺物ともに確認できず。本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市吉井町字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成7年度調査。遺構密度が薄く、遺跡の縁辺部か。	9 工区
15	大日山古墳群	多気町荒岸字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成5年度工事中発見。直径約20m、高さ約2mの円墳。主部なし。他に丘陵斜面に主体部2基。	

第1表 遺跡概況

以上のはか室内整理員として、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

谷久保美知代	白石みよ子	山分孝子
中里輝子	中村敬子	広瀬則代
山路麗子	廣田洋子	服部美奈子
藤葉輝美	北川ゆき	



現地説明会風景

工区	No	遺跡名	調査対象面積 (m ²) 確認面積 54.1 確定 7.3.31現在	調査面積 (m ²)										備考
				2	3	4	5	6	7	8	9	10		
工区	1	明文化跡群	2,000 2,900 2,900				範囲 1,400	報I						
	2	明化古墳群	900 0 0				範囲 1,500							平成4年度多気町 歴史調査
	3	甘林遺跡	2,650 0 0		範囲			範囲I						試掘調査のみ
	4	英瀬遺跡	7,500 2,300 2,300		範囲			範囲 2,300	報I					旧称多気郡条里遺 跡
	5	上ノ田外遺跡	6,000 5,000 5,000	範囲		範囲 辛112 辛64								
	6	新能寺遺跡	2,400 (2,400) 1,600				範囲 1,100 辛333	範囲 500	報Ⅱ					
	7	酒ノ木遺跡	11,200 13,800 12,560	範囲 辛 850	460	3,500 辛 2,321	5,800 辛 2,209	1,200						遺構・遺物多数の ため整理に3ヶ月
	8	茶平遺跡	5,200 5,200 5,200	範囲 辛 900		4,800 辛 900			400	報V				
	9	茶平古墳	400 0 0	範囲					範囲					試掘調査のみ
II工区	10	大日山2号墳	600 — 600					600	報I					平成5年度工事中 新見
	11	野原前遺跡	4,200 4,200 0					範囲						試掘調査のみ 旧称石津遺跡
	12	甘林遺跡	3,700 3,700 1,600					範囲 1,600						旧称東牛込遺跡
	13	駒町遺跡	9,200 9,200 9,700					範囲 3,000	3,100	3,600	報Ⅳ			
	14	御笠山遺跡	8,100 0 0		範囲						報Ⅳ			試掘調査のみ
調査面積合計	範囲確認調査			822	1,052	850	452	496	96	—				
	本 調 査			1,500 ※ 850 ※ 900	5,260 ※ 2,321	5,000 ※ 2,312	11,450 ※ 2,312	9,450 ※ 397	6,000 —	4,100				
	合 計			68,150 52,800	42,760 ※ 850 ※ 900	6,312 ※ 2,321	5,850 ※ 2,312	11,902 ※ 397	9,946 —	6,096 —	4,100			※は下層面積数
調査担当員数	現地調査 整理調査 合計			2 0 2	2 0 2	2 0 2	4 1 5	3 2 5	2 3 5	—				

第2表 調査経過および予定 (平成8年1月現在、範囲確認調査 報…報告書作成 ※は下層面積)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (m ²)	担当者
1	明気窓跡群	多気町相可字明気	平成4 (1992) 年8月28日～9月30日（試掘） 10月16日～平成5 (1993) 年2月28日 平成5 (1993) 年4月19日～10月29日 ＊平成4年6月17日～6月25日予備調査（磁気探査）	530 1,500 1,400 計 3,430	宇河雅之・田村篤一 宇河雅之・田村篤一 宇河雅之・西村修久
2	明気古墳群	多気町相可字明気			多気町教育委員会 西村修久・中里 守
3	甘利遺跡	多気町克海字甘利	平成3 (1991) 年8月26日～10月11日（試掘）	144 計 144	田中喜久雄・野原宏司
4	麻瀬遺跡	多気町荒海字麻瀬	平成3 (1991) 年8月26日～10月11日（試掘） 平成5 (1993) 年8月23日～平成6 (1994) 年1月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気町未登録】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東 良樹
5	上ノ里外遺跡	多気町荒海字上ノ里外ほか	平成2 (1990) 年7月20日～9月12日（試掘） 平成5 (1993) 年1月28日～2月1日（試掘） 平成5 (1993) 年8月23日～平成6 (1994) 年1月27日 平成6 (1994) 年4月18日～8月31日	68 96 1,350 *112 3,550 *64 計 5,164 *176	河瀬信幸 宇河雅之・田村篤一 西村修久 東 良樹・下平康弘
6	新居寺遺跡	多気町相可字新居寺	平成5 (1993) 年7月9日～7月12日（試掘） 平成6 (1994) 年5月25日～8月24日 ＊平成8年度第2次調査予定	96 1,100 *333 計 1,196 *333	宇河雅之 小浜 学・西村修久
7	湯ノ木遺跡	松阪市射和町字湯ノ木・水引場・久保田ほか	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日（試掘） 平成2 (1990) 年10月11日～平成3 (1991) 年3月19日 平成3 (1991) 年4月23日～5月31日 平成4 (1992) 年5月21日～8月31日 平成5 (1993) 年4月19日～8月29日 平成5 (1993) 年8月25日～平成6 (1994) 年3月31日 平成6 (1994) 年8月23日～平成7 (1995) 年1月25日	272 1,500 *850 469 5,500 *2,321 3,600 *400 2,200 *1,800 1,300 計12,832 *5,371	河瀬信幸 河瀬信幸・小林 秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河雅之・田村篤一 東 良樹・小浜 学 小浜 学・西村修久 下平康弘・田村篤一
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日（試掘） 平成3 (1991) 年6月1日～8月24日 平成3 (1991) 年10月14日～平成4 (1992) 年3月13日 平成6 (1994) 年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500 *900 400 計 5,584 *900	河瀬信幸 田中喜久雄・野原宏司 東 良樹
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日（試掘） 平成5 (1993) 年6月25日～8月20日	98 (1,000) 計(1,098)	河瀬信幸 西村修久
10	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6 (1994) 年9月26日～10月5日（試掘） ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【右津遺跡】	176	東 良樹
11	甘利遺跡	松阪市上川町字甘利	平成6 (1994) 年10月6日～10月14日（試掘） 平成7 (1995) 年6月1日～7月19日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【東牛込遺跡】	144 1,600 計 1,744	東 良樹 下平康弘・小林 秀
12	御町遺跡	松阪市朝日町字御町・菅宮ほか	平成5 (1993) 年7月19日～7月23日（試掘） 平成6 (1994) 年8月30日～平成6 (1995) 年2月20日 平成7 (1995) 年8月7日～平成8 (1996) 年1月24日 平成8年度第3次調査予定	356 3,000 3,100 計 6,456	宇河雅之 小浜 学・東 良樹 小浜 学・松本美先
13	御金山遺跡	松阪市西野々町字御金山	平成5 (1993) 年1月26日～1月27日（試掘）	224	宇河雅之
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	平成6 (1994) 年10月17日～10月20日（試掘） 平成7 (1995) 年5月10日～5月26日	176 1,300 計 1,476	東 良樹 松本美先・西村修久
15	大日山古墳群	多気町荒海字大日山	平成6 (1994) 年4月7日～6月10日	600	西村修久・小浜学

第3表 発掘調査遺跡一覧 （調査面積欄の＊印は下層調査面積）

II. 上ノ垣外遺跡

1. 位置と環境

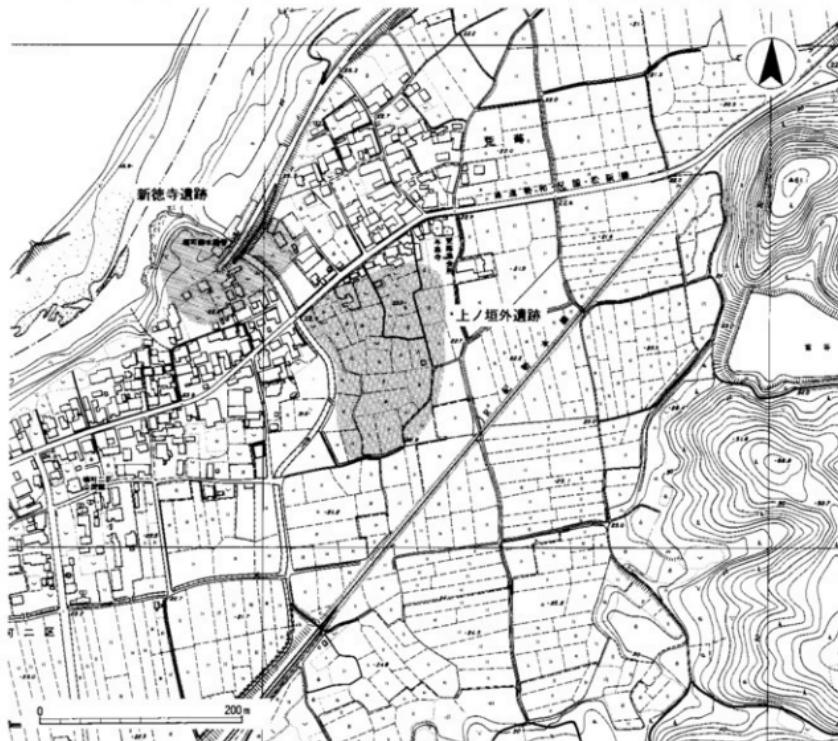
三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置し、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目まぐましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現

在でも三重県南部の東紀州地域や南勢地域への幹線道路の交点に位置することに変わりはない。

松阪市の南を流れる柳田川は、台高山脈の高見山(1,248m)付近に源を発し、流域に2ないし3段の河岸段丘を発達させ、幾多の蛇行を繰り返しながら東流し伊勢湾に注いでいる。

一方、多気郡多気町は柳田川を挟んで松阪市の南に位置している。柳田川が最後の大きな蛇行を終え



第2図 遺跡地形図 (1: 5,000)

た多気町牧付近から下流部の三疋田・四疋田地区には、比較的まとまった低位段丘面が展開しており、条里型地割りも広く残っている。

相可の集落を過ぎると、川幅も広くなり下流の様相を呈し始める。上ノ垣外遺跡（1）は相可の集落の東はずれに位置し、南側から鶴田川に注ぎ込む支流の相可川が形成した自然堤防上に立地する遺跡である。標高は23m前後で、後背低地の水田面との比高はおよそ60cmほどである。

位置と歴史的環境については、第1分冊において詳しく述べてあるのでそれを参照されたい。ここでは、簡単に周辺の遺跡についてふれておくにとどめる。

绳文時代の遺跡としては、最近発掘調査で確認された草創期の遺跡として、高皿遺跡（2）がある。

は場整備に伴う排水路だけの調査であったため、詳しいことはわからないが、有茎尖頭器や木葉形尖頭器、搔器、削器、神子柴系石斧などが多く出土した。これらに伴って、調整剥片が多出していることから、石器製作跡と考えられる遺跡である。ただし、これらの石器群に伴う土器については、ごく微量の爪形文土器（類例のはほとんどないもの）、表裏縄文土器が認められる程度で、他は山形の押型文土器や燃糸文土器が少量と、中・後期のものである。西方約1kmの中位段丘端に立地する半山遺跡（3）との関連が考えられる。

早期になると、対岸に大川式の古段階の堅穴住居や煙道付き炉穴などが検出された鴻ノ木遺跡（4）をはじめとして、鐘突遺跡（5）、上寺遺跡（6）や射原塙内遺跡（7）、右岸側でも半山遺跡（3）、坂倉遺跡（8）など、押型文土器を出土する遺跡が密集している。各遺跡間の土器型式の消長などから、半径約5kmほどの領域内での集落の変遷が追える好地域である。

当遺跡に隣接する新德寺遺跡（9）では、中期の土器が少々と後期前葉の遺構・遺物が多数出土している。この時期の遺跡としては、約5km下流の右岸に金剛坂遺跡、対岸や下流に射原塙内遺跡（7）、東隣の佐奈川水系の田中廻り遺跡（10）などがあるほか、後・晚期の遺跡として森莊川裏遺跡がある。

弥生時代の遺跡としては、対岸に前期・中期の上

寺遺跡（6）、中期の鴻ノ木遺跡（4）、約5km上流右岸に中期前半の遺構・遺物が発掘された花ノ木遺跡があるほか、後期の遺跡として相可高校グランド遺跡（11）が知られている。

古墳時代ではまとまった集落は今のところ知られていないが、鴻ノ木遺跡（4）で、前期の溝や中期の堅穴住居が2棟検出されているほか、当遺跡の南に隣接する巣護遺跡（12）でも、若干の遺物が出土している。

一方、古墳は周辺の低丘陵に多くの古墳群が分布しているが、そのほとんどは六世紀代以降の後期のもので、前期古墳は確認されていない。

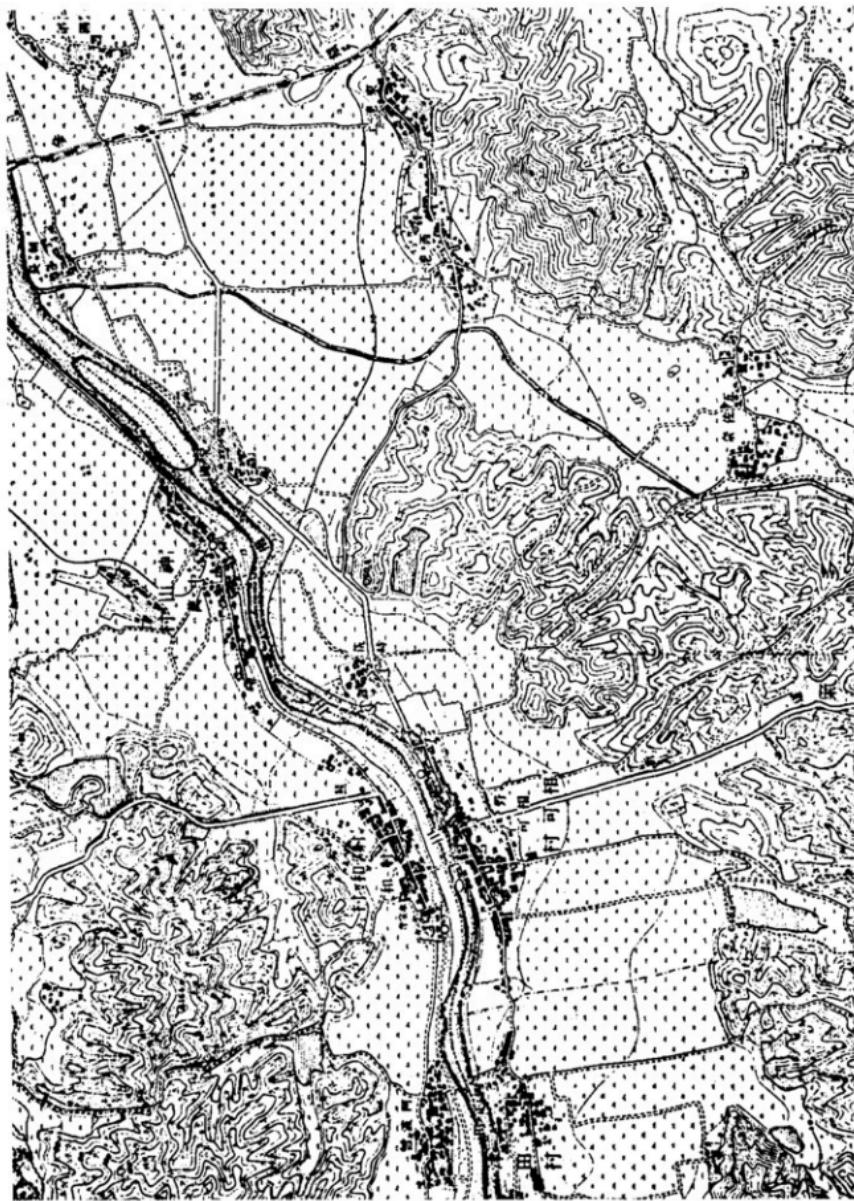
多気町側の主な古墳群をあげると、当遺跡の南方丘陵に立岡山古墳群（13）、大日山古墳群（14）、明気古墳群（15）、黒田山古墳群（16）などがある。約4km北東には河田古墳群（17）もある。

またそれらの古墳群や当遺跡などに須恵器を焼成し、供給したことが知られる明氣窯跡群（18）や、同時期の中尾窯跡（19）がある。

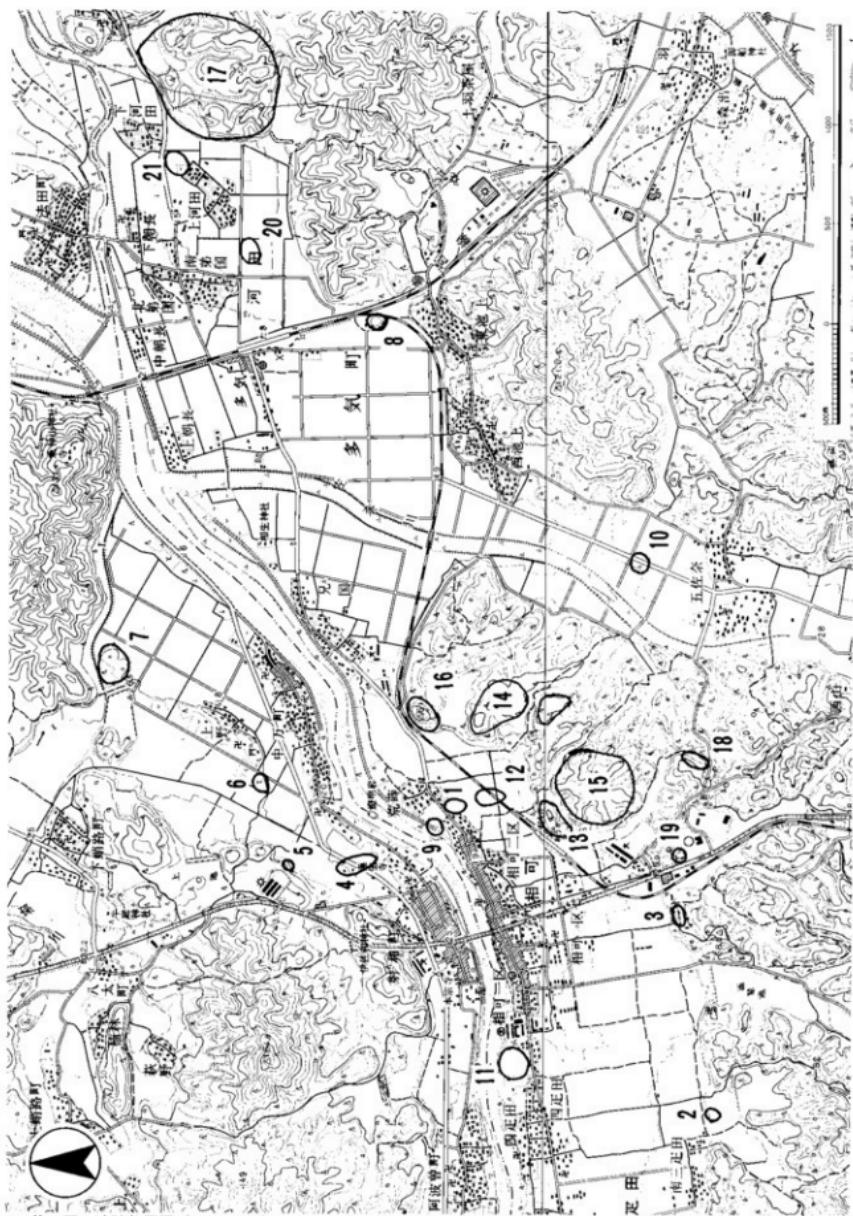
歴史時代では、当遺跡周辺は平安時代に東寺領の莊園となったことが特筆される。カウジデン遺跡（20）はその時代の代表的遺跡で、発掘調査によって四面庇のつく大型の掘立柱建物が検出され、「中万」と書かれた墨書き土器が多数出土している。その他、東裏遺跡（21）も注目される。9間×5間で庇のつく掘立柱建物、「中臣」銘墨書き土器、綠釉陶器や鏡などが発見されている。また、当遺跡でも今回の調査地の隣接地で、は場整備事業に伴って発掘調査が行われおり、やはり平安時代の遺構・遺物が出土しているし、巣護遺跡（12）でも石蒂や綠釉陶器といった特殊遺物が出土している。これらの事実は、前述の東寺領川合・大国莊の施設などに関連する遺跡の可能性を想起させられるのである。

遺跡の北を東西に走るのは、大和南部と伊勢とを結んだ旧伊勢本街道。宿場町相可の集落でこの街道に直交し、南北に走るのが熊野街道。相可の対向集落として発展し、伊勢商人を生むのが射和の集落。中世以降も、この地は古代から育んできた歴史的特性を持続させ続けるのである。

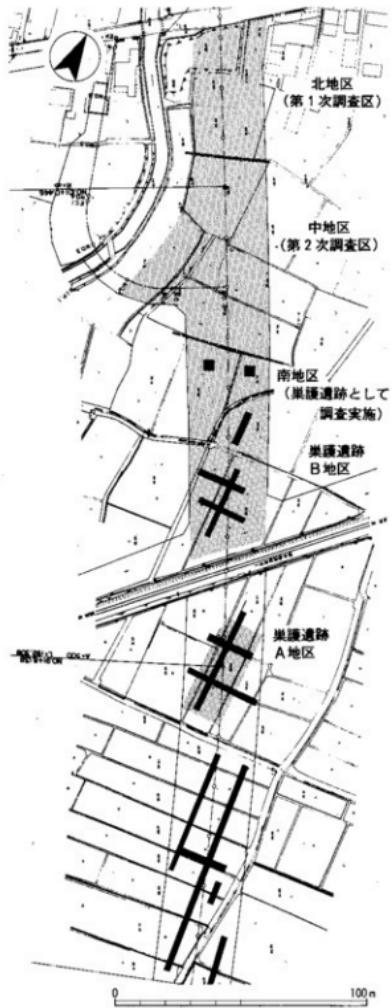
（田 村）



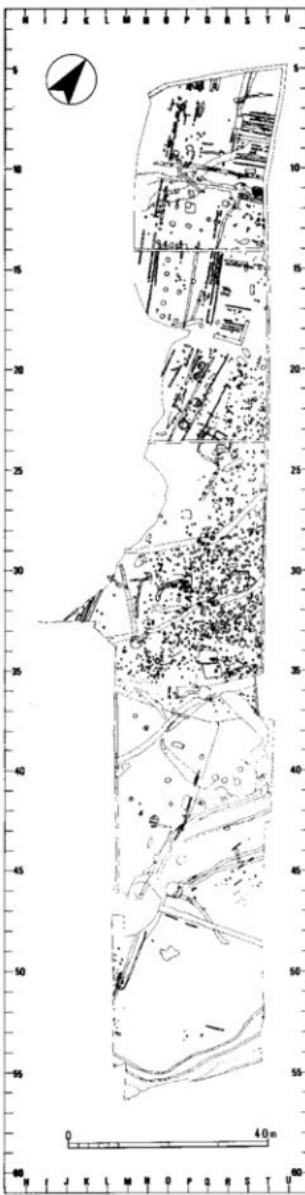
第3図 明治期の遭跡周辺地形図（1：20,000）



第4図 遺跡位置図 (1:25,000)



第5図 調査区位置図 (1:2,000)



第6図 地区割図 (1:800)

2. 層序

本遺跡は、櫛田川に注ぐ小河川の相可川が形成した自然堤防上に立地する遺跡である。昭和34年、当地方にも未曾有の被害をもたらした伊勢湾台風の時には、当遺跡周辺もすべて冠水するほどの状態であったという。

すなわち、人間の営みが始まって以来、この地が幾度となく洪水にみまわれ、浸食と堆積を繰り返してきたであろうことが、容易に推測できるのである。

このような自然条件を反映してか、堆積土層も複雑であった。また、長らく畠地として利用されてきたため、耕作による擾乱も認められるが、耕作の及ばない深さにおいても土層は単純ではなかった。

層序については、第7図に第2次調査区（中区）の東壁面の断面図を示した。

基本的な層序は、表土（暗褐色土）が厚さ10~20cm、第2層（暗褐色土に黒褐色土の混じった土）が10~30cm、第3層（褐色土ないし黒褐色土）となる。

しかし、実際には擾乱などのため複雑な様相を呈している。第1次調査区である北地区では、表土の下の第2層の下に、黒褐色土は認められず、第2次調査区近いところで若干認められる程度であるが、第2次調査区の中地区では、上から第3番目の層に厚さが20~30cmほどの黒褐色土の堆積が見られる。また、その下部に黄褐色土が一部に見られたりする。

遺物は表土および第2層に含まれている。遺構の検出は、第3層である褐色土（北地区・南地区）および黒褐色土（中地区）の上面でおこなった。検出面は地表から浅い所で20cm、深い所で60cmほどであった。縄文時代以降の遺構は、すべてこの検出面において検出したものであり、層位的な所見は得られなかった。

（田村）

3. 遺構と遺物

1. 遺構の分布概要

調査区はバイパス路線幅という制約を受け、幅約30m、長さ約150mと南北に細長い。そのため、調査区を便宜上北地区・中地区・南地区と3区分して記述する。なお、この北地区は第1次調査区に、中地区は第2次調査区に、南地区は果護遺跡B地区として調査した一部に相当する。

今回の調査区は自然堤防の西端付近にある。そのため、上ノ垣外遺跡の中心部は、今回の調査区よりもさらに東にあると思われるが、縄文時代から室町時代にかけての遺構を検出し、多数の遺物が出土した。

縄文時代の遺構は、中地区および南地区で土坑、埋設土器が検出され、遺物もこの中地区で多数の出土があった。しかし、住居跡は検出されなかった。

古墳時代前期の遺構としては、中地区および南地区において方形周溝墓からなる墓域の広がりを確認したが、居住域については、今回の調査区では確認

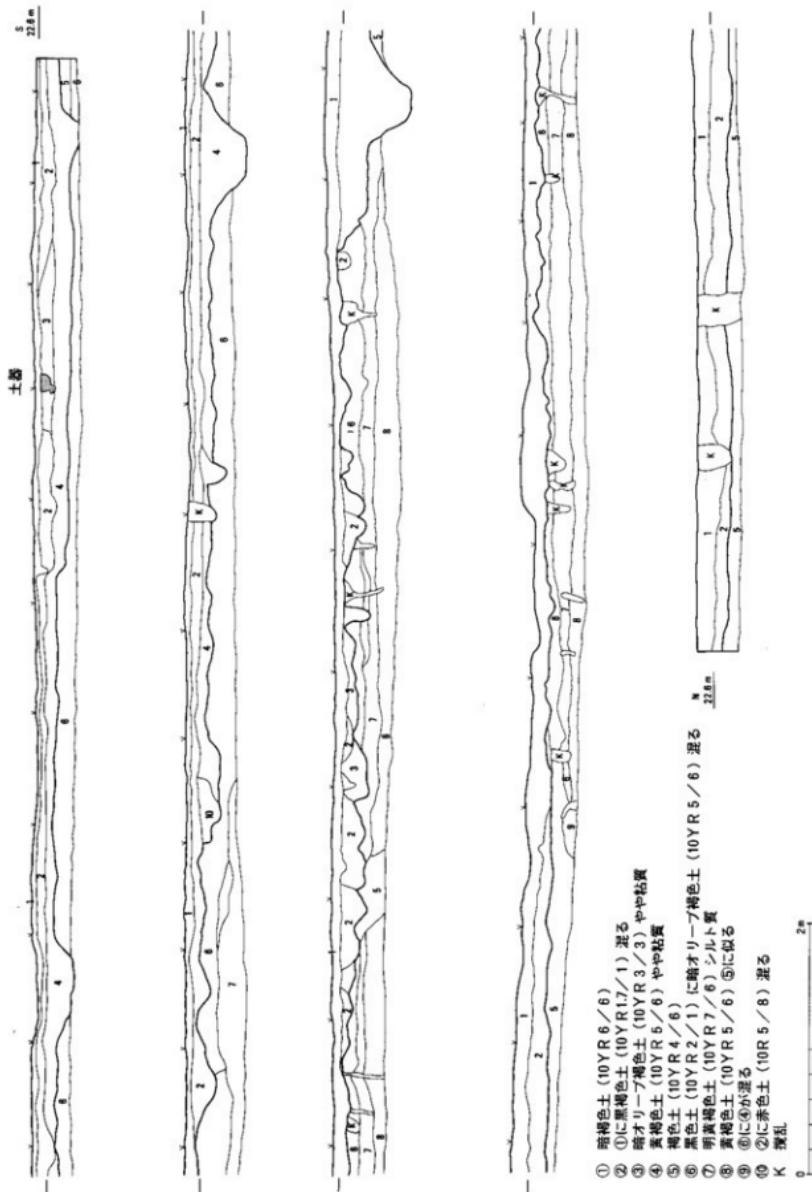
できなかった。奈良・平安時代の遺構には堅穴・掘立柱の住居跡のほか、溝などが中地区に集中して検出された。統く鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物や集石遺構が中地区に、井戸や土坑、溝などが南地区で集中的に検出された。一方、室町時代以降の遺構については北地区に多く、中地区では僅少、南地区においては全く検出されず、地区により遺構の分布にかなりの違いが見られる。

2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、わずかに土坑2基と埋設土器が1基検出されたにすぎない。土器などの出土遺物量からすると、少なすぎる感があるが、これは後世の遺構が構築された時などに破壊されていることも原因の一つと考えられる。

S K 1

調査区のほぼ中央に位置し、長辺4.1m、短辺1.3m、深さ60~70cmの隅丸長方形状の土坑である。主軸方



第7図 発掘区東壁土層断面図 (1:40)



第8図 漢構平面図(1:400)

向はN28°Eである。西側の壁は直線的で急傾斜であるが、東側はゆるやかな傾斜で段状となる。底面はほぼ平坦であるが、北側がわずかに深い。他の時期の遺構とは異なり、黒褐色土が埋まっていた。中央や北寄りの西壁際、底面より約30cmほど浮いた状態で、3個体ほどの縄文土器が出土した。縄帯文成立前の後期前葉ころと考えられる。

出土遺物

1～3がまとまって出土した大きな破片。1は推定口径22cmの精製深鉢。外反気味に頸部から立ち上がった口縁部は上端で内折し、外面は外削ぎ状となり面をもつ。頸部に横位に平行沈線がめぐり、全周で6カ所と思われる部分で口縁部まで棒状にのびる。この棒状にのびる部分のつけ根には凹点が刺突により施文される。胎土は精、若干の砂粒を含み、内外面ともに丁寧なミガキ。外面にはスス付着。内面には煮焦げの炭化物が少し付着している。

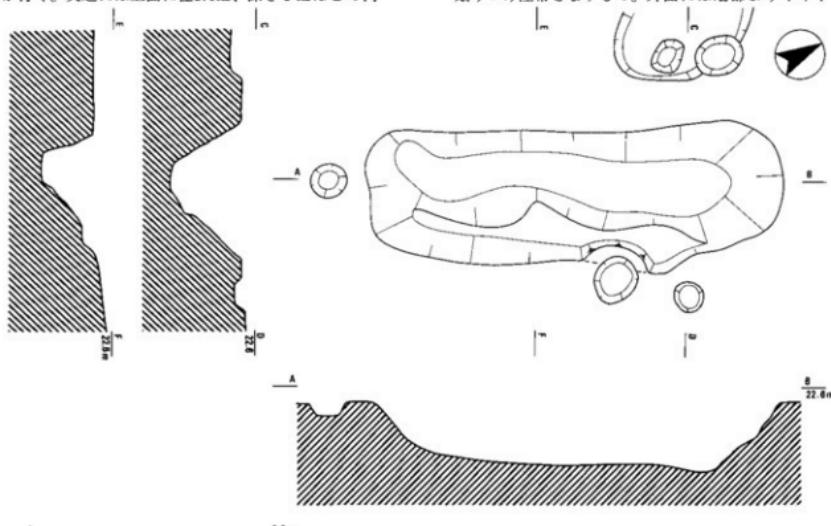
2は無文の深鉢。推定口径は31cm。頸部のくびれはさほど強くはなさそうで、そのくびれ部から直線的に立ち上がる口縁部は、内削ぎ状に内面に面をもつ。平口縁の1カ所に右上がりで左右非対称の突起が付く。突起には上面に径1.4cm、深さ1cmほどの円

孔が施される。内外面とも巻貝の条痕調整、頸部以上の口縁部外面にはその後にナデ調整が施される。突起および口縁端面もナデ仕上げ。胎土は並であるが砂粒を多く含む。焼成は良だがもろい。

3は薄手の無文土器。推定口径27cm。頸部でゆるくくびれた後、やや外反気味に立ち上がる。口縁端部はやや丸みのある面をもつ。内外面とも巻貝の条痕調整。口縁部付近は内外面ともミガキ。胎土は精、砂粒を含み焼成は良、褐色を呈する。

4～20はすべて小片で、埋土からの出土である。

4～8は沈線間に縄文または条線を充填する中津式の体部片。9はやや新しい堀之内式の体部片か。10は中津式と思われる体部の小片であるが、外面に朱彩が施される。11は薄手の口縁部片、二条の深い沈線が口縁に沿って引かれている。12は端部に面をもち、深い沈線がT字状に引かれる。13は沈線間に刺突が施されるもの。14は口縁端部が内側にL字状に拡張し、端面と外面に沈線が一条ずつ引かれる。15は波状口縁の波頂部の小片。外面には継ぎ位の平行沈線が、肥厚した端面には一条の沈線が引かれる。16は口縁部内面の端部からやや下がった位置に粘土を貼りつけ隆帯をなすもの。外面には端部よりやや下



第9図 SK 1 実測図 (1:50)

がった位置に単節のL R縄文を施す。17は2と同一個体の可能性があるもの。18は拡張した口縁端面に沈線と刺空を施す。19は混入と考えられる中期船元式の撚糸叉土器片。20は底部片である。

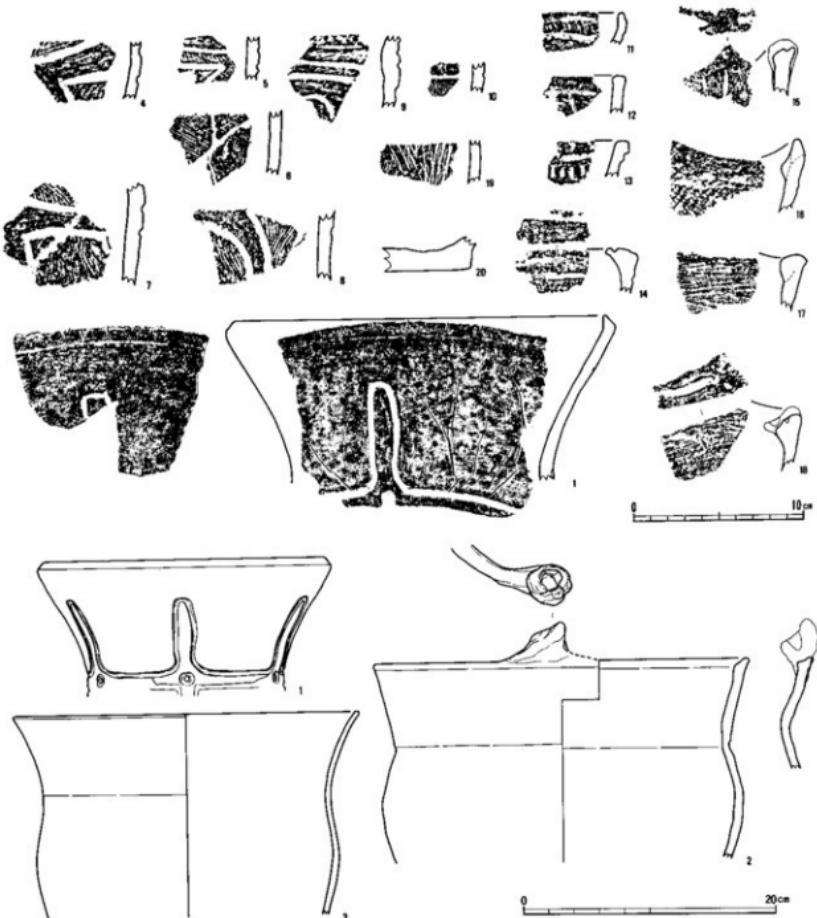
S X 2

調査区中央部やや北寄り（中地区北端付近）で検出した埋設土器である。SK 1 の北西約18mに位置する。掘形ははっきりしないが、土器の大きさとは同じ程度のものであった。底部に穿孔された粗製

の深鉢が正立状態で埋置されていた。体部上半は削平のため欠損し、下半が残る。縄文時代後期初頭から前葉ころと考えられる。

出土遺物

底径10.4cm、やや低い立ち上がりをもつ粗製の深鉢である。底部から体部下半にかけて残存しており、外面にはススが付着している。底部には直径5.2cmの穿孔が施されている。胎土はやや粗、砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。（田村）



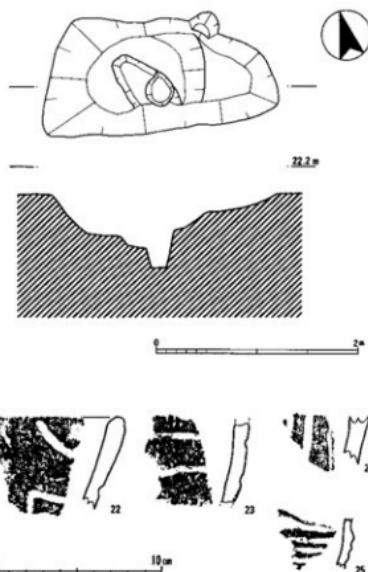
第10図 SK 1出土遺物実測図(1:4)拓影(1:3)

SK 50

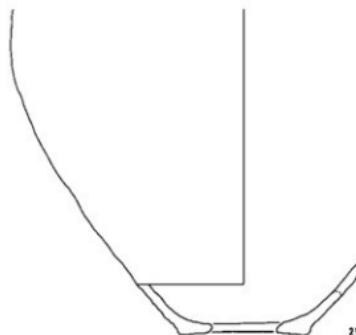
南地区の南端付近に位置する。東西に細長い、丸みを帯びた三角形の平面形である。東 $1/3$ と西 $2/3$ は深さ等に違いがみられ、二つの土坑が重なっているのかもしれないが、埋土の違いは見分けられず、一つの土坑として掘削した。西側 $2/3$ の部分には、底部にさらに深い穴があり、その最深部は検出面から72cmある。埋土は、黄褐色のかなり粘性のある土に褐色土と黒ボクが混じったものであった。埋土中から縄文土器片(22~25)のほか数片が出土した。所属時期は後期初頭と考えられる。(西 村)
出土遺物

22は口縁部の小片。太い沈線が口縁部から八字状に引かれ、その下にはカギ状の沈線が見える。沈線間には縄文などが施されない無文のものである。23は22と同一個体。平行する沈線が見られる。24は別個体の破片。縱方向に太い沈線が3条見られる。これらは、後期初頭の中津式と考えられる。25は混入品で中期と思われる破片で器壁が薄く、沈線の感じも他の3片と相当異なる。多重沈線の上には渦巻文が配置されるものかもしれない。

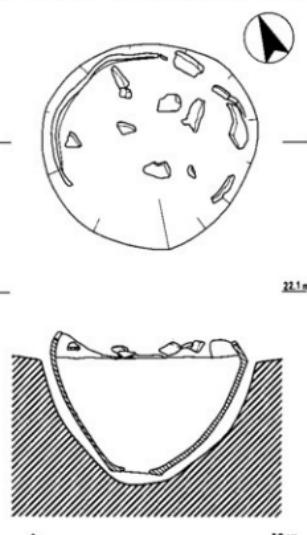
(田 村)



第12図 SK 50実測図(1:50)、遺物拓影(1:3)



第11図 SK 2 実測図(1:10)、遺物実測図(1:4)



3. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

S X 3

・検出の様子

調査区は、地区割りの36・37区内の東西ラインを境に、南が水田として、北が畠として利用されていた。水田部は、畠より60cmほど低くなっている、明らかに、開墾により削り取られた所である。

そんな水田部の耕作土を除去すると、黒ボクの地山に黄褐色土の埋土をもつ溝状のライン（南辺溝にある）が鮮やかに走り遺構が確認された。当初、設定した調査範囲の都合上（調査区の東辺は、地元小学校の通学路や農道の確保という点で、ひとまず3mほど掘削を控えた。）、溝が方形に巡るということにはすぐさま気づかず、また、それまでの調査では平安末～鎌倉時代の遺構・遺物がほとんどであったため、単なる中膨らみの溝として掘削を始めてしまった。そして、溝から壺（26）が出土して初めて周溝の存在に気がついたしだいである。

早急に、北方向、すなわち一段高くなっている畠地に調査区を広げたところ、淡褐色の埋土の北辺溝が検出された。また東方向も、建設予定地はほぎりぎりのところまで調査区を拡張し、遺構のはば全容を現した。

・調査結果

幅1～3mほどの溝が、ほぼ東西と南北の方向に方形に巡る。東辺の溝は、辺の中央からやや南に片寄って3.5mほどの幅を掘らずに残す。従って、東辺は溝というよりも方形の土坑のような感もある。結果的に、東辺溝は北側と南側に二分される。さて、掘り残された部分であるが、その平面形はほんの少しバチ形に聞く様相を示す。しかし、端部を区切る溝は検出されず、現状では周溝は一周しない。問題は残ろうが、ここでは、この掘り残し部分を前方部、太い溝で囲まれた広い方形部分を後方部とし、この遺構を平面の形態から「前方後方型周溝墓」と呼ぶことにする。

北辺と西辺がぶつかるコーナー（北西コーナー）付近から、西辺の溝に沿って、SD 9が走り、周溝墓としての遺構はかなり壊されている。しかし、西辺溝の内側ラインはかなりの部分残っており、遺構の平面的な形状・規模は看取できる。

平面規模のデータや軸の角度等は第13図下の模式図の通りである。

平面形の特徴や周溝の掘り方等については次のようなことがいえる。

- ・ 後方部は正方形に近いが、各コーナーの内角は90°より7～8°プラスマイナスする。また、東西南北の辺より南北方向の辺の方が1.5mほど長い（計測箇所は第13図参照）。

- ・ 前方部は、後方部東辺に対して直角よりも10°北に振ってとりつく。

- ・ 溝の内側ラインは直線的だが、外側ラインは辺の中央付近を彫らませた曲線である。現状（検出面）での溝幅は、各コーナーで0.8～1mほどであるが、北辺溝の広い所では3mを越える。

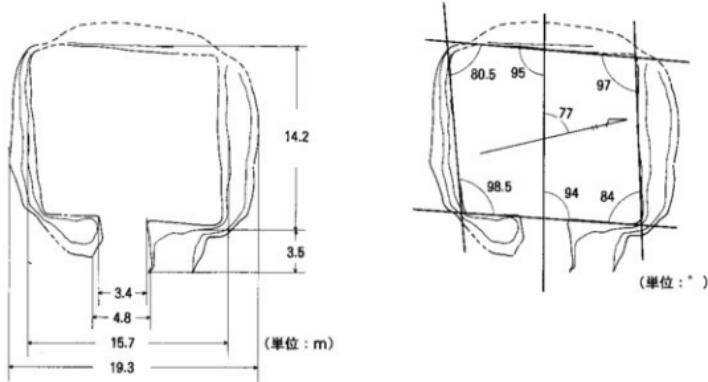
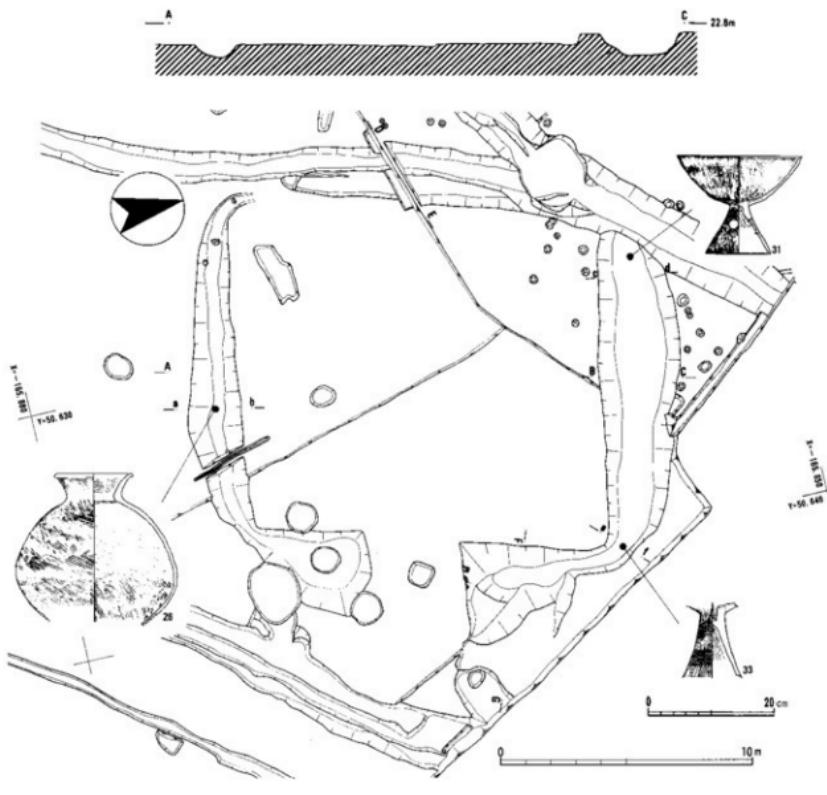
- ・ 検出面の絶対高が一様ではなく、西辺溝は幅が明かではないので概には比較できないが、それでも北辺溝は南辺や西辺溝に比べて広く掘られている。

- ・ 溝の深さは、各コーナー部分で浅くなる。南東コーナーでは、東辺溝の最深部より30cm浅く、南辺溝の最深部より50cm深い。北東コーナーでは、東辺溝の最深部より30cm浅く、北辺溝の最深部より45cm深い。南西コーナーでは、溝がとぎれた状態で検出されているが、それは、もともと周溝が浅かったところに水田開発のための削平が深く行われたためとも考えられ、本来、溝はつながっていたのではないだろうか。

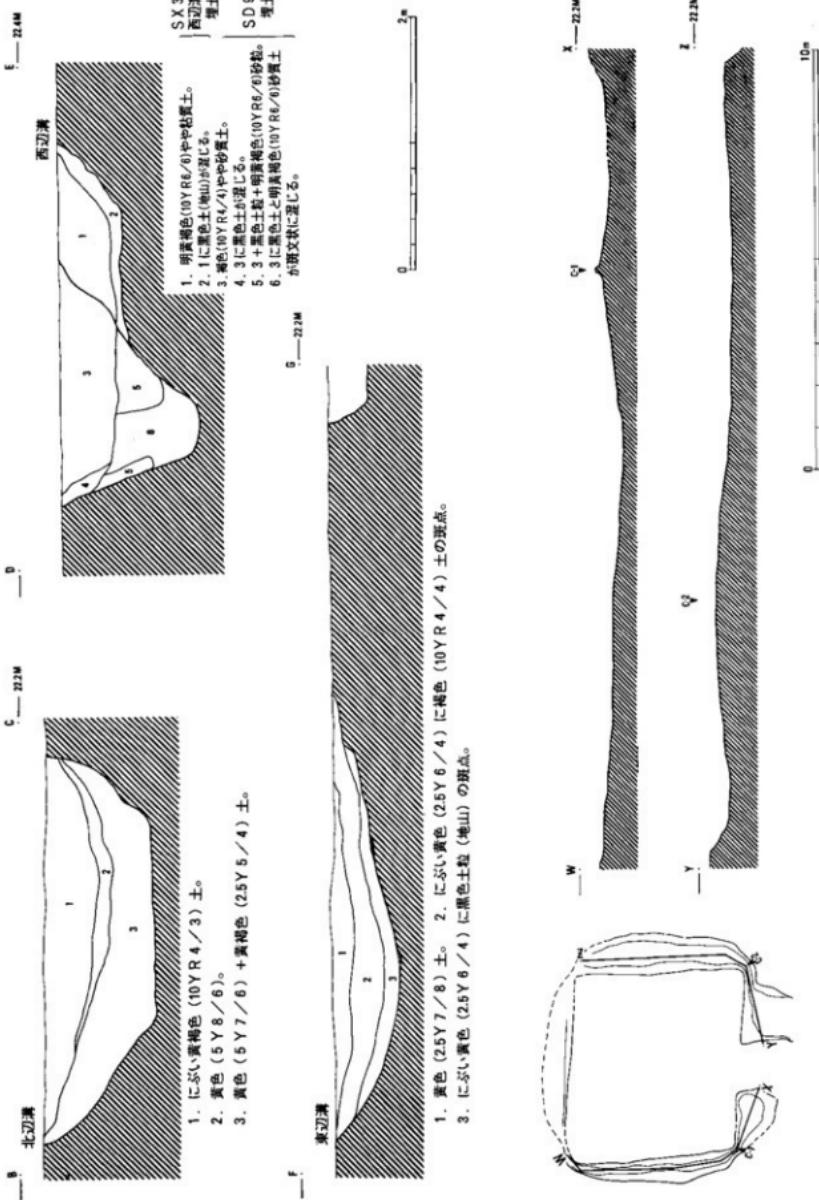
- ・ 前方部の北側でも南側でも、東辺溝の外側のラインはかなり緩味で、溝の底から緩やかな斜面が周溝の外に続いて行く。それに比して内側のラインははっきりしている。特に前方部の北側については、後方部の東辺ラインから前方部の北辺ラインにかけて直線的でシャープであり、造営した人達の意識的な掘削を感じる。

さて、埋葬施設であるが、後方部の大部分がすでに地山まで削平されているということもあり、検出はできなかった。

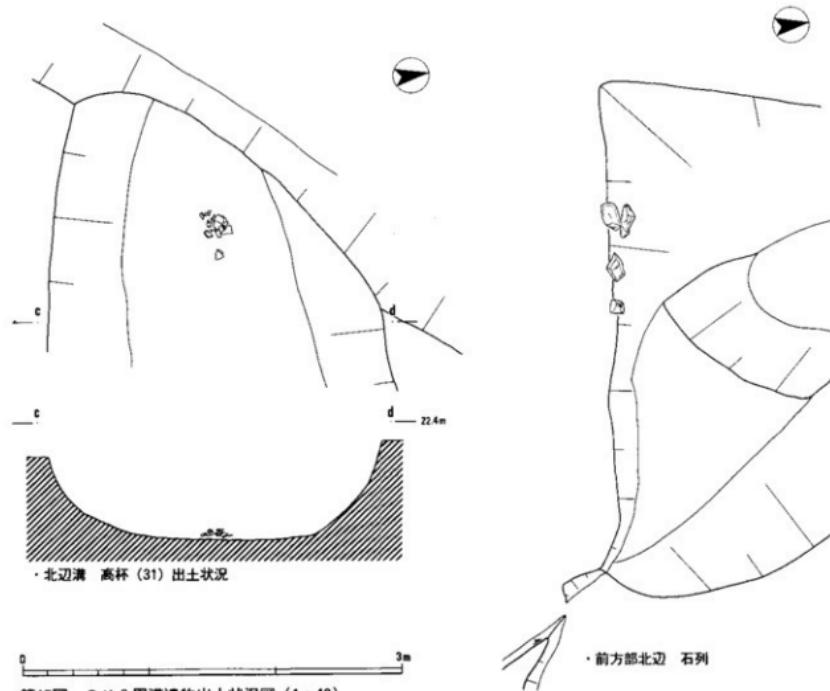
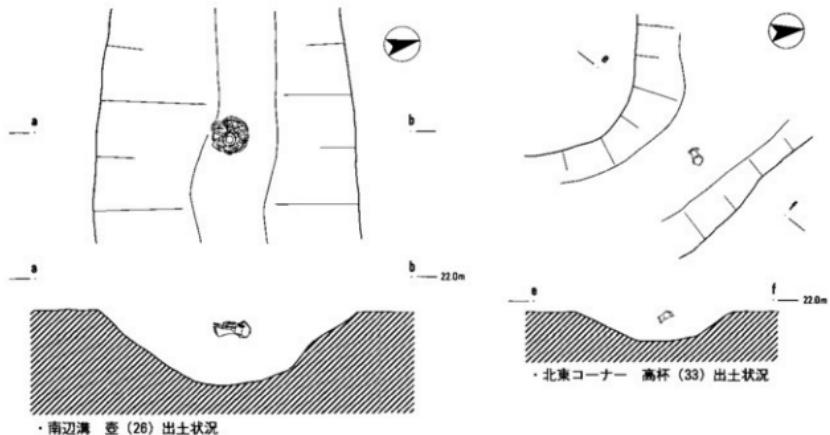
前方部北辺には、その直線的なライン上に20cmほどの山石が4個並んで検出され、周溝構築に絡んだ石材とも考えられる。また、前方部のちょうど中心部あたりに、方形の窪みが検出された。深さは10



第13図 SX 3 実測図 (1:200)、計測図 (1:400)



第14図 S X 3周溝断面図 (1:40)



第15図 S X 3周溝遺物出土状況図 (1:40)

cmほどと浅く、遺物もなかったが、周溝と同じような黄褐色の粘質土を埋土としており、周溝墓と何らかの関わりがあるのかもしれない。

遺物

周溝内から土器が出土したが、完形に近いものは壺(26)と高杯(31)の2点のみであった。

壺(26)は、南辺溝の一一番広くなった所で溝底から40cmほど浮いた状態で出土した。つぶれではいるが、口縁を上にして正置の状態であり、意図的に置かれたようにも思われる。しかし、溝底から浮いている事を考えると、やはり墳丘部からの転落であろうか。

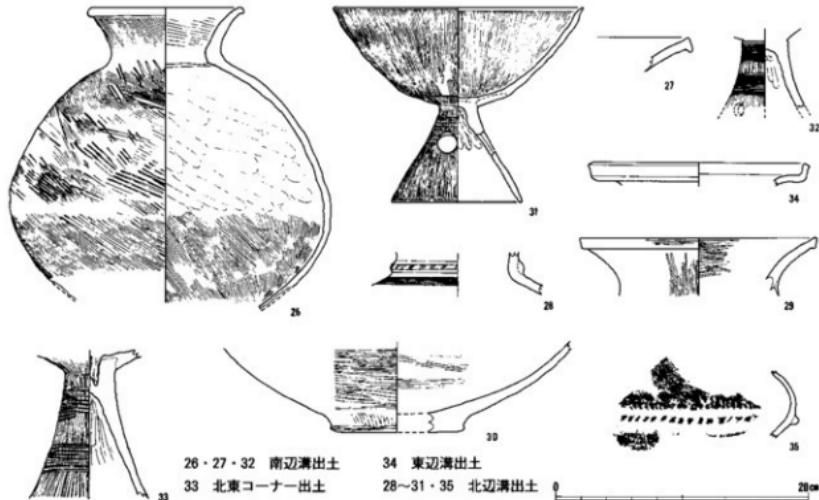
北辺溝からは、高杯(31)や壺片(30)・手培り形土器細片(35)などが出土している。壺や手培り形土器の破片は溝埋土からの出土であるが、高杯(31)については溝の底に接して潰れていた。

出土した土器は、概ね古式土器の範疇で捉えられると思うが、中には弥生土器と言っても差し支えないと考えられるものも含まれる。破片が小さいということもあり、曖昧な点を残しての報告となるが、ここでは、はっきりと時期のわかる高杯(31)の時期でくくり、すべてを古式土器の範疇で報告する。

壺(26~30) 26は、逆ハ字形の口頭部が体部か

ら直接開いて取りつく。口縁端部は外側に丸められ、曲面をつくる。体部の最大径は、体部中位よりや下方にあり、そこで粘土を接いでいる。外面はハケメ調整されているが、体部中位は引っ掻き傷のような雑な調整である。底部は見つからなかった。27と29は口頭部のみの出土である。27は直線的に聞く部位のみの小片で、端部は下方に少し拡張し、頸をつくる。29は体部から少しだけ直立した部分(頭部)があるようである。28は頭部のみの出土で、刺みを施した粘土紐の突端で装飾する。表面の風化が激しくはっきりはしないが、外面肩部には横線が施されているようである。30は底部片で、径を推定すると残存部の最大部で28cmにもなる。底には、外面から意図的な力を加えて器壁を削りだした跡が残る。

高杯(31~33) 32と33は柱状部が長めの脚部で、杯との接合部から下に横線帯を2段持つ。31は破片を接合してほぼ完形になった高杯である。口縁端部は内傾斜面を持ち、やや内弯しながら杯底部に向かう。その杯底部径は口径の0.4倍ほどで、やや弱いものの杯体部との境に稜をもつ。脚部は接合部から八字形に開き始め、柱状部がほとんどなく、裾部は内弯するものの、その度合いは小さい。脚上部に横線が施され、その文様帯の下半から円形透かしが



第16図 S X 3出土遺物実測図 (1:4)

3カ所に穿たれている。この透かし部分の断面を見ると、脚外面側の半分はきれいに整形されているが、内側の半分は全く調整されていない。脚内面以外はヘラミガキがなされている。そのヘラミガキ部分には所々に朱が付着しており、おそらく磨かれた面全体が赤彩されていたものと思われる。

斐(34) 受口の口縁細片である。頭部からほぼ水平に折れ、2cmほどで直立し受口部をつくる。施文等の装飾はされず、ヨコナデによる仕上げである。水平部外面の頭部に近い部分に、僅かに煤らしきものの付着がみられる。

手焼形土器(35) 鉢部片だと思われる。外面に刻みを施した突帯が巡る。内面下半はハケメ調整される。

S X 4

平成5年度の調査で検出された溝の続きが、平成6年度の調査によりブーメラン状の平面形で検出された。遺物は出土しなかったが、SX 3のすぐ西側にあり、鉤状に折れる溝、そしてその溝の走る方向がSX 3と同様であることなどから判断して、方形周溝墓とみなした。SX 3を中心とした周溝墓群の一つであろう。東西方向に走る北辺溝と、それに続

く西辺溝が約2.5mほど残っており、他は削平されてしまったのであろう、検出できなかった。北辺溝は、内側ラインが直線的で外側ラインが弧状を示し、辺の中央付近での溝幅は1mほどで、北西コーナー部では50cmとなる。溝の深さは、やはり北西コーナー部で浅くなる。

(西 村)

S D 5

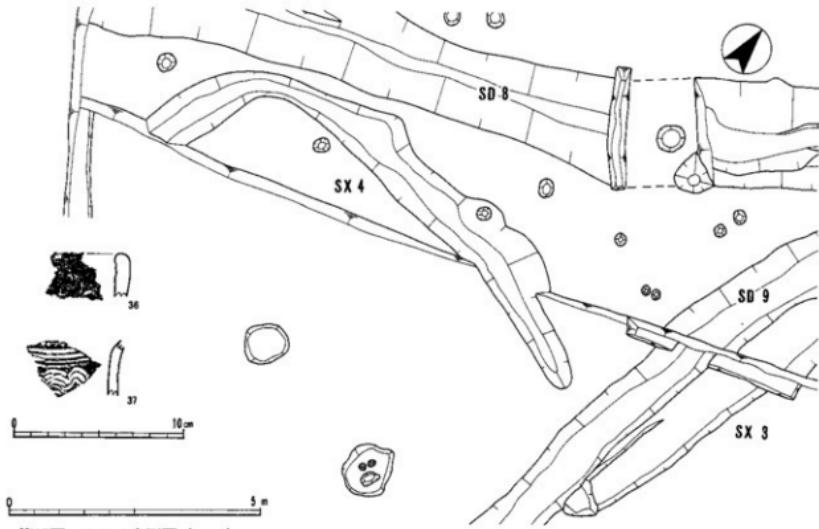
中地区の南部東壁付近で検出。長さ3.2m、幅0.9m、検出面からの深さは25cmである。溝の方向はSX 3・SX 4の西溝や、SD 6と同じであり、一進の方形周溝墓群の一部と考えられる。ただし、南溝が想定される所には溝は検出されていない。

この溝からの出土遺物は、古式土師器の小片しかなく、図化できるものはない。この溝に近い発掘区の壁面において出土した、体部下半を欠失した壺(646)は、あるいはこの溝に関連する遺物かもしれない。

(田 村)

S D 6

南区の調査区西端で3.3mほどの長さ分だけ検出され、調査区外へ延びていく溝である。幅は、調査区壁面付近で1.4m、東端部で90cmである。その東端部は角張っており、検出面からの深さも40cmほどあり、



第17図 SX 4 実測図 (1:4)

はっきりとそこで切れておさまっている。底部は、東端部から1.2mほどの所で15cm弱の段を持ち、調査区壁面側が深くなっている。

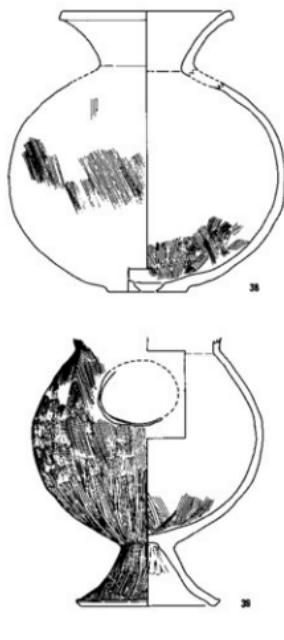
この溝の走る方向はS X 3の西辺溝と同一で、位置としてもその西辺溝の延長線上になる。遺物がなく、決定的なことはいえないが、周溝墓群の一部と考えられるのではないだろうか。 (西村)

Pit.64 (N 30-P 4)

中区中央やや西寄りで検出。この付近は、遺構検出を行った面からさらに下でも、縄文土器などの遺物が包含されており、検出に困難をきわめた。直径約0.3m、深さ20cmの円形のピットである。いくつかのピットが重複する。埋土から広口壺(38)の破片が出土したが、特に注目すべき出土状態ではなかった。弥生時代後期ないし古墳時代初頭か。

出土遺物

壺(38) やや偏平な球状の体部から外反しながら



第18図 Pit.64、Pit.65出土遺物実測図 (1 : 4)

ら開く口縁部を持つ壺である。無文で、体部には細かいハケメが施される。底部は平底で、中心部には穿孔と思われる孔が見られる。

Pit.65 (L 33-P 4)

中区南西端近くで検出。径0.3m、深さ12cmの略円形のピットである。埋土から弥生時代後期の丸窓付土師器台付壺(39)が出土した。出土状況に特に注目すべきものはなかった。弥生時代後期か。

出土遺物

台付き壺(39) 口縁部を欠くが、ほぼ器形わかるものである。球胴状の体部上半に、径約6cmほどの孔が1カ所あけられている(焼成前調整)。体部上半はハケメ、下半はミガキ、脚部はミガキが粗く、隙間にハケメ調整の痕が残る。 (田村)

4. 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

S H10

中地区の南東端付近で検出した。東西辺が2.75m、南北辺が3.5mの隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。検出面からの深さは30cmほどであった。西南隅部を新しい土坑により切りられ、北辺中央やや東寄りに、破壊されたカマド跡と思われる焼土の塊が見られた。床面はとくに貼床やたたきしめの痕跡は認められなかった。また柱穴は認められなかった。埋土および床面から若干の遺物が出土した。出土した土器から、奈良時代前期と考えられる。

出土遺物

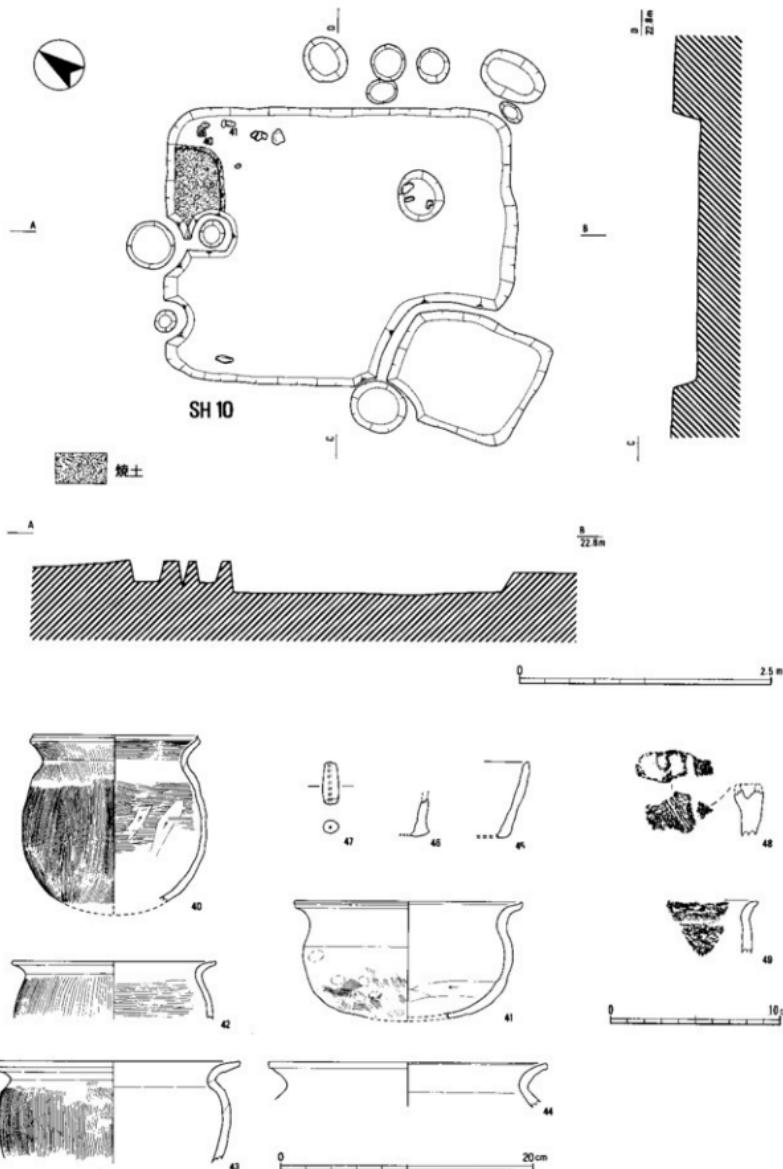
土師器壺(40～44) 口縁部の屈曲が弱く、ゆるやかに斜め上方に立ち上がり、端部をつまみ上げる40と、強く外反する41～44がある。41を除いて他は端部を上方へつまみ上げない。

製塙土器(45・46) いわゆる志摩式製塙土器である。45は口縁部から底部まで残るもので、やや薄手のもの。器壁は直立せず、やや内弯しながら斜め上方へ開く。口縁端部はやや尖り気味。46は下半のみの残存。

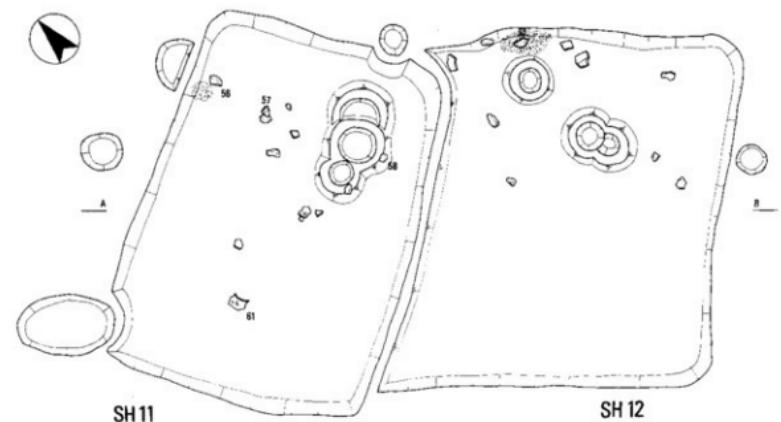
このほか、土錐(47)や混入品の縄文土器(48・49)がある。

S H11

S H10の南西6mに位置する。S H12と重複するが、S H11がS H12を切る。東西辺が3.8m、南北辺



第19図 SH 10実測図 (1:50)、出土遺物実測図 (1:4)



■ 燃土

21.8m



25.0



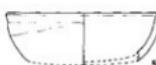
SH 12
SH 11



56



57
58



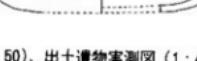
59



60



61



62

第20図 SH11・12実測図(1:50)、出土遺物実測図(1:4)

が2.6mの隅丸方形の堅穴住居跡である。検出面からの深さは20cm、北東隅に近い北辺部に小規模な焼土が見られたが、柱穴は確認できなかった。床面は貼床やたたきしめの痕跡などを確認できなかった。

埋土および床面から若干の遺物が出土した。

出土遺物

土師器皿（56～59） 口径16cm前後で口縁部が斜め上方に立ち上がるるもの（56～58）と内弯する59がある。58・59は底部をヘラケズリするが、56・57はケズリはない。杯は1点のみ（55）。壺（60～62）の口縁部形態は三様である。

このほか、混入と考えられる弥生～古墳時代の土器（63～66）がある。

S H12

S H11に北辺を切られる。東西辺は3.5m、南北辺が約3.2mほどが現存する若干ゆがんだ隅丸方形の堅穴住居跡である。検出面からの深さは約10cmと浅かった。カマド跡と考えられる焼土や柱穴などは確認できなかった。また、貼床やたたきしめの形跡も認められなかった。S H11およびS H12出土土器には大きな違いは見られず、時期的に大差のない奈良時代後期と考えられる。

出土遺物

土師器杯（50～52） 50は器高が高く楕に近いもの、52は口縁部を強くヨコナデするもの。

土師器壺（53） 口縁部が外弯しながら強く外反する壺。端部は細くすぼまっておさまる。

この他に、混入の繩文土器（54）がある。

S X13

中地区の中部東端で検出。一部は発掘区外へ延びる。確認できた範囲では、長辺1.7m、短辺75cmの隅丸のゆがんだ長方形を呈する。検出面からの深さは20cmほどであった。

埋土は焼土のブロックが混じる褐色土で、東辺中央部付近で土師器の杯（半欠）が伏せられた状態で底から約15cmほど浮いた状態で出土した。このほか、土師器杯、壺が出土した。飛鳥時代末期ないし奈良時代初頭に比定される。

遺構の平面形、焼土の存在、遺物の出土状態などから、この土坑の性格は墓壙と推定される。

出土遺物

土師器杯（67・68） 67が口径10.6cm、68はやや大きくなる12cmである。いずれも口縁部を強くヨコナデする。底部はいずれも平底となっている。

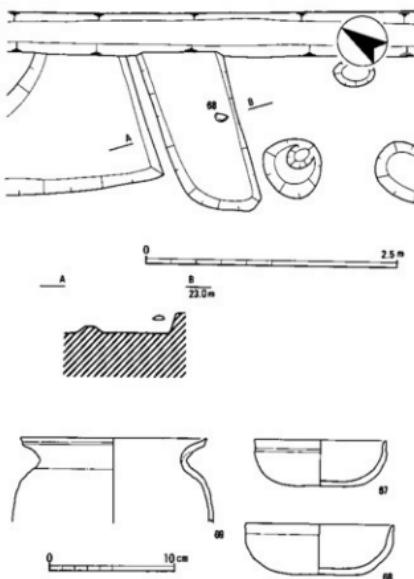
土師器壺（69） 推定口径14.8cmの小型壺である。ヨコナデによってやや薄くなった頸部から、ゆるく外反しながら厚みをもった口縁部が開く。端部は少しでも斜め上方につまみ上げられ、丸みをもって収められる。体部外面にはハケメが見られず、ていねいなナダ調整が施される。

S D 7

北地区のほぼ中央部を北東から南西へ流れる溝である。検出面における幅は1.5m、深さは東端の最深部で90cmであった。発掘区の南西端において不明瞭となる。室町時代の溝D56・58や後世の耕作溝などに切られて、擾乱部分が多く認められた。土師器などが少量出土した。奈良時代前期と考えられる。

出土遺物

土師器杯（70） 口径13cmで丸底に近い底部を有



第21図 S X13実測図(1:50)、出土遺物実測図(1:4)

する杯である。器壁はやや薄く、大部外面にユビオサエ痕を残す。

土師器甕 (71~74) 口径が15cm程度の小型甕71・72と、口径23cm程度の中型 (73・74)、大型の75がある。いずれも字状に外反しながら斜め上方に開く口縁部形態のもので、75を除き端部は尖り気味におさめられる。76は瓶である。

須恵器高杯 (77) 平底から直線的に立ち上がる杯部のつく小型の高杯である。脚中央部に一条の沈線を施し、外反して開く裾部の端部には面を持つ。当遺跡の南約1.2kmに位置する明気3号窯出土須恵器に酷似する。
(田 村)

SD 8

S X 3 の北西コーナーを切り、S K 48 のほとんどを内包して調査区を横切る溝である。検出面での幅は、広い所で2.3m、狭い所で1.5mある。溝底幅は、広い所で1mあるが、西半部はかなり狭く30cmほどである。深さは1.3mで、断面は大部分の所で逆台形である。調査区東端壁の溝断面を見ると、底に近い部分は溝法面の傾斜が垂直に近いほど急で、上半は45°程度の傾斜となっている。また、少なくとも4回の溝底の変化が窺われる。

S K 48 を内包する地点で SD 9 が取り付く。(もっとも、SD 8 と SD 9 の切り合い関係は、SK 48 の存在ということもあり、平面でも断面でもとらえられなかったので、本来 SD 8 の東半部分と SD 9 をつないだ流れが本流であり、SK 48 より西側部分の SD 8 が支流であるとも考えられる。)

出土遺物は多くなく、比較的浅い部分から、土師器片や須恵器片が出土している。この溝は SD 7 と同時期と思われる。

出土遺物

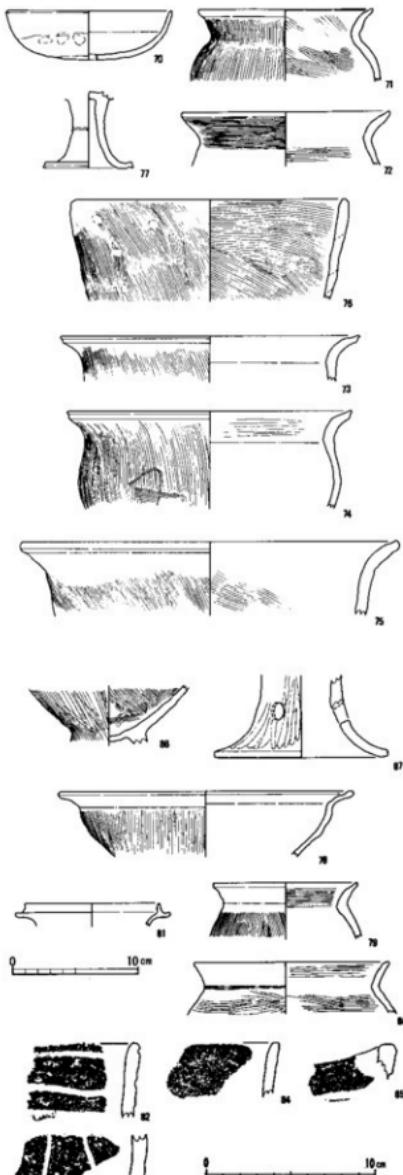
土師器甕 (78~80) 78は浅い鉢形の甕、また80は「く」字状の口縁部を有する甕である。

須恵器杯身 (81) 薄手で立ち上がりの低い古墳時代タイプの杯身。77の高杯と同様、明気窯産と思われる。

この他、混入品の繩文土器 (82~85) や、古墳時代の土器 (86~87) がある。

SD 9

S K 48 から、S X 3 に西辺に沿い、ほぼ南北に走



第22図 SD 7・8 出土遺物実測図 (1:4)

る溝である。S X 3 の西辺溝の外側半分ほどを抉ったかたちで掘られている。検出面での幅は、調査前に畠地であった地山の高い部分で 2 m、調査前に水田であった部分で 1 ~ 1.5 m である。底幅は 40 cm ほどで、やや丸みを帯びている。法面はどちらかというと直線的で、断面は大雑把に見ると逆台形である。

埋土の状況を観察すると、大きく二層に分かれる。上層は褐色系のやや粘質土であるが、下層は砂が主体で、その中にやや粘質の黒色土と黄褐色土が、径 2 ~ 10 cm の斑点状に混じる。S X 3 の溝と重なる辺りでは、下層の埋土を U 字状に抉った層が見られ、浚渫の跡をも思わせる。遺物は上層からは土師器細片が微量出土したが、下層からは全く出土しなかつた。

(西 村)

Pit 66 中区のほぼ中央部に位置し、直径 0.6 m ほどの円形ピットである。検出面からの深さは 10 cm で、中心部に直径 30 cm、深さ 5 cm ほどの小ピットがある。ピット内から 4 個体の土師器杯が出土した。奈良時代後期に属しよう。

出土遺物

土師器杯（88~91） 器高のやや高い 88・89 と、浅い 90、および大型の 91 がある。88 には体部外面に明瞭な粘土巻き上げ痕が見られる。

(田 村)

5. 平安~鎌倉時代の遺構と遺物

Pit 67 (Q33-P.7)

中区の南東部ほぼ中央に位置する。直径 25 cm の円形小ピットで、堀形とほぼ同じ大きさの土師器甕（完形）が、ほぼ正立状態で検出された。また、蓋として土師器杯が、甕の口縁部に納まっていた。この土師器杯は完形ではなく、一部（約 1 / 5）が欠損していた。そして、その上に 3 ~ 5 cm 程度の石が数個見られた。

所属時期は平安時代後期と考えられるが、このピットの性格は不明である。

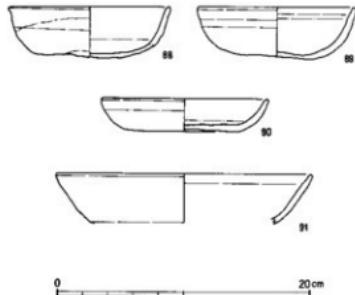
出土遺物

土師器杯（92） 口径 13 cm、器高 3 cm をはかる。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面はユビオサエ。内面は乱ナデ。

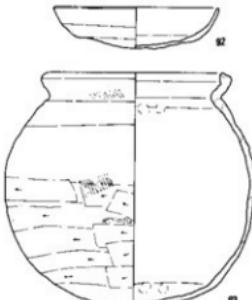
土師器甕（93） 口径 13 cm、器高 19.2 cm をはかる。く字状に外方へ折れて伸びた口縁部は、端部で内折して終わる。口縁部全体にやや厚みがある。大部は若干長脚ながら、球形に近い。体部外面上半をナデ調整、下半をヘラケゼリする。

S D 14

中区のほぼ中央部を北東から南西に流れる溝である。検出面での溝幅は 1 ~ 1.3 m、深さは 0.5 ~ 0.9 m であった。断面形状は逆台形を呈する。この溝からは縄文土器がかなり多量に出土したが、弥生~古墳時代の土器などと共に混入と考えられる。1 点出土した土師器皿（96）から、平安時代中期に比定することができよう。



第23図 Pit.66、Pit.67出土遺物実測図 (1 : 4)



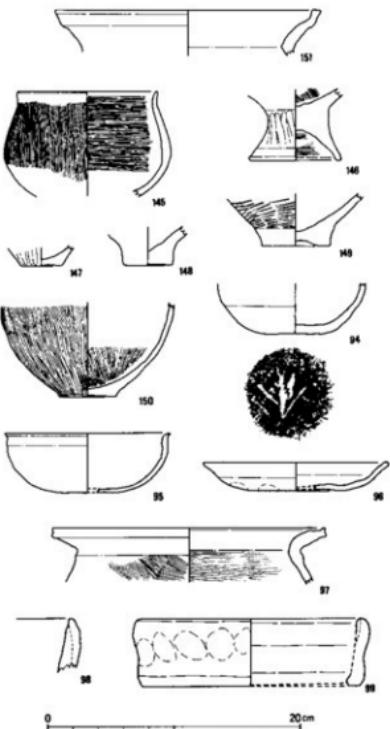
出土遺物

土器器皿 (96) 推定口径14.3cm、器高2.3cmで、ユビオサエ痕の残る底部から、ゆるく外寄気味に外方へ立ち上がる。端部は丸味をもっておさめられ、口縁部内外面には強いヨコナデが施される。

土器器楕 (94・95) 94は平底に近い底部から内寄しながら体部が立ち上がるが、口縁部を欠く。底部外面には木葉痕が見られる。95は丸底の底部から内寄しながら立ち上がる。体部は、口縁部で外半し端部は薄くおさめられる。いずれも奈良時代に比定されよう。

土器器臺 (97) 「く」字状に外方へ折れる口縁部は肥厚し、つまみ上げながら強くヨコナデされ、端部はやや薄くなる。奈良時代に比定されよう。

製塩土器 (98・99) いわゆる志摩式と呼ばれる



第24図 S D 14出土遺物実測図 (1:4)

もの。99は口径が推定できるもので、17cmと推定。底部は残存していないが、非常に薄い。一部器壁が剥離するが、体部外面にはユビオサエ痕が連続的に残る。98は細片であるが、口縁端部が尖るもの。

以上のほか、100～144の様な縄文時代中期・後期の土器のほか、弥生時代後期の土器（145～150）や、古墳時代前期と考えられる土器（151）などが混入していた。

S D 15

S D 14から南へ約14mほど離れ、ほぼ平行して走る溝である。検出面での幅1～1.2m、深さ0.5～0.7mで、S D 14とよく似ている。埋土より縄文土器、弥生土器、奈良時代などの土器が混入品として出土しているが、溝の時期としては、平安時代後期と考えられる。

出土遺物

土器器杯 (152～153) 152・153は混入と考えられるもの。154は底部と体部が不明瞭で、ユビオサエにて成形され、口縁部で強く外反する。

黒色土器楕 (155) 口縁部に近い体部は、強いヨコナデのため器厚が厚くなり、その分端部は尖り氣味となる。内面には細かいハケメが残っている。内面のみ黒色の、A類の楕である。

土器器臺 (156～159) 156～158は小型、159は大型品である。いずれも口縁端部は、ほぼ水平な面を持つ。

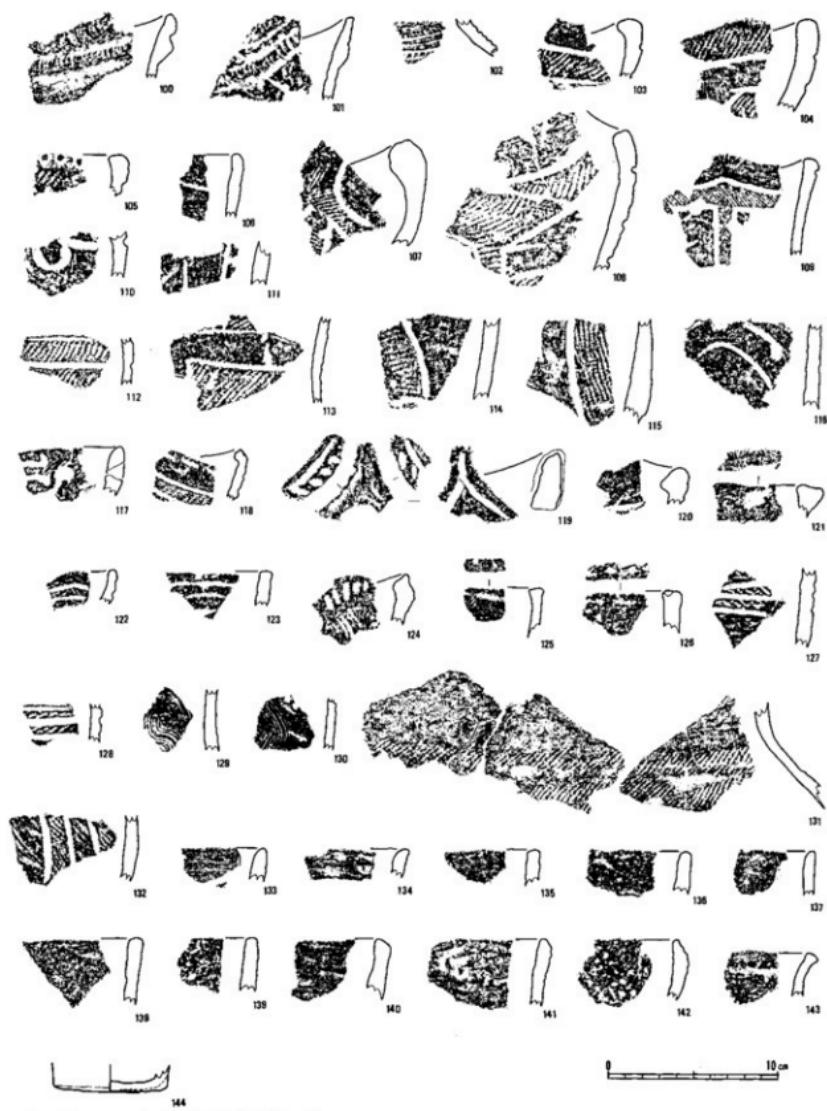
灰釉陶器楕 (160) 底部を欠損する破片。丸みを帯びた体部から口縁部は強く外反しておわる。輪は濁け掛け。

以上のほか、縄文中～後期の土器（161～172）、弥生後期の土器（173～179）が出土している。

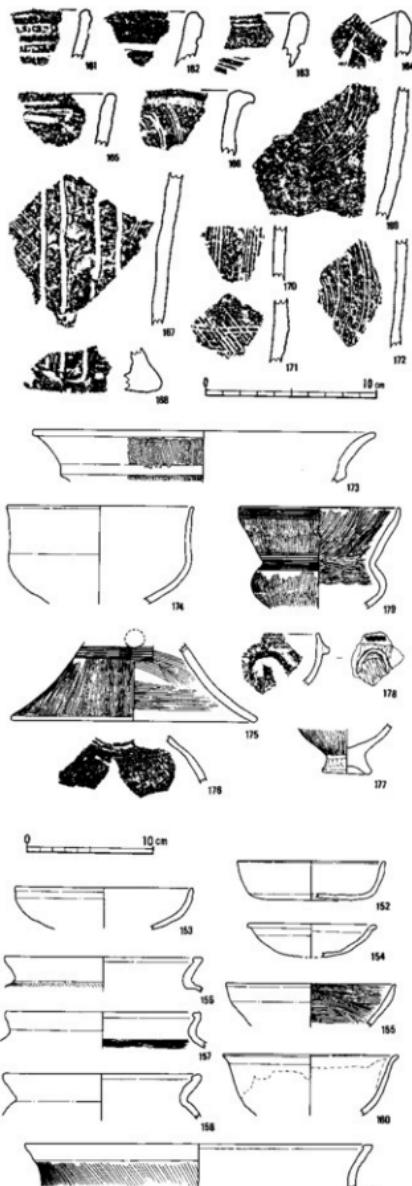
S Z 16

S D 15に近い中地区南西部で検出。東西1.8m、南北2mで方形に石が疎らに配される。石は拳大から人頭大の河原石で、南側の両コーナー部には見られない。平面形は方形もしくは隅丸方形であろう。また中央部にも集石が見られる。この遺構の下部には、中央の集石部に小土坑が検出された。遺物も出土したが、すべて細片ばかりで図示できるものはない。鎌倉時代前期ころに比定できる。

また、すぐ南のS D 15埋土上面からその南にかけ



第25図 SD 14出土縄文土器拓影 (1:3)



第26図 S D 15出土遺物実測図 (1:4) 拓影 (1:3)

て、同程度の大きさの石が散在していた。これも S Z 16と同様の遺構が破壊された痕跡かもしれない。

S Z 17

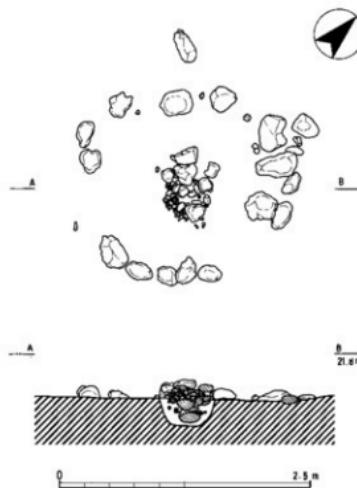
S Z 16の北東約12mに位置する。拳大から人頭大的石がコの字状に配される。もとは方形もしくは円形に配されていたものと思われる。南北の規模は1.2mと考えられるが、かなり破壊を受けているとみられ、特に西半の破壊が著しい。下部に浅い土坑を検出したが、上部の配石とややずれており、別の遺構かとも思われる。S Z 16と同様に性格は不明である。鎌倉時代初頭ころに位置づけられる。

出土遺物

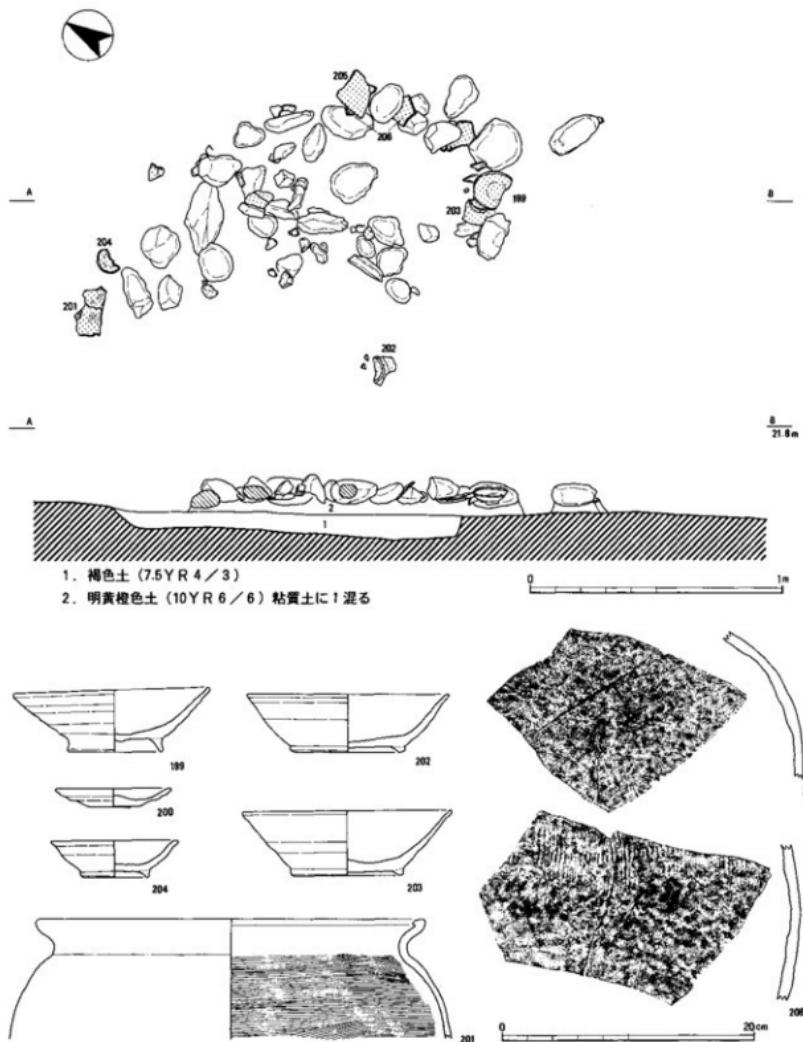
遺物としては、石の間などから土器壺 (201)、ロクロ製土器 (199・200)、山茶碗 (202・203)、小椀 (204) などが出土した。

土器壺 (201) は口縁端部の形状は平安時代末期の特徴をもつが、端部を内面に折り返す次期の手法の萌芽が認められる。

ロクロ製土器には碗 (199) と皿 (200) がある。山茶碗は203のように、体部が直線的になり口縁端部が肥厚するやや新しい傾向も見られる。小椀 (204) は断面三角形のしっかりした高台がつくもの。205・206は常滑産壺の体部片である。



第27図 S Z 16実測図 (1:50)



第28図 S-Z 17実測図 (1:20)、出土遺物実測図拓影 (1:4)

掘立柱建物

平安時代以降と考えられる掘立柱建物が多数あるが、現地で確認できたのはごくわずかである。出土遺物がなく、時期の決め手を欠くものも多い。ここでは、不詳・不明のものも含めて一括して取り扱った。それぞれの時期や規模等については、一覧表にまとめたので、ここでは主なものについて述べることにする。

S B20 中調査区の南東端で検出した。各柱穴は直径40~50cmの略円形の掘形をもつ、桁行3間、梁行2間の東西棟の建物と考えられるが、西側柱の柱穴は精査したものの検出できなかった。奈良時代の豊穴住居S H10の埋土に柱穴を掘り込んでいる。柱穴より土師器杯（180・181）や皿（182）、壺（183~184）、製塙土器片が出土した。土師器杯などの特徴から、平安時代前期に位置づけられる。

出土遺物

土師器杯（180・181） 180はS H2の出土遺物として取り上げられている。181は底部外面へラケズリがなされるものである。

土師器皿（182） 底部外面には2周ほど強くユビオサエした痕跡が明瞭に残る。

土師器壺（183~184） いずれも小片。丸みを帯びた口縁部は頸部から強く外反する。特に183などは直角に近い。体部外面には粗い継ぎのハケメが施される。ほかに把手付き壺もある。

製塙土器は図示しなかったが、口縁部を欠くもので、胎土は良いが2~4mm程度の砂粒を多量に含むものである。

S B21 S B20に重複する位置で検出された。桁行3間以上、梁行2間の東西棟と考えられるが、疑問が残る。北側桁行の柱穴が、他の遺構が重複するため確認できなかった。柱穴から土師器、ロクロ製土師器、山茶椀が出土した。平安時代末ないし鎌倉時代初頭ころと考えられる。

出土遺物

土師器（185~188） やや厚めの器壁から口縁部は薄くなり、丸みをもって仕上げられる椀（185）と、底部から急角度で立ち上がる杯（186）、口縁部外面にヨコナデによる面をもつ皿（187）と小皿（188）がある。

ロクロ製土師器（189） 底部のみ遺存。糸切り痕が残る。

土師器壺（199・191） いずれも小片。頸部からく字状に外反した口縁部は、端部で丸みをもちつつ内側へ摘まれ、水平方向に面を持つ。

山茶椀（192・193） いずれも断面三角形のしっかりした高台をもつ。体部は丸みを帯び、器高も高いめ、口縁部付近で外弯する。

S B22 S H11の東2mほどに位置し、S B20・21と重複する。桁行3間×梁行2間の南北棟建物であるが、柱間が0.9~1.1mほどと狭い。平安時代末ないし鎌倉時代初頭ころと考えられる。柱穴からは、ロクロ製土師器壺（194）のほか、縄文土器や土師器の小片が出土した。

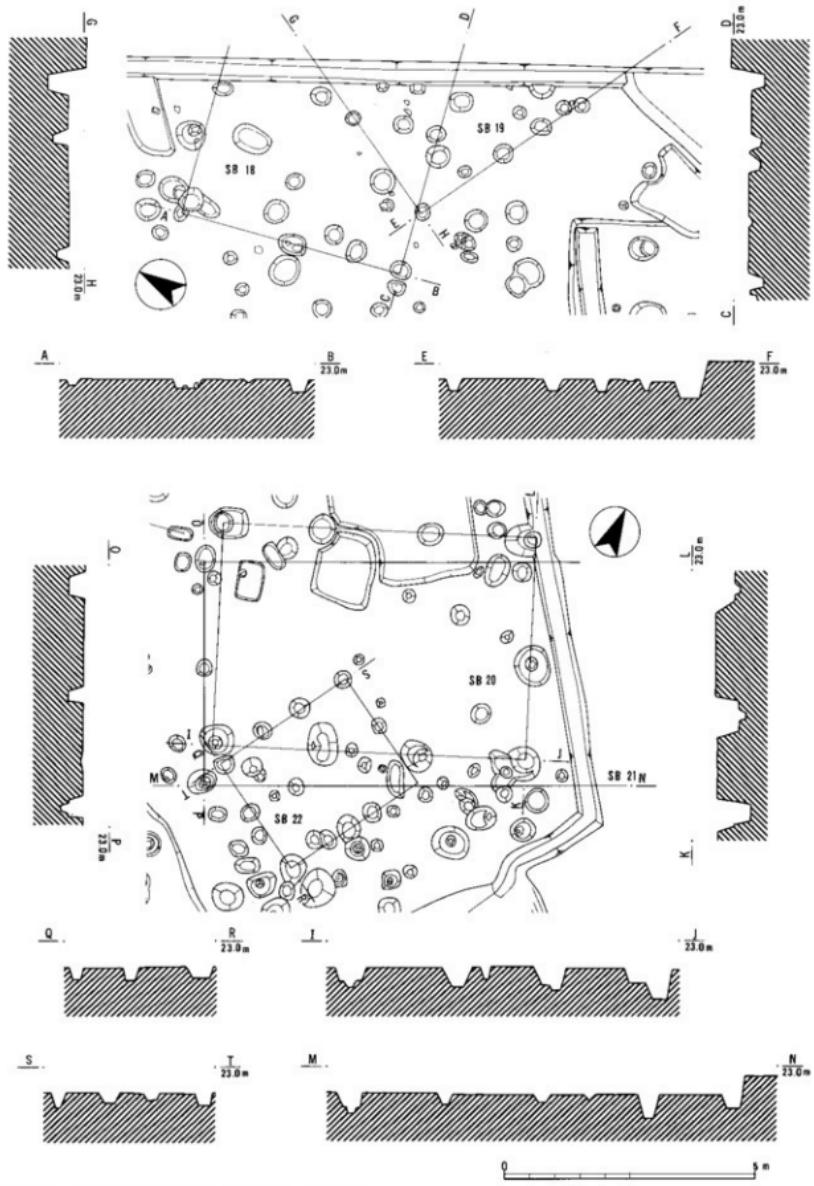
S B23 S B20の西南約4mに位置する桁行3間×梁行2間の東西棟の建物。棟方向はE23°Nで、S B20とよく似た方向である。平安時代末ないし鎌倉時代初頭ころと考えられる。柱穴より縄文土器片、土師器皿・壺、須恵器片などが出土した。図示できるものは土師器の小皿（195）しかない。

S B24 S H11の西に隣接する桁行3間×梁行2間の東西棟建物と考えられるが柱通りはよくない。各柱穴から縄文土器や土師器などが出土している。図示できるものは混入品のタキ目のある壺（196）のみであるが、出土した土師器壺や皿、山茶椀などから、平安時代末から鎌倉時代初頭ころと思われる。

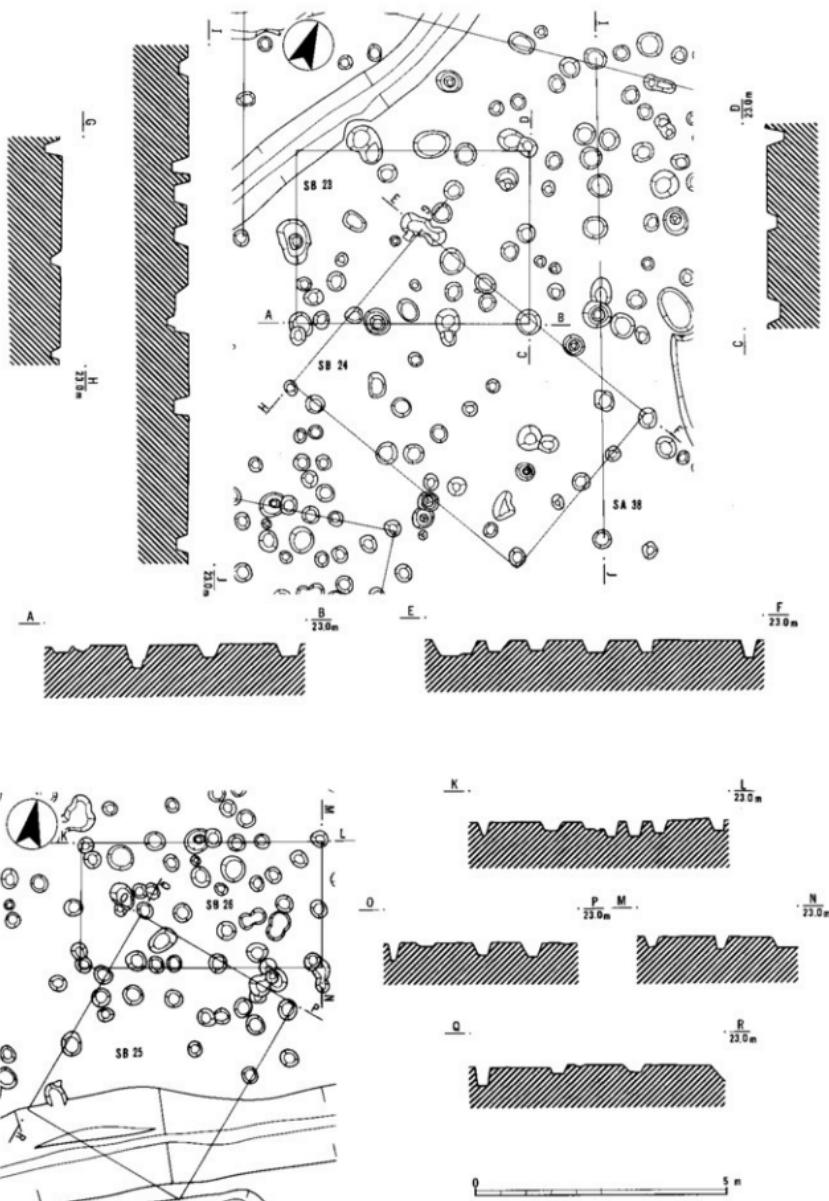
S B25 S B24の南4mに位置する桁行3間×梁行2間の南北棟と思われる建物である。南部分は奈良時代の大溝S D10を掘削する際に見落としたものと思われ、柱穴は検出されていない。S B24と棟方向がほぼ直行する。柱穴からは図示できるものはないが、縄文土器片や土師器杯・壺のほか、製塙土器片も出土している。平安時代におさまる建物であると思われる。

S B26 S B25に一部重複する位置にある。桁行4間×梁行2間の東西棟である。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

S B27 S B26の西約4mに位置する。梁行2間の東西棟と考えられるが、ほとんど調査区外のため全容は不明。柱穴からの遺物の出土もなく、時期も不明である。



第29図 SB 18・19・20・21・22実測図 (1 : 100)



第30図 SB 23・24・25・26実測図 (1:100)

S B28 中区の南半中央部に位置する。桁行3間×梁行2間の南北棟の建物である。柱穴より土師器皿や壺(197)が出土した。平安時代末期に属しよう。

出土遺物

土師器壺(197) 器壁の薄い球状の体部から、口縁部が直立気味に立ち上がる。壺部は丸みを帯びつつ内折する。

S B29 S B28と重複する桁行3間×梁行2間の東西棟の建物。棟方向はS B28とほぼ同じである。柱穴より土師器、須恵器、土錐などの小片が出土しているが、図示できるものはない。出土遺物より、この建物は平安時代に属しよう。

S B30 S B28・29に重複する2間×2間の総柱建物。柱穴の規模は40~50cmの円形で、他の掘立柱建物の柱穴の規模よりやや大きい。柱穴より平安末~鎌倉初頭ころの遺物が出土しているが、時期については不詳である。

S B31 S B28・29の南に位置する桁行3間×梁行2間の東西棟である。柱穴から縄文土器、土師器などが出土している。出土した土師器鍋の特徴から、鎌倉時代前期の建物と判断。遺物は図示できない小片ばかりである。

S B32 S B31に重複する。桁行3間×梁行2間の東西棟である。出土遺物がなく、時期は不明。

S B33 S B31の東に隣接する桁行3間×梁行2間の東西棟であるが、北側桁行の柱穴を確認できなかった。出土遺物には平安時代と思われる土師器杯片もあるが、山茶椀(198)があり、鎌倉時代前期と考えられる。

出土遺物

山茶椀(198) やや低く潰れかけた高台がつき、体部の立ち上がりよりもやや直線的になっているが、口縁部はヨコナデのため外反し、壺部はまだ厚くなっていないものである。底部は中心部分が薄い。

S B34 S B33に一部重複する位置にある。桁行3間×梁行2間の南北棟と考えられるが、確認できていない柱穴が多く、疑問が残る。出土遺物もなく、時期も不明である。

S B35 S B33の東に隣接する位置で確認。桁行3間以上×梁行2間の東西棟。東部分は調査区外にのびるため不明である。柱間距離が若干異なるが、

S B31と棟方向をほぼ同じくする。柱穴からの出土遺物に土師器細片が多いが、明確な時期は決めがたいものの、鎌倉時代後期以降かと思われる。

S B36 S B35の南に位置する2間×2間の総柱建物である。S B30とよく似た規模であるが、方向に若干違いが見られる。出土遺物はごく微量のため不明ながら、S B30とはほぼ同時期と思われる。

S B37 中地区の北半で一部が検出された。東西2間分、南北2間分が確認されたが、あとは調査区外へのびるため不明である。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

S A38 中地区の南半中央部付近に位置する。S B23の東で南北4間の櫛列と思われる。S B20・21・23などと方向を同じくする。柱穴から土師器小皿片が出土しており、鎌倉時代前期と考えられる。

S A39 S B23西側にのびる南北方向の櫛列と思われ、南北6間分のピット(一部欠)が相当するが、櫛列とするかどうか問題が残る。柱間距離は2.8mほど、北端ではほぼ直角に東へ折れるかもしれない。出土遺物は縄文土器の細片しかなく、時期は不明。

S A63 中地区南半部を東西にのびる櫛列。柱穴の掘り形は長円形である。縄文土器、土師器、山茶椀などの細片が出土しているが、時期は中世後期もしくは近世以降の新しい時期のものであろう。

Pit.68 (R 33 Pit 6)

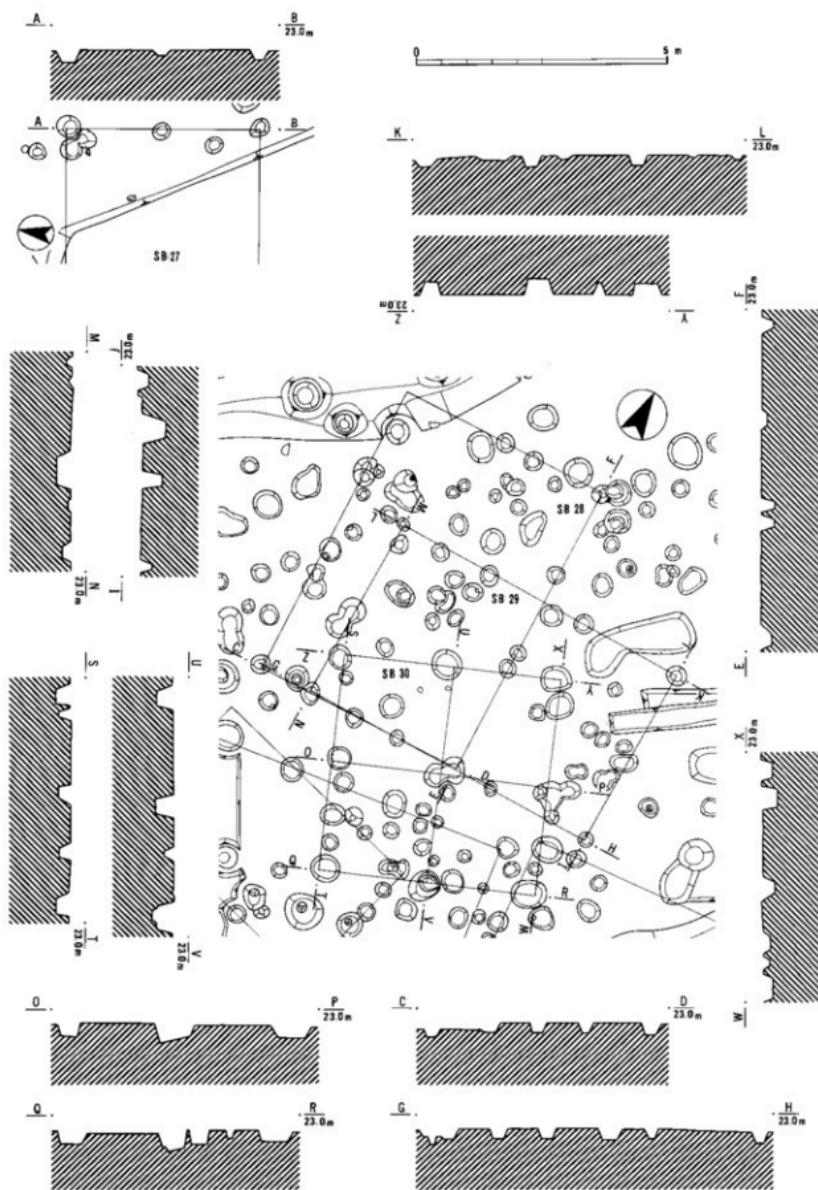
中地区の南東部付近、S H10とS H11のほぼ中間に位置する。平面形が 0.5×0.8 mの長方形を呈するピットで、検出面からの深さは10cmほどであった。

ピットの端近くで底面から少し浮き、傾いた状態で完形の土師器鍋(207)が出土した。この鍋は口径が18.4cm、器高11cmで体部外面に煤が付着している。鎌倉時代前期に比定できる。なお、この遺構の性格は不明である。

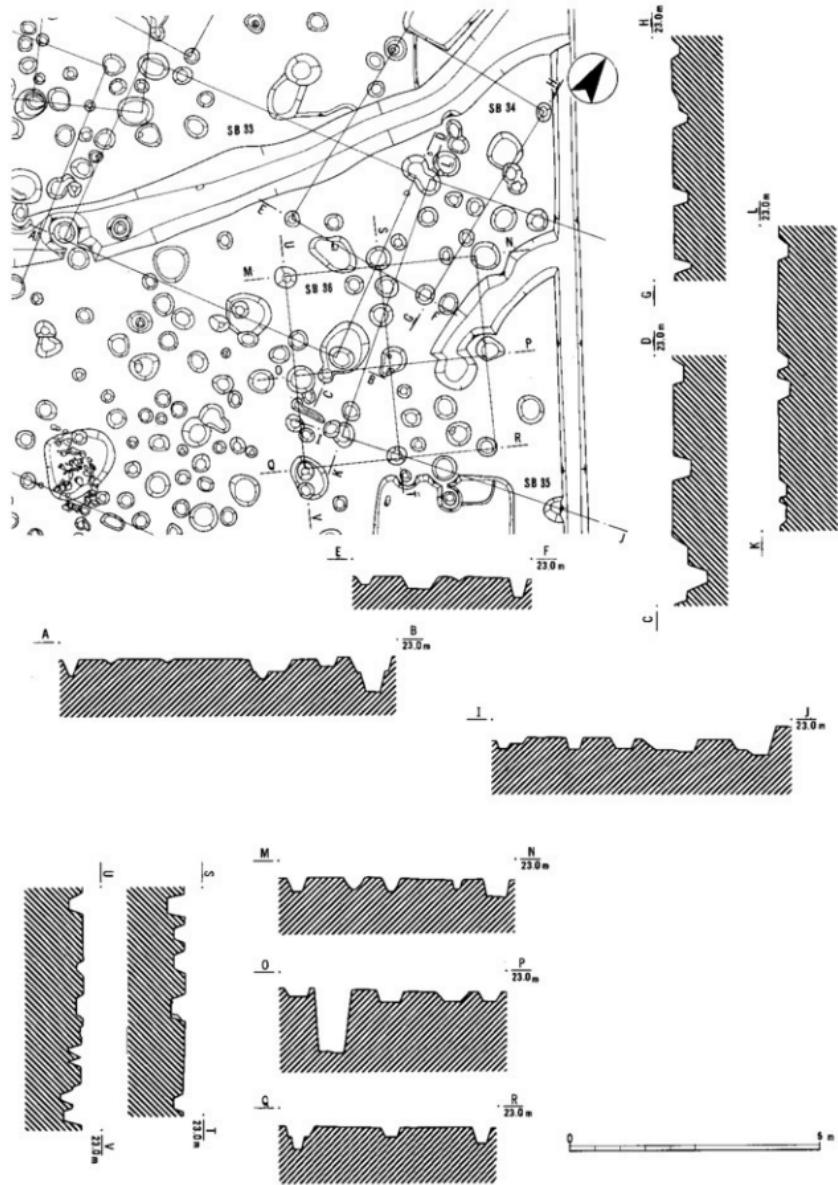
S D40

中地区的南西部にて検出。平安時代後期の溝S D15を切って、南東から北西方向へ流れ、段丘崖で切れている。幅0.9m、深さ0.5m、断面は逆台形である。南端に重複する土坑との切り合い関係は不明であるが、同一の遺構とも考えられる。

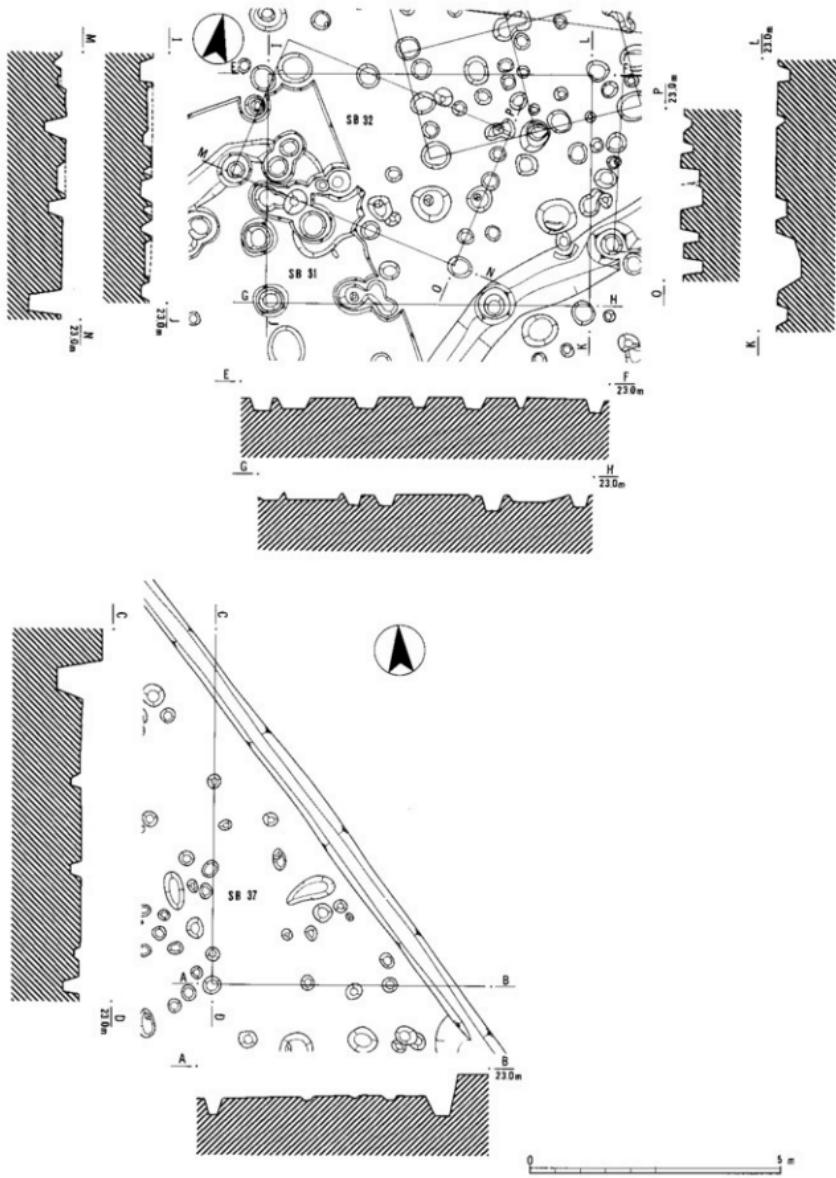
出土遺物



第31図 S B 27・28・29・30実測図 (1 : 100)



第32図 S B 33・34・35・36実測図 (1: 100)



第33図 SB 31・32・37実測図 (1 : 100)

土器小皿 (208) 口縁部外面にヨコナデによる面をもつもので、やや浅い器高のもの。

山茶碗 (210) は低い高台のつくもの。山皿 (209) は無高台である。

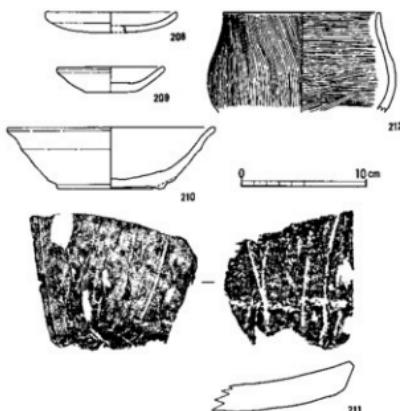
211は平瓦片で、非常に精良な胎土が使用されたもの。凸面はヘラズリ、凹面は布目痕が残る。このほか、混入品と考えられる弥生時代後期の高杯 (212)などがある。

(田村)

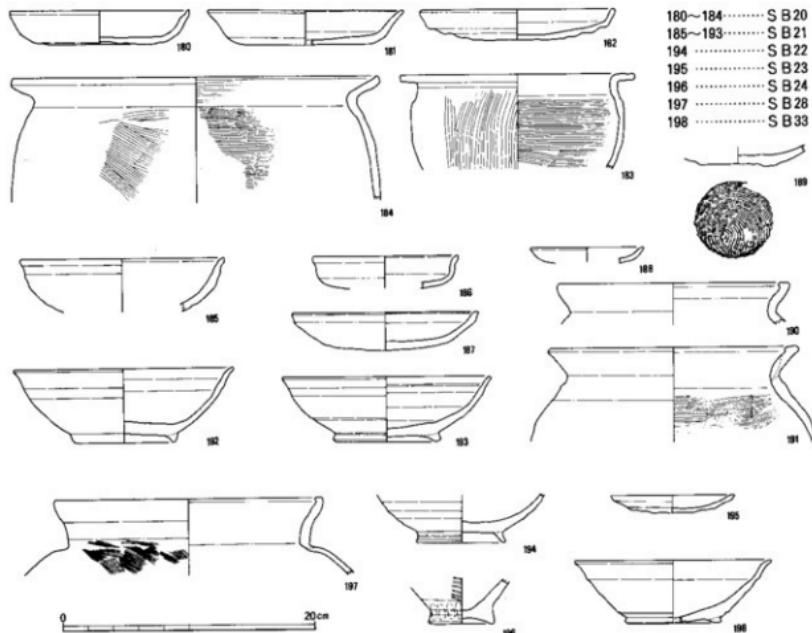
S D41

S X 3 の南側を、北東—南西方向に走る溝である。調査区の西半ではほぼ南北方向の流れとなるが、東半部と比べると、深さが10cmほどとなり浅くなり、溝の肩のラインも明瞭さに欠けた。しっかりと検出された調査区東半部では、溝は二重になっているよう見え、1.6~2 m幅の溝（外溝）の中に60~70cm幅の溝（中溝）が通っている格好である。ただ、溝の南辺は、外溝の肩から中溝の肩まで斜面が続くのに対して、北辺ははっきりとテラス状の部分が見ら

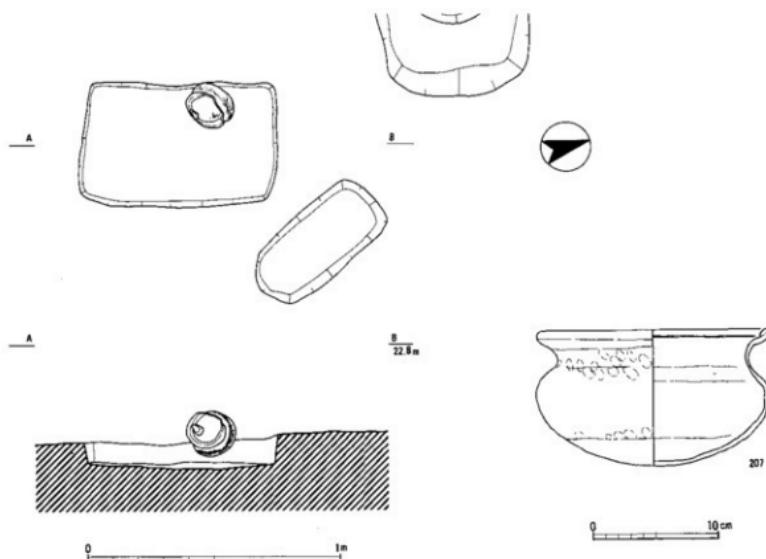
れ、単純に溝の中に溝が掘られたとは結論づけられないようである。テラス部分は、S E 46に続き、また、調査区東壁近くでとざれる。



第35図 S D 40出土遺物実測図 (1:4)



第34図 拔立柱建物出土遺物実測図 (1:4)



第36図 Pit.68実測図(1:20)、出土遺物実測図(1:4)

遺構名	規 模	棟 方 向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
S B18	(2) × 2	E 18° N	—	4.6	2.6	2.3		
S B19	(2) × (1)	E 22° S	—	—	2.3	2.0		
S B20	3 × 2	E 20° N	6.1	4.5	2.0	2.25	平安前期	
S B21	(3) × 2	E 22° N	—	4.5	2.0	2.25	平安末～鎌倉	
S B22	3 × 2	N 33° E	3.0	2.5	1.0	1.25	平安末～鎌倉	
S B23	3 × 2	E 23° N	4.5	3.5	1.5	1.75	平安末～鎌倉	
S B24	3 × 2	E 17° S	6.0	4.0	2.0	2.0	平安末～鎌倉	
S B25	4 × 2	E 10° N	4.8	2.6	1.2	1.3	平安	
S B26	(2) × 2	N 23° E	—	3.4	—	1.7		
S B27	— × 2	E 10° N	—	3.8	—	1.9		
S B28	3 × 2	N 5° W	6.3	4.4	2.1	2.2	平安末期	
S B29	3 × 2	E 3° N	6.2	3.8	2.1	1.9	平安	
S B30	2 × 2	E 25° N	4.3	4.3	2.15	2.15		純柱
S B31	3 × 2	E 10° N	6.4	4.6	2.3	2.3	鎌倉前期	
S B32	3 × 2	E 10° S	4.8	2.9	1.95	1.95		
S B33	3 × 2	E 13° N	5.9	4.0	2.0	2.0	鎌倉前期	
S B34	3 × 2	N 2° W	4.5	3.2	1.6	1.6		
S B35	(2) × 2	E 13° N	—	5.4	—	2.7	鎌倉後期～？	
S B36	2 × 2	N 35° W	3.9	3.8	1.95	1.9		純柱
S B37	(2) × (2)	N 4° E	—	—	2.0	1.8		柱間距離不揃
S A38		N 23° W			2.5		鎌倉前期	柱間距離不揃
S A39		N 22° W			2.8～3.6			柱間距離不揃
S A63		E 8° N			2.8～3.0			柱間距離不揃

第4表 据立柱建物・柵列一覧

遺物

土師器の小皿・皿（ロクロ製土師器を含む）・椀（ロクロ製土師器）・鍋、山皿・山茶椀・捏鉢等の陶器類が出土している。

土師器

小皿（213）・皿（214・215） 口縁端部をヨコナデし、内面はナデできれいにするが、外面は指オサエの痕で凸凹したままの皿である。

ロクロ製土師器皿（216）・椀（217・218） 216は底部を疑高台状に突出させている。椀は、ロクロ水挽きで成形し回転糸切りした体部に高台を貼りつけたものである。217は通常の平らな底部に高台を貼りつけ、白色に近い胎土であるのに対して、218は疑高台状に厚くなかった底部に高台を付け、胎土は赤みを帯びたものである。

鍋（219～221） 口縁部は、上方に延びる短い頸部の先を外反させている。端部は折り返しにより肥厚させている。219と220は内面にハケメの跡が薄く残る。

陶器

山皿（222） 口縁端部のヨコナデが強く、外弯する。底部は疑高台状に出っ張り、 $1/2$ ほどどの残存部からは、回転糸切り痕をナデ消したような様子が窺える。

山茶椀（223～235） 223・224・226・229などは、体部に丸みがあり、比較的器壁が薄く、高台の作りも貼りつけ方もやや丁寧である。比して、225や228は体部がやや直線的で、高台がかなりぞんざいである。藤澤編年に当てはめると、前者が4型式に近く、後者が5型式ということになろう。

鉢（236） 体部外面はヘラ状工具で調整してあるようだが、非常に弱くわかりにくい。

S D51

S D41と2～3mの間隔をもってほぼ平行に検出された。幅60cm、深さ20cmでかなり直線的である。S D41が流れを南北に変える地点で切れる。

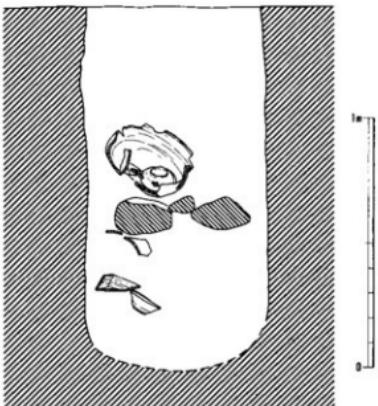
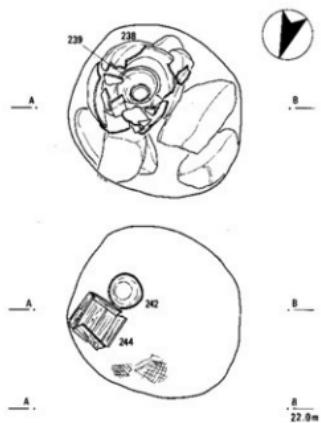
S D41とS D51は、平行に近いという検出のされたから、何らかの関係があるように思える。また、調査前、この2条の溝の上にはかなりの利用度があつた農道が存在し、S D41が描くカーブはまさにその農道のルートである。S D41とS D51に挟まれた部

分は、当時も道路ではなかったのだろうか。

そもそもこの辺りは条里による方格地割りがなされていた所である。そんな中で、カーブをもった道路が水田を分けていたのには些か不自然さがあった。これらの遺構の時期には、S D41より北側はまだ水田には開発されておらず、自然堤防の微丘陵地のままであったのであろう。

S E42

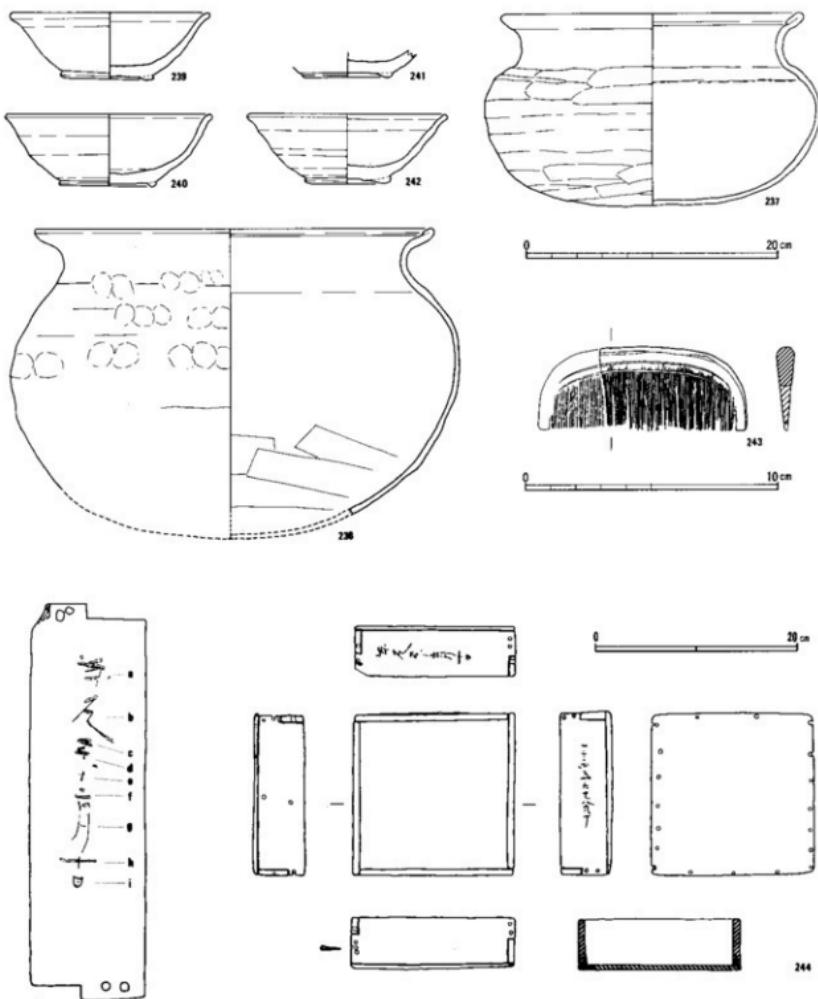
直径70cmで円筒形に掘られた素掘りの井戸である。検出面では、褐色土に暗褐色土が斑点状に混じつ



第37図 S E42遺物出土状況実測図（1:20）

た土が埋土として確認された。掘り下げていくと、検出面から50cmの深さで10~20cmの川原石がほぼ同レベルで5個見られ、その直下に土師器の鍋(238)が検出された。そしてこの鍋の中からは、2個体の完形山茶碗(239・240)が口を合わせた状態で見つかった。この出土状況からは、わざわざそのように

して井戸に沈めたと思われる作為的なものが強く感じ取られる。これらの下方、検出面から70cmの所では、再び川原石が見られたが、ここでは、30cm大の少し大きめの石が、あたかも井戸を塞ぐように7個詰まっていた。その下には土師器鍋(237)が、そしてそのさらに下、検出面から110cmほどで櫛・折・完



第38図 S E 42出土遺物実測図 (1 : 4 はか)

形山茶碗（243・244・242）が検出された。これらの遺物の周辺には、茎状の纖維質の植物痕跡も残っていた。なお、樹について、掘削した泥とともに検出され、出土状況図は記録になかった。井戸底部は少しすり鉢状になっており、最深部で検出面から1.45mの深さであった。

堆土掘削中、水が湧きはじめたのは土師器鍋（237）が検出されたあたりからである。水の湧き方は、当然天候にも左右されるが、通常は、50～60cmの深さでは水を全て除去したあと30分ほどで元の様に溜まるという程度であるが、底に近づくにつれて、水のしみだしが目に見えて分かるようになった。

遺物

土師器

鍋（237・238） 238は口径31.2cmの大型、237は口径23.5cmの中型鍋である。238の体部が球形に近いのに対して、237は底部が平たく偏平感がある。口縁部は両方とも同様の作りで、体部から上部に立ち上がる頸部を持ち、斜め上方に開いて端部を折り返し肥厚させる。

陶器

山茶碗（239～242） 体部がやや内寄して延び、口縁部が少し外反する。幅広感のある高台が貼りつけられる。

藤澤編年の5型式にあたる。

木製品

櫛（243） 現存長5.5cmの横櫛で、復元すると8.5cmほどの長さになろうか。中央部で2cmほどの深さの刻みを入れ、厚さ0.5mm弱の歯を作りだす。刻みは両側から施され、歯の基部からさらに8mmほど刻みの線だけがついている。表面には漆などの痕跡はなく、白木のままの製品だったようである。材質はイヌキであるという分析結果が出ている。

杓（244） 15.8×4.5×0.8cmの板の端部をカギ状に加工し、合欠状に組み合わせて正方形の枠を作り、底板を付けて容器としている。板のつなぎ合わせには長さ1.5～2.5cmほどの木釘を用いる。全体に雑な作りで、特に底板を留めるための釘の打ち方に規則性がなく、また、側板を割ってしまったり、側板からはみ出たりする釘もある。さらに、底板は枠に合わせた正方形ではなく、四辺のうち一辺が枠より

も2cmほど大きいままである。

側面のうち2面には線刻がある。一面には一から九までの漢数字が刻まれ、もう一面には年月日が刻まれる。

この升の容量は、 $14.8 \times 14.6 \times 4.5\text{cm} = 972.4\text{cm}^3$ と計算できる。

〈 側面に線刻された年月日について 〉

現状で第38回のように線刻を写し取った。はつきり読み取れるのはf～iの最後の4文字であり、それぞれ「二」「月」「十」「日」と読める。a～eについては、推測もまじえて以下のように読むことができる。（三重県埋蔵文化財センター主事小林秀氏に解説していただいた）

・ b = 元、c = 、d = 「年」という字の頭の部分、としてみる。

そうすると【a 元元年】と読める。

・ 2文字目が「元」という字の元号を探す。

貞元（976～78） 寛元（1243～47）

天元（978～83） 康元（1256～57）

長元（1028～37） 正元（1259～60）

保元（1156～59） 乾元（1302～03）

安元（1175～77） 嘉元（1303～06）

承元（1207～11） 延元（1336～40）

・ 伴出する山茶碗から、平安末～鎌倉初の時期の年号にしまると、保元・安元・承元・寛元あたりが候補となる。

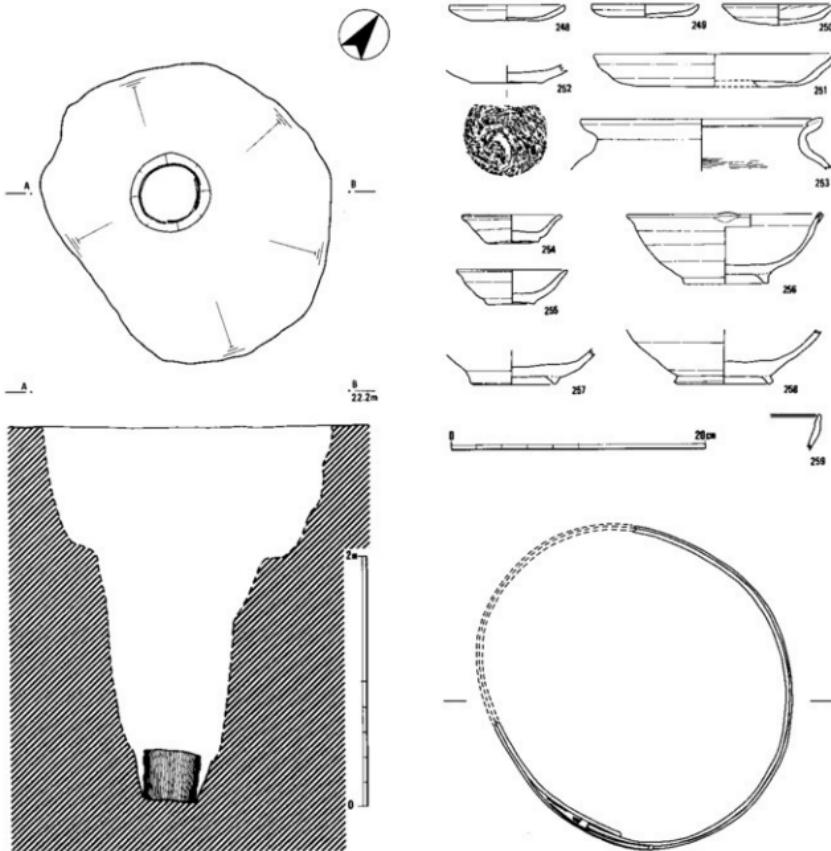
・ 「保」「安」「承」「寛」の形とaの形を比べてみると、どれとも似ていない。

しかし、それぞれの異体字まで考慮して比べてみると、aは「承」の異体字の「兼」の上部によく似ている。

☆ すなわち、元号は“承元（1207～11）”と推測でき、a～dまで、「承元・年」ということになる。

・ ところで、eの「！」はdの「年」という字の最終画ともとれし、漢数字の「十」の縱棒とも考えられる。前者の場合、日にちは「二月十日」となり、後者の場合は「十二月十日」となる。

・ さてそこで、元号を承元とした場合、承元元年は10月25日から始まっていることから、承元元年の二月十日はあり得ず、従って、aは漢数字の「十」



ということになる。

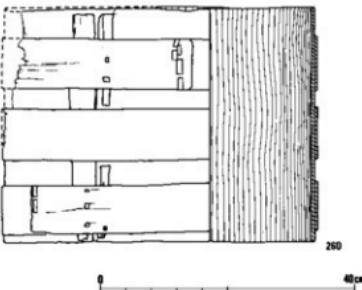
以上、この線刻は、

「承元、年十二月十日」と読める。

* 承元、年=1207年

S E43

直径90cmの円筒状に掘られた遺構である。埋土は灰色の砂と褐色土が混じったものであるが、底の方はほど砂の割合が多い。最深部までは77cmの深さであり、その底面には、20cm大の河原石があたかも置かれたかのように2個みられた。掘削中に水が湧いてくることはなかったが、井戸として掘られたもので



第39図 S E46実測図(1:40)、出土遺物実測図(1:4)

であろう。埋土の中に土師器皿（ロクロ土師器を含む）の細片や山茶椀片が混じっていた。

遺物

土師器皿（245）は胎土が白っぽく、1mm大の砂粒が多数含まれる。口縁端部のみヨコナデされ、わずかに外反する。

S E 44

直径1.2mの円筒形の素掘り井戸である。壁の崩落と湧水のため、1mほどの深さまで人力で掘り、あとは重機による断ち割り調査とした。

底は、砂利層手前のオーリー^イ黄色砂層で止まっており、検出面からの深さは2.1mである。

遺物

土師器片が少量と完形山皿（246）が出土した。246は外面に軽く稜を持ち、大きく2段に水挽きした指のあとが窺える。いわゆるヌタも見られる。

S E 45

直径1.2mの円筒形の穴である。検出当初は井戸であろうと推測したが、検出面からの深さが40~50cmで底となってしまった。調査期間中、水が湧いて溜まるというようなことはなかった。形状からすると、やはり井戸であろうが、掘削の途中であったのだろうか？

遺物

土師器細片が少量で、図示できるものはいわゆるロクロ製土師器の小皿（247）が1点だけであった。

247の胎土は赤褐色で、白色の微細砂粒が混じる。底部に比べて口縁が薄く、内面では底部が盛り上がりつたように段ができる。

S E 46

周溝墓S X 3の溝部にかかる素掘りの井戸である。検出当初は直径2m程の円形の平面形であったが、降雨により壁が崩れ2.0m×2.4mの不整形な円形となってしまった。

検出面から1mほどの深さで、壁の崩落、水の湧きだし等の理由から人力掘削を諦め、調査最終段階で重機による断ち割りを試みた。その結果、検出面から2.6mの深さで曲物が検出され、井戸の底部となつた。曲物自体の深さ（曲物側面の高さ）は約40cmで、検出面からおよそ3m下の砂利（2~3cm大）層の上に置かれている。深さ3mの井戸は、当遺跡では

最深である。

井戸上部は崩落により、また、下部は重機のバケットによる掘削のため、壁面の様子は正確には記録できなかった。しかし、深さ1.5mの所に、植物を多数含む暗褐色土が凸レンズ状に溜まっている部分があり、それを、この井戸のある時期の底であると考えると、径1mの円筒状井戸を想定することができる。ただ、曲物設置部分については元々の様子がよく観察できた。それによると、厚さ30~40cmの灰色の砂層を径60~40cmの逆円錐台状に抉り、そこにすっぽりと曲物を入れ込んでいる。曲物と砂層の間にできた隙間には、5mmほどの大きさの砂利がつめこまれていた。

遺物

人力で掘削した上部1mほどまでの部分で、さほど多くはないが土器が出土した。土師器皿・鍋と山茶椀・山皿である。ほとんどが破片であったが、山皿（254・255）は完形であった。また、1片ではあるが瓦器片もみられた。

土師器

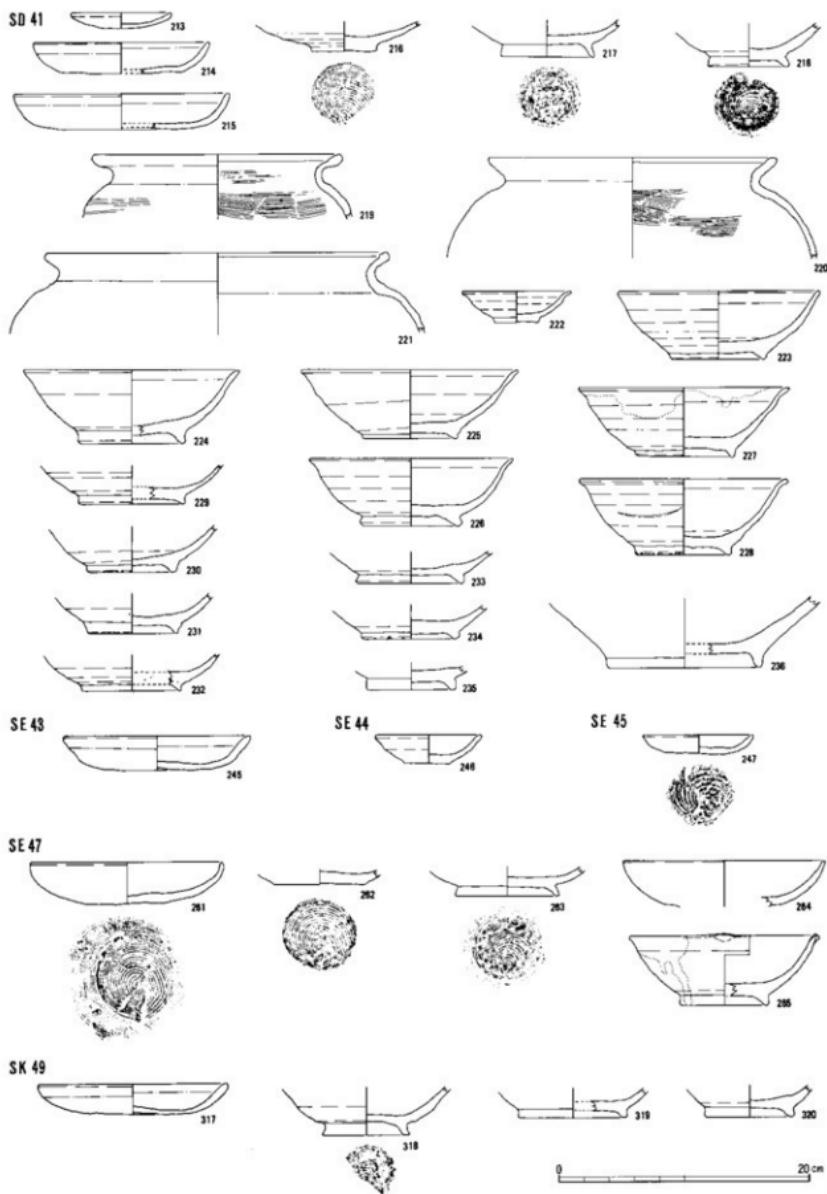
小皿（248~250）・皿（251） 口縁端部をヨコナデし、内面をナデ、外表面を指オサエのままという成形パターンの皿である。248・249はやや薄い器壁で器面が少し波うった感があるが、250は少し厚手で248・249よりしっかりした感がある。251の皿は口縁が直線的に外方向に延び、端部で少しだけ内側方向に折れる。

ロクロ製土師器皿（252） 暗褐色で、他の土師器に比べて焼きの硬いものである。

鍋（253） 口縁から肩部にかけての9×5cm程度の小片である。推定の口径は18.8cmと、鍋としては小型である。肩部から軽く上方に折れ小さな頸部をつくり、その先に口縁部を広げる。口縁端部は折り返され、ヨコナデされている。肩部内面には横ハケが施される。

陶器類

山皿（254・255）・山茶椀（256~258） 山皿は、底部から若干の湾曲を持って斜め上方に体部が立ち上がり、口縁部でヨコナデが強くなりやや外反する。高台は持たないが、外表面に段が見られ、疑高台でも言うべき底部となっている。



第40図 SD 41・SE 43・SE 47・SK 49出土遺物実測図 (1 : 4)

山茶椀も、やや湾曲した体部が底部から延びる。256は弱い輪花を持つ。

瓦器

椀（259） 口縁部のみの小片である。口縁部内面の沈線は端部に弱く施される。口縁は、横ナデにより内弯し、体部には指オサエ痕が見られる。ヘラミガキは、内面は密に施されるが、外面はかなり疎である。

木製品

曲物（260） 162×37×0.7cmの板に、ほぼ1cm間隔の切り目を入れ、円筒形に丸める。両端の重なった部分を桜の皮で留め、外周に幅8cmの板のタガを3枚入れる。タガと本体の間に薄い板を差しこみ、隙間を埋めている。

S E 47

直径1.2mの円筒形の素掘り井戸である。S E 23と同様に、深さ1mほどまで人力掘削で、以下は重機による断ち割りとなった。検出面から1.7mで底となる。底部には、木の枝や竹片・草などの植物が比較的多くみられた。また、ロクロ製土師器皿（261）も底部から出土している。

遺物

ロクロ製土師器 261の皿は、口縁端部と内面についててはやや丁寧に仕上げているが、外面には指痕や粘土カスの付着が見られ、難な仕上げであるといえよう。口縁端部は、ヨコナデが強くなされているのであろう、端部内面円周の一部に内傾する幅の狭い面をもつ。

264は体部のみである。やはり、内面は丁寧な回転ナデで、外面はほとんど水挽きのままという状態である。

山茶椀（265） やや丸みを帯びて体部を立ち上がらせ、口縁端部を外反させる。1／2弱残存している口縁部分に輪花が一か所見られ、また、灰釉が濁け掛けされている。藤澤編年の4型式におさめることもできる山茶椀である。

S K 48

S D 8 の埋土に掘り込まれた土坑である。径2.4～2.5mのやや方形がかった円形の平面形で、壁をほぼ垂直にして筒状に掘られている。検出面からの深さは1.2mである。底部はかなり平坦であると言えるが、

一部に段状の不整部分が見られる。埋土は概ねU字状に堆積する。

遺物

最上層と最下層以外で、ほぼ万遍無くどの層からも、土師器の皿（大・小）や鍋、山茶椀などが多数出土した。土師器の中にはロクロ製土師器も混じり、遺跡全体の、この時期（平安末～鎌倉初）の出土土器の縮図といつてもよい。

土師器

小皿（266～292） 口径8～9cmの小皿である。器高は1.5cm程で、深さはあまりない。ロクロを使用せずに作られ、基本的に、口縁端部はヨコナデ、内面はナデ、外面は指オサエのままという調整方法である。ヨコナデの施され方により、口縁部外面にはつきりと面を持つものと、そうでないものとに分けることもできる。

皿（293～302） 口径15cm、器高3cm程である。製作技法は小皿に準じる。

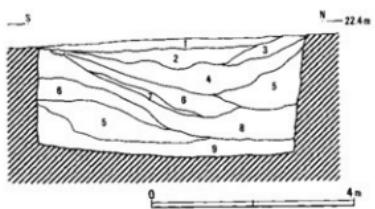
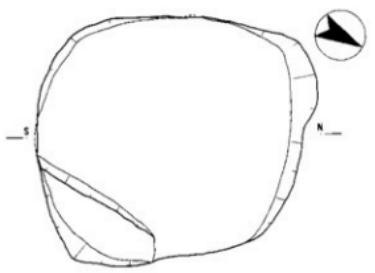
ロクロ製土師器皿（303・304） 304は、底部がやや突き出で高台状になる。底面は、糸切り痕というよりも、棒状工具のようなものでナデられているようである。

ロクロ製土師器皿（305・306） 305の口縁部の内弯が目立つのに対して、306は直線的である。

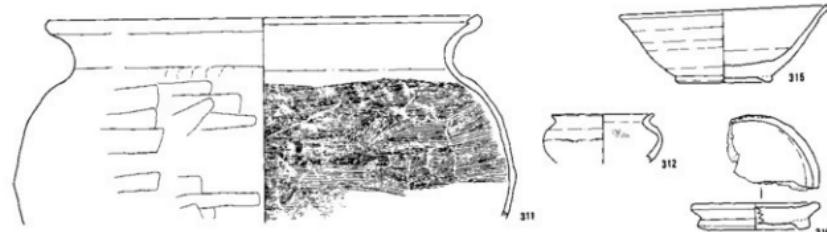
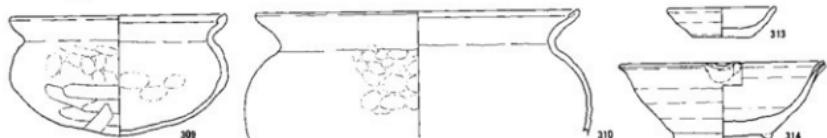
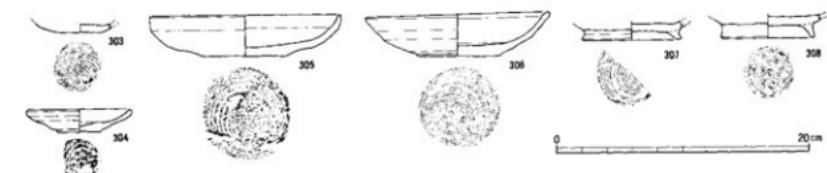
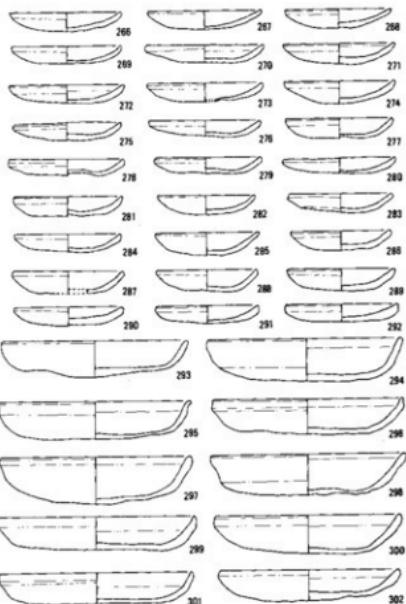
ロクロ製土師器椀（307・308） 307は乳白色の胎土で、308は橙色系の胎土である。307の高台が中頃から段を持って外に開くのに対して、308は直線的な高台である。

鍋（309～311） 大、中、小の3種の大きさがある。いずれも口縁端部を折り返し、肥厚させたものである。309と310は、口縁が体部から直接逆八字形に延びるが、311は少し上方に延びる頸部とも言える部分を持つ。調整は、口縁部はヨコナデ、体部上半は指オサエのまま、もしくはその上に軽いヘラケズリ（板ナデ）、体部下半はヘラケズリとなる。311は体部内面にかなり細かいハケメを施す。外面には煤が付着する。

ミニチュア鍋（312） 口径7.9cmの錫形をした土器である。底部は見つけられなかったが、口縁部から体部にかけての破片が2片と口縁部のみの破片が1片ある。口縁部は3片合わせて2／3ほど残る。



1. 暗褐色(10YR 3/4)土。
2. 1に淡黄色(5Y 6/4)粘質土。
3. 1+淡黄色(5Y 6/4)砂質土。
4. 1+褐色(10Y R2/1)土。
5. 褐色(10Y R4/4)土。
6. 5+明黃褐色(2.5Y 7/6)土。
7. 炭化物。
8. ブロックと黑色土粒が混じる。
9. 5+炭化物。
10. 1+褐色(10Y R2/1)土。



第41図 SK48実測図(1:50)出土遺物実測図(1:4)

口縁から体部までの破片の一方には内外面とも炭化物の付着が見られるが、もう一方は、表面が風化したのであろうか、それが見られない。口縁端部に折り返しではなく、鍋形の土器をそのまま真似た特別な用途の土器とは即断できないが、ここでは取り敢えずミニチュア鍋としておきたい。

陶器

山皿・山茶碗（313～315） 山皿（313）は、体部に少し丸みがあり、口縁をやや外側に反らす。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部との境（底面円周）を面取りをするようにナデている。口縁端部から内面にかけて自然釉がみられる。山茶碗は、器盤が口縁に向かって少し薄くなり、口縁部を外反気味にする。高台は低く、貼りつける際に高台内側を潰すようにナデしている。314は輪花が一か所施されている。

硯（山茶碗からの転用硯）（316） 山茶碗の体部を欠いて底部だけにし、その欠き口を磨り削ってきれいにし、硯としている。山茶碗の見込みにあたる部分は、墨を擦ったのであろ磨耗してツルツルとはしているが、それでもまだ表面の細かい凹みは消えておらず、それほど長い期間の使用ではなかったようである。高台は幅広のボリューム感あるものである。

これらの山茶碗は、藤澤編年の5型式の時期にある。

S K 49

調査区東端で検出され、調査区外へも延びる土坑である。南西～北東方向に長軸をもつ楕円の平面形であるが、南西の先端部にはピット状の窪みがある。深さは、最大値をとると30cmである。

遺物

S D41等と同様の土器片が出土している。318のクロ製土器碗は白っぽい胎土である。（西 村）

6. 鎌倉末期～室町時代の造構と遺物

S K 52

平面のほとんどの面積が試掘坑にひっかかった造構である。一辺1.1mの正方形に近い土坑で、深さは、検出面から7～8cmほどである。

遺物は出土しなかつたが、平面形や規模から、S

X53と同様の性格を持つものと思われる。

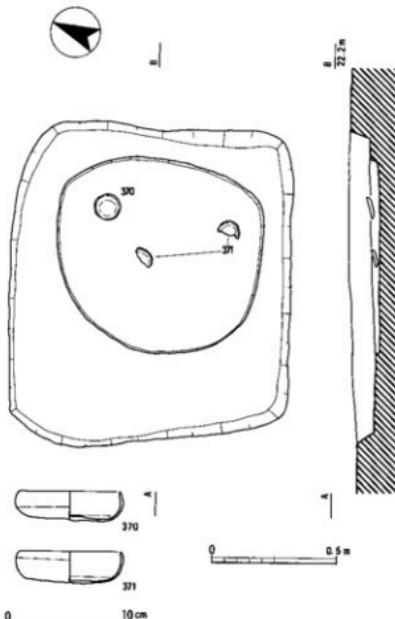
S X 53

1.1×1.2mの隅丸方形プランの土坑である。検出面からの深さは8cmと浅いが、壁面は垂直に近く、底面もフラットで、わりと丁寧に掘られた感がある。平坦な底面の中央よりやや東に片寄って、径75～85cmのやや歪な円形の褐色の染みが見られ、その染みの範囲内に土器器皿が2個体分（370・371）検出された。370は、割れてはいたものの完形での検出であったが、371は2箇所に分散しての出土であった。染み込みの深さは1～2cm程の浅いものであった。

想像の域は出ないが、染みの部分が桶状木製品の痕跡とも考えられなくはなく、骨片などは見当たらなかったものの、埋葬施設である可能性も捨てきれない。

遺物

土師器小皿（370・371） 両方とも薄く作られ、大きさも形もよく似ている。370は、口縁部を内弯さ



第42図 S X 53実測図（1:20）出土遺物実測図（1:4）

せ、内面をナデ調整し、外面は指オサエのままでいる。口縁端部はあえて特別にヨコナデなどの調整はしていない。371の方の調整は、表面の風化によりはっきりしないところが多いが、おそらくは370と同様であろう。

S Z 54

調査区東端で検出された、集石を伴う遺構である。比較的新しい耕作溝や他の遺構のためはっきりはないが、隅丸方形らしい掘り方をもつ。その掘り方の中に、30~40cm大の川原石を1~2段半円形に並べ、その弧内に20cm大の石が投げ込まれたかのように雜然と集められている。石の間には、土師器鍋・小皿、陶器小皿(384・385)が破片の状態で入っていた。集石の下は、深さ30cm程度のすり鉢状の窪みとなる。

リン・カルシウムの分析結果(本書P72参照)を見ると、集石間の土から高い濃度のリン酸成分が検出されている。

S Z 55

人頭大の石が60cmほどの範囲に不規則に集められ、その南側に径約1.5mの広がりで土師器鍋片が集中していた。SD 58の一部分とも考えられなくはないが、石材の北側に巡る掘り方の肩のラインが弧状にきれいに検出され、切り合いは不明ではあるが、独立した遺構であると判断した。石材の下には穴などの施設めいたものはなかった。

遺物

土師器の小皿・鍋・羽釜と陶器の小皿が主な遺物であるが、縁釉陶器と山茶楓の破片も紛れ込んでいた。

土師器

小皿(372~375) 口径7~8cm、器高2cm弱の大きさである。口縁部は内弯して立ち上がり、最先端部は調整せず波打ったままである。器壁はかなり薄い。

皿(376) 口縁はどうらかというと直線的に外に開き、端部のみヨコナデを施し微妙に内弯する。

鍋A(377~381) 体部から、口縁部が「く」字状に屈曲して開くタイプの鍋である。口縁端部を折り返し、つまんでヨコナデする。口縁部は全体がヨコナデ、体部外面上半はハケメで下半はヘラケズリ

という調整が基本である。口縁付け根(屈曲部)の径よりも体部最大径のほうが4cmほど大きい。

377は口縁端部が上方に折られ、受け口状になっているが、先端をさらに内側に曲げてヨコナデすれば通常の形になると思われる。

鍋B(382) 体部が半球状で、水平近くまで折り曲げた短い口縁を持つタイプの鍋である。口縁端部は鍋Aと同様の処理をする。口縁の下に少し膨らみをもたせる。ハケメ調整はしない。

実測図では、体部上部が傾いているが、なにぶん小片であり、本来はもうすこし垂直に近いのかもしれない。

羽釜(383) 口縁端部を外側に折り返し、その上をヨコナデする。しかし、親指の腹の幅(1.5cm)からはみ出した部分は調整せず折り返したままの状態で、ヨコナデした部分は少し薄くなり、親指のあたりなかったところが相対的に突起状になって盛り上がる。

体部はほんの一部しか残っていないが、外面にハケメの沈線が見える。鍋の下面から下方に煤の付着が見られる。

陶器

山茶楓(388) 水挽きのままの体部に逆台形の高台を貼りつけたものである。見込み部は擦られてすべすべとしている。

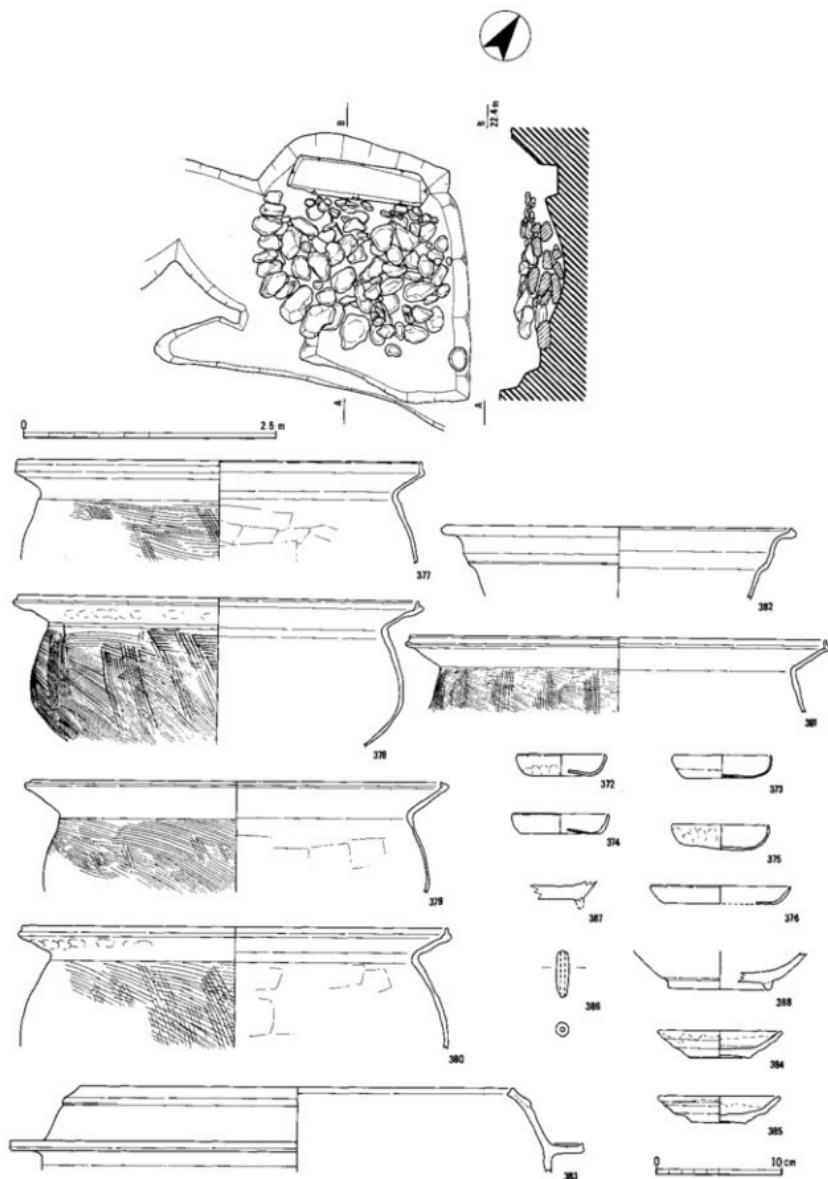
縁釉小皿(384・385) ロクロ水挽き成形で、底部に回転糸切り痕を残す。口縁内面に幅1~1.5cm程の灰釉の帯が施される。外面の釉は内面に比べて幅が狭く、また釉の掛からない所もあり、意図的というよりも流れたというようなものである。口縁端部内側に灰釉をナガシガケしたのであろうか。

この縁釉小皿は、古瀬戸後期Ⅲ~Ⅳ期(15世紀中頃)にあたる(藤澤編年)。

縁釉楓(387) 5.5×4cmの小片で、付け高台である。確定はできないが、器種は楓ということにしておく。内外面とも、やや赤みを帯びた胎土が少し透ける程度に縁釉が施される。

S D 56

幅65cm前後で、東西方向に調査区を横断する溝である。東はまだ調査区外に延び、西は、調査区西斜面の途中で終わる。断面は、基本的にU字形状で、



第43図 S.Z.54実測図(1:50)、出土遺物実測図(1:4)

深さは10cm程である。部分的に、大きいもので30cmを越える川原石が詰まり、また、土師器の鍋片も多く出土した。

S D 57

S Z 54の位置から南方向に延びる溝である。全長12mほどで、南先端部は細く丸く收まる。深さは10cmと浅く、本格的な溝として長く機能していたものではなさそうである。S Z 55の方向へ流れ込むものなのか、逆に流れ出るものなのかも結論付けられない。土師器鍋片が、特にS Z 55に近い部分で多く出土した。

S D 58

S Z 55、S Z 54に連続して西へ走る溝である。調査区東半の平坦部では、まず、1.1mの幅で検出され、10cm強の深さまで掘削したところで幅の北半分がさらに20~30cm深く掘り込まれていた。すなわち、溝の南半はテラス状に浅く段をなす。この浅いテラス状部分が、S Z 55やS D 57と連続するのである。そして、調査区西半の斜面部分では下方の水田部に向かってラッパ状に開く。

深く掘り込まれた溝は、S Z 54のすぐ西から始まり、調査区西端まで続くようである。幅は、60~70cmを基本とするが、S D 7と交差するところはかなり広がっているようである。この交差地点は前述のように、切り合ひ関係等がはっきりせず、S D 7の流れとの区別がつかない状態である。土師器鍋の遺物の出土範囲から推測するに、この交差部分は、北に2mほど広がっているようである。

遺物

S D 56・S D 57・S D 58の3条の溝からは、皆同

様に土師器小皿・鍋・羽釜・茶釜形土器などが出土した。ほとんどが鍋の破片であり、皿類は少なく、茶釜となると数個体もないと思われる。

伊勢型鍋 7類 (新田洋、1985)、南伊勢系鍋第4段階 (伊藤裕博、1990) に相当する土師器がほとんどであるが、401のように口縁端部に近い内面に断面三角形の突出帯が巡るという一段階古い様相のものも見られた。

また、397は体部が鍋Bのプロポーションでありながら口縁の様相は鍋Aと変わりがない。(西村)

S D 59

中地区的南西部に位置する。幅0.5m、長さ8mほどの溝である。検出面からの深さは10cmで、断面形は逆台形である。土師器の小皿が出土した。

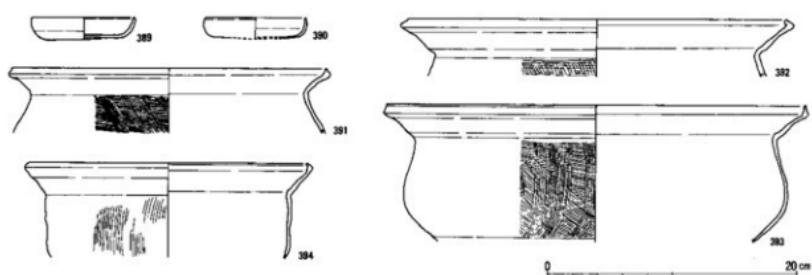
S K 60

S D 59から北西へ3mほどに位置する。南北3m、東西1.4mの梢円形を呈する土坑で、検出面からの深さは0.7mであった。微量の土師器片などが出土したにすぎない。(田村)

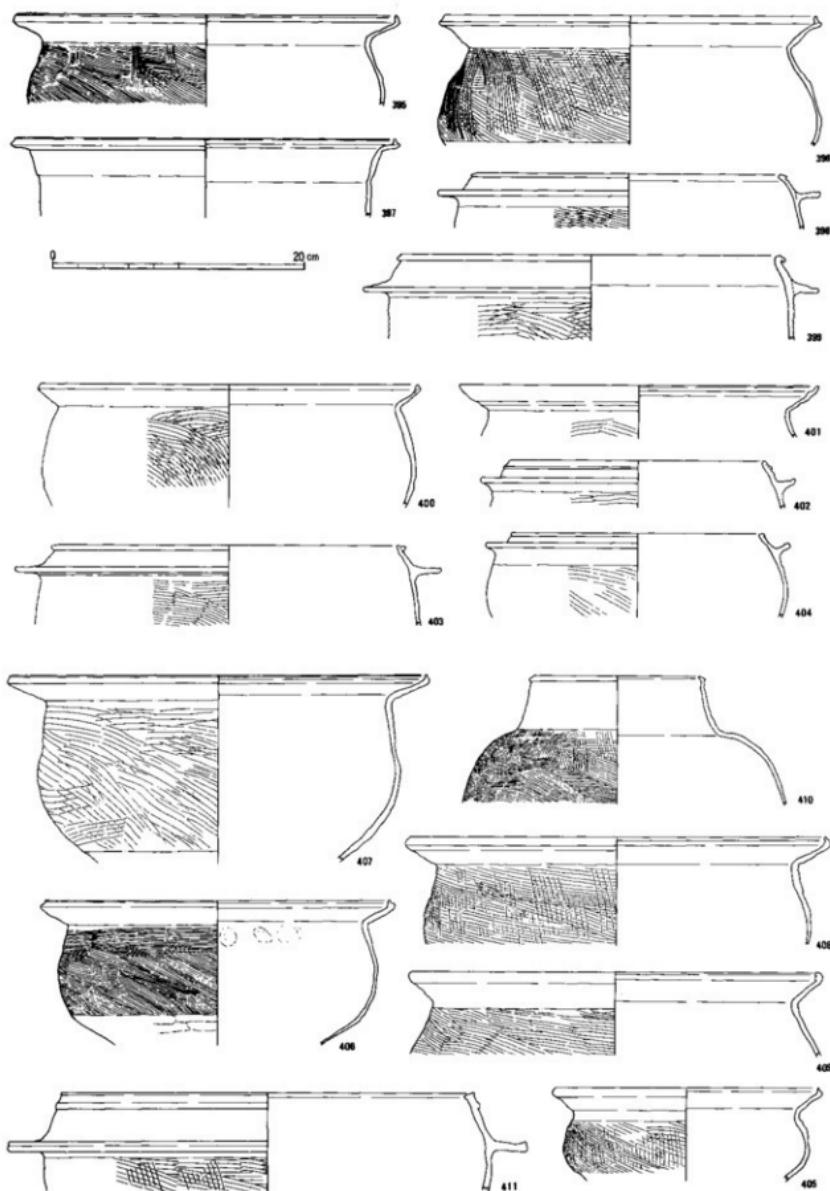
7. ピット出土の遺物

掘立柱建物としてまとまらなかった多数のピットからも、完形品を含めて多数の遺物が出土した。ここでは、そのうちの主なものを第46図に示した。

これらのほとんどは、平安時代から鎌倉時代のものである。中にはPit.70のように、多数の遺物(349~369)を出したピットもある。個々の遺物については遺物観察表を参照されたい。



第44図 S Z 55出土遺物実測図 (1:4)



第45図 SD 56・57・58出土遺物実測図 (1 : 4)

8. 遺物包含出土の遺物

遺物包含からは多量の縄文土器をはじめ、多数の土器を中心とする遺物が出土した。個々の内容は遺物観察表にゆずるが、ここでは主なものについて述べる。

(1) 縄文土器

縄文時代の遺物には土器と石器がある。石器は後述するので、土器のみ概要を示す。

第47図に中期に属するものを一括した。前半期のものとして、412~416、424~427が瀬戸内の船元IおよびII式に相当し、418~423は隆帯上に連続C字状爪形文を施すもの。419は口縁部の隆帯間に、C字状爪形文と同じ原体（半截竹管）を連続的に刺突している。

428・429は竹管の外側を使って逆C字状爪形文を施したもの。いわゆるキャタピラー文で、勝板式に類似するものであろう。429は口縁部近くの破片で、内面に曲線文が見られる。浅鉢と考えられる。また430はC字状爪形文を施している。

431は口縁部外面に細かな縄文（R L）を施し、竹管による平行沈線の下部に三角形の沈刻を施す。

432は浅鉢であろう。口縁部外面は無文であるが、内面に文様が見られる。端部付近にはC字状爪形文、その下部に沈線と三角形の沈刻が見られる。

439・440は同一個体であるが、口縁部が強く内折し、特異な器形であろう。竹管による平行沈線によつてつくられた窓枠状の区画内に縄文を施し、そこに三叉文を施している。口縁部内面は直角に面をつくり、肥厚する。

433・436などはC字状爪形文や、三角形の沈刻が見られるもの。器壁の磨滅のため、詳細に観察できない。

442~447は中期後半のもの。量的には非常に少ない。445は北白川C式の富士山形を呈する山形口縁の破片である。

441は磨滅はげしく、詳細な器面の観察ができず、所属時期も不明である。鉢形土器と思われるが、頸部の沈线下に縄文が施されるものかもしれない。後期に属するものかもしれない。

448~511は後期に属する有文土器の口縁部片。448~477は初頭の中津式。当遺跡の出土縄文土器中で大

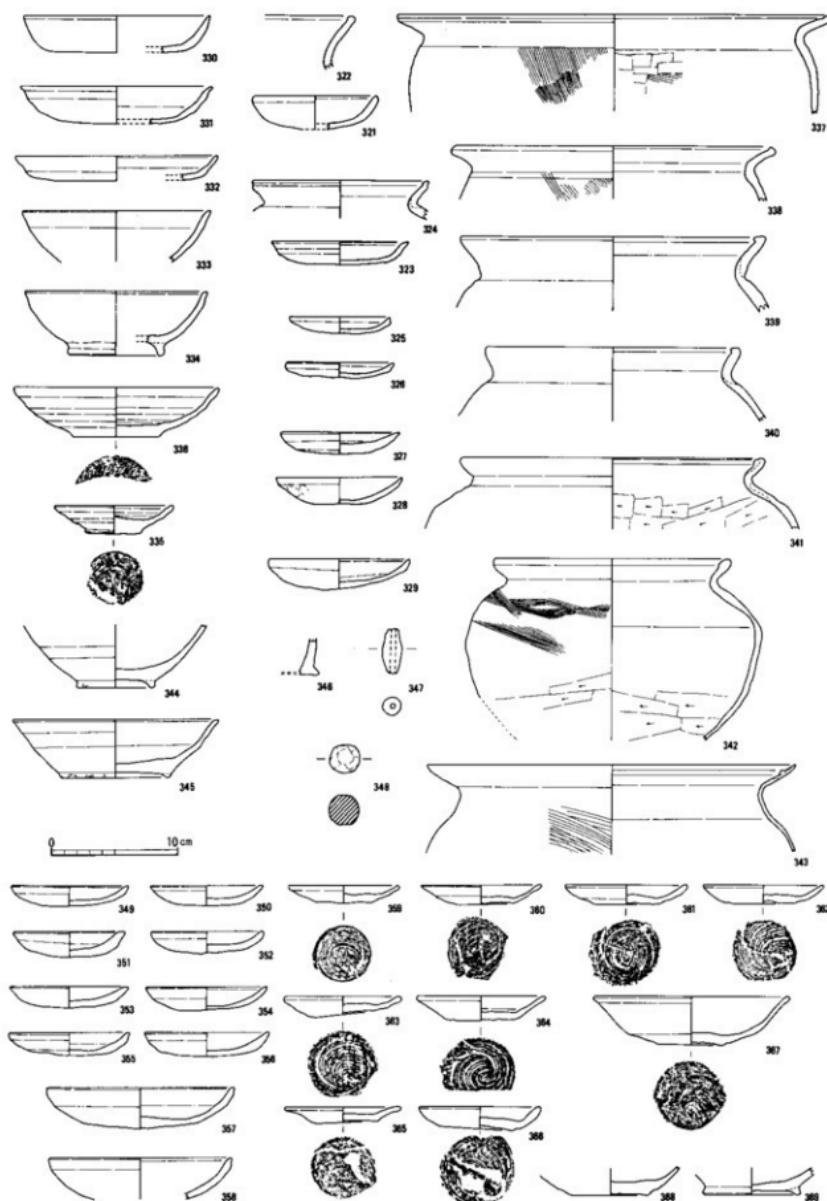
きな破片を含め数量的に最も多い。しかし、文様構成までわかるような資料は少なく、当遺跡における特徴を抽出するまではいたらない。ただ、少ない資料からでも、松阪市斎ノ下遺跡における中津式土器の様相と同様の傾向が窺える。すなわち、文様構成としては縦位に展開するものと、横位に展開するものが認められることや、2本の沈線で帯状に曲線的な文様を描き、沈線間に充填する文様として、縄文を充填するもの（448~465）、条線を充填するもの（466~472）と、無文のもの（475~477）とがあり、条線文を充填するものが一定量存在することである。

462は沈線間の構文帶に刺突を施した短沈線が加えられる。461と462は縄文帶に刺突がなされるもの。これらの手法は瀬戸内や山陰方面で多く見られるが、当県地方でも量的には少ないものの、鈴鹿市東庄内A遺跡や、当遺跡に近い田中廻り遺跡にも類例がある。

464は波頂部にキザミが施されるものであるが、文様帶の幅が少し狭くなっているもの。

465は実測図のみ提示したが、中津式の文様の基本である一筆書きの構成が確立していない段階と考えられるもの。口縁部は肥厚せず、上半が切れた6単位の窓枠状区画文が施され、それに対応するように、区画文の下に渦巻き状の文様がつく。これは上部の区画文には連続していない。観察が可能な3カ所の様子を詳しく見ると、1本の沈線で逆“コ”的字状に平行する横長の帯状文をつくる。これは沈線の起点と終点が別の場所で、閉じたものではない。一方、起点と終点が閉じて逆“コ”的字状となるものもある。いずれも帯状となった部分に、単節のR L縄文を充填している。このほか、口縁部の窓枠状区画文間に縄文を施している。口縁部とは接合しないが、ナデ調整の体部から底部まで遺存している。なお、底部は薄手で若干の上げ底である。

最も大きな破片である472は6単位の波頂部をもつ波状口縁深鉢と考えられる。頸部がやや強くくびれる胴張りの器形であろう。口縁部はやや肥厚する傾向が見てとれる。窓枠状区画文は上部へ上がってしまった結果下半部分が残り、その下に横位に展開する帯状文からJ字状文とその下に「大」の字状の文様が下がる。そして、その下で横に連結して下端区



第46図 ピット出土遺物実測図 (1:4)

画を構成するものと思われる。条線で充填された文様帯と無文帯がネガとポジの関係を構成するようである。

これらに続く時期のものには478~505がある。479は3本の沈線を直交させるような文様構成をとる。沈線帯には繩文が施され、口縁部内面にも文様が施される。

480~486は同一個体であるが、関東の堀之内1式に相当するものである。大型の深鉢の破片で、肥厚させて縁帯部を作りだした口縁部に2条の並行沈線を横走させる。波頂部には円孔とそれに沿う弧状沈線と刺突文を施す。以下の体部には単節のL R繩文

を施す。487も同様の口縁部片であろう。

488~505はいわゆる縁帶文土器成立前の広瀬土坑40段階に位置づけられるもの。量的にはさほど多くない。そして、北白川上層式2ないし3期にあたる506~510が若干ある。このころより後は当遺跡の南方に広がる巣鴨遺跡などで、後期後半まで断続的な遺跡の営みがあったようで、元住吉山式など微量の遺物が出土している。

511は幅広で浅い凹線文が施されたもの。後期末葉の宮窓式の可能性があるが、この時期の遺物は他に出土しておらず、判断に苦しむ。

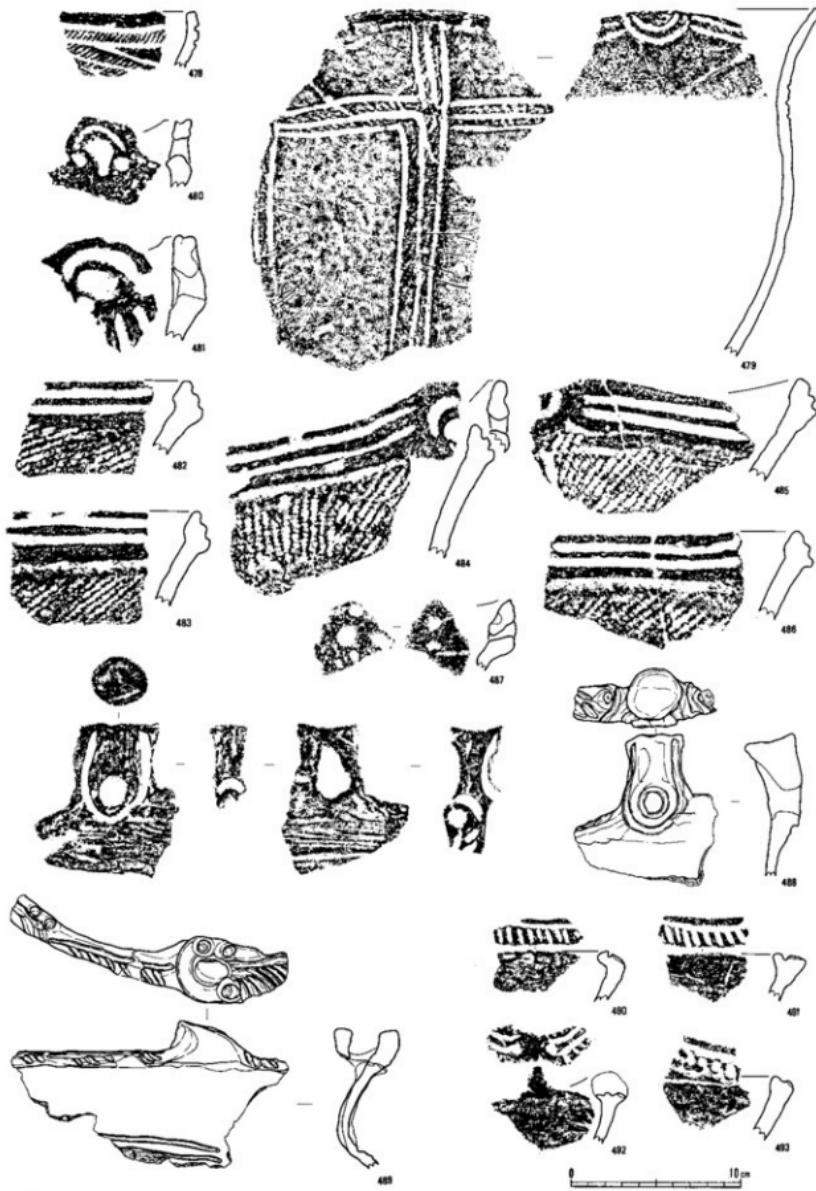
なお、同様の例として643がある。晩期末の突唇文



第47図 包含層出土繩文土器拓影 (1 : 3)



第48図 包含層出土縄文土器拓影 (1:3)



第49図 包含層出土縄文土器拓影 (1:3)

土器の破片かと思われるが、やはりこれ1片のみの出土である。

512～555は条線文や縄文が施されたもの、および無文土器の口縁部を集めた。ほとんどが後期に属するものであろう。

512～518は条線文が施される。519～521は縄文が施されるもの。521は口縁端部に刺突文が見られる。その他はすべてナデ調整の無文土器であるが、525には条痕が認められる。

556～619は体部片のうち有文のものを集めた。556～587および589～592は中津式の、588および593～600は堀之内式並行、601～605は北白川上層式の体部片であろう。他にも多数の破片が出土している。

底部には620～642がある。すべて平底ないしは若干の上げ底である。628には底部外面に網代痕が認められる。また、629では結節縄文が見られる。624および626もこれとよく似ており、同一個体かもしれない。これは中期のものである。

以上のほか、土製円盤が1点(644)出土している。

(2) 弥生～古墳時代の土器

弥生時代後期の壺(647・648)、高杯(649・650)や、壺(651～653)などがある。

646は発掘区の東壁出土した。底部を欠くが、体部から口縁部にかけてはほぼ完形である。櫛状工具によって体部には直線文、刺突文、はね上げ文のような文様が施される。また、口縁部内面にも口縁に沿って2列の刺突文が施される。弥生時代後期ないしは古墳時代初頭のものと思われる。

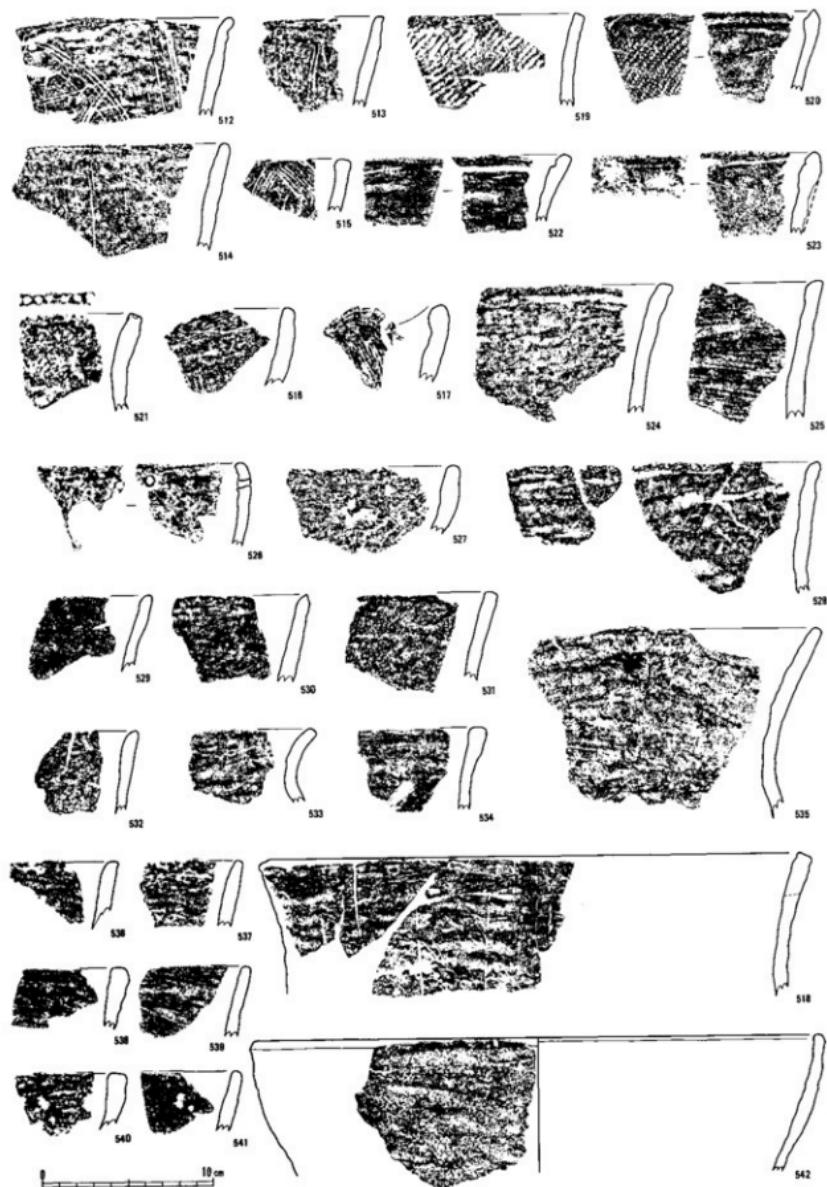
この他、古墳時代の土器として654～656が1カ所からまとまって出土している。656の底部内面には、細い棒状のもので穿孔をしようとした形跡が残る。そのほか、664の須恵器杯身などもある。

(3) 奈良時代の土器

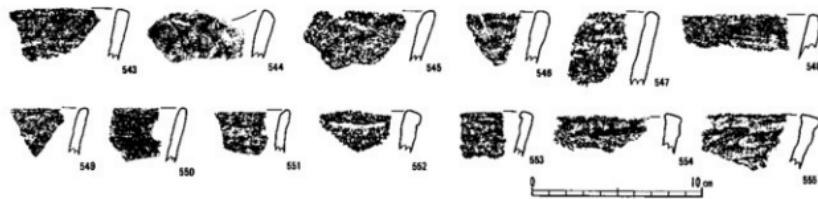
土師器の壺(657)、杯(658・659)、皿(660・661)や高杯(662・663)、須恵器杯(665)がある。



第50図 包含層出土縄文土器拓影 (1:3)



第51図 包含層出土縄文土器拓影 (1 : 3)



第52図 包含層出土縄文土器拓影（1:3）

(4) 平安時代以降の土器

土師器壺（666）、灰釉陶器碗（667）などのほか、山茶碗、669・670のような山皿（小碗）、縁釉小皿（671）、常滑產甕（672）、平瓦片（673）や須恵器片を転用した加工円整（674）など多種・多様で多数の破片が出土している。

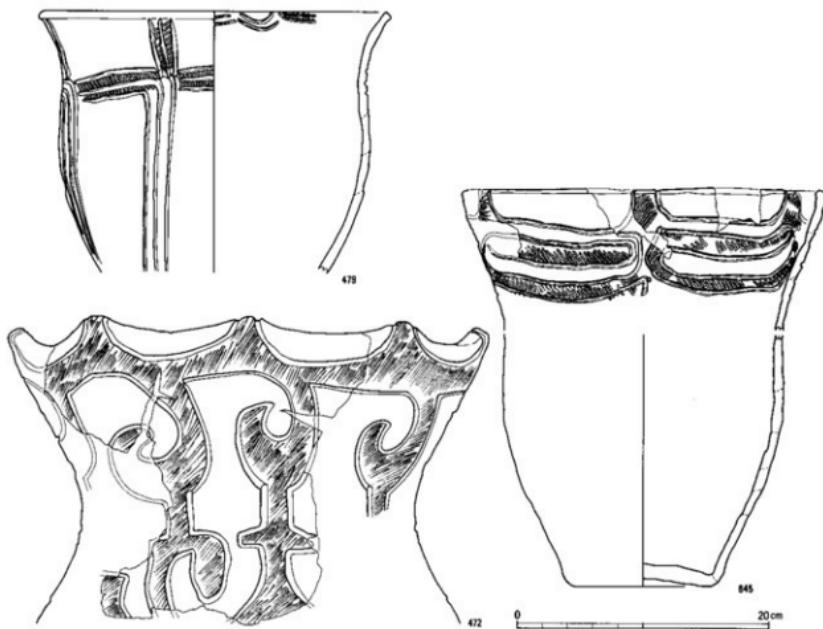
8. 石製品

石製品には石鐵（677～686）、石匙（687）、削器（688）、スクレーパー（689～691）、楔形石器（692）、

石錐（693～712）、打製石斧（713）などがある。これらについては第5表にまとめた。

このほか、多数の剥片や碎片があるほか、注目すべきものとして大珠（676）がある。出土状況は不明である。長さ6.13cm、幅2.68cm、厚さ0.63cm、重量は19.43gで、淡い黄緑色を呈する。偏平な形状で玉斧と呼ばれるタイプに属しよう。当初は蛇紋岩製かと考え、角式磨製石斧を転用した可能性なども想定したが、一種の硬玉製である可能性もあるという教示を得ている。

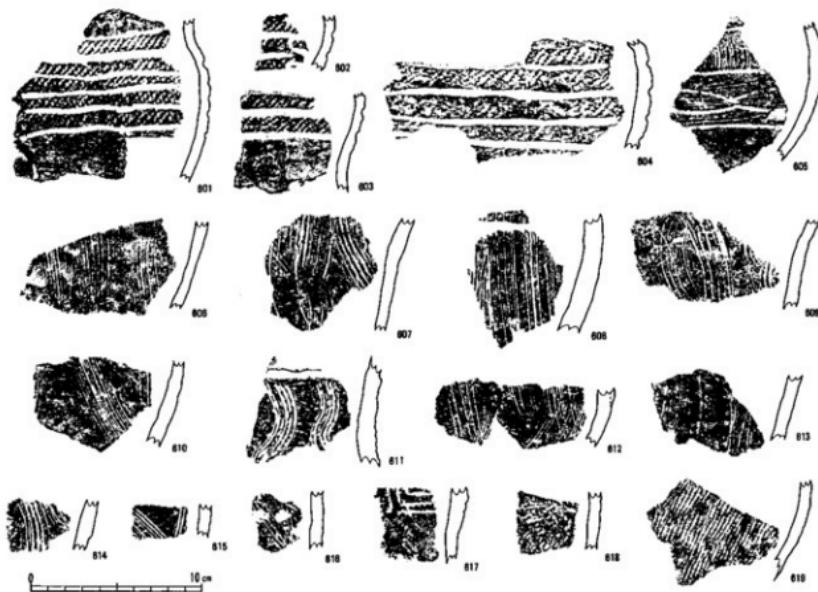
（田 村）



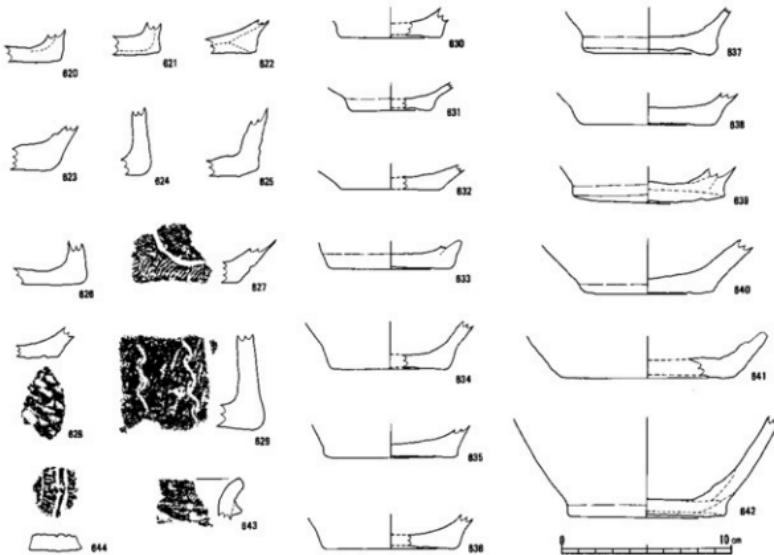
第53図 包含層出土縄文土器実測図（1:4）



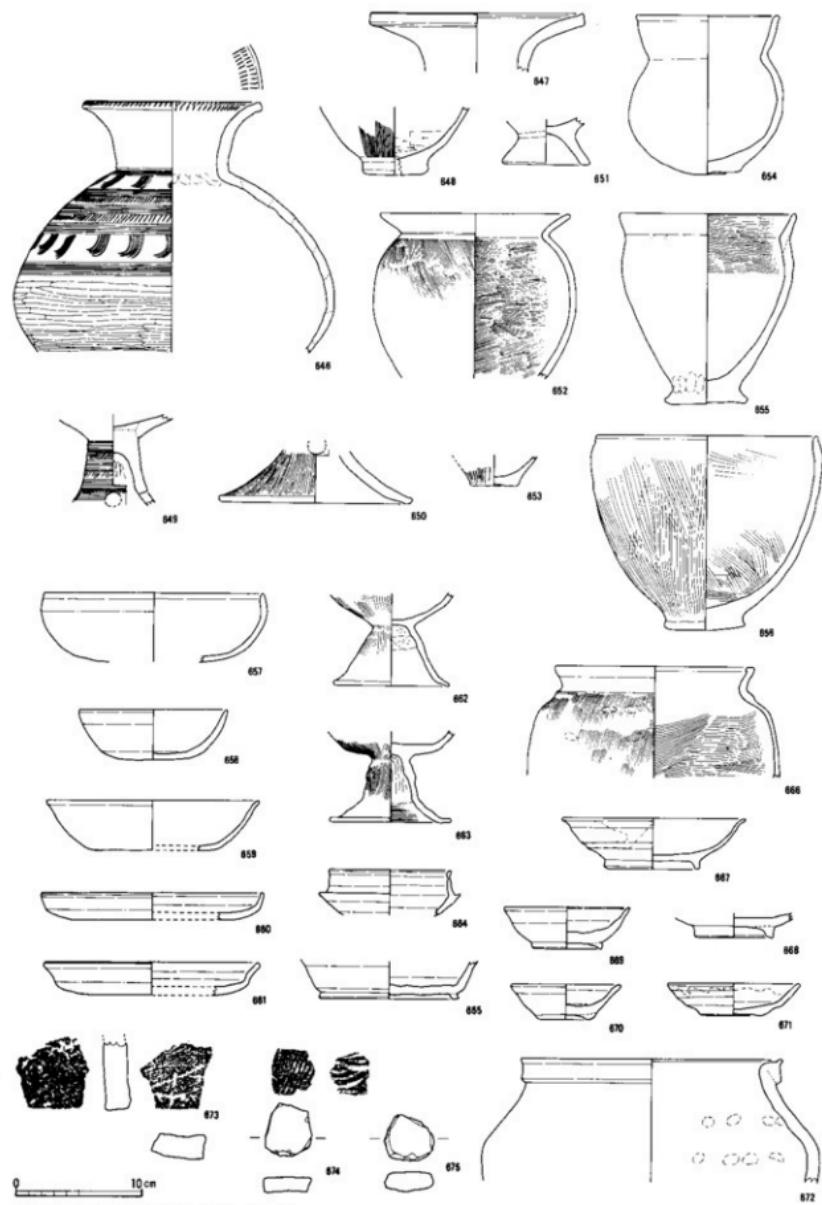
第54図 包含層出土縄文土器拓影 (1 : 3)



第55図 包含層出土縄文土器拓影 (1 : 3)



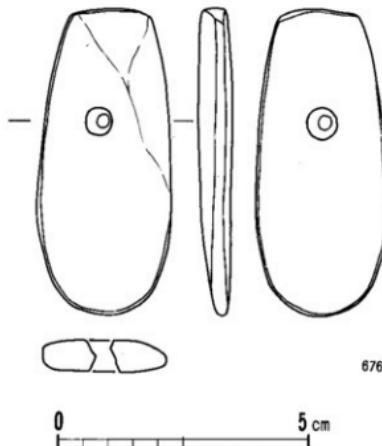
第56図 包含層出土縄文土器実測図、拓影 (1 : 3)



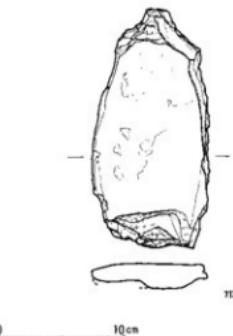
第57図 包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

番号	実測番号	地区名	遺構部位	器種	石質	遺存状態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
676		R 26	包含層	大珠	硅玉?	完存	61.3	26.8	6.3	19.43	
677	082-04	N 30	黒ボク上層	石鏟	チャート	一部欠	(17.5)	(13.0)	4.4	0.68	
678	084-03		表面探集	石鏟	サヌカイト	一部欠	(16.0)	(12.0)	3.0	0.39	
679	082-01	M 29	S Z15	石鏟	サヌカイト	完存	20.0	18.0	3.0	0.54	
680	082-06	Q 28	P 5	石鏟	サヌカイト	一部欠	(16.0)	15.0	2.0	0.39	
681	082-02	M 30	S D14	石鏟	サヌカイト	一部欠	(19.0)	(12.0)	3.0	0.35	
682	082-05	N 34	P 5	石鏟	サヌカイト	完存	20.0	14.8	3.8	0.71	
683	082-08	Q 34	S H 7 VI	石鏟	サヌカイト	一部欠	27.0	24.2	7.8	4.42	
684	082-09	R 30	包含層	石鏟	サヌカイト	一部欠	(24.0)	(10.0)	2.5	0.37	
685	082-03	N 28	S D 1	石鏟	サヌカイト	一部欠	(15.7)	(12.0)	2.4	0.44	
686	082-07	Q 34	P 16	石鏟	サヌカイト	一部欠	(16.0)	(7.5)	2.8	0.25	
687	079-03	M 34	包含層	石匙	サヌカイト	完存	27.0	58.5	8.0	13.75	
688	083-01		表面探集	削器	サヌカイト	一部欠	(41.0)	(30.0)	11.5	15.05	
689	081-01		表面探集	スクレーパー	サヌカイト	完存	36.0	59.0	11.1	23.13	橢形石器に転用
690	079-02	O 35	包含層	スクレーパー	サヌカイト	完存	36.0	58.0	15.4	27.80	
691	081-02	S 31	P 5	スクレーパー	チャート	完存	44.0	63.5	15.9	43.42	
692	083-02	N 30	包含層	橢形石器	サヌカイト	完存	40.0	21.5	11.0	8.43	
693	075-04	L 33	地山直上	切目石鏟	結晶片岩	完存	93.0	29.0	12.0	51.54	
694	075-01	Q 19	包含層	切目石鏟	粘板岩	一部欠	(56.6)	27.2	20.0	40.3	
695	084-01	S 14	東端帶試掘溝	切目石鏟	結晶片岩	完存	63.5	21.0	14.5	33.15	
696	075-03	S 17	包含層	切目石鏟	粘板岩	完存	46.0	28.9	15.7	30.42	
697	075-02	Q 19	包含層	切目石鏟	粘板岩	一部欠	(38.1)	(18.9)	(17.6)	4.92	
698	078-03	R 26	S D 1	打欠き石鏟	粘板岩	完存	50.0	36.9	14.8	45.51	
699	077-01	N 30	地山直上	打欠き石鏟	細粒花崗岩	完存	61.5	38.0	22.0	72.56	
700	084-02	P 13	表土直下	打欠き石鏟	砂岩	完存	65.0	32.0	14.5	41.15	
701	076-04	S 26	にじみ	打欠き石鏟	砂岩片岩	完存	63.0	27.0	13.2	38.6	
702	077-02	N 25	包含層	打欠き石鏟	結晶片岩	完存	82.5	30.0	8.5	37.50	
703	078-04	P 27	包含層	打欠き石鏟	砂岩	完存	54.0	46.5	17.0	65.79	
704	078-01	P 20	P 3	打欠き石鏟	砂岩	完存	58.0	23.5	16.3	36.65	
705	085-01	R 37	黒ボク上層	打欠き石鏟	砂岩片岩	完存	57.0	29.0	12.0	26.80	
706	076-02	S 30	S D 4	打欠き石鏟	千枚岩	完存	57.0	28.0	12.1	29.59	
707	076-03	M 31	S D12	打欠き石鏟	珪質粘板岩	完存	61.0	33.0	19.0	55.91	
708	077-03	N 34	包含層	打欠き石鏟	粘板岩	一部欠	(43.4)	36.4	7.9	16.43	
709	076-01	S 時計	包含層	打欠き石鏟	粘板岩	一部欠	(50.7)	(30.0)	12.0	25.07	
710	077-04	N 34	包含層	打欠き石鏟	砂岩片岩	一部欠	48.0	44.8	(10.5)	33.58	
711	079-01	O 29	包含層	打欠き石鏟	硬砂岩	完存	39.2	32.0	11.0	20.51	
712	078-02	Q 31	P 15	打欠き石鏟	砂岩片岩	完存	58.5	31.5	21.6	59.63	
713	080-01	S 17	土器部	打製石斧	綠色片岩	完存	192.0	96.0	20.9	452.0	

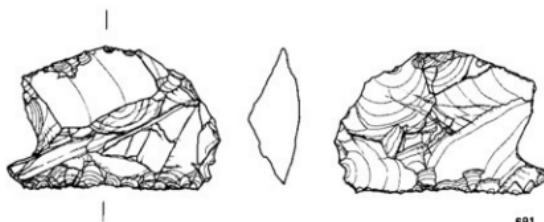
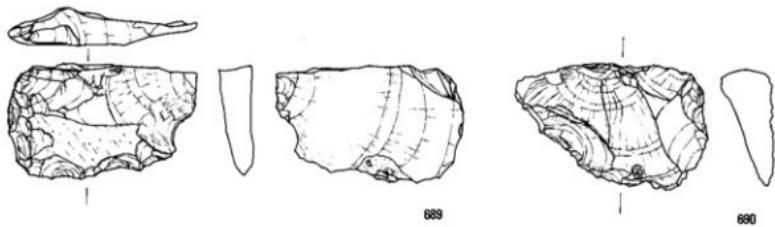
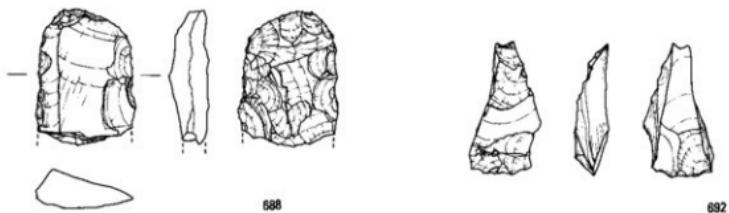
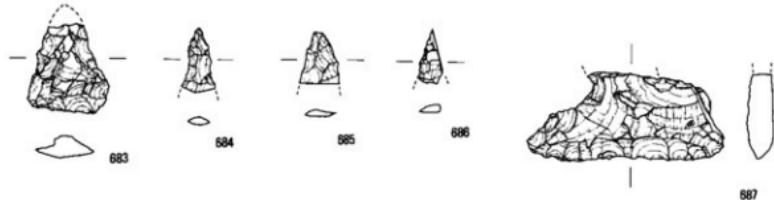
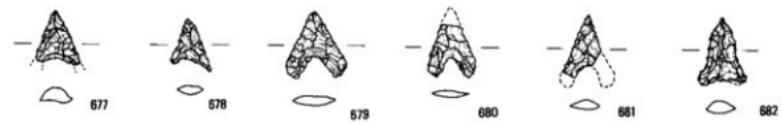
第5表 石器一覧表



第58図 大珠実測図 (1:1)

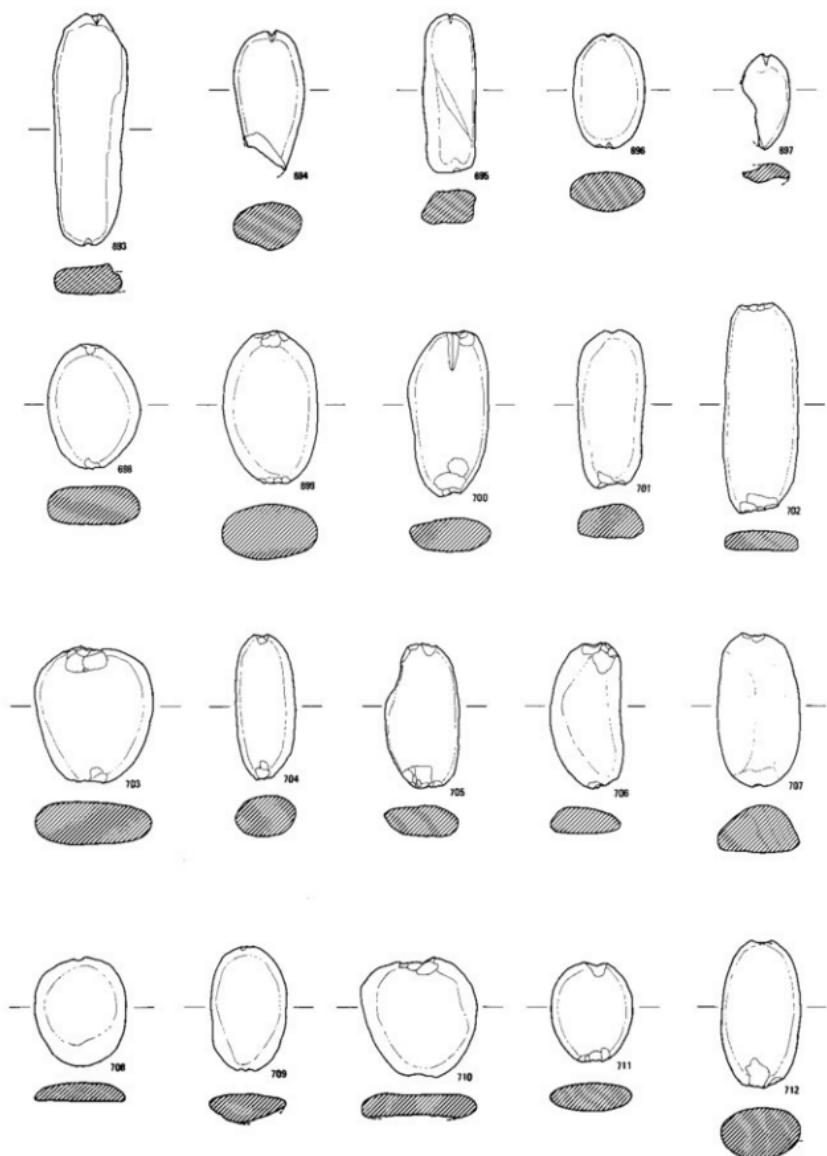


第59図 打製石斧実測図 (1:4)



0 10 cm

第60図 石器実測図 (2 : 3)



第61図 石器実測図 (1 : 2)

4. 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 土器内容物の検討

(1) 試料

分析試料は、第6表に示した調査地点2カ所の計15点である。今回の分析調査では、古墳時代初頭の前方後方型周溝墓SX3より出土した壺や、鎌倉時代初頭の井戸SE42より出土した山茶椀等の内容物の推定を行う。SX3では遺構の性格上壺内への人骨埋納が予想されたので、その手法として、人体特に人骨に多量に含まれ、しかも土壤中では比較的拡散・移動しにくいリン酸量を測定し、土壤中に局所的な濃集状態から人体の痕跡を定性的に推定するリン分析（竹迫、1981）を実施する。また、リン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析を行う。またSE42についても、比較の意味で同様の分析を行った。

なお、土壤中を流失しにくいリン酸も年月の経過に伴い、当時の含有量をそのまま保持することは難しい。したがって、含量対比のために、各遺構ごとに埋設時の影響を受けていない周辺土壤を対照試料とした。

(2) 方法

リン、カルシウムの測定は、土壤標準分析・測定法委員会（1986）、土壤養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考として、以下の操作行程を行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、10mLに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P₂O₅

mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

(3) 結果

リン酸、カルシウム分析の結果を第7表に示す。

・ SX3

対照試料とした周溝外地山のリン酸含量2.29P₂O₅mg/gに対し、壺直下周溝底部、壺内部および周溝埋土壘接部の試料では1.30～2.15P₂O₅mg/gではば同じかそれ以下の値を示す。カルシウム含量は、対照試料6.99CaOmg/gよりいずれも低い値である。

・ SE42

対照試料とした井戸外地山試料のリン酸含量1.76P₂O₅mg/gに対し、山茶椀内部、伊勢型鍋内部の試料では5.99、5.77P₂O₅mg/gでかなり高い値を示し、リン酸の濃集が認められる。また、井戸底近くの試料でも2.97P₂O₅mg/gと高い値である。カルシウム含量も、対照試料の3.73CaOmg/gに対し、いずれも自然賦存量範囲内ではあるが、4.88～5.06CaOmg/gと高い値を示す。

(4) 考察

土壤中に含有されるリン酸含量は、Bowen（1983）が調査した世界各国の土壤での含量の中央値は2.0P₂O₅mg/g、Bolt and Bruggenwert（1980）では1.0～2.5P₂O₅mg/gとされている。また、わが国では、川崎ら（1991）の調査で黒ボク土の平均値が未耕地で2.1P₂O₅mg/g、既耕地で5.5P₂O₅mg/gとされ、天野ら（1991）はリン酸の自然賦存量が2.7P₂O₅mg/g以下であると報告されている。これらの報告例から、土壤本来のリン酸含量は通常上記の値と考えられ、これを著しく越える土壤では人骨などのリン成分を多く含むものが何らかのかたちで土壤中に遺存したものと考えられる。

土壤中のカルシウム含量については、普通1～50CaOmg/g（藤貴、1979）といわれ、自然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きいかから、土壤本来の含量と外的要因により富化された含量の区別することが難しい。この自然賦存量と今回対照試料とした土壤の含量から、周溝墓周溝、井戸より出土した壺や土器の内容物について次のことが考えられる。

S X 3周溝の壺内部および周溝埋土壺隣接部ではリン酸の濃集はみられず、壺内への人骨埋納についてはよくわからない。今後周溝内埋葬を考慮し、周溝埋土の面的調査も必要であろう。一方井戸 S E 42から出土した山茶輪内部、伊勢型鍋内部および井戸底近くでは、リン酸の濃集が認められる。したがって、この井戸内にはリン酸成分が多く含有したもの（例えば動物遺体・植物遺体など）が存在したことが推測される。カルシウムについては、いずれも自然賦存量範囲内の値を示したので、これが動物遺体かどうかについては断定できない。なお、この点をさらに追求するには、同一試料で炭素含量（植物由来と考えられる）を推定し、リン酸含量と回帰分析を行うのが有効である。

2. 木製品の樹種

(1) 試料

試料は、鎌倉時代初頭の井戸 S E 42から出土した櫛と、同時期の井戸 S E 46から出土した底部曲物の本体およびタガの合計3点である。

(2) 方法

剃刀を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の切片を作成し、ガム・クローラーで封入してプレパラートを作成する。プレパラートは、生物顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

櫛はイヌキ、曲物本体とタガはスギにそれぞれ同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・スギ [*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don]

スギ科スギ属

早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晚材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔組織壁は滑らか、分野隙孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

・イヌキ [*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.]

マンサク科イヌキ属

散孔材で、道管はほとんど単独、横断面では多角形。道管は階段穿孔を有し、段数は5前後。放射組

織は異性II型、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状ではなく等間隔に配列する。

(4) 考察

イスノキの材は緻密で、ツゲ（柘植）に次ぐ櫛の良材とされ、各地・各時代の櫛に同定例が多い。遺跡から出土した櫛の樹種同定結果をみると、ツゲよりもイスノキが同定されることが多い（島地・伊東、1988）。このことは、過去においてはイスノキが最も適していた材と考えられていた可能性を示唆する。今回の結果から、本地域においても櫛にイスノキが使用されていたことが明らかとなった。

曲物はスギであった。同様の木製品には、これまでの調査でもヒノキ属やスギが多く確認されている。またスギは、比較的近い朱中遺跡B地区から出土した奈良・平安時代～中世（？）の板材等に多数確認されており、古くから本地域の建築・土木に広く利用されていたことが推定される。この背景には、周辺植生から入手しやすかったことであろう。今回の結果から、周辺植生から入手しやすい木材の中から、曲物に必要な板状の加工が容易で耐水性がある木材を選択したと考えられる。

3. 葉状植物遺体の種類

(1) 試料

試料は、鎌倉時代初頭の井戸 S E 42底部近くから検出された葉状植物遺体1点である。肉眼観察では、イネ科草本類に類似する。

(2) 方法

植物遺体を数片採取し、電気炉による乾式灰化法（600°C、30分間）で処理する。得られた灰像をブリュウラックスで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で観察する。

(3) 結果

得られた灰像には、2形態の植物珪酸体が認められた。ひとつは、ファン型（近藤・佐瀬、1986）を呈する。いわゆる断面形が扁形で綫長が50μm前後である。また、顯著な亀甲模様が認められ、側面形が長方形である。この形態から、栽培植物のイネ属に形成される葉身機動細胞珪酸体と見ることができ。これらの機動細胞珪酸体は列を成し、ところど

ころで直線的に配列する。

もうひとつは、キビ型（近藤・佐瀬、1986）で、その中でも二重垂鉢型を呈する。両端は側面の湾曲が大きい。また、中央部のくびれが顕著である。縦長は10~20μm程度である。これらの点は、イネ属の葉部短細胞珪酸体の特徴である。なお、この短細胞珪酸体も列を成す。

以上の点から、この薬状植物はイネ属である。

（4）考察

薬状の植物はイネ属であった。本遺跡は、現在でも水田地帯に位置し、地名などから周辺では古くから条里制に地割が行われていたと考えられている。このことを考慮すれば、今回の植物遺体は稻薬であることが考えられる。また、その用途等については、井戸内の遺物の出土状況等の吟味を経て推定されるべきであろう。

II. 上ノ塙外遺跡におけるリン・カルシウム分析

1. 試料

試料は、室町時代の集石SZ54およびその周辺の地山から採取された土壤10点（試料番号1~6、A~D）である。各試料の詳細については、分析結果と共に第8表に示した。この集石の内容物について、リン・カルシウム分析により検証する。

（引用文献）

竹迫 紘（1981）11号住居址内埋甕中の土壤リン酸分析、横浜市高速2号線埋藏文化財発掘調査報告、p.156-158、横浜市道高速2号線埋藏文化財発掘調査団。

土壤標準分析・測定法委員会（1986）土壤標準分析・測定法、354p., 博友社。

Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学－元素の循環と生化学－。浅見輝男・茅野充男訳、297p., 博友社 [Bowen,H.J.M.(1979) Environmental Chemistry of Elements]。

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.(1980) 土壤の化学、岩田進午・三輪壽太郎・井上隆弘・陽 捷行訳、309p., 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976) SOIL CHEMISTRY] , p. 235-236.

川崎 弘・吉田 淳・井上恒久（1991）九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,149p.;

2. 分析方法

I-2 (2) 参照

3. 結果

リン酸、カルシウム分析結果を第8表に示す。

対照試料とした集石外掘方、集石下の地山、SZ54掘方外の試料のリン酸含量1.63~2.34P₂O₅mg/gに対し、集石内石間埋土の試料では3.37~3.72P₂O₅mg/gと高い値を示すが、集石下の遺構底部の試料番号4・5では対照試料とほぼ同じ値である。カルシウム含量は、対照試料3.50~3.66CaOmg/gに対し、集石内石間埋土では4.17~4.88CaOmg/gで自然貯存量範囲ではあるがやや高い傾向を示す。

4. 考察

対照試料とした集石外掘方、集石下の地山、SZ54掘方外の試料のリン酸含量からみて、集石遺構SZ54ではリン酸の濃集が認められ、リン酸成分を多く含有したもの（動・植物遺体等）が存在したことが推測される。カルシウムについては、自然貯存量範囲内の値であり、これが動物遺体であるかどうか不明である。植物由来と考えられる炭素含有量の測定を行い、リン酸含量との回帰分析を行うのも有効であろう。

p.23-27.

天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信（19-91）中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,p.28-36

烏地 謙・伊藤隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、296p.,雄山閣。

近藤錦三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25,31-64

遺構名	試料番号	出土位置・試料名など
SX3	②	周溝埋土 壺底接部
	④	ク
	⑤	ク
	⑥	ク
	⑦	ク
	⑧	壺直下周溝底部
	⑨	ク
	⑩	ク
	⑪	壺内部（上部）
	⑫	ク（下部）
	⑬	周溝外地山
	SE42	二つ合わせた山茶壺内部 伊勢型鍋内部 井戸底近く 井戸外山地

第6表 土壤分析試料

遺構名	試料番号・試料名	リン酸含量 $P_2O_5\text{mg/g}$	カルシウム含量 $CaO\text{mg/g}$	土色・土性
SX3	②	1.88	4.05	2.5Y3/3暗オリーブ褐色・L~CL
	④	2.15	4.89	2.5Y3/3暗オリーブ褐色・CL
	⑤	1.3	3.11	2.5Y4/3オリーブ褐色・L
	⑥	1.92	4.17	2.5Y4/3オリーブ褐色・CL
	⑦	1.86	4.48	2.5Y4/3オリーブ褐色・CL
	⑧	1.48	3.26	2.5Y4/3オリーブ褐色・CL
	⑨	2.06	4.75	2.5Y4/3オリーブ褐色・CL
	⑩	1.59	4.28	2.5Y4/3オリーブ褐色・L
	⑪	2.17	5.22	2.5Y4/3オリーブ褐色・CL
	⑫	2.09	4.85	2.5Y4/3オリーブ褐色・CL
	⑬	2.29	6.99	2.5Y3/2黒褐色・CL
	SE42	二つ合わせた山茶壺内部 伊勢型鍋内部 井戸底近く 井戸外山地	5.98 5.77 2.97 1.76	5.02 4.88 5.06 3.73

第7表 SX3, SE42リン・カルシウム分析結果

- 注。(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
(2) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性の判定法による。L…壤土（ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。）、CL…堆積土（わずかに砂を感じるが、かなりねばる。）

遺構名	試料番号	採取位置	リン酸含量 $P_2O_5\text{mg/g}$	カルシウム含量 $CaO\text{mg/g}$	土色・土性
SZ54	1	集石内、石間埋土	3.37	4.17	2.5Y4/4オリーブ褐色・CL
	2	集石内、石間埋土	3.72	4.27	2.5Y4/4オリーブ褐色・CL
	3	集石内、石間埋土	3.63	4.88	2.5Y4/4オリーブ褐色・CL
	4	集石下の遺構底部	2.45	3.69	2.5Y4/4オリーブ褐色・CL
	5	集石下の遺構底部	2.16	3.54	2.5Y4/4オリーブ褐色・CL
	6	集石下の遺構底部	2.20	4.33	2.5Y4/4オリーブ褐色・CL
	A	集石外、堀方内	2.34	3.52	2.5Y5/4黄褐色・CL
	B	集石外、堀方内	2.13	3.51	2.5Y5/4黄褐色・CL
	C	集石下の地山	1.93	3.66	2.5Y5/4黄褐色・CL
	D	SZ54の堀方外	1.63	3.50	2.5Y5/4黄褐色・CL

第8表 SZ54リン・カルシウム分析結果

- 注。(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
(2) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性の判定法による。
CL…堆積土（わずかに砂を感じるが、かなり粘る。）

III. 結語

上ノ垣外遺跡は、櫛田川中流右岸に注ぎ込む小支流、相可川の形成した自然堤防上に立地した遺跡である。遺跡は自然堤防上の東西120m、南北200mほどに広がり、今回の発掘調査はこのうち遺跡西部の約5,000m²について調査したことになる。その結果、縄文時代中期初頭から人間の営みのあったことが判明した。遺跡の全体を発掘調査していないため、全容の解明には至っていないが、調査で明らかになつたことや新たに問題になったことなどをここで整理し、まとめにかえたい。

(1) 遺跡の立地環境について

すでに述べたが、当遺跡は櫛田川中流右岸に注ぎ込む小支流の相可川が形成した自然堤防上に立地している。この自然堤防は、現在の相可集落の櫛田川本流が形成した自然堤防帶背後の低湿地帯を、櫛田川と平行して流れてきた相可川が、ようやく本流に注ぎ込もうとして、流れを北に振った地点に形成されたものである。現在の後背低地との比高は約2mを測り、主に普通畑や果樹園として利用されている。

今回の発掘調査では、地表面からかなり下まで、かなりの厚さでシルト質の洪水堆積物が覆っていることがわかった。部分的には2次堆積と考えられる黒ボク土が見られたり、それらが攪乱されたような複雑な堆積が認められ、上層部分ではかなり複雑な状態であった。これら土層の攪乱は、縄文時代以降の遺跡形成過程での人為的な原因もあるだろうが、度重なる洪水による侵食と堆積の結果を示すものと考えられる。卑近な例では、昭和34(1959)年に当地を襲った伊勢湾台風でも、この地は冠水している。

縄文時代に人々が当地に生活を始めたものの、このような自然的条件から、断続的に生活が営まれていったものと思われる。この地に初めて本格的な生活の根拠をおいた縄文後期初頭の人々は、あるいは水害のために、北に少し離れた新篠寺遺跡ヘムラを移したのかもしれない。

以後、弥生時代後期ころまでめぼしい活動の痕跡

は見られず、飛鳥時代末期以降に活発化する。遺跡の盛期は奈良時代後半から平安時代、鎌倉時代にかけてで、今回の調査区よりさらに東の畠地に、集落の中心部が存在したことが容易に想像できる。それは、遺跡の立地する自然堤防の中で、最も高いところである。

(2) 遺構・遺物について

① 縄文時代

縄文時代についてみると、今回の調査では、南勢地域における後期初頭中津式土器の比較的まとまった資料を得ることができたほか、いくつかの調査成果を得ることができた。

出土土器量からすれば中津式期の住居跡などが検出されてもよいと思われるが、その確認には至らなかった。結局、同時期あるいはもう少し後に属すると思われる土坑1基と、埋設土器1基が検出されたにとどまる。

土坑SK1は、出土した土器から福田K2式の古い段階から広瀬土坑40段階までの間の時期に比定できよう。この土坑の平面形は長椭円形の掘り方で、墓的な性格も考えられるが確証は何もない。遺物についても完形・半完形品ではなく、供獻性は認められない。ただ、この土坑に近いR-26区の遺物包含層から、大珠が出土していることは注目すべきである。しかし、この土坑の性格については不明と言わざるを得ない。

ところで、今回の調査で出土した硬玉製と考えられる大珠については、出土状況さえ不明であるが、三重県下では殆ど例を見ない遺物である。過去の出土例としては、わずかに南牟婁郡内出土とされる1点があるだけである。これは6cm内外の緒縫型大珠ということであるが、出土地も不明であり、現在は現物の所在も明らかでない。

一方、SK1から北西に18m離れた位置にSX2がある。底部穿孔された粗製の無文深鉢を正立埋置している。削平のため上半部が欠損していることや、無文であるため、詳しい所属時期は不明である。

しかし、当地方での埋設土器の検出状況から、古

くて中期末が上限であり、最も盛行するのが後期前葉であることから、当例もこの時期すなわち中津式から広瀬土坑40段階までの間に属するものと考えられる。

なお、当遺跡で出土した縄文土器は、中期初頭を初出とし、末葉の遺物がごく微量ある。そして、殆どが後期初頭の中津式で占められ、その後量を減らしながら、北白川上層式のころまで細々と継続する。

縄文時代の当遺跡における最盛期は、後期初頭の中津式期にあった。そして、次第に衰退をはじめ、それと時を同じくするように、櫛田川合流地点の微高地上で新徳寺遺跡が隆盛を迎えるのである。

新徳寺遺跡は当遺跡との距離が約100m、何らかの理由で上ノ垣外から新徳寺へと集落を移したものと考えられよう。

(田 村)

②S X 3について

溝を方形に巡らしたこの種の遺構は、県内では「方形周溝墓」と呼ばれ扱われているのが現状である。方形周溝墓も含めて「墳丘墓」と呼ぶ方向に流れつつあるような昨今であるが、残念ながら「周溝墓」と「墳丘墓」の概念規定等について持論が展開できるほど筆者に見識も能力もないので、ここでは一応、見た通りの、「周溝墓」という言葉を使うことにした。言葉の上で、「墳丘墓」と「周溝墓」が同義に使われていたりするが、ご容赦願いたい。

2～3世紀ごろのS X 3のような形態の遺構は、赤塚次郎氏により「B型墳」と分類され、前方後方墳と絡めた研究がなされている。B型墳はさらにB 1～3型に細分され、「前方後方型墳丘墓」としてまとめられる。その分類にあてはめると、S X 3は何型になるのであろうか。平面形だけを見ると、辺の中央部にいわゆる陸橋部（開口部）をもつだけのB 1型といえそうであるが、前方部を意識していると思われる溝の掘り方を考慮するとB 2型となるのではないだろうか。

さて、話は前後するかもしれないが、この遺構の時期については、北辺溝の底部につぶれていた高杯がキーとなる。この高杯（31）は一見して、東海地方西部一帯に特徴的に分布する、いわゆる「欠山（様）式」の範疇に属する。しかし、脚部の内湾があまり強くなく、杯底部の稜も弱いなど、欠山式の中では

新しい要素をもつ。山田猛氏の時期区分の欠山様式新段階にあたるものと思われる。

櫛田川流域では、これまでに瀬干遺跡や寺垣内遺跡でB型墳が検出されている。いずれもB 1型で、周溝墓群のなかに営まれており、単独では存在しない。時期や形態に若干の違いがあるものの、これらの例を参考にしても、やはりS X 3の周囲にはS X 4などの1～2基にはとどまらない数の墓が営まれていたであろうことは想像に難くない。上ノ垣外遺跡の自然堤防の縁辺、すなわち、遺構の西、南、東側にかけてのすでに水田に開発されてしまった地域も含めて、墓域が形成されていたのではないだろうか。

もし、墓域があったとすると、その墓群の中で、S X 3は特別の墓であったのか、はたまた複数の同等の墓のひとつであったのか、興味あるところである。また、櫛田川右岸では、現在のところ、最古の古墳は権現山2号墳で5世紀前半のものとされる。S X 3からそれまでの間、どのような墓制が存在したのか、今後の調査研究で明らかになればと思う。

(西 村)

③飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代に関しては、若干の遺構を検出したにすぎない。特筆すべき事項はないが、奈良時代では中地区の南東部で堅穴住居を3軒検出したが、この時期の集落の中心は、もう少し東に広がるのであろうか。また、中地区と南地区的境近くで検出された溝S D 8・9は、出土遺物が極端に少ないが概ね奈良時代と考えられる。平成2年度に今回の調査区の東方で、ほ場整備事業に伴い発掘調査が行われたが、その時に検出された直線的な溝S D 4につながるものであろう。

④平安～鎌倉時代

平安時代になると、住居は掘立柱建物にかわる。棟方向をそろえる建物もいくつかは認められるが、出土遺物がなく時期不明の建物が多いなど、集落の構造や変遷を把握できるものではない。他の遺構や出土遺物からみると、最盛期は平安時代末期から鎌倉時代前期にある。ただ、この時期の遺構についても、中心はやはり調査区のさらに東の畠地にある。

⑤室町時代

室町期の遺構は北区に集中する。中区にある時代のはっきりしない掘立柱建物の中には、この時期のものもあるかもしれないが、遺物の量を考えると、その可能性は低いと言わざるを得ない。いわゆる「南伊勢系」の土師器が北区から集中して出土し、中区・南区ではほとんど出土しないのである。

この時期の遺構は、溝、集石遺構、土坑などで、

〔註〕

1. 位置と環境

- ①松葉和也・日栄智子「高畠遺跡発掘調査概報」三重県埋蔵文化財センター 1996
②奥 義次「牛山遺跡（第二編 原始）」「多気町史」多気町 1992
③河瀬信幸「鴨ノ木遺跡」「一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報」三重県埋蔵文化財センター 1991
小浜 学・田村陽一「鴨ノ木遺跡（第5次）」「一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」三重県埋蔵文化財センター 1994
④奥 義次・下村登良男「鍍金遺跡発掘調査報告」松阪市教育委員会 1981
⑤奥 義次・下村登良男「上寺遺跡発掘調査報告」松阪市教育委員会 1981
⑥奥 義次・下村登良男「射原塙内遺跡発掘調査報告」松阪市教育委員会 1981
⑦奥 義次「坂倉遺跡（第二編 原始）」「多気町史」多気町 1992
⑧西村修久・小浜 学「新恵寺遺跡」「一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ」三重県埋蔵文化財センター 1995
⑨谷本鉄次ほか「金剛塙遺跡発掘調査報告」明和町教育委員会 1971
⑩奥 義次「田中通り遺跡（第二編 原始）」「多気町史」多気町 1992
⑪奥 義次「森庄川浦遺跡（第二編 原始）」「多気町史」多気町 1992
⑫田村陽一「花ノ木遺跡」「近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊 1 三重県教育委員会 1979
⑬下村登良男「校庭遺跡（第二編 原始）」「多気町史」多気町 1992
⑭田村陽一「果園遺跡」「一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ」三重県埋蔵文化財センター 1995
⑮西村修久「大日山古墳群」「一般国道42号松阪・多気バイパス地内発掘調査報告Ⅰ」三重県埋蔵文化財センター 1995
⑯吉水康夫「河田古墳群発掘調査報告Ⅰ」「多気町教育委員会 1974
下村登良男「河田古墳群発掘調査報告Ⅱ」「多気町教育委員会 1986
田阪仁ほか「河田古墳群発掘調査報告Ⅳ」「多気町教育委員会 1983

住居は直接は検出されなかった。住居は、現在の家屋の位置と多分に重なるのだろう。すなわち、今回の調査区は上ノ垣外遺跡の西端部を調査し、集落の一部を明らかにした訳である。今後、東の隣接地において調査が行われる時、当遺跡の全貌が明らかにされることであろう。今後の発掘調査の機会を持ちたい。

（田村・西村）

- ⑰宇河雅之「明治窯跡群」「一般国道42号松阪・多気バイパス地内発掘調査報告Ⅰ」三重県埋蔵文化財センター 1995
⑲下村登良男「中尾窯跡」「河田古墳群発掘調査報告Ⅲ」多気町教員会 1986
⑳三重県教育委員会「カウジアン遺跡」「三重県埋蔵文化財年報10」三重県教育委員会 1980
㉑三重県教育委員会「東浦遺跡」「三重県埋蔵文化財年報9」三重県教育委員会 1979
㉒3. 遺構と遺物
㉓新田 洋「平安時代～中世における煮炊用具－伊勢型」鍋に関する若干の覺書」「三重考古学研究」1 三重考古学談話会 1985
㉔伊藤裕作「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」「Mie history vol. 1 三重歴史文化研究会 1990
伊藤裕作「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」「研究紀要」第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992
㉕千葉 豊「縁帶文系土器群の成立と展開」「史林」72-6号 1989
㉖三重県立図書館の磯部克氏にご教示いただいた。
㉗江坂輝弘「櫛文土器文化研究序説」「六興出版 1982
㉘東海女子短期大学の岩野見司氏にご教示いただいた。
㉙千葉 豊「近畿地方出土の埋設土器について」「昭和61年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ」三重県教育委員会 1989
㉚赤塚次郎「東海系のトレスースー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域ー」「古代文化」44-6 1992
赤塚次郎「前方後方墳」「季刊考古学」第40号 雄山閣 1992
赤塚次郎「東海のB型墳」「シンボジウム西相模の三・四世紀方形周溝墓をめぐって」東海大学校地内遺跡調査団 1992
㉛山田 猛「山城遺跡」「山城遺跡・北瀬古遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1994
㉜宇河雅之「瀬干遺跡」「瀬干遺跡・被塙内遺跡・大寺山遺跡・柳江遺跡・北ノ垣内遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1996
㉝三重県教育委員会「寺垣内遺跡発掘調査概要」(第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会資料) 1988
㉞その他S X 3に関して以下の文献を参考にした。
・田中史新「東国古墳時代出現期とその前後」「東アジアの古代文化」46号 1980
・都出比呂志「墳墓」「岩波講座 日本書紀」4. 集落と祭祀 1986
㉟田村陽一「上ノ垣外遺跡」「平成2年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1991

遺構番号	概報	調査時	備考
S K 1	(2次) S K 9	(2次) S D 5	繩文後期
S X 2	(2次) 墓設土器	(2次) 墓設土器 I	繩文後期?
S X 3	(果護) 前方後方型周溝墓	(果護) S D 18	古墳前期
S X 4	(果護) 溝20	(果護) S D 20	古墳前期
S D 5	(2次) S D 11	(2次) S D 11	古墳前期
S D 6	-----	(2次) S D 5	古墳前期?
S D 7	(1次) 溝1	(1次) S D 5	奈良前期
S D 8	(2次) S D 10	(2次) S D 10	奈良前期
S D 9	(果護) 溝19	(果護) S D 19	奈良前期?
S H 10	(果護) 溝19	(果護) S D 19	奈良前期
S H 11	(2次) S H 2	(2次) S H 2	奈良後期
S H 12	(2次) S H 7	(2次) S H 7	奈良後期
S X 13	(2次) S Z 3	(2次) S Z 3	飛鳥末~奈良初
S D 14	(2次) S D 1	(2次) S D 1	平安中期
S D 15	(2次) S D 4	(2次) S D 4	平安後期
S Z 16	(2次) S Z 13	(2次) S Z 13	鎌倉前期
S Z 17	(2次) 配石遺構	(2次) S Z 8	鎌倉前期
S B 18	-----	-----	-
S B 19	(2次) S B 27	-----	平安前期
S B 20	(2次) S B 20	-----	平安末~鎌倉
S B 21	-----	-----	平安末~鎌倉
S B 22	(2次) S B 16	-----	平安末~鎌倉
S B 23	(2次) S B 18	-----	平安末~鎌倉
S B 24	-----	-----	平安
S B 25	-----	-----	-
S B 26	-----	-----	-
S B 27	-----	-----	-
S B 28	-----	-----	-
S B 29	(2次) S B 17	-----	平安末期
S B 30	(2次) S B 25	-----	平安
S B 31	-----	-----	-
S B 32	-----	-----	-
S B 33	-----	-----	-
S B 34	(2次) S B 19	-----	鎌倉前期
S B 35	-----	-----	-
S B 36	(2次) S B 26	-----	鎌倉後期~?
S B 37	-----	-----	-
S A 38	-----	-----	-
S A 39	-----	-----	-
S D 40	-----	(2次) S D 12	鎌倉
S D 41	(果護) 溝6	(果護) S D 6	鎌倉前期
S E 42	(果護) 井戸22	(果護) S E 22	鎌倉前期?
S E 43	-----	(果護) S E 21	鎌倉前期?
S E 44	(果護) 井戸23	(果護) S E 23	鎌倉前期
S E 45	-----	(果護) S E 24	鎌倉前期
S E 46	(果護) 井戸26	(果護) S E 26	鎌倉前期
S E 47	(果護) 井戸28	(果護) S E 28	鎌倉前期
S K 48	(果護) 土坑25	(果護) S K 25	鎌倉前期
S E 49	-----	(果護) S K 29	鎌倉前期
S K 50	-----	(果護) S K 27	鎌倉後期
S D 51	-----	-----	鎌倉前期
S K 52	(1次) 土坑6	(1次) S K 1	鎌倉末~室町
S X 53	(1次) 土坑5	(1次) S Z 2	鎌倉末~室町
S Z 54	(1次) 集石遺構7	(1次) S Z 7	鎌倉末~室町
S Z 55	-----	(1次) S Z 3	鎌倉末~室町
S D 56	(1次) 溝2	(1次) S D 2	室町
S D 57	(1次) 溝4	(1次) S D 6	室町
S D 58	(1次) 溝3	(1次) S D 8	室町
S D 59	-----	(2次) S D 14	室町
S K 60	-----	(2次) S Z 15	室町
S D 61	-----	(2次) S D 23	-
S D 62	-----	(2次) S D 23	-
S A 63	-----	-----	-
Pit 64	-----	(2次) N 30-P 4	弥生後期~古墳
Pit 65	-----	(2次) L 33-P 4	弥生後期
Pit 66	-----	(2次) O 29-P 2	奈良後期
Pit 67	-----	(2次) Q 33-P 7	平安後期
Pit 68	-----	(2次) R 33-P 6	鎌倉前期
S Z 69	-----	(2次) S 19-P 1	-
Pit 70	-----	(2次) Q 34-P 16	鎌倉前期

第9表 遺構番号対照表



昭和23年極東米軍撮影空中写真



遺跡遠景（西上空から）



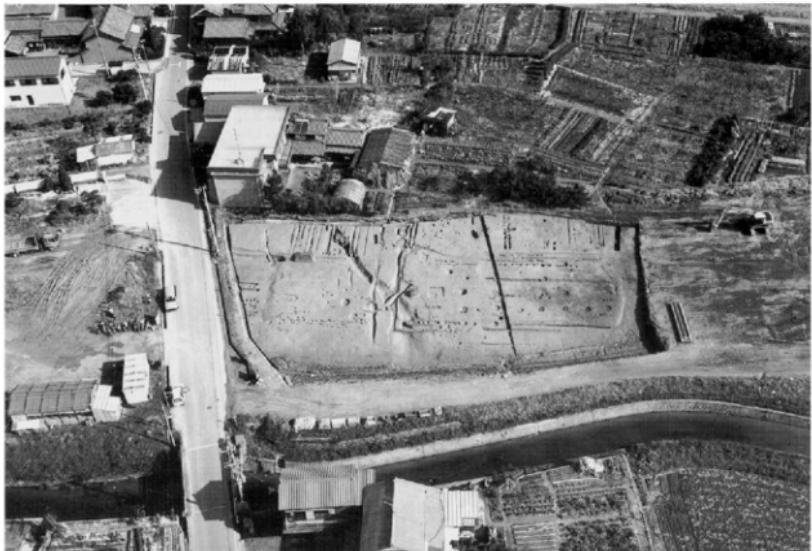
調査前全景（北から）



調査後全景（北上空から）



調査後全景（南上空から）



第1次調査（北地区、西上空から）



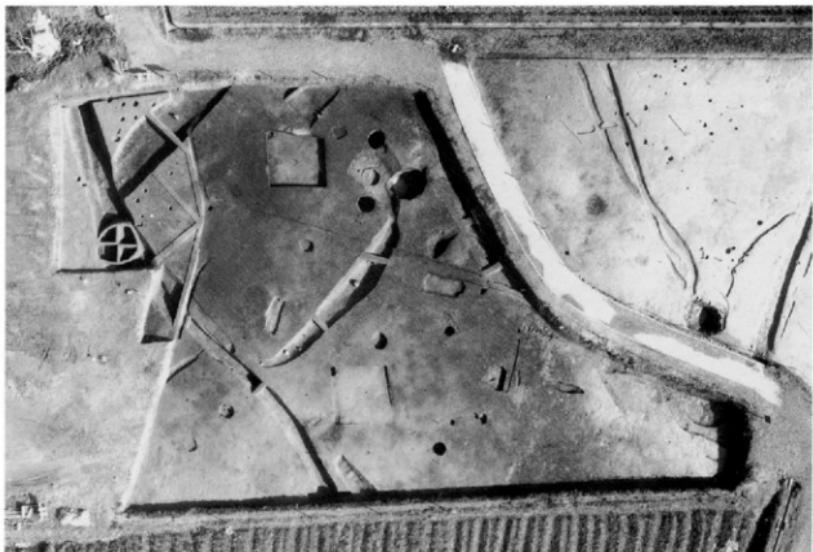
第1次調査（北地区、北から）



第2次調査（中地区、西上空から）



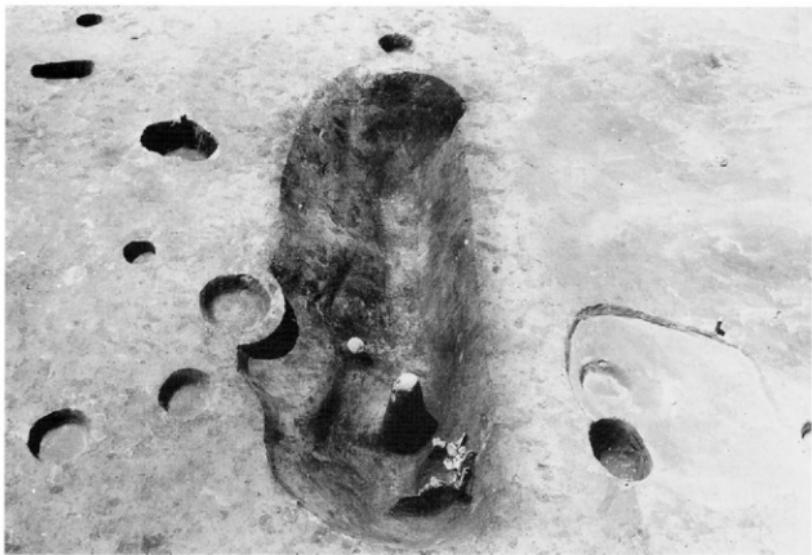
第2次調査（中地区、北から）



巢藩遺跡区（南地区、西上空から）



巢藩遺跡区（南地区、調査風景）



S K 1 (北から)



S K 1 繩文土器出土状況（東から）



S X 2 検出状況（南から）

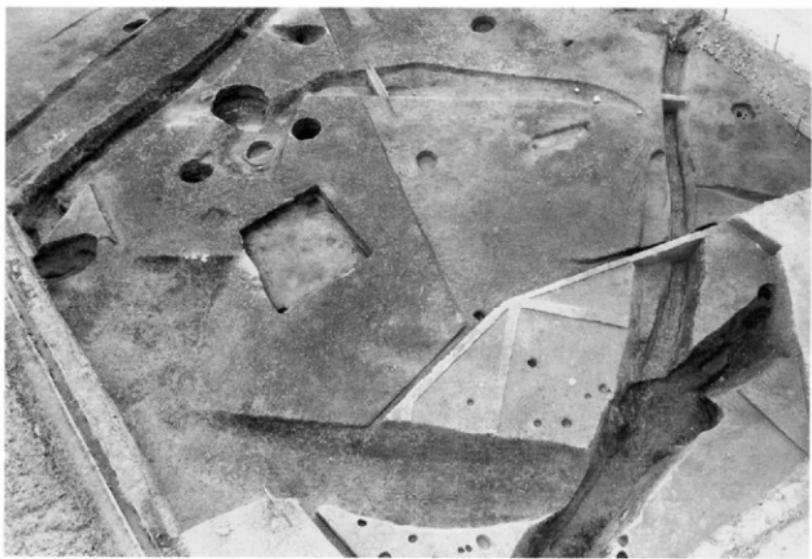


S X 2 埋設状況（東から）

P L 9.



S X 3 (東から)



S X 3 (北から)



S X 3 南周溝遺物出土状況（東から）



S X 3 南周溝遺物出土状況（西から）



S X 3 北周溝遺物出土状況（東から）



S X 3 西周溝・SD 9断面（南から）

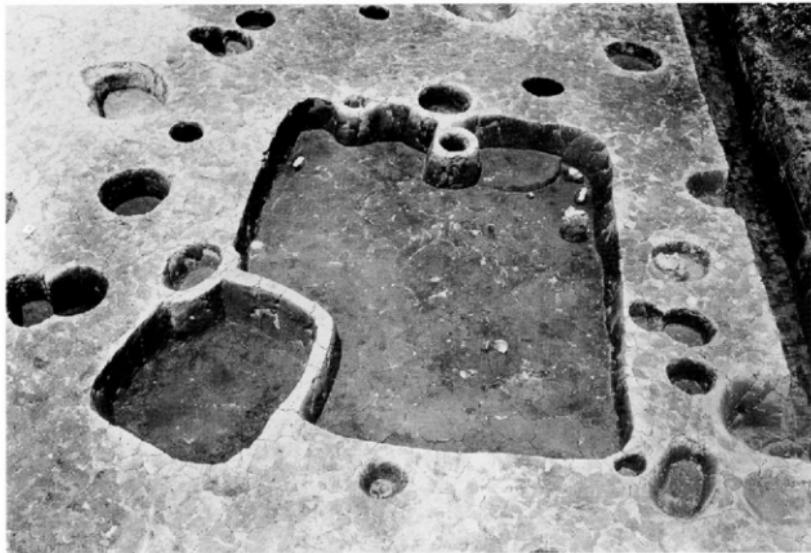


S X 4 (東から)



第2次調査（中地区）調査風景

P L 13.



S H10 (南から)



S H11・12 (北から)

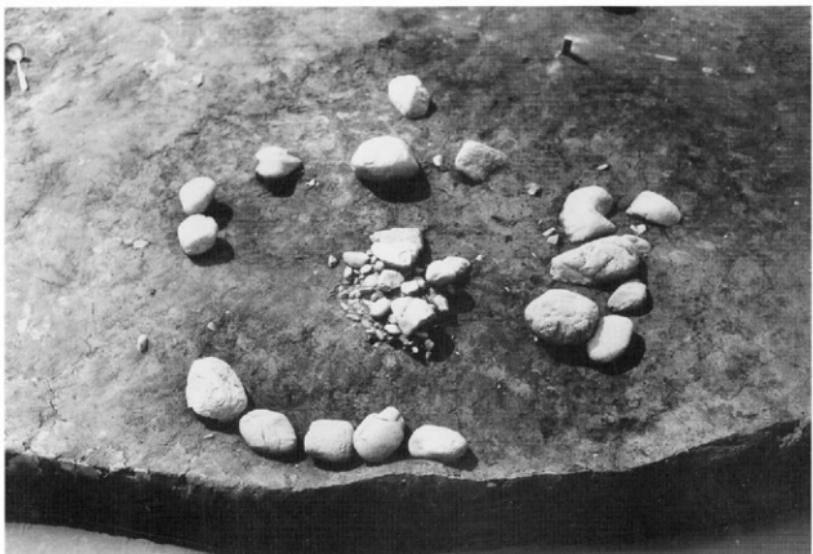


S X 13 (南西から)



Pit.66 遺物出土状況

P L 15.



S Z 16 (南から)



S Z 17 (北西から)



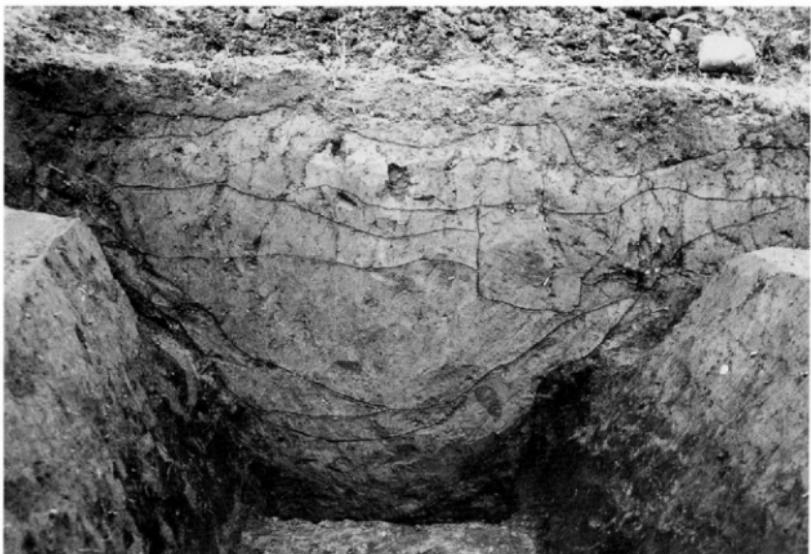
Pit.67檢出狀況



Pit.67遺物出土狀況



S K 48 遺物出土状況（北から）



S D 8 発掘区東壁断面（南西から）



S E 42上部遺物出土状況（北から）



S E 42下部遺物出土状況（南から）



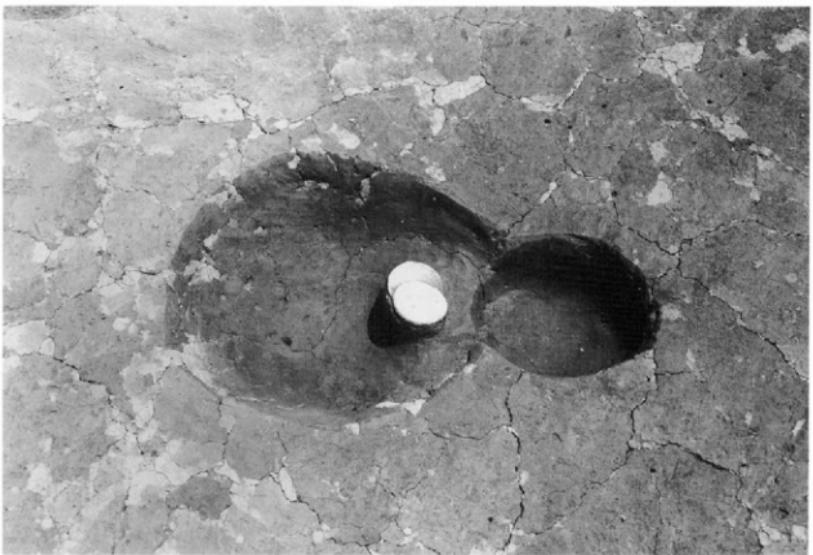
S E 42下部遺物出土状況（南から）



S E 44曲物出土状況（南から）

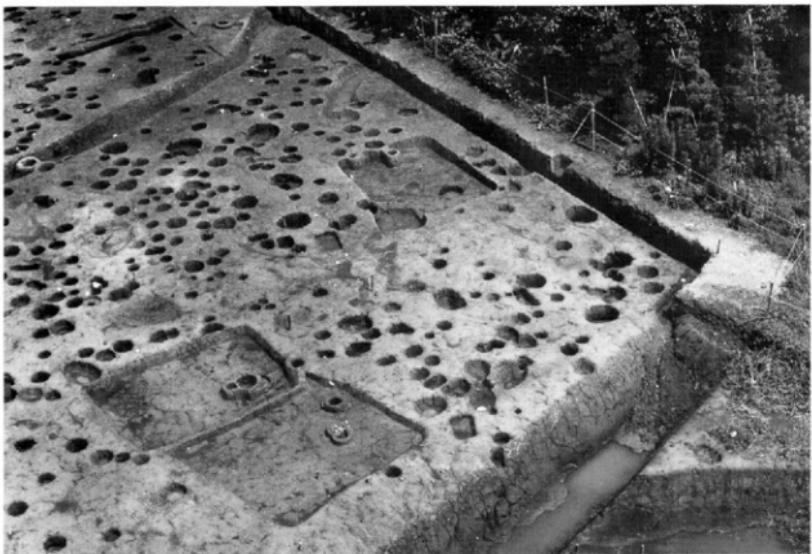


Pit.68 (南から)



Pit.71 (O-30 P 8) (西から)

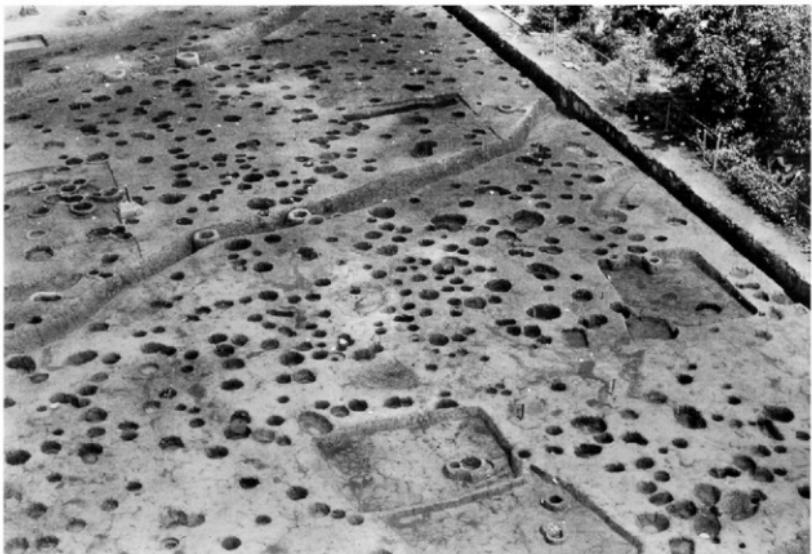
P L 21.



S B 20・21・22ほか（南から）



S B 23・24・25・26ほか（東から）

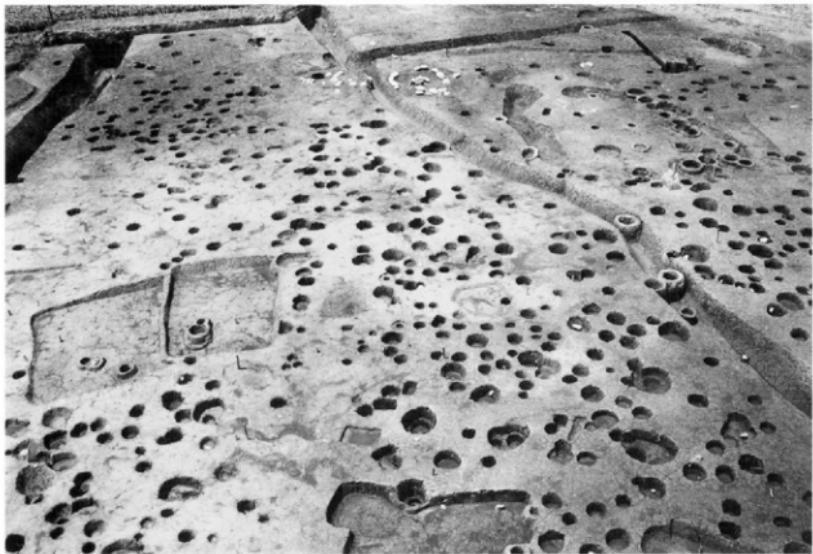


S B 33・34・35・36ほか（南から）



S B 23・24・S A 38ほか（南から）

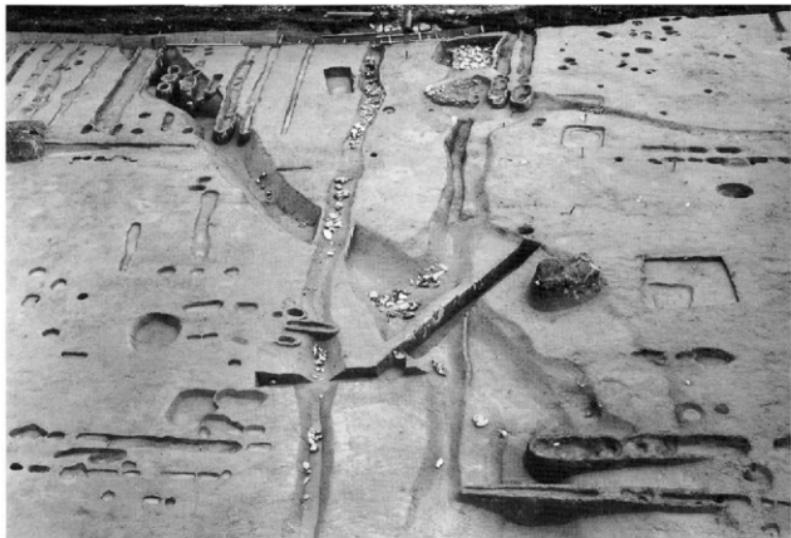
P L 23.



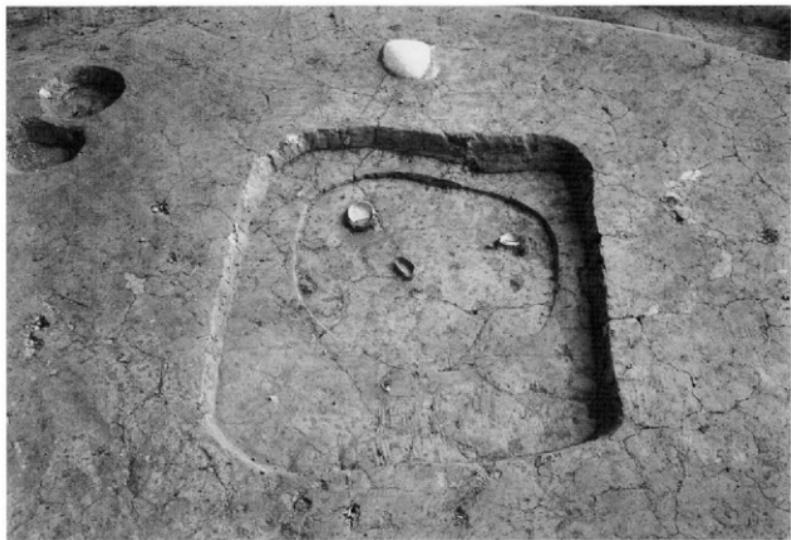
S B 23・24・S A 38はか（東から）



S B 20・21はか（東から）



第1次調査（北地区）主要遺構（西から）

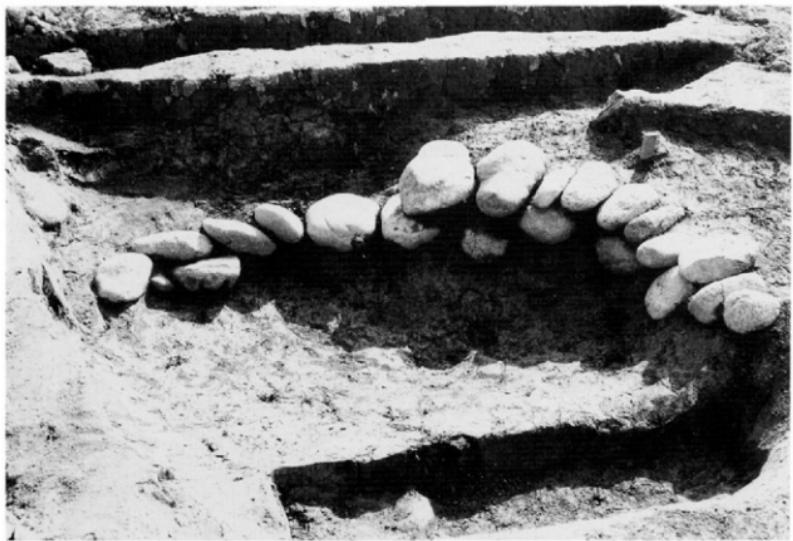


S X53（西から）

P L 25.



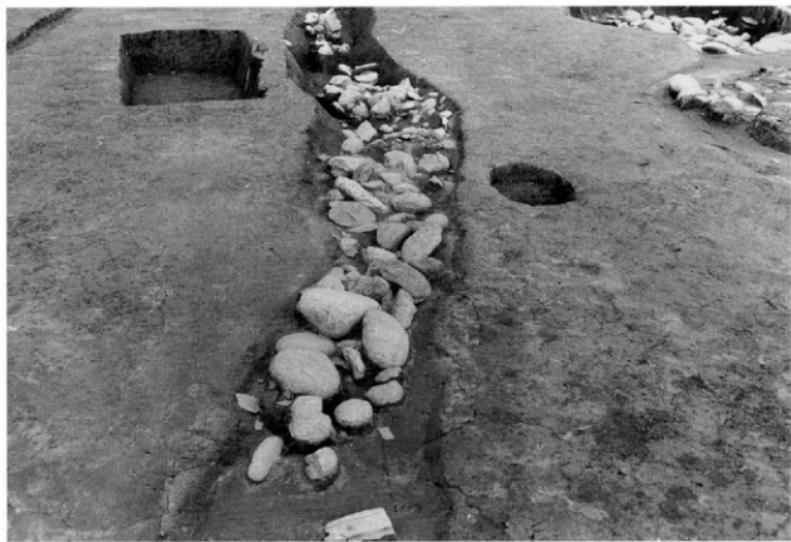
S Z 54 (西から)



S Z 54 (北から)

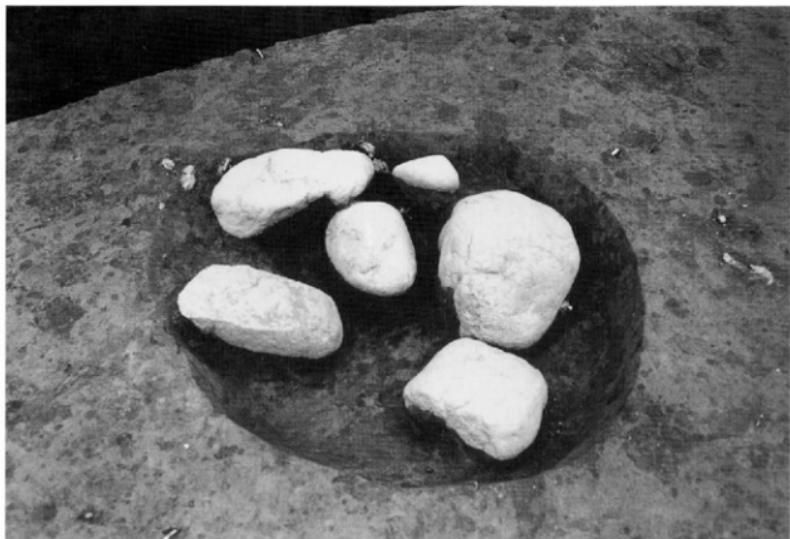


S Z 55 (南から)



S D 56 (西から)

P L 27.



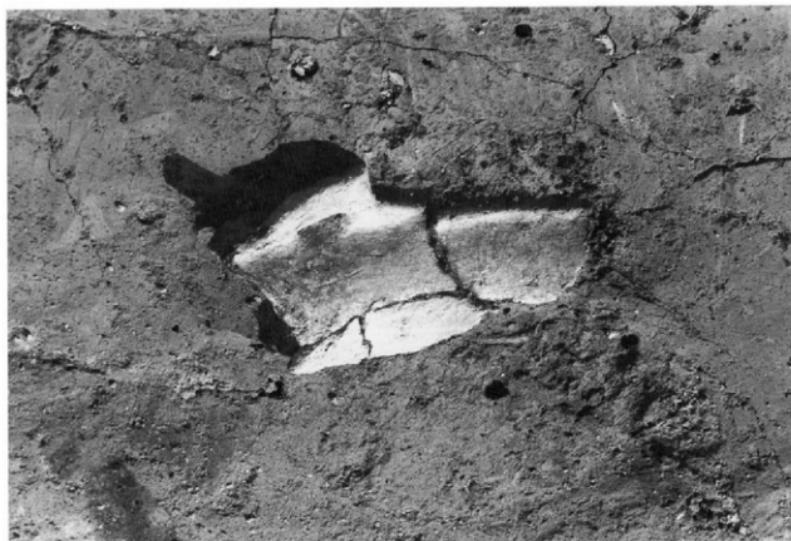
S Z 69 (西から)



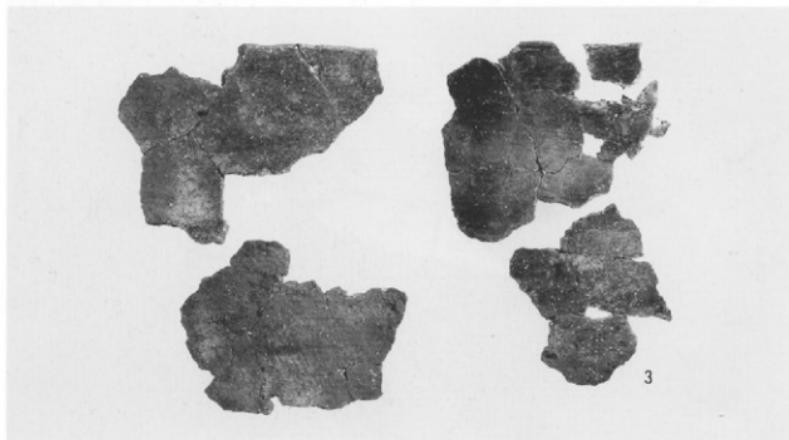
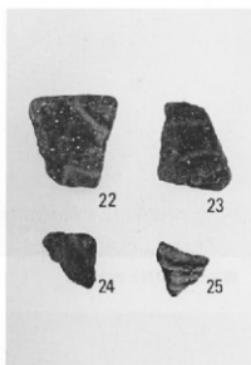
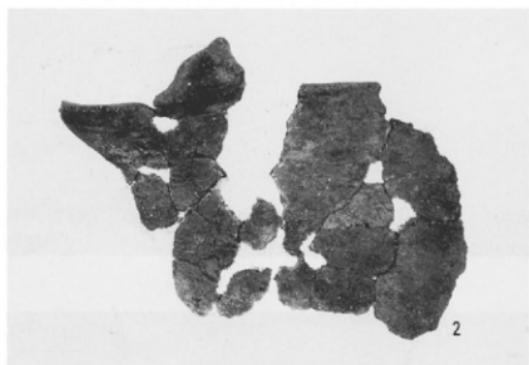
第1次調査（北地区）調査風景



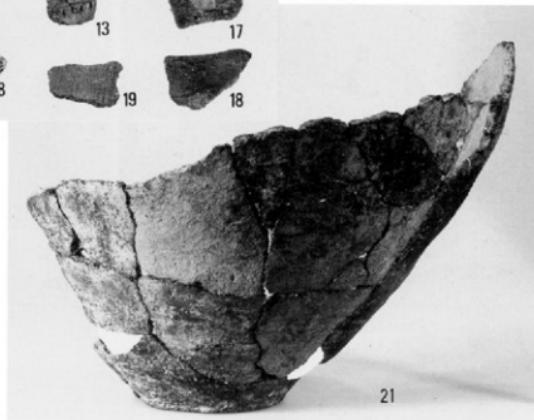
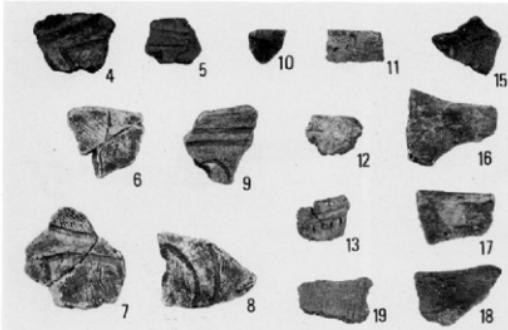
繩文土器（479）出土状況



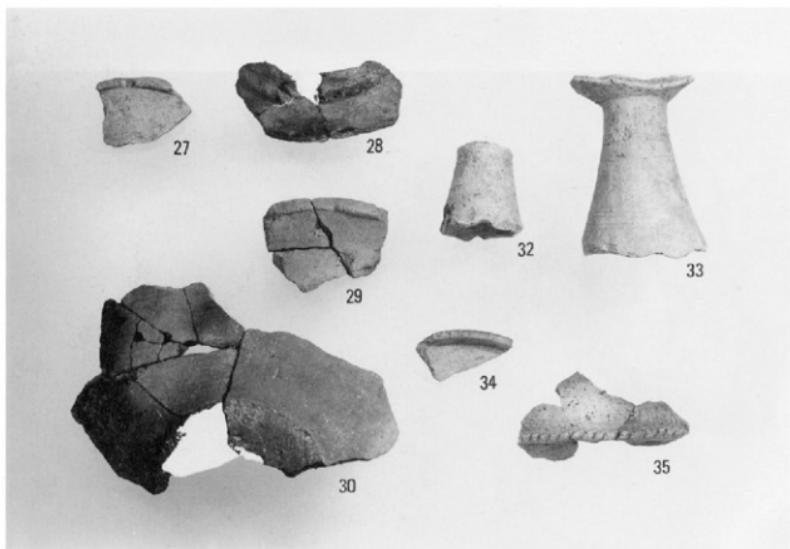
繩文土器（489）出土状況



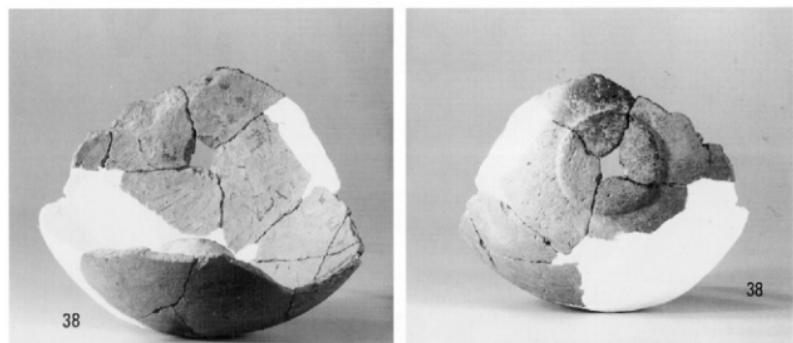
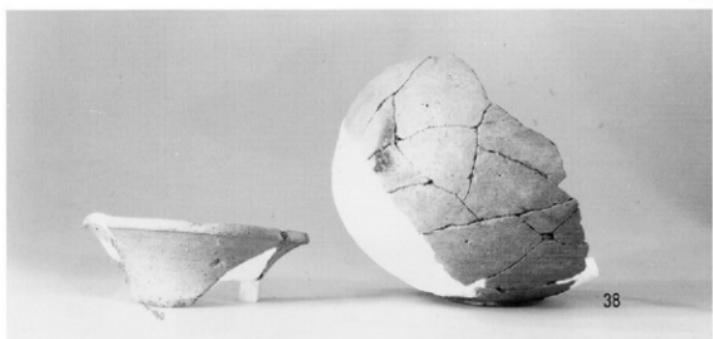
出土遺物



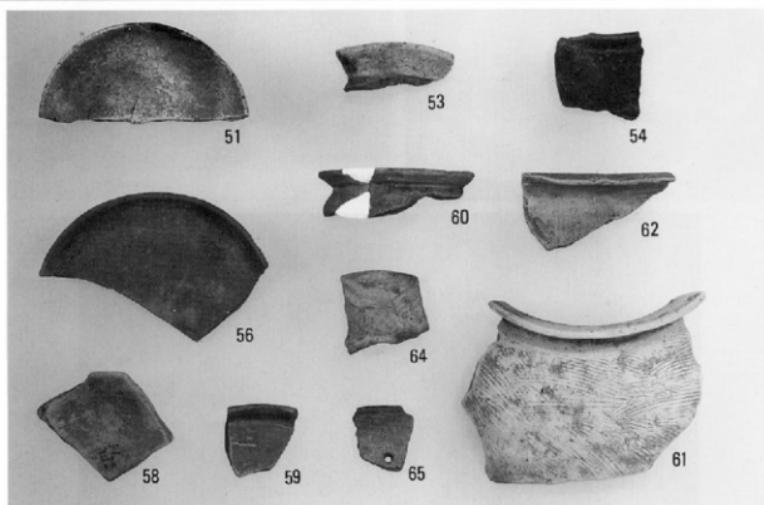
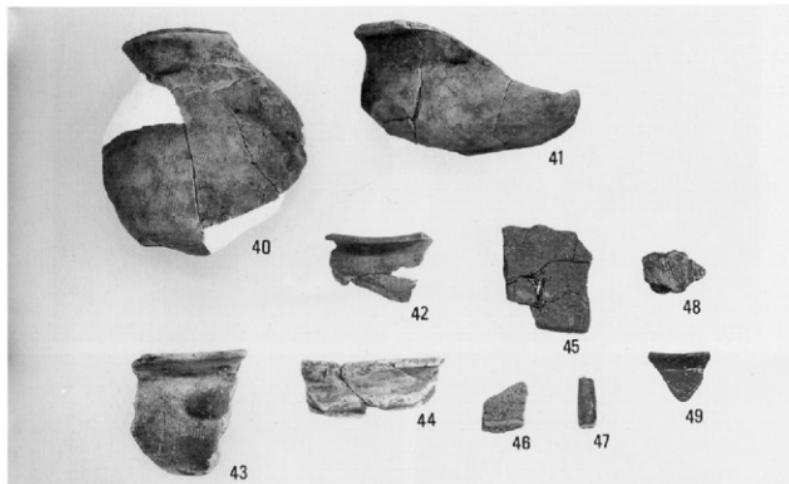
出土遗物



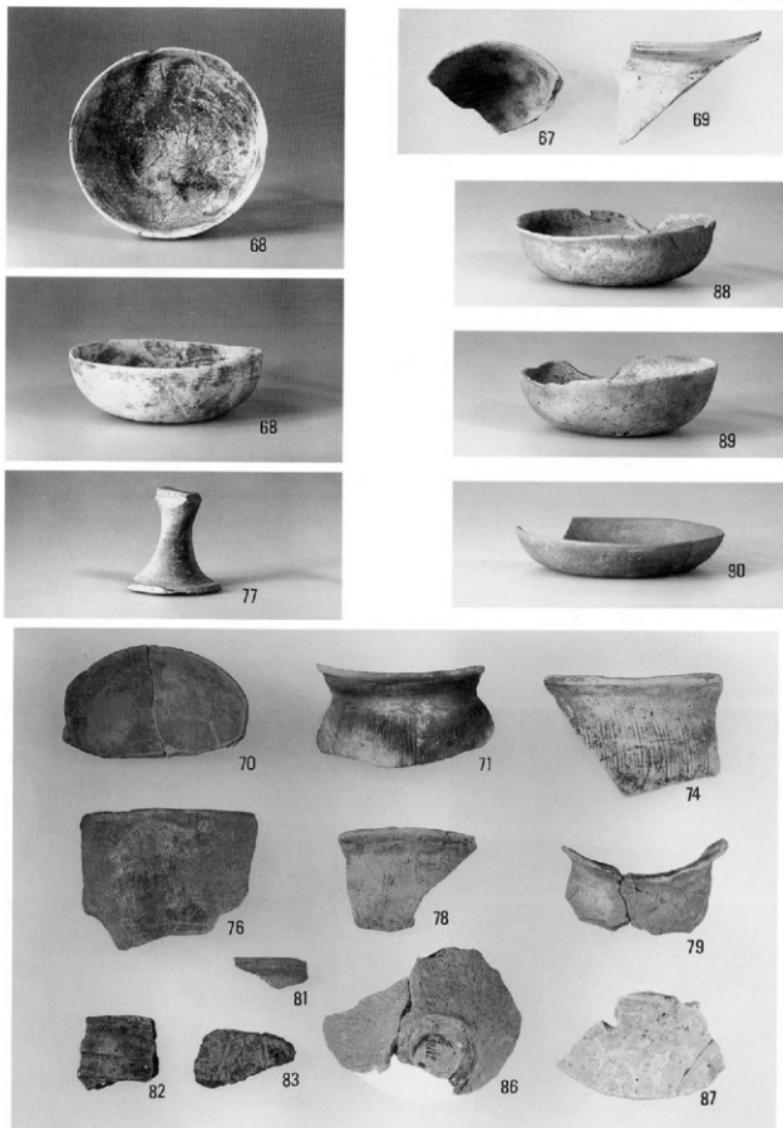
出土遺物



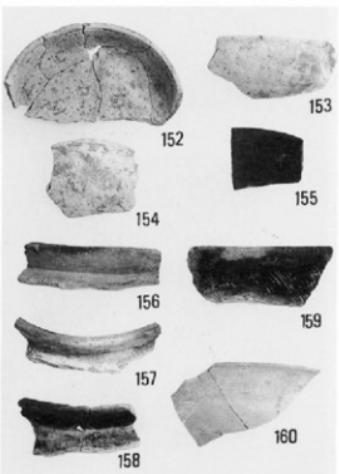
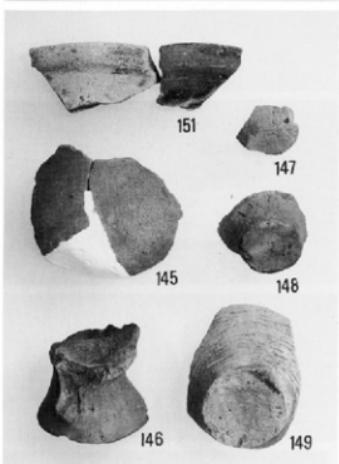
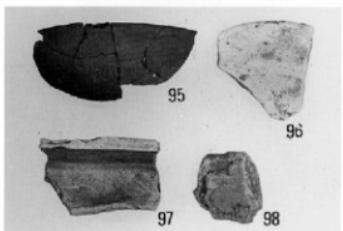
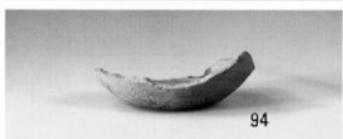
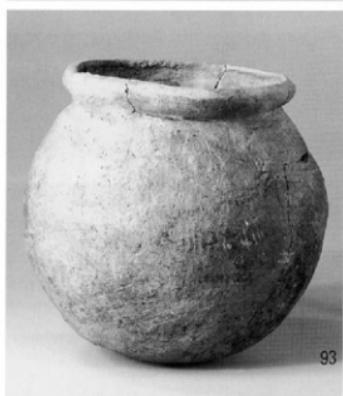
出土遗物

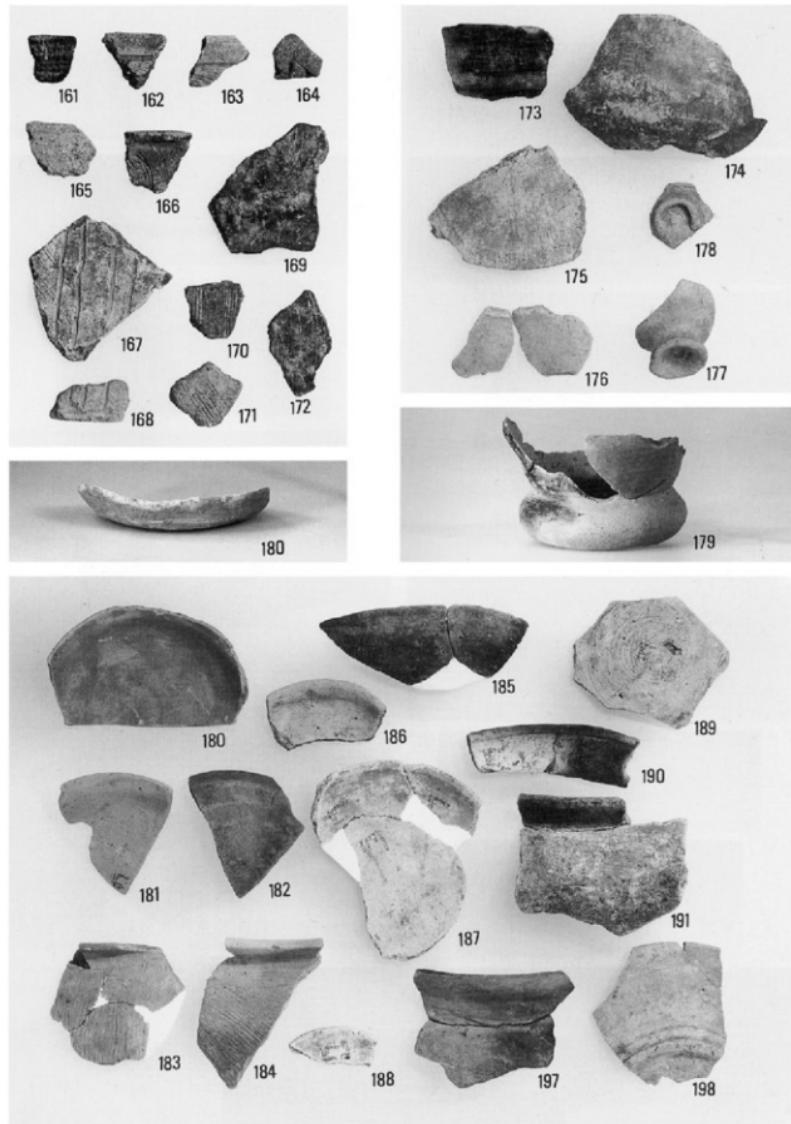


出土遺物



出土遺物





出土遺物



192



193



193



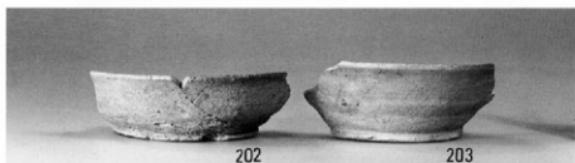
199



200



204



202



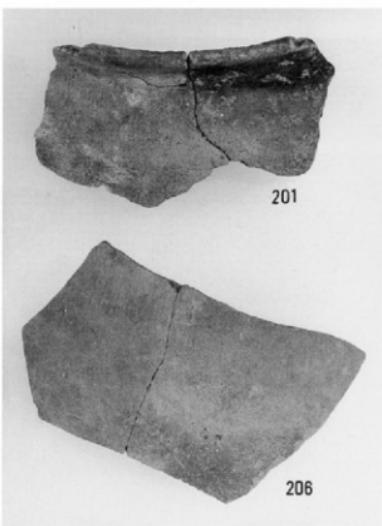
194



195

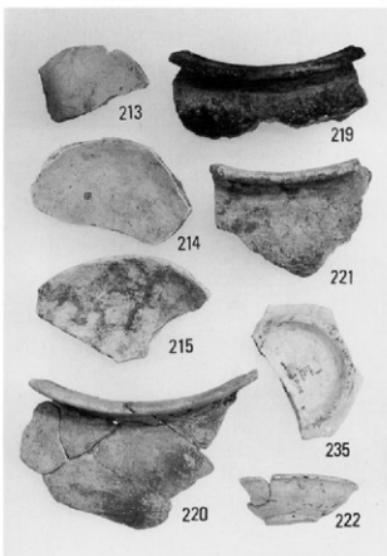
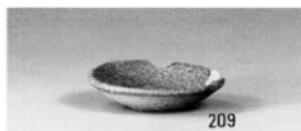


196



201

206

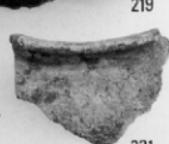


213

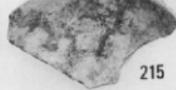
219



214



221



215

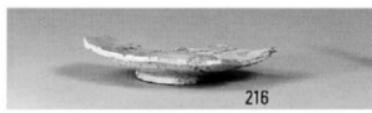


220



235

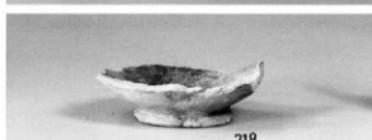
222



216



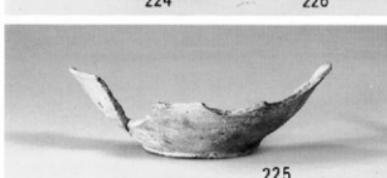
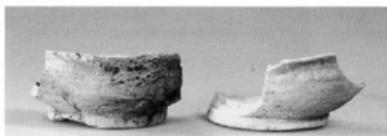
217



218



223





239



240



242

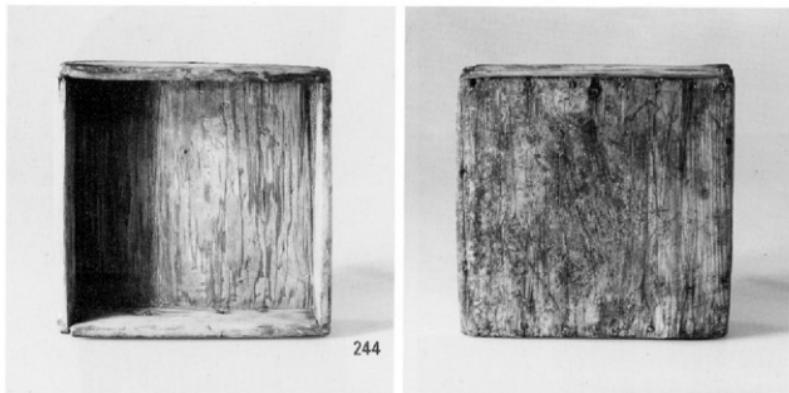


243

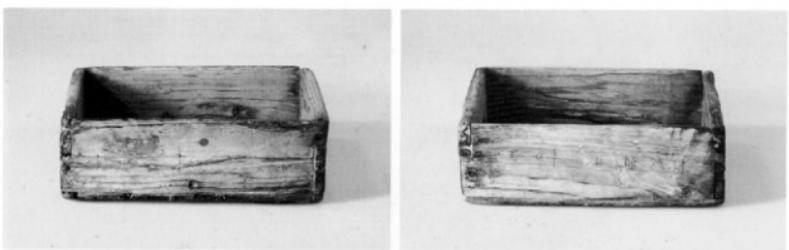
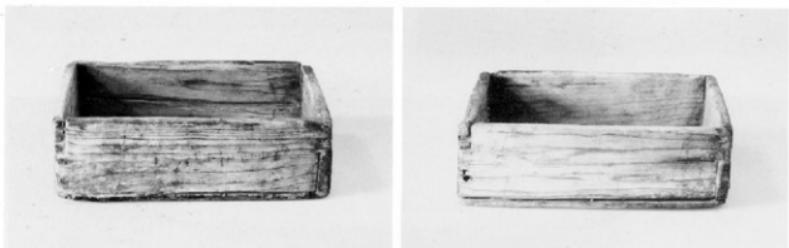


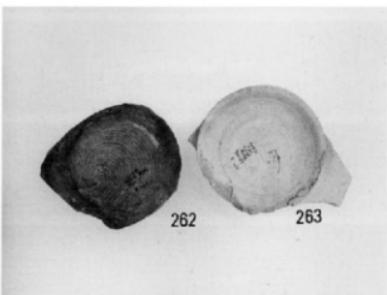
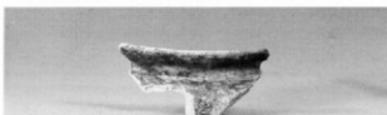
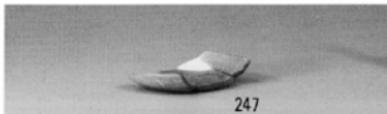
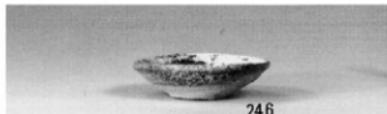
238

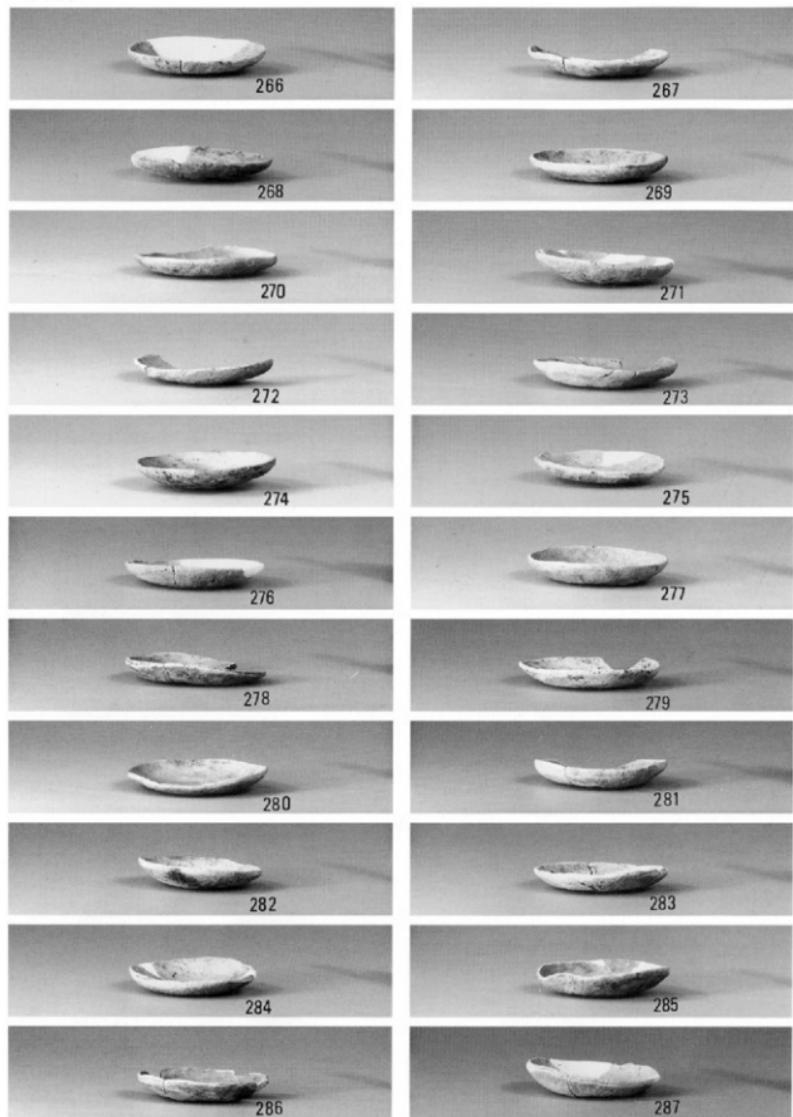
出土遺物

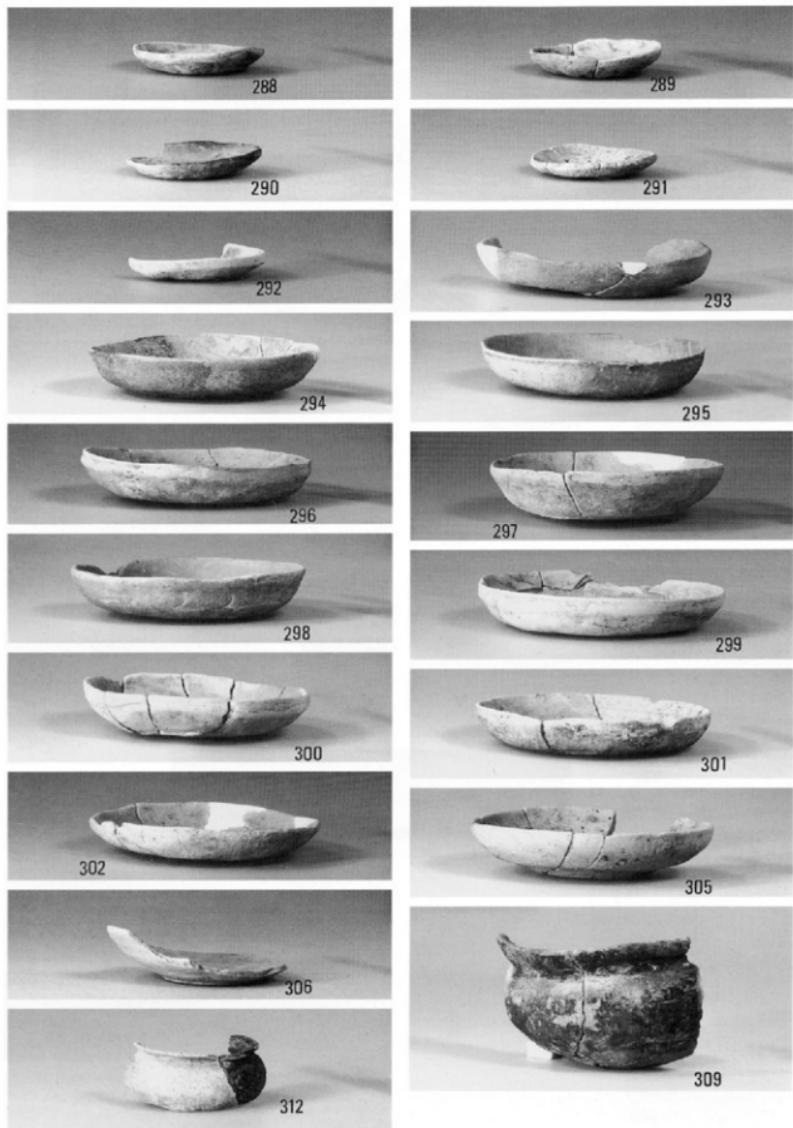


244





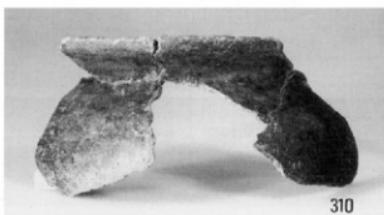




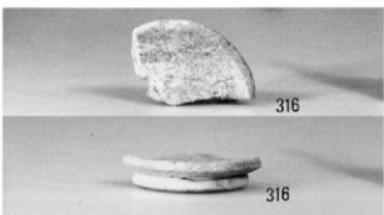
出土遺物



311



310



316

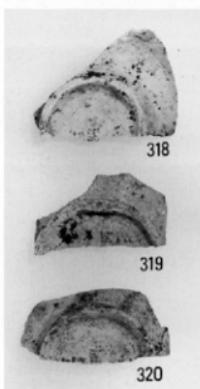
316



314



315



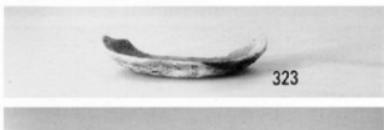
318

319

320



317



323



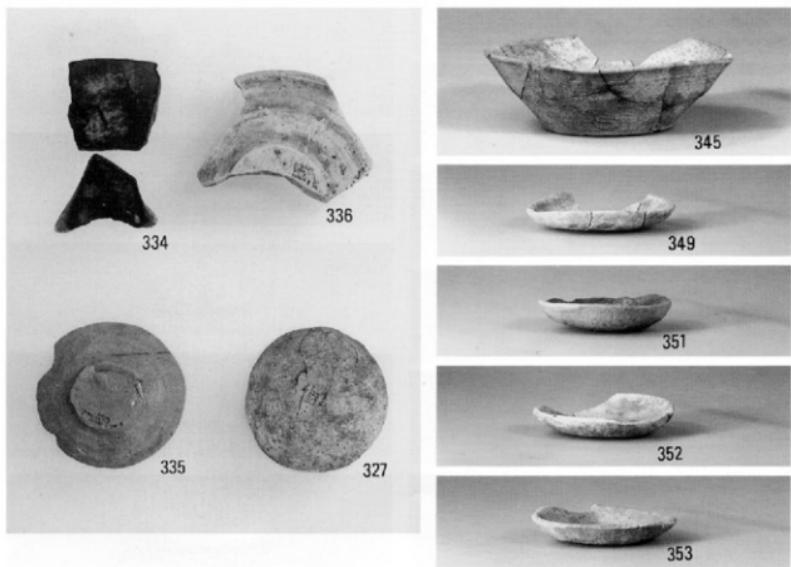
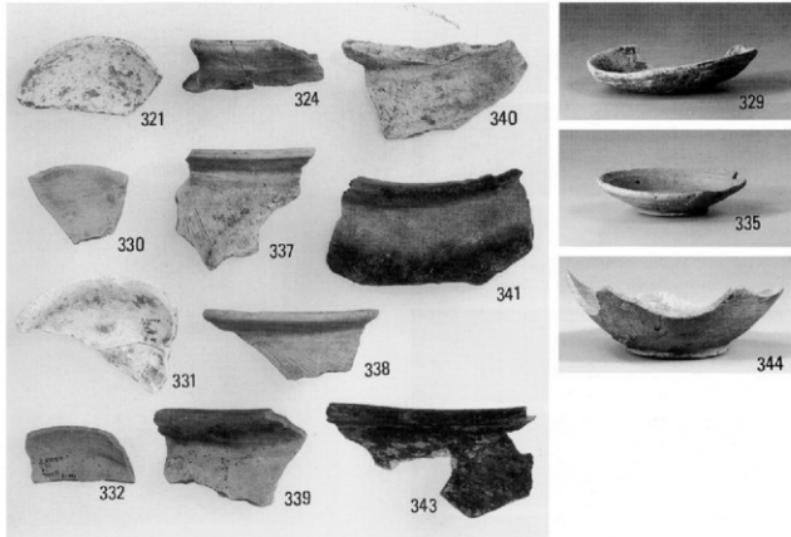
325

326

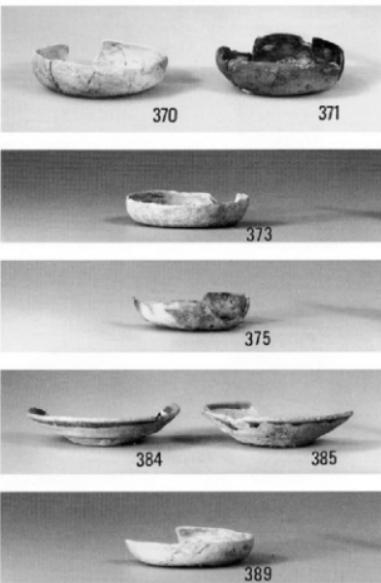
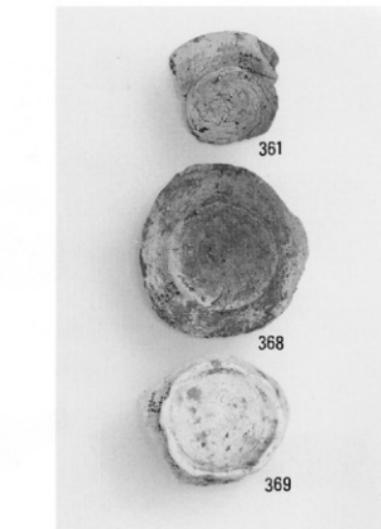
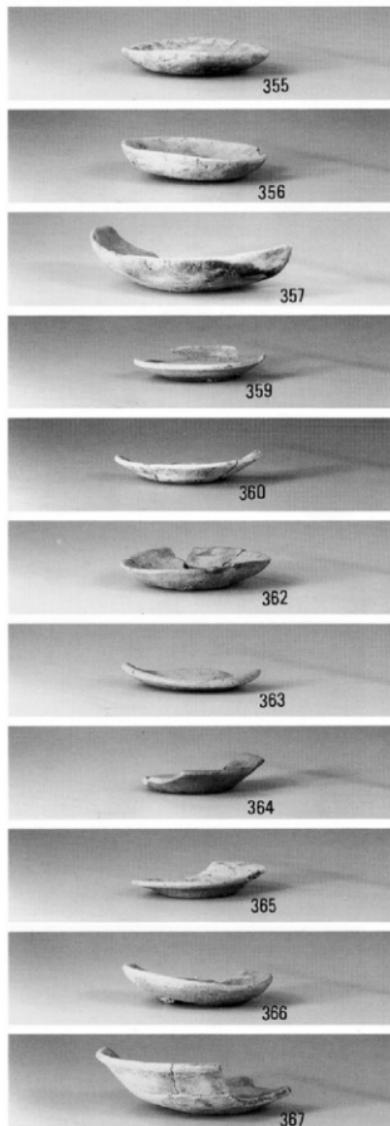


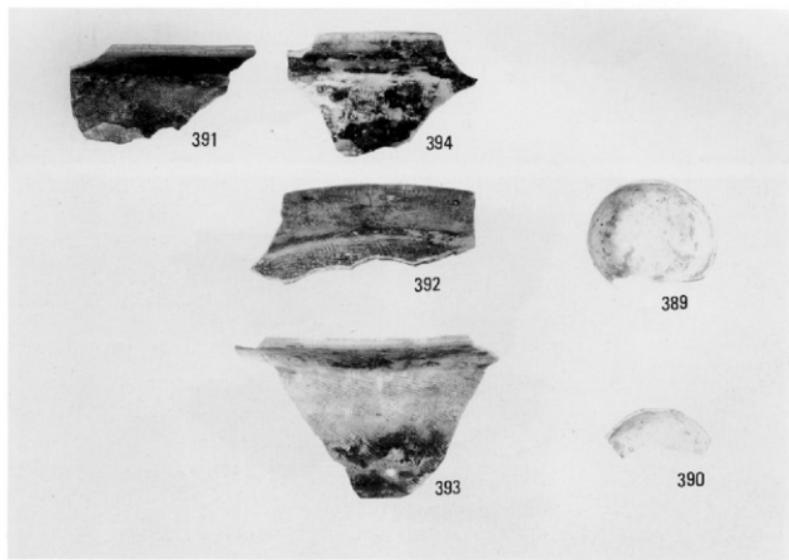
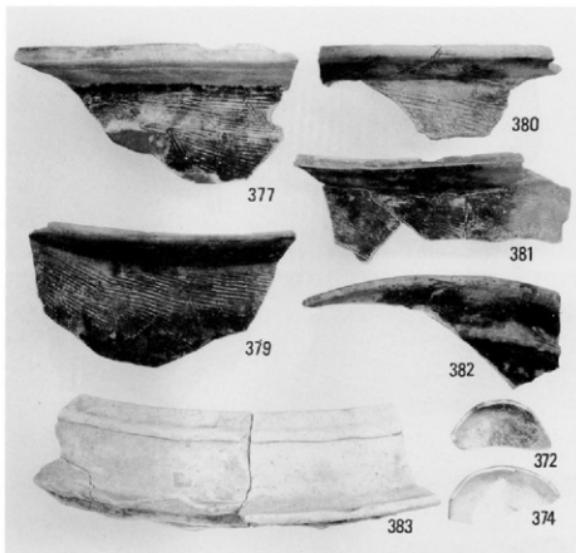
328

出土遺物

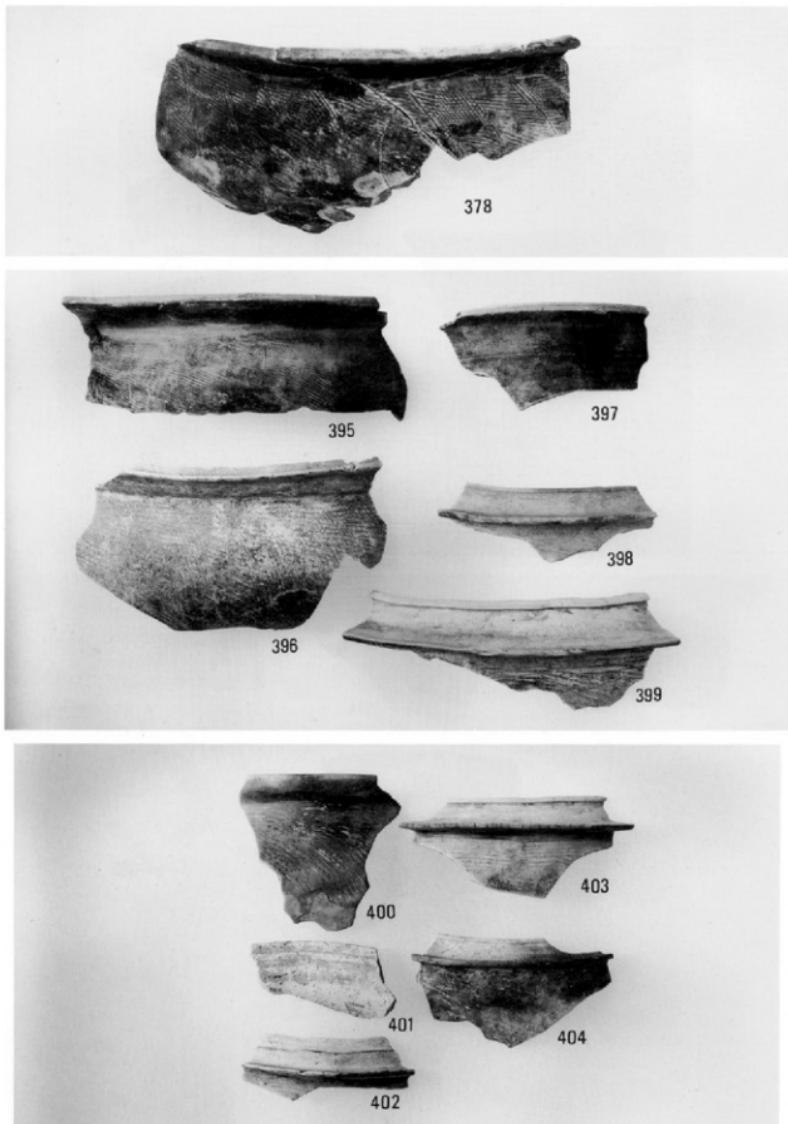


出土遺物

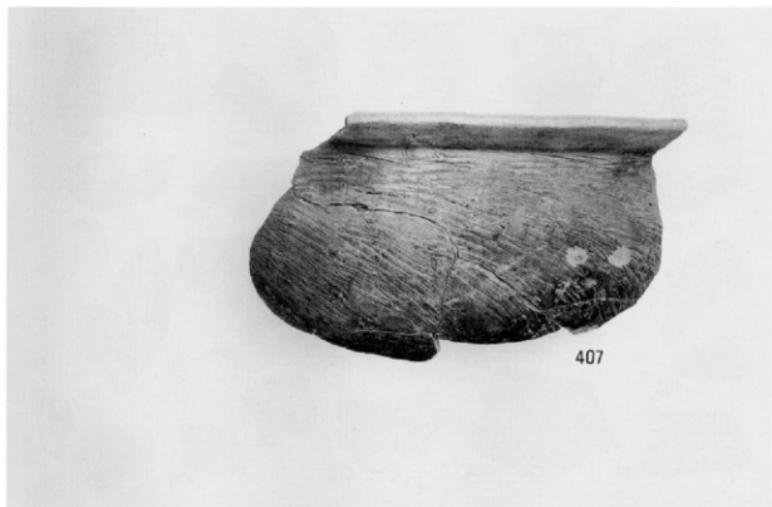
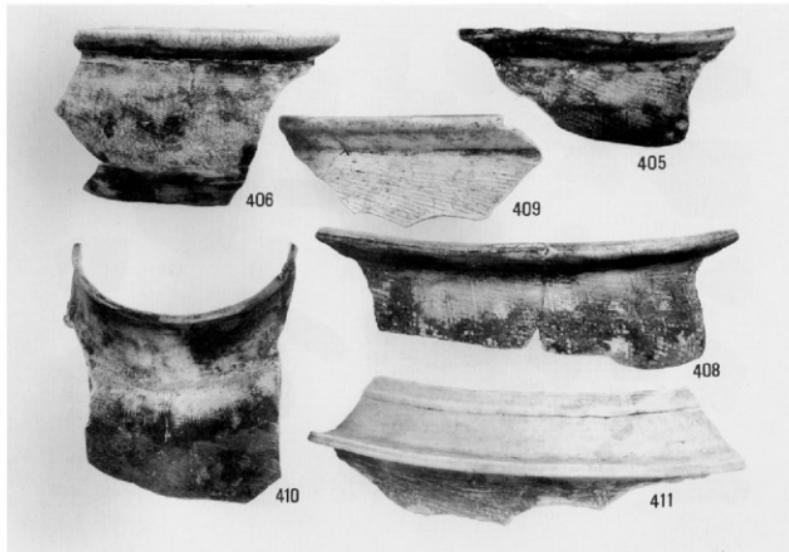




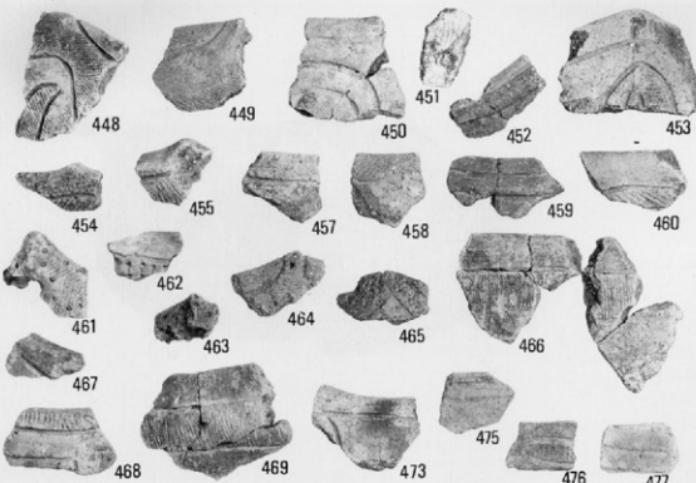
出土遺物



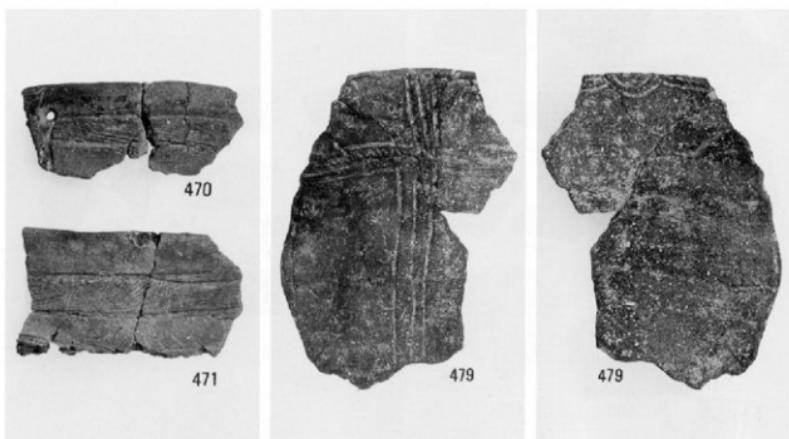
出土遺物



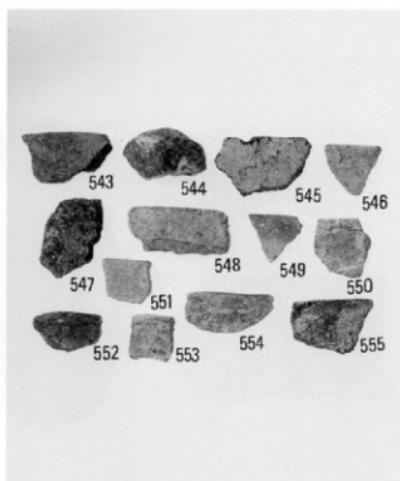
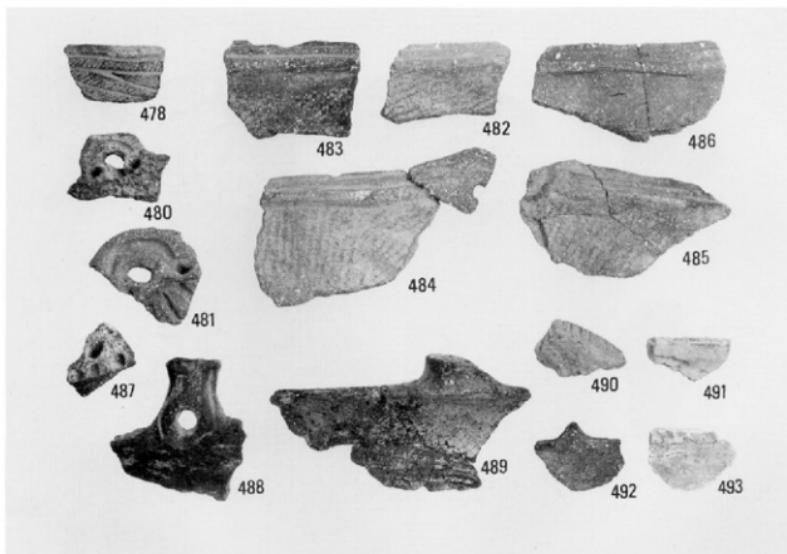
出土遺物



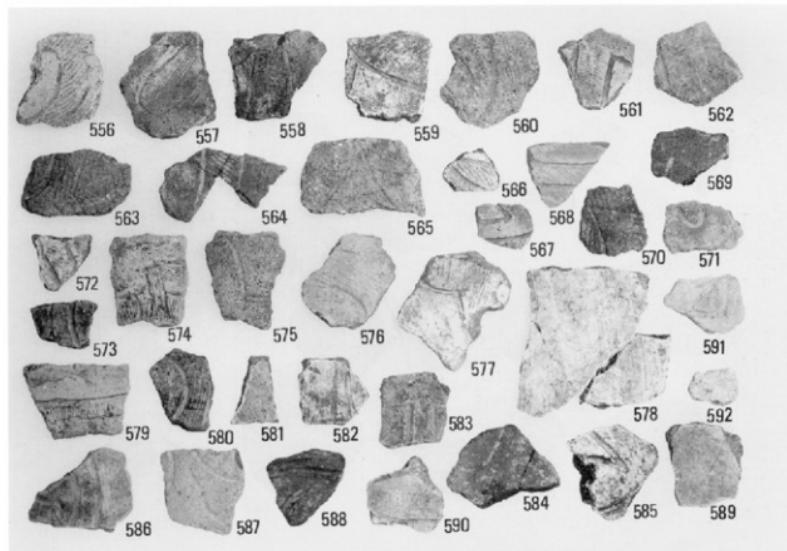
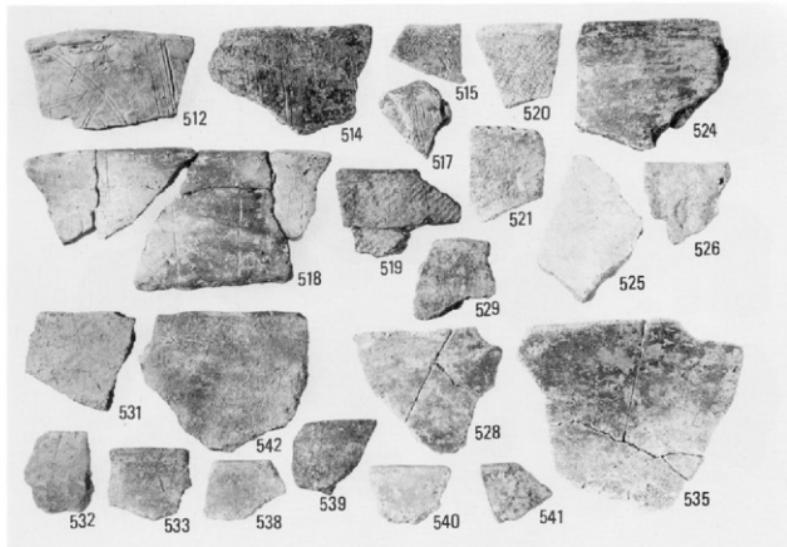
出土遺物



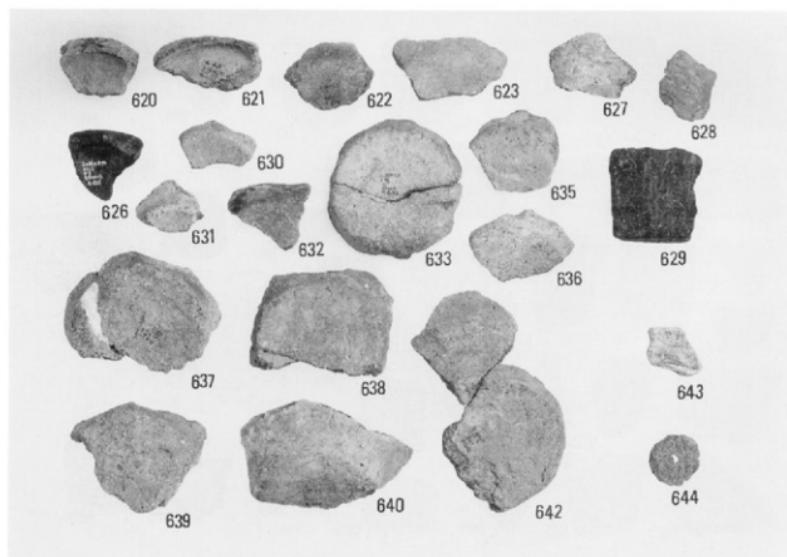
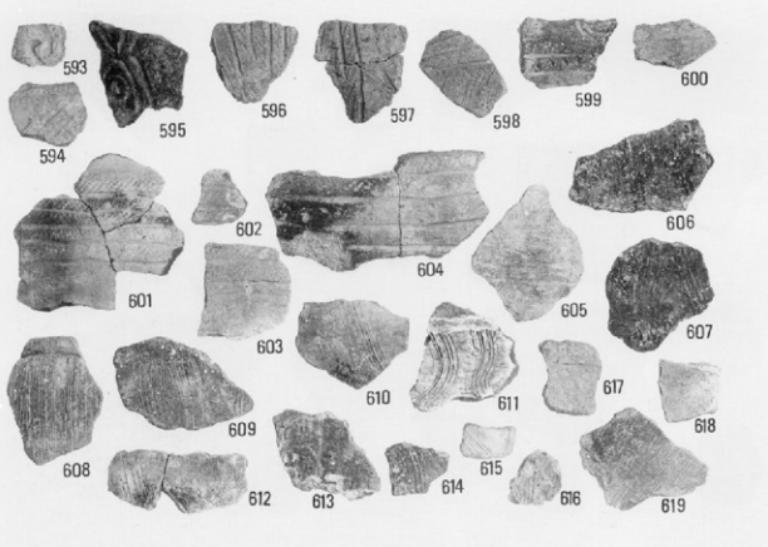
出土遺物



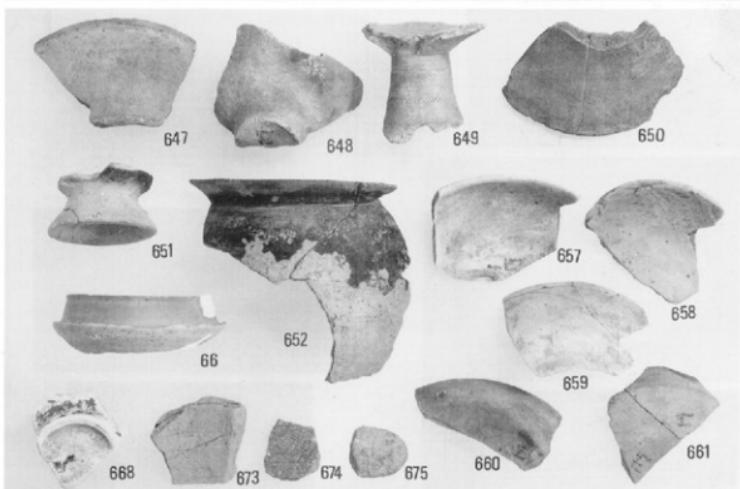
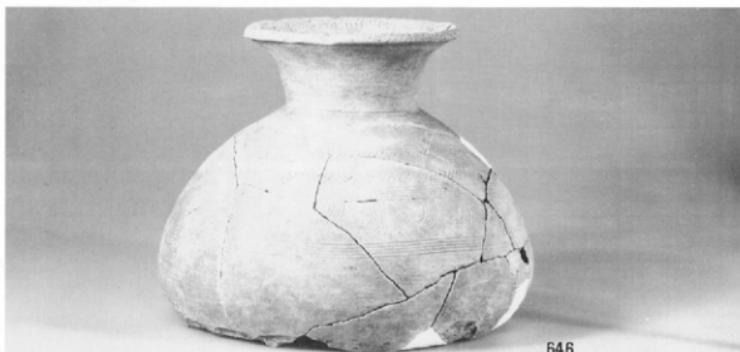
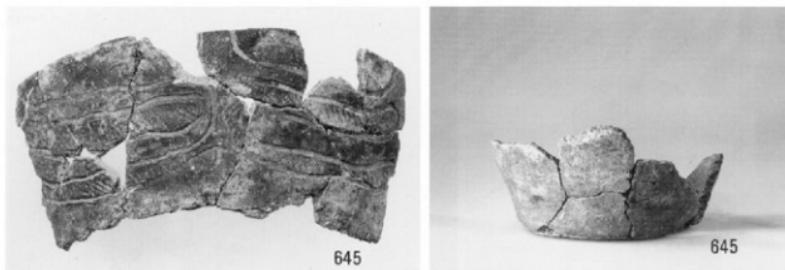
出土遺物



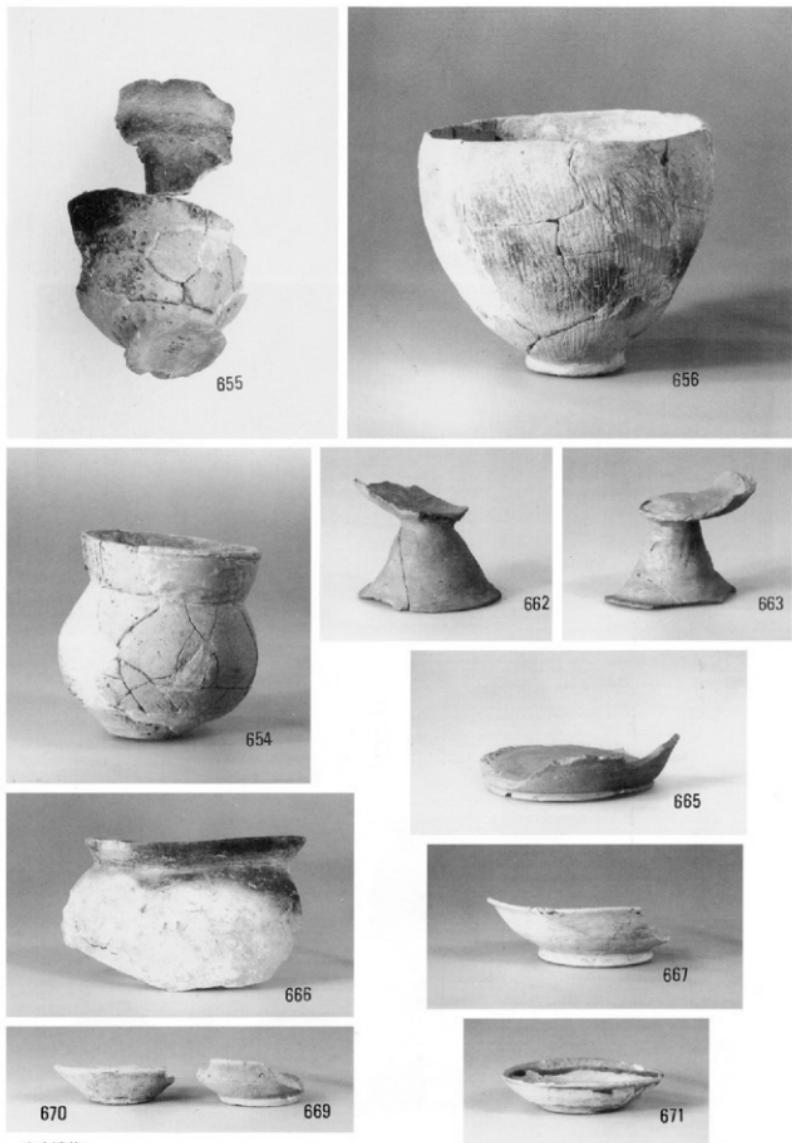
出土遺物



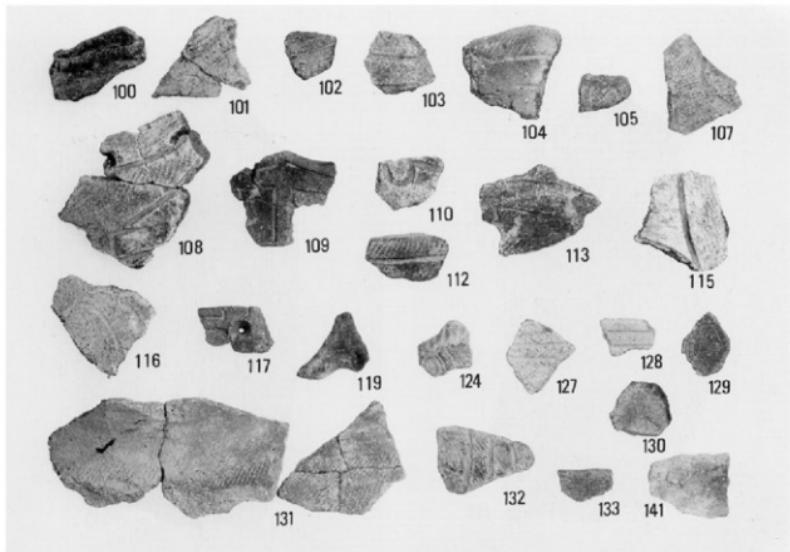
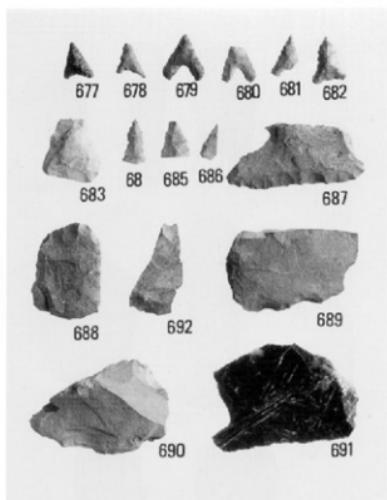
出土遺物



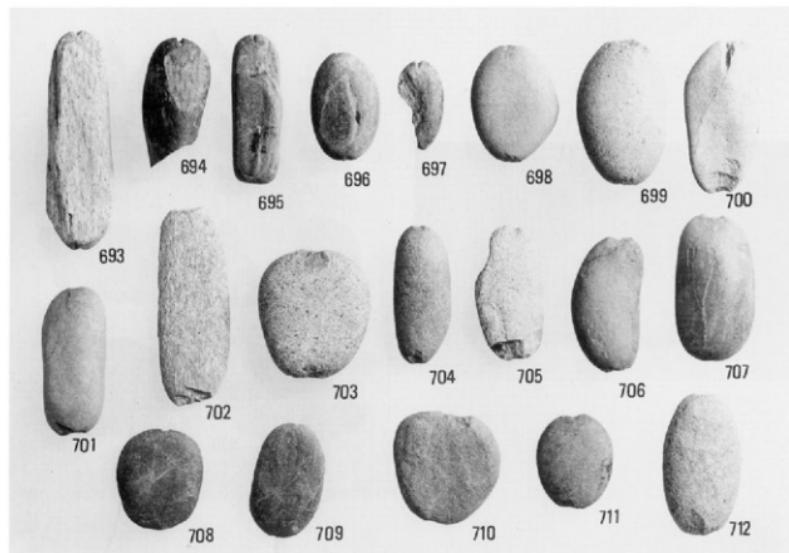
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
1	縄文土器 深鉢	SK1	口径:(27.0)	・口縁端部内折、内外面ミガキ	密	良	外:灰褐色(7.5YR4/2) 内:褐(7.5YR4/3)	口縁部1/3存		072-01
2	縄文土器 深鉢	SK1	口径:(31.0)	・口縁端部内削ぎ状、筒状突起 ・体部外面巻貝条痕	やや粗	良	外:灰褐色(7.5YR4/2) 内:褐(5YR6/6)	口縁部1/3存		073-01
3	縄文土器 深鉢	SK1	口径:(27.0)	・口縁部外面ミガキ ・体部巻貝条痕のちみガキ	密	良	外:褐褐色(5YR3/4) 内:灰褐色(1.5YR5/3)	口縁部1/3存	外面スス付着	071-01
4	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀、無文部と異文部(RL)帯 ・無文部はミガキ、内面ミガキ	密	やや不良	外:灰褐色(7.5YR6/2) 内:灰褐色(7.5YR6/2)	体部小片		066-01
5	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀、無文部と異文部(RL)帯 ・無文部はミガキ、内面ミガキ	やや密	やや良	外:灰褐色(7.5YR5/2) 内:灰褐色(7.5YR5/2)	体部細片		066-08
6	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀、無文部と異文部の文様 ・無文部はミガキ、内面ミガキ	やや密	良	外:灰褐色(7.5YR3/3) 内:灰褐色(7.5YR3/4)	体部小片		066-02
7	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀、無文部と異文部(RL)帯 ・内面ナデ	密	やや良	外:灰褐色(7.5YR7/1) 内:灰褐色(7.5YR7/1)	体部小片		066-12
8	縄文土器 深鉢	SK1	同上		密	やや良	外:灰褐色(7.5YR7/1) 内:灰褐色(7.5YR7/1)	体部小片	7と同一個体	066-11
9	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀、無文部と異文部(?)帯 ・無文部はミガキ、内面ミガキ	やや粗	良	外:褐(5YR6/6) 内:灰褐色(1.5YR8/4)	体部小片		066-03
10	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀、無文部と異文部 ・無文部はミガキ、内面ミガキ	密	良	外:灰褐色(7.5YR5/2) 内:灰褐色(7.5YR5/2)	体部細片	外面に朱彩	066-05
11	縄文土器 深鉢	SK1		・沈線による帶狀 ・内外面粗いミガキ	やや密	良	外:灰褐色(7.5YR5/2) 内:灰褐色(7.5YR5/2)	口縁部細片		066-09
12	縄文土器 深鉢	SK1		・口縁部面取り、沈線文	粗	やや良	外:灰褐色(7.5YR8/4) 内:灰褐色(7.5YR7/4)	口縁部細片		066-07
13	縄文土器 深鉢	SK1		・口縁部段状に肥厚、沈線文に斜交文	やや粗	やや良	外:灰褐色(7.5YR5/2) 内:灰褐色(7.5YR6/4)	口縁部細片		066-10
14	縄文土器 深鉢	SK1		・口縁部L字状に肥厚、沈線文	密	良	外:褐(7.5YR7/6) 内:褐(7.5YR6/6)	口縁部細片		066-16
15	縄文土器 深鉢	SK1		・鉢底層、口縁部に泥層、表面に手打行進	やや粗	やや良	外:灰褐色(7.5YR5/3) 内:ESR9(7.5YR7/4)	口縁部細片		066-17
16	縄文土器 深鉢	SK1		・波状口縁、口縁部内面に隆脊 ・口縁部外面や下に横文(RL)	やや粗	良	外:灰褐色(7.5YR6/4) 内:灰褐色(7.5YR7/4)	口縁部小片		066-14
17	縄文土器 深鉢	SK1		・波状口縁、口縁部内面、底部に面もつ ・外面条痕、内面ナデ	やや粗	やや不良	外:灰褐色(7.5YR7/2) 内:灰褐色(7.5YR8/4)	口縁部小片		066-15
18	縄文土器 深鉢	SK1		・鉢底層、口縁部に肥厚、表面に泥層、壁	やや粗	良	外:灰褐色(7.5YR4/2) 内:灰褐色(7.5YR4/2)	口縁部小片		066-04
19	縄文土器 深鉢	SK1		・外面に撚糸文 ・内面ヨコナデ	やや密	良	外:褐褐色(7.5YR5/4) 内:灰褐色(7.5YR8/4)	体部小片		066-06
20	縄文土器 深鉢	SK1		・底部外面でいねいなナデ	やや粗	良	外:灰褐色(7.5YR7/2) 内:ESR9(7.5YR7/4)	底部1/5存		066-13
21	縄文土器 深鉢	SX2	底径10.8	・底部に直徑5.6cmの穿孔(變成後) ・内外面ナデ	やや密	やや良	外:灰褐色(7.5YR5/2) 内:灰褐色(7.5YR5/2)	底部完存	外面にスス付着	029-01
22	縄文土器 深鉢	SK50		・沈線文	やや粗	良	外:褐(5YR6/6) 内:褐(7.5YR6/6)	口縁部小片	磨耗	141-03
23	縄文土器 深鉢	SK50		・沈線文	やや粗	良	外:褐褐色(7.5YR6/2) 内:褐褐色(7.5YR6/2)	体部小片		141-04
24	縄文土器 深鉢	SK50		・沈線文	やや粗	不良	外:褐褐色(7.5YR6/2) 内:ESR9(7.5YR7/4)	体部細片		141-08
25	縄文土器 深鉢	SK50		・沈線文	やや密	やや不良	外:褐褐色(7.5YR5/4) 内:ESR9(7.5YR5/4)	体部細片		141-09

第10表 遺物観察表(1)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
26	広口壺	SX3 南辺溝	口径: 11.8 腹径: 11.4 高さ: 24.0	・外面部ハケメ ・内面部上半ナメ 下半ハケメ	やや粗	やや不良	浅黄 (10YR8/3)	・口部直径11.8cm ・多量な火照 ・底部欠損	此後は人為か? ・底部下半にスス付着	091-01
27	広口壺	SX3 南辺溝		・ミガキ調整が主 ・外面部端面のアゴ部はヨコナメ	やや密 0.5~1mm 大粒砂多い	良	褐 (5YR7/2) 肩部に墨 (5YR7/4)	・口部端のみ 5x4cmの小片	・土石混入を観察するなら 火照	089-03
28	広口壺	SX3 北辺溝	口径: (10.4)	・体部肩部に横線文 ・黒墨で捺める跡が2つ並んでいる	やや粗 火照跡	やや良	橙 (5YR7/6)	・重墨跡のみ 1/3ほど小片	風化激しい	090-03
29	広口壺	SX3 北辺溝	口径: (18.6)	・表面ミガキ ・外面部 横方向 ・内面部 横方向	黒(5YR1/1) 火照跡	良	外面: 橙 (5YR7/6) 内面: 浅黄 (10YR8/4)	・口部端のみX 5.5cmの小片		090-04
30	広口壺	SX3 北辺溝	口径: (10.5)	・体部外面ミガキ (横方向、斜め方向)在	中粗 (5YR7/6) 火照跡	良	有光 壁 (7.5YR7/6) 内面 (7.5YR7/2) 肩部 (5YR7/4)	・直徑1/2直角 ・多量に墨の墨 ・墨もまだ口部に残る ・底部は火照跡	底に横 灰 多量墨に墨が残る 黑斑あり	089-01
31	高杯	SX3 北辺溝	口径: 19.8 高: 15.5 腹基部径: 3.3 腹高: 10.2 脚高: 7.5	・口部墨ヨコナメ、内面部に墨を残す ・リバウンド痕、内面部に墨を残す ・墨と墨を重ねた所を残すようにある ・墨と墨を重ねた所を残すようにある ・脚部ヨコナメ、基部はナメ、墨とほつき ・透孔3ヶ所	やや密 火照跡	やや良	褐 (5YR7/4) 壁 (5YR7/2) 脚 (5YR7/4)	・脚部に墨の墨 墨もまだ口部に残る 墨は火照跡	墨に墨の墨 墨もまだ口部に残る 墨もまだ口部に残る	088-01
32	高杯	SX3 南辺溝	脚基部径: 3.8	・ソケット状の脚基部 ・脚部: リバウンド痕、内面部に墨を残す ・内面: オサエ及びナメ	やや粗 (5YR7/6) 火照跡	やや良	淡黄 (2.5YR8/3)	・脚部上半のみ	円孔の数は不明	090-02
33	高杯	SX3 ヨコナメ	脚基部径: 4.0	・脚部: リバウンド痕、内面部に墨を残す ・内面: ナメ。しばり痕。	やや密	やや不良	浅黄 (7.5YR8/4)	・脚部上半		090-01
34	受口壺	SX3 東辺溝	口径: 17?	・ヨコナメ	やや粗 (5YR7/6) 火照跡	良	外壁: 浅黄 (10YR4/2) 内壁: 淡黄 (10YR8/4)	口部部のみ 5x3cmの小片	・外面部にスス付着	090-05
35	手培形土器	SX3 北辺溝		・側面内側に火照跡のあつて墨を残す ・側面下部火照跡、火照跡	やや粗 火照跡	やや良	外壁: 淡黄 (10YR7/6) 内壁: 黄 (10YR8/2) 脚 (7.5YR7.1/1)	・直徑1/2直角 ・多量に墨の墨 ・墨は火照跡	墨に墨の墨 墨もまだ口部に残る 墨もまだ口部に残る	088-02
36	純文土器 深鉢	SX4		・口縁部内外面ミガキ ・端部は丸みをもつ	密	良		口縁部細片		022-01
37	弥生土器 壺	SX4		・横横横線と波状文	やや密	良		頸部細片		022-02
38	広口壺	Pit.64 蓋付	口径: (13.4) 高: (11.1) 腹径: (4.2)	・口部ヨコナメ ・横横横線と波状文、内面ナメ ・内面はハケメ後ナメか	密	やや良	淡黄 (10YR7/4) — 壁 (5YR7/5)	2 / 3 存	・底部穿孔 ・体部外面にスス付着	070-02
39	台付壺	Pit.65 脚付: (11.7)		・外面部ハケメ後、観察のミガキ ・内面ハケメ後ナメ ・尾足端部ヨコナメ、内面ナメ	密	良	淡黄 (2.5YR8/3)	1/2存、壁 基部は火照	・肩部一ヶ所に6.2 ×5.0cmの窓をもつ	049-08
40	土師器 壺	SH10	口径: (13.0) 高: (14.45)	・口縁部つまみ上げ ・墨ヨコナメ、墨脚部、墨脚部	やや密	良	浅黄 (7.5YR8/3)	口縁-体部/存	・体部外面にスス付着	001-03
41	土師器 壺	SH10	口径: (18.0) 高: (9.5)	・口縁部つまみ上げ ・墨ヨコナメ、墨脚部ナメ後、墨脚部	密	良	淡黄 (10YR7/3)	口縁-体部/存	・脚部墨跡と墨けたあり ・体部外面に剥離あり	001-02
42	土師器 壺	SH10	口径: (16.0)	・口縁部ヨコナメ、体部ハケメ	密	良	外: 淡黄 (10YR6/2) 内: 浅黄 (10YR8/3)	60x4.0cmの小片		002-01
43	土師器 壺	SH10	口径: (19.8)	・墨ヨコナメ、墨脚部、墨脚部、墨脚部	やや粗	良	浅黄 (10YR8/3)	口縁-体部/存	・製部内面にスス付着	001-04
44	土師器 壺	SH10	口径: (22.0)	・口縁部ヨコナメ、頸部ナメ	やや粗	良	浅黄 (10YR8/4)	口縁-墨/存		002-02
45	製塙土器	SH10		・外面部ヨコナメ、内面火照跡による墨跡	粗	やや良	橙 (5YR7/6)	65x5.5cmの小片	・全体的に掌激しい	002-05
46	製塙土器	SH10		・内・外面部ともナメか	粗	やや良	橙 (7.5YR7/6)	30x3.0cmの小片	・脚部墨跡と墨けたあり	002-06
47	土 鍤	SH10	長径: 3.4 幅径: 1.3	・指で成形後、穿孔・ナメ	密	良	灰 (10YR5/2)	ほぼ完形		001-05
48	純文土器 鉢	SH10		・波状口縁部頭部に筋突起 ・外面部沈継横走、内面ナメ	やや密	良	外: 淡黄 (5YR5/4) 内: 黄 (5YR4/2)	口縁部のみ 3.7x3.2cm片		002-04
49	純文土器 鉢	SH10		・横横に沈継横走、以下籠文 (RL)	やや密	やや良	淡黄 (10YR7/4)	口縁部のみ 3.7x3.1cm片		002-03
50	土 器 杯	SH12	口径: (12.4)	・口縁部は指ナメにより、やや凹凸感 ・口縁部ヨコナメ、体部ナメ	密	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	40x4.0cmの小片		016-03

第11表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
51	土師器 杯	S H12	口径: (3.1) 高: (3.1)	・口縁部ヨコナデ、体部-底部ナデ やや粗	やや良	灰白 (2.5Y8/2)	1 / 2 存	・口縁部にスス付着 ・粘土巻き上げ痕あり		016-01
52	土師器 杯	S H12	口径: (15.6)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ 密	良	橙 (5YR6/6)	55×2.0cmの片			016-05
53	土師器 壺	S H12	口径: (15.4)	・口縁部ヨコナデ やや密	良	灰白 (10YR8/2)	口縁部のみ/碎	・肩-腹部も3枚 (?) 有り		016-04
54	绳文土器 鉢?	S H12	口径: (9.8)	・口縁部-口縁内面はヨコナデ ・口縁外周は、横文 (L字) ・体部直面ヨコキ、内面は指すエラヒナデ 密	良	黒褐色 (2.5Y3/2)	口縁-体部/碎			016-06
55	土師器 杯	S H11	口径: (12.2) 高: (4.25)	・口縁部ヨコナデ、体部-斜削りのちナデ ・強いヨコナデにより口縁部はやや坂	密	良	褐灰 (10YR4/1)	40×1.3cmの片	・粘土巻き上げ痕あり	003-06
56	土師器 皿	S H11	口径: (15.3) 高: 2.05	・口縁部ヨコナデ、体部-底部ナデ 密	良	橙 (5YR7/6)	1 / 3 存			004-06
57	土師器 皿	S H11	口径: (14.8) 高: 2.55	同 上	密	やや不良	橙 (7.5YR8/6)	3 / 5 存		004-07
58	土師器 皿	S H11	口径: (16.0) 高: (2.95)	・口縁部ヨコナデ、体部-底部へ削り後ナデ ・強いヨコナデにより口縁部はやや坂	密	やや不良	浅黄橙 (10YR8/4)	1 / 6 存	・底部外間にスス付着	003-05
59	土師器 皿	S H11	口径: (16.0) 高: (2.9)	・体部から口縁部は、出張面に立ち上がり ・口縁部ヨコナデ、体部-底部へ削り後ナデ 密	良	橙 (7.5YR7/6)	45×1.5cmの片	・底部に口縫 (?) あり		003-04
60	土師器 壺	S H11	口径: (13.0)	・口縁部ヨコナデ、体部はハケメ やや粗	やや良	灰白 (7.5YR7/3)	口縁-体部/碎	・腹部前面にスス付着		003-03
61	土師器 壺	S H11	口径: (18.0)	同 上	やや粗	やや不良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁-体部/碎	・体部前面にスス付着	003-01
62	土師器 壺	S H11	口径: (27.9)	・口縁部ヨコナデ、斜削りナメ、斜削りへ滑走ナメ やや粗	良	褐灰 (10YR4/1)	口縁-体部/碎	・体部前面にスス付着か		003-02
63	土師器 受口縁壺	S H11	口径: (11.4)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部ナデ やや粗	良	浅黄 (10YR6/3)	40×2.0cmの片			004-02
64	壺	S H11	口径: (11.0)	・口縁部ヨコナデ、口縁部後ウム、内面ナデ やや密	やや良	浅黄 (2.5Y7/3)	口縁部のみ/碎			004-05
65	壺	S H11	口径: (16.0)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部ヘラミガキ 密	良	外: 浅黄 (2.5Y7/3) 内: にぼい黄橙	40×1.3cmの片	・強度では口縁部に厚さ (側面) が1ヶ所あり		004-04
66	壺	S H11	口径: (16.6)	・口縁部-口縁部端部ヨコナデ、外側のカメ ・体部ハケメ やや密	良	口縁部 (10YR7/2)	口縁-体部/碎			004-01
67	土師器 杯	S X13	口径: (10.4) 高: 3.8	・体部から口縁部よ、ヨコナデにより外反 ・口縁部ヨコナデ、体部-底部ナデ やや粗	良	淡黄 (2.5Y8/3)	1 / 4 存	・底部前面に凹凸している		015-02
68	土師器 杯	S X13	口径: 11.8 高: 4.1	・口縁部ヨコナデ、体部-底部ナデ やや密	良	外: 淡黄 (10YR8/3) 内: 淡黄 (2.5Y8/3)	完 形	・外表面は全体にスス付着 ・底部前面へ斜刀破れ		015-01
69	土師器 壺	S X13	口径: (14.8)	・口縁部の最左端は、やや込み上むだれた感好 ・口縁部ヨコナデ、体部ナデ 密	良	灰白 (10YR8/2)	口縁-体部/碎	・腹部前面に工具痕あり		015-03
70	土師器 杯	S D 7	口径: (13.0) 高: (3.9)	・口縁カタ、輪郭付付は、斜削り、斜削 密	良	浅黄 (10YR8/4) 明赤系 (5YR5/6)	1 / 2 存			133-01
71	土師器 壺	S D 7	口径: (13.6)	・口縁部ヨコナデ、頭部-体部ナデ 密	良	外: 浅黄 (10YR6/2) 内: 灰白 (2.5Y8/2)	口縁-体部/碎	・体部前面にスス付着		133-02
72	土師器 壺	S D 7	口径: (16.4)	・口縁部ヨコナデ、内面斜削り、頭部ナメ 密	やや良	外: にぼい黄 (10YR7/4) 内: にぼい黄 (10YR5/3)	口縁-体部/碎	・全体的に摩滅		133-05
73	土師器 壺	S D 7	口径: (23.6)	・口縁部ヨコナデ、頭部斜削り、内面ウム後ナメ やや粗	やや不良	外: 白 (10YR8/2)	口縁-頭部/碎	・全体的に摩滅して頭部後		133-04
74	土師器 壺	S D 7	口径: (22.4)	・口縁部はつまみ上げられ、外反した感好 ・口縁部ヨコナデ、頭部ナメ、斜削り やや粗	やや不良	外: 青-淡青 (10YR7/1) 内: 淡黄 (2.5Y8/2)	口縁-体部/碎	・全体的に摩滅して頭部 ・頭部へ斜刀破れ (?) あり		133-03
75	土師器 壺	S D 7	口径: (29.6)	・口縁部ヨコナデ、口縁-頭部ナデ やや密	やや良	外: 青 (5YR7/6) 内: にぼい黄 (10YR1/4)	口縁-頭部/碎	・全体的に摩滅して頭部 ・頭部へ斜刀破れ (?) あり		134-01

第12表 遺物観察表(3)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
76	土師器 瓶	SD 7	口径: (11.4)	・口縁端部ヨコナデ、体部ハケメ	やや密	やや良	灰白 (5Y7-/1) 灰 (5Y6-/1)	口輪・体部/碎	・体部外側にスス付着 ・体部外側に指圧痕あり	134-02
77	須恵器 杯	SD 7	口径: (7.0)	・腹部中央に、一条の沈窓が入る ・脚部ヨコナデ、脚部端部ヨコナデ	やや粗	良	灰白 (5Y7-/1) 灰 (5Y6-/1)	籌筋のみ定形 足・脚部端部/碎		133-06
78	土師器 甕	SD 8	口径: (33.2)	・体部から口縁部は大きく外反 ・縫合跡、脚部端部ヨコナデ	やや密	やや良	洗鍊 (7.5YR8/6)	口輪・体部/碎		010-03
79	土師器 甕	SD 8	口径: (31.3)	・口縁部は、垂直につまり上げられた模様 ・口縁部ヨコナデ、脚部端部ヨコナデ ・体部外表面ハケメ、内面ナデ	やや密	やや良	浅黄 (10YR8/4)	口輪・体部/碎	・口輪部内面にスス付着	010-01
80	土師器 甕	SD 8	口径: (16.4)	・口縁端部ヨコナデ、口縁・体部ハケメ	粗	やや良	外: 灰 (7.5YR7/6) 内: にあき (HYR7/1)	口輪・体部/碎	・外表面は摩滅、底面 ・口縁部内面の 剥離変色している	010-02
81	須恵器 杯	SD 8	口径: (10.6)	・口縁部ヨコナデ	密	良	灰 (5Y6-/1)	口輪のみ/碎		010-06
82	縄文土器 深鉢	SD 8		・口縁部内面ミガキ	やや粗	やや良	外: にあき (HYR7/1) 内: 亂青 (HYR6/2)	口縁部のみ/0 X5.0cmの小片	・現状では外面上 沈窓が三条に入る	011-02
83	縄文土器 深鉢	SD 8		・口縁部内面ナデ	やや粗	やや良	外: 亂青 (HYR5/1) 内: 深 (7.5YR7/6)	口縁部のみ/0 X5.5cmの小片	・現状では外面上 沈窓文が二条に入る	011-04
84	縄文土器 深鉢	SD 8		・口縁部内・外表面ともミガキ	やや密	底	外: 浅黄 (10YR5/2) 内: にあき (HYR7/2)	口縁部のみ/0 X2.5cmの小片		011-01
85	縄文土器 深鉢	SD 8		・口縁部内・外表面ともミガキ	やや密	良	浅黄 (10YR8/3)	口縁部のみ/0 X2.5cmの小片	・現状では外面上 沈窓文が一束に入る	011-03
86	土師器 台付甕	SD 8		・底部内・外表面ともハケメ	やや粗	やや良	外: にあき (7.5YR7/4) 内: オリーブ (5Y3/1)	底部のみ/0存		010-05
87	土師器 高杯	SD 8	口径: (11.8)	・脚部・縫合跡、脚部端部ヨコナデ	やや粗	やや良	浅黄 (2.5Y8-/4)	脚部・縫合跡/存	・浅灰では脚部に 草芽が一束あり ・内部には2箇所不規則	010-04
88	土師器 杯	Pit 66	口径: 12.55 高: 4.1	・口縁端部ヨコナデにより外反 ・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	やや良	灰白 (10YR8/1) 洗鍊 (10YR6/2)	ほぼ完形	・体部外側に巻き上 げ痕がわざりに残る ・内・外表面ともスス付着	017-01
89	土師器 杯	Pit 66	口径: 12.2 高: 4.2	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	やや良	灰 (7.5YR8/2) 洗鍊 (7.5YR8/3)	口縁部のみ欠	・内・外表面ともスス付着	017-02
90	土師器 杯	Pit 66	口径: 13.0 高: 2.6	同 上	密	良	橙 (5YR7/6) 明青 (5YR5/6)	口縁・体部1/ /6のみ欠		017-03
91	土師器 杯	Pit 66	口径: 20.1	・口縁部～体部ヨコナデ	密	不良	にぶい青 (HYR7/1)	口輪・縫合跡/存	・全体的に摩滅も り	017-04
92	土師器 杯	Pit 67	口径: 13.0 高: 3.3	・口縁部～体部ヨコナデ、底部乱ナデ	やや密	やや不良	灰白 (2.5Y8/2)	はぼ完形	・口縁部に歪みあり	030-02
93	土師器 甕	Pit 67	口径: 13.8 高: 18.7	・口縁部ナデ、縫合跡オサエのまま ・体部内面ナデ、底部内面ナデ ・底部は壊すサエ、底ナデ	やや密	やや不良	外: にぶい青 (HYR7/1) 内: 亂青 (7.5YR8/3)	完形	・縫合跡に付けて火候	030-01
94	土師器 碗	SD 14	底径: 4.8	・体部外面ヨコナデ、内面ナデ ・底部へ割り下ナデ、内面ナデ	やや密	やや良	橙 (5YR7/6) 乳白色	底部完形 乳白色/存	・底部外側に本革度あり	025-07
95	土師器 碗	SD 14	口径: (13.0) 高: (4.75)	・口縁部ヨコナデ、体部・底部ヨコナデ	密	良	橙 (2.5YR6/8)	1 / 3 存		028-06
96	土師器 皿	SD 14	口径: (14.6) 高: (2.25)	・口縁部ヨコナデ、体部・底部ヨコナデ	やや密	やや不良	灰白 (10YR8/2)	1 / 6 存		028-04
97	土師器 甕	SD 14	口径: (21.5)	・体部から口縁部が「く」字形に基面して高く ・口縁部の最も高き部は、垂直につまり上げ られた柱状、基面部内面はヨコナデにより複数 ・口縁部ヨコナデ、口縁部ナデ、内面ナデ	密	やや良	浅黄 (10YR8/3)	口縁部/10存		028-02
98	製塙器	SD 14		・口縁部指オサエ後ナデ	やや密	やや良	にぶい青 (5YR7/4) X4.5cmの小片	口縁部のみ/0 X4.5cmの小片	・外表面の一部は白く変色 ・断面に粘土層合板	025-06
99	製塙器	SD 14	口径: (17.2) 高: (5.4)	・口縁部～体部指オサエ後ナデ	やや密	やや良	外: 青 (5YR7/4) 内: 深 (7.5YR7/6)	口縁・体部のみ	・口縁部に粘土層合板	025-05
100	縄文土器 深鉢	SD 14		・外面に幾何文・連続C字状瓜形文	やや粗	やや良	外: にぶい青 (5YR5/4) 内: 深 (7.5YR6/6)	口縁部のみ/0 X3.5cmの小片		024-09

第13表 遺物観察表(4)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
101	縄文土器 深鉢	SD14		・縁带上に連続C字状爪形文 縁帯の両端に沈線文	粗	やや良	外: 黒灰 (2.5YR7/2) 内: 淡黄 (10YR8/4)	口縁部のみ5.2 X5.0cmの小片		024-11
102	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線、刺み	やや密	やや良	にい黄 (1.5YR7/4)	口縁部のみ2.5 X2.0cmの小片		024-14
103	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (L R)	やや密	やや良	にい黄 (1.5YR7/4)	口縁部のみ4.5 X3.8cmの小片		026-06
104	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (L R)	やや密	やや良	外: 黒灰 (2.5Y5/1) 内: 淡黄 (10YR8/4)	口縁部・全体5.5 X6.1cmの小片		026-03
105	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に縄文 (L R) 円形竹管文	やや粗	やや良	灰黄褐 (10YR5/2)	口縁部のみ2.2 X2.5cmの小片		024-08
106	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや密	やや良	灰黄褐 (10YR4/2)	口縁部のみ4.0 X2.0cmの小片		024-05
107	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (L R)	やや密	やや良	淡黄褐 (10YR8/3)	口縁部のみ6.5 X5.0cmの小片		026-04
108	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (L R)	やや密	やや不良	灰白 (2.5Y8/2)	口縁部・全体10.5 X10.0cmの小片		026-01
109	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (R L)	密	良	灰灰 (2.5Y5/1)	口縁部のみ6.8 X6.5cmの小片		026-02
110	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (L R ?)	粗	やや良	灰白 (10YR8/3)	口縁部のみ3.0 X3.0cmの小片		027-05
111	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (L R ?)	やや密	良	外: 黑灰 (2.5Y6/1) 内: 淡黄 (10YR8/1)	口縁部のみ2.7cmの小片		024-15
112	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (L R) ・外面にスス付着か	密	良	外: 黑灰 (10YR5/1) 内: にい黄 (10YR7/4)	口縁部のみ2.5 X3.0cmの小片		027-03
113	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (L R) ・外面にスス付着か	やや粗	良	にい黄 (1.5YR7/4) 内: 灰黄 (1.5YR5/2)	口縁部のみ2.0 X2.0cmの小片		027-11
114	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (L R)	やや密	良	外: 黑灰 (2.5Y7/3) 内: にい黄 (10YR7/3)	口縁部のみ3.0 X3.0cmの小片		024-12
115	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (L R)	やや密	良	淡黄 (2.5Y8/3)	口縁部のみ3.0 X3.0cmの小片		027-04
116	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや粗	良	にい黄 (10YR7/3)	口縁部のみ2.5 X2.5cmの小片		027-10
117	縄文土器 深鉢	SD14		・現状では穿孔が一ヵ所あり ・外面に沈線文、縄文 (L R)	やや密	良	にい黄 (1.5YR6/3)	口縁部のみ5.0 X3.0cmの小片		026-05
118	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文 (L R) ・口縁端部端部外面に短沈線	密	良	灰黄褐 (10YR5/2)	口縁部のみ4.0 X3.0cmの小片		026-10
119	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部に沈線文、キザミ ・口縁内部に沈線文	密	良	外: 灰 (5Y4/1) 内: 淡黄 (2.5Y7/3)	口縁部のみ5.0 X3.5cmの小片		024-10
120	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや粗	良	灰黄褐 (10YR6/2)	口縁部のみ3.3 X3.5cmの小片		026-16
121	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁部外面に沈線文? ・口縁端部強張、ややくぼむ	やや粗	やや良	にい黄 (10YR7/3)	口縁部のみ4.2 X2.0cmの小片		026-17
122	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや密	良	にい黄 (10YR7/4-5/3)	口縁部のみ2.5 X2.0cmの小片		026-14
123	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや粗	やや良	にい黄 (10YR7/4)	口縁部のみ4.4 X2.5cmの小片		026-13
124	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部にキザミ、口縁端部に沈線文	やや密	やや良	にい黄 (10YR5/4)	口縁部のみ3.8 X3.0cmの小片		026-11
125	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部にキザミ	密	良	にい黄 (10YR7/4)	口縁部のみ5.5 X2.9cmの小片		026-07

第14表 遺物観察表(5)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号	
126	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部に刺突文	やや密	やや良	外: 稲 (7.5YR7/6) 内: み透 (7.5YR7/4)	口縁部のみ4.4cm×3.0cmの小片		026-09	
127	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (R L)	やや粗	やや良	にみ透 (10YR7/3)	3.8cm×3.0cmの小片		027-06	
128	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (R L)	やや密	良	にみ透 (10YR7/3)	3.5×2.3cmの小片		027-08	
129	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に柔線文	やや密	良	外: 鮎天 (10YR4/1) 内: み透 (10YR5/1)	3.0×4.0cmの小片		027-02	
130	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に柔線文	密	良	にみ透 (7.5YR6/4)	3.8×3.8cmの小片		027-01	
131	縄文土器 鉢	SD14		・体部外面に縄文 (L R)	やや密	やや良	外: 鮎天 (2.5Y6/1) 内: み透 (10YR5/3)	15.2×7.6cm 8.2×7.4cm		027-12	
132	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文 (L R) ・全般的にやや摩滅	密	やや不良	稻 (7.5YR7/6)	6.5×4.5cmの小片		027-07	
133	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に柳状工具による柔線	やや密	やや良	外: 鮎天 (10YR5/1) 内: み透 (10YR1/1)	13.5×6.5cm X2.0cmの小片		026-19	
134	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁部外面ミガキ ・無文	やや粗	やや良	外: 鮎天 (2.5Y5/1) 内: 深黄 (2.5Y6/2)	口縁部のみ4.2cm×1.8cmの小片		026-18	
135	縄文土器 深鉢	SD14	同上	やや密	良	灰黄褐 (10YR5/2)		口縁部のみ3.6cm×2.4cmの小片		024-02	
136	縄文土器 深鉢	SD14	同上	やや粗	やや不良	にみ透 (7.5YR7/4)		口縁部のみ4.0cm×2.5cmの小片		026-15	
137	縄文土器 深鉢	SD14	同上	・外面にスヌ付着か ・口縁部外面ミガキ ・無文	やや密	良	外: 朱褐 (10YB5/1) 内: み透 (10YR7/4)	口縁部のみ3.0cm×2.9cmの小片		024-03	
138	縄文土器 深鉢	SD14	同上	やや密	やや良	にみ透 (7.5YR7/4)		口縁・体部5.5cm×1.0cmの小片		026-12	
139	縄文土器 深鉢	SD14	同上	やや密	良	にみ透 (10YR7/3)		口縁部のみ2.8cm×3.2cmの小片		024-01	
140	縄文土器 深鉢	SD14	同上	密	良	にみ透 (10YR7/1)		口縁部のみ3.8cm×3.5cmの小片		026-08	
141	縄文土器 深鉢	SD14	同上	やや密	やや良	外: み透 (7.5YR7/4) 内: 稲 (7.5YR7/6)		口縁部のみ5.0cm×4.0cmの小片		024-06	
142	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に刺突文? ・全般的に摩滅激しい	やや粗	やや不良	明透褐 (10YR7/6)		口縁部のみ5.0cm×4.0cmの小片		024-07
143	縄文土器 深鉢	SD14			やや粗	やや良	稻 (7.5YR7/6)		口縁部のみ3.0cm×2.9cmの小片		024-04
144	縄文土器 深鉢	底径: (6.8)			やや粗	やや良	外: み透 (10YR7/3) 内: 深黄 (2.5Y6/2)	底部のみ1.5cm		028-10	
145	弥生土器 高杯	SD14	D径: (11.0)	・口縁・体部内・外面ともミガキ	密	良	外: 稲 (7.5YR7/6) 内: み透 (10YB5/4)	口縫・体部ノズル 底部のみ1.5cm	・体部内面の一部黒変	028-06	
146	土器 台付壺	SD14	脚径: (7.0)	・底部外面ヨコナデ、内面ハケメ ・脚部外面ミガキ、内面ハケメ ・脚部端部ヨコナデ	密	良	外: み透 (10YR7/3) 内: 鮎天 (10YR4/1)	脚部・脚部ノズル		028-09	
147	弥生土器 壺	SD14	底径: (3.0)	・底部外面ミガキ、内面ナデ	密	良	外: 透青 (10YR8/1) 内: 深黄 (2.5Y6/3)	底部のみ1.2cm		028-07	
148	弥生土器 壺	SD14	底径: (3.6)	・底部内・外面ともナデ	やや密	良	外: み透 (10YR7/3) 内: 深黄 (2.5Y6/1)	底部のみ完形		028-06	
149	弥生土器 壺	SD14	底径: (5.3)	・体部外面タキ、内面ナデ ・脚部側面斜め下・内・外側ともナデ	やや密	良	浅透青 (10YR8/3) 黄灰 (2.5Y6/1)	底部 完形 底部の一帯は黒化している		027-13	
150	弥生土器 壺	SD14	底径: (4.5)	・体部内・外面ともミガキ ・底部外面ナデ、内面ミガキ	密	良	外: 稲 (5YR7/6) 内: み透 (10YR7/1)	底部 完形 底部ノズル		027-14	

第15表 遺物観察表(6)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
151	土師器 甕?	S D14	口径: (10.8)	・口縁部ヨコナデ、底部内凹ア ・口縁端部ヨコナデ、底部内凹ア	密	良	外:灰白 (10YR8/1) 内: (2.5Y8/2)	口縁-瓶頸/存	・瓶頸内面に工具痕か ・底面	025-02 028-01
152	土師器 杯	S D15	口径: (11.6) 高: 3.15	・口縁端部ヨコナデ、口縁部～底部ナデ ・口縁端部内面に、沈縫が一束入る	密	やや良	淡黄褐 (10YR8/3)	2 / 5 存		006-06
153	土師器 杯	S D15	口径: (13.9)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部～底部ナデ	密	やや良	外:淡褐 (5YR8/4) 内:灰白 (10YR8/2)	口縁-瓶頸/存		006-07
154	土師器 杯	S D15	口径: (9.9)	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ ・口縁端部はヨコナデにより外反	密	やや良	淡黄 (2.5Y8/3)	1 / 6 存	・底部底面に付着あり	006-08
155	黒色土器 碗	S D15	口径: (13.4)	・口縁端部ヨコナデ、底部内凹ア ・口縁端部はヨコナデにより外反	密	良	外:灰白 (10YR7/4) 内:灰 (N4/0)	口縁-瓶頸/存	・内面は部分的にミガキ	005-06
156	土師器 甕	S D15	口径: (15.5)	・口縁端部は折り返しヨコナデ ・胎部外面ハケメ、内面ヨコナデ	やや粗	やや良	灰青 (2.5Y7/2)	口縁-瓶頸/存		005-02
157	土師器 甕	S D15	口径: (15.2)	・口縁端部は折り返しヨコナデ ・胎部外面ヨコナデ、内面ハケメ	やや粗	良	灰白 (2.5Y8/2)	口縁-瓶頸/存	・瓶頸外面にスズ付着	005-01
158	土師器 甕	S D15	口径: (15.4)	・口縁端部は折り返しヨコナデ ・胎部外面ハケメ、内面一方向のナデ	粗	やや良	外:暗灰 (7.5YR3/1) 内:淡青 (2.5Y8/3)	口縁-瓶頸/存	・口縁外面の全周にスズ付着 ・口縁外側に直すナデ	005-04
159	土師器 甕	S D15	口径: (27.4)	・口縁部折り返しヨコナデ ・口縁部外面ハケメ、内面ヨコナデ	やや密	やや良	外:灰灰 (10YR4/1) 内:浅青 (10YR8/1)	口縁-瓶頸/存	・口縁外側の全周にスズ付着	005-03
160	灰釉陶器 椀	S D15	口径: (13.8)	・口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	灰白5Y (7/1)	口縁-瓶頸/存	輪のつけがけ	005-05
161	繩文土器 深鉢	S D15		・口縁部外面に半截竹管文(C字)	やや粗	良	にぶい青碧 (10YR8/1) X3.0cmの小片		口縁部のみ3.0 X3.0cmの小片	007-05
162	繩文土器 深鉢	S D15		・口縁部外面に沈線文、条線	やや粗	やや良	にぶい青碧 (10YR7/1)		口縁部のみ4.0 X3.5cmの小片	007-01
163	繩文土器 深鉢	S D15		・口縁部外面に沈線文、条線	密	良	にぶい青碧 (10YR7/4)		口縁部のみ4.0 X3.1cmの小片	007-03
164	繩文土器 深鉢	S D15		・口縁部外面に繩文	やや粗	やや不良	橙 (7.5YR6/6) X2.8cmの小片		口縁部のみ3.0 X2.8cmの小片	007-11
165	繩文土器 深鉢	S D15		・口縁部外面に条線	やや粗	やや不良	にぶい青碧 (10YR7/1)		口縁部のみ4.5 X2.2cmの小片	007-04
166	繩文土器 深鉢	S D15		・口縁部外面に条線	やや粗	やや良	外:灰青 (2.5Y6/2) 内:にぶい青碧 (10YR7/1)		口縁部のみ3.3 X4.0cmの小片	007-02
167	繩文土器 深鉢	S D15		・外面に沈線文・条線	やや粗	やや	灰白 (10YR8/2)	9.8x3.1cmの片		007-09
168	繩文土器 深鉢	S D15		・外面に沈線文	密	やや良	淡黄 (2.5Y8/3)		底盤のみ4.8 X2.0cmの小片	007-12
169	繩文土器 鉢	S D15		・外面に条線	粗	不良	外:灰青 (10YR8/1) 内:にぶい青碧 (10YR5/1)	7.8x3.0cmの片		007-10
170	繩文土器 深鉢	S D15		・外面に櫛状工具による条線	粗	やや不良	にぶい青碧 (10YR6/3)	3.8x3.9cmの片		007-06
171	繩文土器 鉢	S D15		・外面に櫛状工具による条線	やや粗	やや良	橙 (7.5YR6/6)	4.7x4.0cmの片		007-07
172	繩文土器 深鉢	S D15		・外面に条線	やや粗	やや良	灰青碧 (10YR5/2)	4.0x6.9cmの片		007-08
173	弥生土器 高杯	S D15	口径: (27.0)	・口縁部ヨコナデ、口縁内・外面ミガキ	密	良	外:暗灰 (N3/0) 内:青碧 (10YR8/1)	口縁-瓶頸/10cm		005-07
174	弥生土器 高杯	S D15	口径: (14.6)	・口縁部～体部ミガキ後ヨコナデ	密	良	浅黄 (2.5Y8/3)	口縁-瓶頸/存	・底部内面に工具痕 ・体部外側の一帯黒斑	006-01
175	弥生土器 高杯	S D15	口径: (19.2)	・脚部斜傾角約2度、外側脚部斜傾角 ・脚部底面ハケメ、脚部内面ヨコナデ	やや粗	良	浅黄 (2.5Y8/3)	脚部のみ1/5存	・現在では掌孔が一ヶ所	006-02

第16表 遺物観察表(7)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
176	弥生土器 壺	S D15		・腹部表面彫文、神文、側面横溝	密	やや不良	浅黄(7.5YR8/4)	黒・褐色/片	・やや磨滅進む	006-05
177	弥生土器 台付壺	S D15	口径: (3.5)	・底部ミガキ、脚部ナゲ	密	良	淡黄(2.5YR8/3)	黒・褐色/碎	・脚部外側に指ササ工痕	006-03
178	弥生土器 小型鉢	S D15		・口縁部外側波状文、体部ミガキ ・体部外側に逆U字形把手を2ヶ所はりつけ	密	良	浅黄(10YR8/3)	口縁・体部/4.0 X4.3cmの小片		006-04
179	弥生土器 直口壺	S D15	口径: (12.5)	・口縁部外側波状文・内面ミガキ ・腹部外側波状文・内面ミガキ ・体部外側ミガキ、内面ナゲ	やや粗	良	浅黄(7.5YR7/4)	黒・褐色/口縁1/4存	・外蓋の一端は黒変する	006-09
180	土師器 杯	S B20	口径: (14.1) 高: 2.7	・口縁部・側面コナデ、底部一方ナゲ ・口縁部・側面ヨコナデにより、少し膨らむ	密	やや不良	外: 浅黄(2.5YR8/4) 内: 淡(5YR7/6)	1 / 2 存		001-01
181	土師器 杯	S B20	口径: (15.2) 高: 2.8	・口縁部・体部ヨコナデ、底部ナデ ・口縁部はヨコナデにより外反	密	やや不良	浅黄(7.5YR8/6)	1 / 6 存		087-01
182	口クロ 土師器皿	S B20	口径: (15.0) 高: 2.5	・口縁ヨコナデ、側面クロナデ、底部ナデ	やや密	やや良	橙(5YR7/8)	1 / 6 存		087-02
183	土師器 壺	S B20	口径: (18.4)	・口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	やや密	やや不良	橙(2.5YR7/6)	口縁・側面/10存		087-04
184	土師器 壺	S B20	口径: (18.8)	・口縁・側面斜ヨコナデ、底部斜ウツナゲ ・側面斜ヨサエ後ウツメ、内面ハケメ	密	良	橙(5YR6/8)	口縁・側面/10存		041-02
185	土師器 碗	S B21	口径: (16.0)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ ・口縁部面取りか	やや粗	やや不良	外: 黄(2.5YR4/1) 内: 浅黄(1.5YR8/3)	口縁・体部/3存	・外蓋は変化・スス付着	035-08
186	土師器 杯	S B21	口径: (11.4)	・口縁部・体部ヨコナデ、底部ナデ ・口縁部の内面はヨコナデにより、膨らむ	やや粗	やや不良	浅黄(10YR8/3)	1 / 3 存		036-04
187	土師器 皿	S B21	口径: (14.6)	・口縁ヨコナデ、側面斜ヨコナデ、底部ナデ	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	1 / 3 存	・底部外面に工具痕か	035-01
188	土師器 小皿	S B21	口径: (9.0)	・口縁ヨコナデ、口縁部・体部ナデ	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	口縁・側面/6存		035-06
189	口クロ 土師器皿	S B21	底径: 6.1	・底部外面斜糸切り、内面クロナデ	やや粗	良	浅黄(7.5YR8/3)	底唇のみ完形		035-07
190	土師器 壺	S B21	口径: (18.2)	・口縁部ヨコナデ/水戻しヨコナデ ・腹部外面ヨコナデ、内面ナデ	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	口縁・側面/6存	・外面に広くスス付着	035-02
191	土師器 壺	S B21	口径: (19.6)	・口縁・側面ヨコナデ、側面斜ナ・内面ナメ	粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	口縁・側面/4存	・口縁外周にスス付着	036-01
192	山茶碗	S B21	口径: (17.4) 高さ: (7.5) 高: (5.9)	・口縁・体部クロナデ、底部外面斜糸切り後高台はりつけ、内面クロナデ ・口縁部は外反	やや密	良	灰白(5Y7/1)	1 / 3 存	・前面に粉飾有	033-02
193	山茶碗	S B21	口径: (16.3) 高さ: (7.8) 高: (5.2)	同上	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	1 / 3 存	・口縁・側面・底部は研磨か ・底部内面は研磨か ・底部内面スス付着	033-01
194	口クロ 土師器皿	S B21	口径: (6.9)	・側面斜ヨコナデ、側面斜ヨコナデ/内面ナメ	密	やや不良	灰白(7.5YR8/1)	底部のみ完形	・底部内面は黒変 ・体部内面スス付着	033-03
195	土師器 小皿	S B23	口径: (9.7) 高: 1.4	・口縁部ヨコナデ、外側面ヨサエ	やや粗	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	1 / 2 存		038-04
196	台付壺	S B24	口径: (5.1)	・底部外面タタキ、内面ハケメ ・底部外面ヨサエ後ナデ、内面ケズリ	やや粗	やや良	外: 浅黄(2.5Y8/3) 内: 黄白(10YR7/1)	底唇のみ完形		038-02
197	土師器 壺	S B28	口径: (21.2)	・口縁ヨコナデ、側面斜ウツメ、内面ナメ	やや密	良	外: 黄(2.5YR7/4) 内: 黄白(10YR5/2)	口縁・側面/6存	・側面底部もスス付着	036-07
198	山茶碗	S B33	口径: (15.4) 高さ: (6.9) 高: (5.1)	・口縁・底部斜ヨコナデ、側面斜ナ・底部斜ナ ・口縁部は外反	やや粗	良	灰白(2.5Y8/1)	1 / 6 存	・高台にモミガラ痕	036-08
199	口クロ 土師器皿	S Z17	口径: (15.3) 高さ: (7.2) 高: (5.2)	・全周ヨコナデ。但、内面はその後ナデか ・底部外面斜糸切り後、高台はりつけ	粗	不良	灰白(2.5Y8/2)	口縁部/2欠	・口縁部の一部は黒いヨコナデにより多少み気味	008-01
200	口クロ 土師器皿	S Z17	口径: (9.1) 高: (1.5)	・ヨクロナデ、底部外面斜糸切り後ナデ	やや粗	やや良	浅黄(7.5YR8/6)	3 / 4 存		008-05

第17表 遺物観察表(8)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
201	土師器 鍋	S Z17	口径: (30.6) 高台径: (8.2) 高: (4.7)	・口縁部折り返しヨコナデ ・部外面ナデ、内面ハケメ。	やや粗	やや良	灰白 (10YR7/1)	口縁~体部 1 / 4 存	頭部内・外面ともスス付着	009-01
202	山茶碗	S Z17	口径: (16.0) 高台径: (8.2) 高: (4.7)	・ロクロナデ、底部外面回転糸 切り後ナデ、高台はりつけ	やや粗	良	灰白 (5Y7/1)	1 / 3 存	口縁部内面に自然釉付着	008-03
203	山茶碗	S Z17	口径: (16.0) 高台径: (8.4) 高: (5.2)	同 上	密	良	灰白 (5Y8/1)	1 / 3 存	口縁部~体部内面に自然釉付着	008-02
204	小碗	S Z17	口径: (10.0) 高台径: (4.3) 高: (3.0)	同 上	密	良	外: 灰白 (2.5Y8/2) 内: 浅黄 (5Y7/3)	3 / 4 存	内面全体に自然釉付着	008-04
205	陶器 甕	S Z17		・体部内・外面ともナデ	密	良	灰白 (7.5YR6/2)	体部片	体部外面に広く自然釉付着	008-06
206	陶器 甕	S Z17		・体部内・外面ともナデ、但、 外面の一部タキ痕	密	良	灰白 (7.5YR6/2)	体部片 21×12cm大	常滑産	009-02
207	土師器 鍋	Pit 68	口径: 18.0 高: 10.9	・口縁部折り返しナデ ・体部~底部指オサエ後ナデ	やや密	良	外: 黒 (10YR2/1) 内: 甕台 (10YR8/1)	口縁部1/4欠	外表面全体にスス付着	031-02
208	土師器 皿	S D40	口径: (10.4) 高: (1.6)	・口縁部~底部内面ヨコナデ、外蓋ナデ	やや密	やや不良	浅黄 (10YR8/3)	1 / 6 存	全体的に磨滅進む	023-01
209	山皿	S D40	口径: 8.2 高: 2.2	・ロクロナデ、但、口縁部ヨコナデ ・底部外面回転糸切り	密	良	外: 灰白 (2.5Y8/1) 内: 浅黄 (5Y7/3)	口縁部1/6欠	内面全体に自然釉 の固まり付着	023-02
210	山茶碗	S D40	口径: (11.4) 高台径: (8.1) 高: (5.0)	・ロクロナデ ・底部外面回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	灰白 (5Y7/2)	1 / 3 存	高台に歪みあり	023-03
211	平瓦片	S D40		・凸面はヘタケズリ、凹面は布目痕	密	良	灰白 (5Y8/1)	12.0×11.0 cmの破片		023-06
212	弥生土器 高杯	S D40	口径: (12.3)	・口縁部ヨコナデ、口縁部~体部ミガキ	密	良	にみか (7.5YR7/4)	口縁~体部 1 / 6 存	体部外面の一部 黒変する	023-05
213	土師器 小皿	S D41	口径: (7.8) 高: 1.3	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外輪指サエのまま	やや粗	良	外: 朝霞灰 (5Y7/2) 内: にまつた青緑 (10YR7/3)	1 / 4 存		116-08
214	土師器 皿	S D41	口径: (13.6) 高: 2.5	同 上	やや粗	良	浅黄緑 (7.5YR8/3)	1 / 4 存		116-07
215	土師器 皿	S D41	口径: (16.8) 高: 2.9	同 上	やや密	良	浅黄緑 (10YR8/3)	1 / 4 存		116-06
216	ロクロ土師器 皿	S D41	底径: 5.1	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや密	良	浅黄緑 (10YR8/3)	底部のみ完形		116-04
217	ロクロ土師器 碗	S D41	高台径: 7.1	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ	やや粗	やや良	灰白 (10YR8/2)	底部のみ完形	内・外間に磨 滅激しい	116-03
218	ロクロ土師器 碗	S D41	高台径: 6.1	同 上	密	やや良	浅黄 (5YR8/3) ? / 浅黄 (2.5Y8/3)	底部のみ完形	内面は黒変している	116-01
219	土師器 鍋	S D41	口径: (19.2)	・口縁部折り返し、ヨコナデ、内 面ハケメ調整後ナデか	やや粗	良	褐灰 (7.5YR4/1)	口縁部 1/4のみ存	外表面全体にスス付着	117-02
220	土師器 鍋	S D41	口径: (22.9)	・口縁部折り返し、ヨコナデ、内 面ハケメ調整、外輪指サエのままか	やや粗	良	橙 (2.5YR6/6)	口縁~体部 1/4のみ存	内・外間に磨 滅激しい	117-03
221	土師器 鍋	S D41	口径: (27.0)	同 上	粗	良	浅黄緑 (7.5YR8/4)	口縁~体部 1/8のみ存	内・外間に磨 滅激しい	117-01
222	山皿	S D41	口径: (8.5) 高台径: (3.4) 高: 2.5	・ロクロナデ、底部切り離し後ナデ	密	良	灰白 (2.5Y8/1)	1 / 3 存		115-07
223	山茶碗	S D41	口径: (15.8) 高台径: (7.8) 高: 5.5	・ロクロナデ、底部回転糸切り 後高台はり付け	密	良	灰白 (2.5 Y8/1)	1 / 2 存 (但、口縁部は 1/3 のみ存)		115-02
224	山茶碗	S D41	口径: (16.9) 高台径: (7.8) 高: 6.0	・ロクロナデ、底部切り離し後 ナデ高台はりつけ	やや密	良	灰白 (10YR7/1)	1 / 6 存 (但、底盤/8)	内面全体にスス付着	114-02
225	山茶碗	S D41	口径: (16.9) 高台径: (7.2) 高: 5.5	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ	やや密	良	灰白 (2.5Y8/1)	1 / 2 存 (但、口縁部/8)	内面にスス付着 ・高台にモミガラ痕	115-01

第18表 遺物観察表(9)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
226	山茶碗	SD41	口径：(15.0) 高台径：(7.3) 高：5.4	ロクロナデ、底部切り離し後 ナデ高台はりつけ	やや粗	良	灰白 (2.5Y8/1) (乳, 口縁部1/10)	1/2 存		115-04
227	山茶碗	SD41	口径：(16.7) 高台径：(5.4) 高：5.45	ロクロナデ、底縫合糸切り後ナデ、 高台はりつけ、底部内面へ方向ナデ	やや密	良	灰白 (N7/0)	口縁部ごく一部のみ欠	口縁部に灰青つけがけ ・高台にモミガラ痕あり ・底縫合糸の跡がある	115-01
228	山茶碗	SD41	口径：(16.3) 高台径：(7.2) 高：6.1	ロクロナデ、底部ヘラ切り後、 高台はりつけ底部内面ナデ	やや密	良	灰白 (2.5Y8/1)	1/2 存 (但、底窓完)	・高台にモミガラ痕あり ・底窓部にヘラ跡があり	114-01
229	山茶碗	SD41	高台径：8.0	ロクロナデ、底部回転糸切り 後高台はりつけ	やや密	良	灰白 (2.5Y8/1)	底部の1/2存	・内部に自然釉付着 ・底縫合糸の跡がある	114-04
230	山茶碗	SD41	高台径：6.3	ロクロナデ、底部切り離し後ナデ、 高台はりつけ、体部外側ヘラでくり抜子	やや粗	良	灰白 (N7/0)	底部のみ完形	・内部に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕あり	115-05
231	山茶碗	SD41	高台径：6.6	ロクロナデ、底部回転糸切り 後、高台はりつけ	やや密	良	灰白 (2.5Y8/1)	底部のみ完形	・内部に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕あり ・底縫合糸の跡がある	114-03
232	山茶碗	SD41	高台径：(7.5)	内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ 底部切り離し後高台はりつけ	やや粗	良	灰白 (2.5Y8/1)	1/4 存	・内部に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕あり	115-06
233	山茶碗	SD41	高台径：(8.1)	ロクロナデ、底縫合糸切り後 高台はりつけ	やや密	良	灰白 (2.5Y8/1)	底脚のみ1/2存		115-03
234	山茶碗	SD41	高台径：(6.8)	ロクロナデ、底部切り離し後、 高台はりつけ、外腹ナデ	やや粗	良	灰白 (N7/0)	底部のみ完形	・高台にモミガラ痕 ・内部に自然釉付着	114-05
235	山茶碗	SD41	高台径：(6.5)	ロクロナデ、底部切り離し後、高台はりつけ	やや密	良	灰白 (2.5Y8/1)	底部のみ1/2存		116-02
236	捏鉢	SD41	高台径：(11.5)	ロクロナデ、底縫合糸切り後 ・外腹輕いケズリ	やや粗	良	灰白 (2.5Y8/1)	底部～体部 のみ1/3存	・内部にスス付着か ・底部～体部のみ1/3存	116-06
237	土師器 鍋	SE42	口径：(23.0) 高：(15.2)	口縁部は、1.3cm所引退しヨコナデ ・側部～底部カズリ、底部内面にはむけた ・側部～底部カズリ、底部内面にはむけた	やや粗	良	黄灰 (2.5Y4/1)	口縁部1/4存 底部～体部3/4存	・外縁部自然吹き、灰化 ・側部～底部より裏剥離不規則	096-01
238	土師器 鍋	SE42	口径：(31.8) 高：(24.7)	口縁部は、1.0cm所引退しヨコナデ ・底部外腹内面に上部ナデ、下部へう裂り	やや粗	良	淡黄 (2.5Y8/3) 黒褐 (2.5Y3/1)	ほぼ完形	同 上	095-01
239	山茶碗	SE42	口径：(18.4) 高台径：(6.3) 高：5.3	ロクロナデ、底縫合糸切り後、高台はりつけ、ナデ ・口縁部は外反	密	良	灰白 (N8/0)	完形	・口縫合糸～体部内面の一 筋、スス付着あり	092-01
240	山茶碗	SE42	口径：(15.9) 高台径：(1.1) 高：5.8	同 上	密	良	灰白 (N8/0)	完形	・口縫合糸～体部内面の一 筋、スス付着あり ・口縁部に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕	092-02
241	山茶碗	SE42	高台径：6.6	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ、ナデ	密	良	灰白 (N8/0)	底部のみ完形		096-02
242	山茶碗	SE42	口径：(15.3) 高台径：5.7 高：5.6	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ、ナデ ・口縁部は外反	密	良	灰白 (N8/0)	完形		092-03
243	櫛	SE42	残存部 長：5.5 幅：3.3 厚：0.7	白木の5.5cm弱櫛で ・毛引きまで完全には残していない ・最終的に表面をなく	—	—	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	1/4 存か	・材質はマンサク 科イヌキ ・残存する歯は66本	093-01
244	杓	SE42	内径：(4.8X 4.8X1.9) 外径：(7.7-8.8) 幅厚：3.4	4枚の板状合板に組み合われて棒をつくり、 握り紐打付されて留めとる ・長さ1.5～2.5cmほどの木軒使用	—	—	浅黄 (2.5Y7/3)	ほぼ完形	2側面に線刻あり	094-01
245	土師器 皿	SE43	口径：(14.5) 高：(2.3)	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外腹指オサエのまま	やや粗	良	淡黄 (2.5Y8/4)	1/10 存		101-06
246	山皿	SE44	口径：8.1 高：2.3	ロクロナデ、底縫合糸切り後、 ヘラ状工具で調整か	やや密	良	灰白 (5Y8/1)	完形	・口縁部に自然釉付着 ・口縁部内面に粘土 カス付着	101-04
247	ロクロ土器 小皿	SE45	口径：8.6 高：1.6 厚：4.7	ロクロナデ ・口縁部ヨコナデ、底縫合糸切り	密	良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2/3 存		101-05
248	土師器 小皿	SE46	口径：(9) 高：1.2	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外腹指オサエのまま	密	良	内: 淡黄 (7.5YR8/4) 外: 淡黄 (7.5YR8/3)	1/6 存	口縁部外腹に、 帽の使い面をもつ	099-02
249	土師器 小皿	SE46	口径：(8.3) 高：1.0	同 上	やや密	やや良	灰白 (2.5Y8/1)	1/2 存	口縁歪みやや大	099-01
250	土師器 小皿	SE46	口径：(8.7) 高：1.6	口縁部ヨコナデ、外腹指オサエにま ・内腹は、工具(ヘラ状)を使って整形した あとナデか?	密	良	浅黄橙 (10YR8/3)	1/2 存		098-05

第19表 遺物観察表(0)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
251	土師器皿	SE46	口径: (18.8) 埋土 高: 2.5	・口縁端部ヨコナデ、内面ナデ ・外面指オサエ後軽いナデ	密	やや良	青(ぶい)黄(イエ)1/1 青(ぶい)黄(イエ)1/1	1/6 存	内面に、黑色の変化物が付着 腹部に黒いものはないが、裏 面に黒いためこれは不適	098-06
252	ロクロ土器器皿	SE46	底径: 5.5	・体部回転ナデ ・回転糸切り	密	やや良	褐灰(10YR5/1)	底部のみ存	内面一面に黒色の付着物	098-03
253	土師器皿	SE46	口径: (18.8) 埋土	・口縁端部折り返し、ヨコナデ ・口縁部と体部の境は指オサエ ・体部内面にシケメがわざかに残る	密 1mm繊維 残存	良	内: 淡黄(2.5Y8/3) 外: 淡黄(10YR5/4)	9×5cmの小片		098-04
254	山皿	SE46	口径: 7.6 埋土 高: 2.3	・水焼き成形・回転糸切り ・口縁端部を若干外反させる ・底面/2枚、既成でて腹部を切る	密	堅	内: 灰白(2.5Y8/1) 外: 付着物の褐色 明黄色(10YR6/6)	完形	外面全面に埋土 中の鉄分付着	099-04
255	山皿	SE46	口径: 8.6 埋土 高: 2.8	・水焼き成形、口縁端部のみヨコナデ ・底部突出台状 ・底面/2枚	密	堅	内: 自然釉 オリーブ質(2.5Y8/3) 外: 灰白(2.5Y8/1)	完形	内面は、ほぼ全 面に自然釉	099-05
256	山茶碗	SE46	口径: (15.2) 埋土 高: 5.5	・水焼き成形・貼付高台 ・口縁端部や外反 ・輪花あり・絞糸切り	密	堅	内: 灰(5Y6/1) 外: 灰白(5Y1/1)	2/3 存	輪花は、現状では 2ヶ所見られる 内面に輕く自然釉	099-03
257	山茶碗	SE46	高台径: 7.2 埋土	・水焼き成形 ・回転糸切り ・貼付高台	密	堅	灰白(2.5Y8/1)	底部A2/3 存	内面に自然釉と 重ね焼きの痕跡	098-01
258	山茶碗	SE46	高台径: 6.3 埋土	・水焼き成形 ・回転糸切り ・貼付高台・幅広の高台	密 1mm繊維 ごく僅か	堅	灰白(2.5Y7/1)	底部のみ存	内面に自然釉	098-02
259	瓦器碗	SE46	埋土	・内縁端部ミガキ外や端等ミガキ ・口縁端部内面に弱い沈線	密	良	灰(5N5)	4×3cmの小片		098-07
260	曲物	SE46	底	・一枚の陶板に輪糸を用いて腰の側面で留り込みを 入れた、円筒形に丸めて腰の底で留め、3本 のタグを入れて補強する				完形	ただ見る時に直 接により一目瞭然	097-01
261	ロクロ土器器皿	SE47	口径: (15.0) 高: 3.3 底径: 6.5	・ロクロナデ ・口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	密	良	にぶい黄橙 (10YR7/3)	2/3 存	体部外面の一部 にスス付着か	100-01
262	ロクロ土器器皿	SE47	底径: (7.2)	同 上	密	良	にぶい橙 (7.5YR7/3)	底部のみ完形	内面は黒変している	100-03
263	ロクロ土器器皿	SE47	高台径: (8.0)	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ	密	良	灰白 (2.5Y8/1~8/2)	2/3存		100-02
264	ロクロ土器器皿	SE47	口径: (15.8)	・ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	密	良	淡黄(2.5Y8/3)	口縁～体部 のみ1/6存	口縁～体部 のみ1/6存 はりつけ痕あり	101-01
265	山茶碗	SE47	口径: (14.6) 高台径: (6.6) 高: 5.6	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ	密	良	灰白(5N8/0) (2.5Y2/1)	1/2 存	現状では輪糸1ヶ所 ・内・外面とも施釉れあり ・内・外面とも、全体的に暗	100-04
266	土師器皿	SK48	口径: 8.7 埋土 高: 1.5	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、 外面指オサエのまま	やや粗	良	浅黄澄(10YR8.4)	3/4 存		110-08
267	土師器皿	SK48	口径: 8.8 埋土 高: 1.5	同 上	やや密	良	浅黄澄(10YR8/3)	1/2 存		110-12
268	土師器皿	SK48	口径: 8.35 埋土 高: 1.5	同 上	密	良	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3/4 存		110-04
269	土師器皿	SK48	口径: 8.5 埋土 高: 1.4	同 上	密	良	灰白(10YR8/2)	口縁部一部欠	・体部に焼成跡があり ・口縁に油煙痕	103-03
270	土師器皿	SK48	口径: 9.1 埋土 高: 1.4	同 上	密	良	浅黄澄(7.5YR8/3)	口縁部1/3 のみ欠		112-04
271	土師器皿	SK48	口径: 8.7 埋土 高: 1.7	同 上	密	良	浅黄澄(10YR8/3)	口縁部1/4 のみ欠		110-01
272	土師器皿	SK48	口径: 9.0 埋土 高: 1.5	同 上	やや密	良	浅黄澄(7.5YR8/3)	1/2 存		110-09
273	土師器皿	SK48	口径: 8.95 埋土 高: 2.0	同 上	密	良	浅黄澄(10YR8/3)	7/8 存		102-06
274	土師器皿	SK48	口径: 8.6 埋土 高: 1.8	同 上	密	良	にぶい黄橙 (10YR7/3)	完形		102-01
275	土師器皿	SK48	口径: 8.4 埋土 高: 1.5	同 上	やや粗	良	浅黄澄(10YR8/3)	口縁部一部欠		110-06

第20表 遺物観察表(1)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
276	土師器皿	S K48	口径: 8.65 高: 1.4	口沿部ヨコナデ、内面ナデ、外表面オサエのまま	やや密	良	浅黄橙 (10Y R8/3)	2/3存		110-07
277	土師器皿	S K48	口径: 8.3 高: 1.6	同 上	やや密	良	浅黄橙 (7.5Y R8/4)	完形		103-01
278	土師器皿	S K48	口径: (8.9) 高: 1.3	同 上	密	良	浅黄橙 (10Y R8/3)	口縁部一部欠 歪み大きい		102-08
279	土師器皿	S K48	口径: (8.15) 高: 1.4	同 上	やや粗	良	灰白(10Y RB/2)	口縁部一部欠 内面とも磨滅大きい		102-03
280	土師器皿	S K48	口径: 8.7 高: 1.3	同 上	密	良	外: 浅橙 (5YR8/3) 内: 灰白 (10Y RB/2)	完形	底部分割的凹凸の範囲に ハケノ状の痕跡あり 歪み大きい	112-03
281	土師器皿	S K48	口径: (8.5) 高: 1.55	同 上	やや密	良	浅黄橙 (10Y R8/3)	3/4存		102-07
282	土師器皿	S K48	口径: 7.5 高: 1.5	同 上	やや粗	良	灰白 (7.5Y R8/1)	完形	口縁に油煙痕	104-01
283	土師器皿	S K48	口径: 8.0 高: 1.5	同 上	やや粗	やや良	浅黄橙 (7.5Y R8/3)	完形		112-05
284	土師器皿	S K48	口径: 8.2 高: 1.4	同 上	密	良	浅黄橙 (10Y R8/4)	口縁部一部欠		110-02
285	土師器皿	S K48	口径: 8.15 高: 1.8	同 上	密	良	浅黄橙 (7.5Y R8/4)	口縁部一部欠	口縁部に歪みあり	110-03
286	土師器皿	S K48	口径: 7.2 高: 1.55	同 上	密	良	浅黄橙 (7.5Y R8/4)	口縁部/5欠	全体的に歪みあり	110-11
287	土師器皿	S K48	口径: (8.5) 高: (1.6)	同 上	密	良	浅黄橙 (10Y R8/3) /浅黄橙 (7.5Y R8/4)	口縁部/5欠 底部分中央	内面とも磨滅進む	110-14
288	土師器皿	S K48	口径: 7.8 高: 1.7	同 上	密	良	淡黄 (2.5Y R8/3) /浅黄 (10Y R8/3)	完形	歪み大きい	105-02
289	土師器皿	S K48	口径: 8.4 高: 1.8	同 上	やや密	良	灰白 (10Y R8/2) /にれい塊 (5YR7/4)	完形		102-04
290	土師器皿	S K48	口径: 8.4 高: 1.5	同 上	やや粗	良	外: 浅橙 (10Y R8/3) 内: 黒褐 (10Y R3/1)	口縁部/4欠	内面全体、口縁部外層 は黒化している	102-02
291	土師器皿	S K48	口径: 7.9 高: 1.4	同 上	やや粗	良	浅黄 (10Y R8/3) /にれい塊 (5YR7/4)	底部分一部欠		102-06
292	土師器皿	S K48	口径: 8.8 高: 1.45	同 上	密	やや良	浅黄橙 (10Y R8/3)	1/2存	内・外表面ともに 磨滅進む	110-10
293	土師器皿	S K48	口径: 14.5 高: 2.9	同 上	やや密	良	灰黄褐 (10Y R6/2)	口縁部/3欠	内・外表面ともに一部 にスス付着	106-5
294	土師器皿	S K48	口径: 15.1 高: 3.4	同 上	密	良	灰黄 (2.5Y 7/2)	完形	内面にスス付着	104-2
295	土師器皿	S K48	口径: 15.0 高: 3.0	同 上	やや粗	良	上: 浅橙 (7.5Y R7/4)~ /黄 (2.5Y R7/4) 内: にれい塊 (5YR7/4)	口縁部の一部欠 スス付着	内・外表面にかけて スス付着	112-01
296	土師器皿	S K48	口径: 14.9 高: 2.8	同 上	密	良	浅黄橙 (10Y R8/3)	体部一部欠		104-04
297	土師器皿	S K48	口径: 14.85 高: 3.75	同 上	密	良	浅黄橙 (10Y R8/3)	口縁部・底 部一部欠		106-01
298	土師器皿	S K48	口径: 15.2 高: 3.25	同 上	密	良	灰黄 (10Y R8/2)~ 黄 (2.5Y 5/1) 内: 黑褐 (10Y R6/1)	口縁部一部欠		112-02
299	土師器皿	S K48	口径: 15.4 高: 2.7	同 上	密	良	浅黄橙 (7.5Y R8/3)	口縁部/5欠	内・外表面ともに 磨滅痕あり	106-02
300	土師器皿	S K48	口径: 14.55 高: 3.1	同 上	密	良	外: 浅橙 (7.5Y R8/4) 内: 深橙 (10Y R8/3)	底部分一部欠		106-03

第21表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
301	土師器皿	S K48	口径: 15.1 埋土 高: 2.5	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外表面オサエのまま	やや粗	良	外: 黄灰 (25Y4/1) 内: 浅黄 (10YR8/4)	口縁部一部欠 外面全体にスス付着	104-03	
302	土師器皿	S K48	口径: (16.0) 埋土 高: 2.5	同 上	やや粗	良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁～体部 1/10欠	106-04	
303	ロクロ土器蓋皿	S K48	底径: 3.4 埋土	ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	浅黄橙 (10YR8/3)	底部のみ 3/4存	111-02	
304	ロクロ土器蓋皿	S K48	口径: (8.0) 高: 1.8 底径: 3.4	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 △状工具で調整か	粗	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1/5存	111-03	
305	ロクロ土器蓋皿	S K48	口径: 14.8 埋土 高: 3.45 底径: 6.7	ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	橙 (5YR7/6)	口縁部/8欠 内面にスス付着	104-05	
306	ロクロ土器蓋皿	S K48	口径: (14.4) 高: 3.4 底径: 6.4	同 上	やや密	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	底部は完形 口縁部一部存	112-06	
307	ロクロ土器蓋椀	S K48	底径: (7.5)	ロクロナデ、底部回転糸切り	粗	良	淡黄 (2.5Y8/3)	底部1/2存	111-05	
308	ロクロ土器蓋皿	S K48	高台径: 7.1	ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ	粗	良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	底部剥離存	111-07	
309	土師器鍋	S K48	口径: 16.7 埋土 高: (9.6)	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 棒ナデ、外表面オサエのまま外側調整か、 △状アソブ	粗	良	灰黄褐 (10YR5/2)	1/3存 外面にスス付着	107-01	
310	土師器鍋	S K48	口径: 25.5	ロクロナデ、外表面オサエのまま外側調整か	やや粗	良	外: 浅褐 (10YR3/3) 内: 淡褐 (10YR6/2)	1/3存 外面全体にスス付着	107-02	
311	土師器鍋	S K48	口径: (34.0)	ロクロナデ、外表面 △状アソブ、内面ハケメ調整	やや粗	良	にふい黄橙 (10YR6/3)	口縁～体部 3/4存 内・外ともに部分的スス付着	108-01	
312	ミニチュア鍋	S K48	口径: 7.9	ロクロナデ、外表面ナデ	やや粗	良	灰白 (10YR8/2) にふい黄 (10YR5/3)	口縁～体部 3/4存 内・外ともに部分的にスス付着	103-04	
313	山茶皿	S K48	口径: 8.3 埋土 高: 2.4	ロクロナデ、底部回転糸切り	やや密	良	灰白 (7.5Y7/1)	口縁部一部欠 自然釉付着	113-02	
314	山茶碗	S K48	口径: 15.9 高台径: 7.35 高: 6.1	ロクロナデ、内面ナデ	密	良	灰白 (N8/0)	口縁部/3欠 底部内面に工具痕あり	113-04	
315	山茶碗	S K48	口径: 16.3 高台径: 6.9 高: 5.9	ロクロナデ、内面ナデ	やや密	良	灰白 (N8/0)	口縁部/8欠 体部外面にスス付着	113-03	
316	山茶碗用碇	S K48	口径: 9.2 高台径: 7.3 高: 2.1	ロクロナデ、内面ナデ	密	良	外: 灰白 (15YT/1) 内: 灰白 (N8/0)～灰 (N6/0)	1/4存	113-01	
317	土師器皿	S K49	口径: 14.8 高: 2.5	ロクロナデ、外表面オサエのまま外側調整か	密	良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	1/2存 つなぎ痕あり	100-05	
318	ロクロ土器蓋碗	S K49	底径: (6.2)	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ	やや粗	良	浅黄 (2.5Y8/3)	底部1/2存	101-03	
319	山茶碗	S K49	底径: (8.0)	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 高台はりつけ	やや粗	良	灰白 (5Y8/1)	底部のみ3存	100-06	
320	山茶碗	S K49	底径: (6.4)	ロクロナデ、底部回転糸切り後、 △状工具で調整か	やや粗	良	外: 灰白 (5Y8/1) 内: 灰 (5Y5/1)	底部のみ2存 内面に全体的にスス付着	101-02	
321	土師器皿	2次 P31 P12	口径: (9.6)	ロクロナデ、体部ナデ	やや粗	やや良	淡黄 (2.5Y8/3)	1/3存 全体的に磨滅進む	035-03	
322	土師器皿	2次 P31 亮		ロクロナデ、体部ハケメ後ナデか	やや粗	やや良	にふい澄 (7.5YR7/4)	7.5×4.5cm の小片	035-04	
323	土師器皿	2次 Q34 P10	口径: 10.8 高: 1.85	ロクロナデ、外表面 △状工具で調整か	やや粗	やや良	浅黄橙 (10YR8/4)	2/3存 口縁の一部黒変	034-08	
324	土師器皿	2次 Q34 亮	口径: (13.6)	ロクロナデ、外表面 △状工具で調整か	やや密	やや良	灰白 (10YR8/2)	口縁～体部 1/5存	034-07	
325	土師器皿	2次 Q30 P8	口径: 7.8 高: 1.3	ロクロナデ、外表面 △状工具で調整か	やや密	やや不良	灰白 (10YR8/2)	完形	017-05	

第22表 遺物観察表(3)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
326	土師器皿	2次 030 P 8	口径: 8.3 高: 1.3	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや密	やや不良	灰青(10YR 8/4)	完形	・内面に油煙付着	017-06
327	土師器皿	2次 R24 P 9	口径: 9.1 高: 1.75	同上	やや粗	やや不良	灰黄(2.5Y 7/2)	口縁部のみ ごく一部欠	・底部外面に粘土接合痕あり	017-07
328	土師器皿	2次 R24 P 9	口径: 9.8 高: 2.1	・口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエのまま、内面ナデ、底部ナデ	やや密	やや良	灰青(1.5Y 8/1)	完形	・全体的に磨滅進む	040-04
329	土師器皿	2次 Q31 P 18	口径: (10.9) 高: (2.4)	・口縁部ヨコナデ、体部・底部外面指オサエのまま、内面指オサエ後ナデ	やや粗	やや良	灰青(7.5YR 8/1)	3 / 4 存	・底部外面にヘラ状工具痕あり	033-04
330	ロクロ土師器皿	2次 P31 P 8	口径: (14.6)	・口縁・体部ロクロナデ	密	やや良	灰青(7.5YR 8/6)	1 / 5 存		036-02
331	土師器皿	2次 P29 P 4	口径: (15.0)	・口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ	やや密	やや良	灰白(10Y 3/1)	1 / 3 存		036-06
332	土師器皿	2次 S32 P 1	口径: (15.5)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ ・口縁部・体部間に強いヨコナデ	やや密	良	橙(7.5YR 7/6)	6.3x3.5cmの小片		036-05
333	土師器皿	2次 P30 P 12	口径: (14.5)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰青(10YR 8/3)	1 / 6 存		036-03
334	黒色土器輪	2次 P31 P 12	口径: (14.6) 高さ: (8.5) 高: (5.2)	・口縁部ヨコナデ、体部ミガキ ・高台はりつけ ・内面指オサエ	やや粗	良	外: 黒白(10YR 8/1) 内: 黒(N2/0)	高台1/3存	・内面に工具の あたり傷あり	035-05
335	ロクロ土師器皿	2次 P32 小皿 P 7	口径: 9.2 高: 2.3 底径: 5.3	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	灰青(1.5Y 8/1)	口縁部・高台 1.5cm大的小石含む		017-08
336	ロクロ土師器皿	2次 P32 P 7	口径: (15.0) 高: 4.0 底径: (4.6)	同上	やや粗	良	灰白(2.5Y 8/2)	1 / 3 存	・内面にスス付着か	044-02
337	土師器皿	2次 S31 P 6	口径: (34.2)	・軸道から口縁部が「く」字形に延びて直ぐ ・口縁部ヨコナデ、内面指オサエ(少々)	やや密	良	灰青(10YR 7/1)	8.0x8.0cmの小片		041-01
338	土師器皿	2次 Q34 P 14	口径: (28.6)	・軸道から口縁部が「く」字形に延びて直ぐ ・口縁部ヨコナデ、内面指オサエ(少々) ・内面指オサエ	密	良	橙(5YR 6/8)	口縁・体部/8片		040-05
339	土師器皿	2次 Q34 P 7	口径: (34.0)	・軸道から口縁部が「く」字形に延びて直ぐ ・口縁部ヨコナデ、内面指オサエ(少々) ・内面指オサエ	やや粗	やや良	外: 淡橙(5YR 7/3) 内: 灰青(10YR 8/5)	口縁・体部/10片	・腹部内面にスス付	034-06
340	土師器皿	2次 S31 P 2	口径: (20.0)	・口縁部ヨコナデ、多量外面上に落着オサエナデ ・下部ナデ、底部内面に落着ナデ	やや粗	やや不良	淡橙(5YR 8/4)	口縁・体部/5片	・体部回転糸切りあり	034-06
341	土師器皿	2次 P31 P 5	口径: (23.7)	・口縁部ヨコナデ、内面指オサエ(少々) ・外縁・外側に強いヨコナデ	やや粗	やや良	灰青(7.5YR 8/1)	口縁・体部/8片	・外縁にスス付着 ・多量内面に工具印(少々)	044-01
342	土師器皿	2次 P32 P 3	口径: (18.3)	・口縁部ヨコナデ、内面指オサエ(少々) ・内面指オサエ(少々)ナデ直ぐ(少々)	やや粗	やや不良	外: 黄白(7.5YR 8/1) 内: 黄白(10YR 8/1)	口縁・体部/1存	・内・外縁に大きな鉛錫付着 ・外縁に工具印(少々)	037-01
343	土師器皿	2次 M33 P 6	口径: (29.2)	・口縁部ヨコナデ、内面指オサエ(少々) ・内面指オサエ	やや密	良	外: 黄白(7.5YR 4/1) 内: 黄白(10YR 8/1)	口縁部/8片 ～体部/1存	・外縁全唇にスス付着 ・全体的に表面に膏手	039-01
344	山茶輪	2次 S33 P 1	直径: (6.0)	・ロクロナデ、底部回転糸切り、へり状で調整か ・高台はりつけ	密	良	灰青(10YR 7/2)	口縁ののみ存 体部一部存	・体部内面にスス付着 ・高台にモミガタあり	040-02
345	山茶輪	2次 P32 P 3	口径: (15.2) 高さ: (4.4) 高: 4.6	・ロクロナデ、底部回転糸切り ・高台はりつけ	密	良	灰青(10YR 7/2)	口縁1/56枚	・口縁内面に膏手 ・高台にモミガタあり	040-01
346	製塙土器	2次 P33 P 13		・落着オサエ(少々)ナデ、内面ハラ工具で調整か	粗	良	外: 灰(2.5YR 6/6) 内: 灰(5YR 7/6)	小片		049-01
347	土鍵	2次 R34 P 9	長径: 3.55 短径: 1.5	・指による成形後、穿孔・ナデ	密	良	灰青(10YR 8/1)	輪削近づ(數)		049-02
348	球状土製品	2次 Q31 P 17	直径: 2.2	・指による成形後、ナデか	密	良	灰青(10YR 7/1)	完形		049-03
349	土師器皿	Pit 70	口径: 9.2 高: 1.6	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	外: 黑(10YR 8/1) 内: 黑(2.5YR 8/1)	4 / 5 存		032-04
350	土師器皿	Pit 70	口径: (8.8) 高: 1.6	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ	やや密	良	淡黄(2.5YR 8/3)	1 / 3 存	・口縁背面に落着か	032-06

第23表 遺物観察表(4)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
351	土師器皿	Pit 70	口径：8.6 高：2.1	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ ・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	良	外：灰白(10YR 8/1) 内：灰白(10YR 8/1)	口縁部/204枚 内面へ吹き加工跡(?)付	・内面黒変する ・内面へ吹き加工跡(?)付	018-08
352	土師器皿	Pit 70	口径：8.7 高：1.8	・口縁部ヨコナデ、体部～底部 ・部外面ナデ、内面一方向ナデ	やや密	良	灰白(2.5YR 8/2)	4／5存		032-05
353	土師器皿	Pit 70	口径：9.2 高：1.7	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ ・体部～底部ナデ	やや粗	良	灰白(10YR 7/8)～ 橙(2.5YR 7/8)	口縁部～器身 内面へ吹き加工痕(?)付	・口縁部に黒變付 ・内面へ吹き加工痕(?)付	032-01
354	土師器皿	Pit 70	口径：9.5 高：1.85	・口縁部ヨコナデ、体部外面オサ 工後ナデ、内面ナデ、底部ナデ	やや密	良	外：灰白(10YR 8/1) 内：灰白(5YR 7/8)	口縁～器身～器底 内面へ吹き加工痕(?)付	・口縁部～器身へ黒變付 ・新に黒變付	032-03
355	土師器皿	Pit 70	口径：9.3 高：1.8	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	良	外：灰白(10YR 8/1) 内：灰白(5YR 8/1)	完形		018-07
356	土師器皿	Pit 70	口径：9.8 高：1.9	同上	やや密	良	外：灰白(7.5YR 8/1) 内：灰白(10YR 8/1)	口縁部～器身 内面へ吹き加工痕(?)付		032-02
357	土師器皿	Pit 70	口径：(14.6) 高：(3.3)	同上	やや密	良	外：灰白(10YR 8/1) 内：灰白(10YR 8/1)	1／2存	・外面の広範囲にスス付着	018-04
358	土師器皿	Pit 70	口径：(14.2)	・口縁部ヨコナデ、体部外面指 オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良	灰白(10YR 8/1)	口縁～体部/2付	・外面上にスス付着	032-07
359	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：8.6 高：1.4 底径：4.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや密	良	灰白(1.5YR 8/1)	4／5存	・体部背面にスス(?)付着	032-10
360	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：9.3 高：1.6 底径：4.15	同上	やや密	やや不良	灰白(2.5YR 8/2) より白い	1／2存	・同一個体と考えられる裏面 口縁部に黒變付(?)	034-01
361	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：(9.5) 高：1.55 底径：4.8	同上	やや粗	やや不良	灰白(10YR 8/1)	1／5存	・口縁部は磨滅 ・底部へ吹き加工痕(?)付 ・底部内面へ黒變付	034-02
362	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：(9.45) 高：1.5 底径：5.0	同上	やや粗	やや不良	灰白(10YR 8/2)	1／5存	・口縁部は磨滅 ・底部へ吹き加工痕(?)付	034-03
363	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：(8.9) 高：1.7 底径：4.7	同上	やや密	良	橙(5YR 7/6)	1／2存	・全般的に歪み大 ・底部内面へ吹き加工痕(?)付	032-12
364	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：(9.8) 高：1.9 底径：4.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り ・集落～口縁部にかけて、やや外反充満	密	良	灰白(10YR 8/1)	2／3存	・胎土は非常に密	032-09
365	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：8.8 高：1.3 底径：4.65	同上	やや粗	やや不良	橙(5YR 7/6)～ 淡黄(2.5YR 8/3)	2／3存	・全体的に、漏れが少	032-11
366	ロクロ土器皿	Pit 70	口径：9.4 高：1.9 底径：5.9	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	灰白(7.5YR 7/4)	3／4存	・底部内面吹き加工痕(?)付 ・底部内面へ吹き加工痕(?)付	018-06
367	土師器皿	Pit 70	口径：(15.4) 高：3.9 底径：5.3	・ロクロナデ、底部回転糸切り ・集落～口縁部にかけて、やや外反充満	やや粗	良	灰白(10YR 8/4)	1／3存	・全体的に黒變が強く、黒 變不規則	032-08
368	土師器皿	Pit 70	口径：5.85	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	灰白(10YR 8/4)	ほぼ完形		018-05
369	土師器皿	Pit 70	高台径：7.15	・ロクロナデ、底部回転糸切り、高台はうつり ・有口縁部を黒變させ、高台はうつり	やや粗	不良	灰白(10YR 8/2)	底盤のみはは完形	・全般的に黒變が少く、黒變 は不規則 ・高台に、△大の中古合付	034-04
370	土師器皿	S X53	口径：8.0 底面 高：2.4	・内面ナデ、外面指オサエのまま	密	良	灰白(7.5YR 8/1)	ほぼ完形		119-04
371	土師器皿	S X53	口径：8.0 底面 高：2.5	・黒変化あり、黒變部はまきりしないが、黒變部は オサエのままでも	密	やや良	内：灰白(7.5YR 8/1) 外：灰白(10YR 8/1)	ほぼ完形		119-05
372	土師器皿	S Z55	口径：(6.9) 集石部 高：1.7	・解け、削け付けた付、口縁部は、やや傾 けた付	密	良	淡黄(2.5YR 8/3)	1／5存		120-04
373	土師器皿	S Z55	口径：(7.5) 集石部 高：1.6	同上	密	やや良	淡黄(2.5YR 8/3)	1／4存		119-03
374	土師器皿	S Z55	口径：7.7 集石部 高：1.8	同上	密	やや良	淡黄(2.5YR 8/3)	ほぼ完形	・口縁部背面に、ヘラ吹工具 当たったよを黒變あり	120-05
375	土師器皿	S Z55	口径：7.6 集石部 高：2.0	同上	密	良	内：灰白(5YR 8/1) 外：灰白(10YR 8/1)	3／4存		120-03

第24表 遺物観察表(5)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成型・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
376	土師器皿	S Z55	口径:(11.0) 高さ: 1.4 集石部	口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外側指オサエのまま	密	良	灰白(10YR8/1)	口縁と腹足の一部のみ/5枚		120-02
377	土師器皿	S Z55	口径:(32.0) 集石部	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外側指オサエのまま	密	良	灰(10YR8/1) 外: 口縁部灰青(10YR8/1) 腹: 灰青(10YR8/1)	口縁部1/5枚	体部外周全体に窓状の黒色化粧付施	122-01
378	土師器皿	S Z55	口径: 31.8 集石部	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外側指オサエのまま	やや密	やや良	灰(10YR8/1) 外: 灰(10YR8/1) 内: 灰(10YR8/1)	窓部出詰み 底部は欠損	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外側指オサエのまま	123-01
379	土師器皿	S Z55	口径:(32.6) 集石部	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	灰青(7.5YR8/1)	口縁から腹足上半 半の約1/5枚	●外面に窓(黒色化粧)の付着多い	121-02
380	土師器皿	S Z55	口径:(33.8) 集石部	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	灰(10YR8/1)	口縁1/6枚 腹足上半1/5枚	●外面に窓	121-01
381	土師器皿	W Z55	口径:(33.2) 集石部	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	灰(10YR8/1)	窓部出詰み 底部は欠損	●外面に窓	122-02
382	土師器皿	S Z55	口径:(27.4)	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	灰(7.5YR7/4)	窓部出詰み 底部は欠損	●外面に窓	120-01
383	土師器皿	S Z55	口径:(34.4) 羽釜	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	やや密	良	灰(10YR8/3)	口縁・腹足下 まで1/10枚	●窓直下にスス付着	122-03
384	土師器皿	S Z55	口径: (3.7) 土鍋	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	やや密	良	灰(10YR8/4)	腹足下若干欠損		119-01
385	山茶碗	S Z55	高台径: (8.0) 集石部	●クロ口挽き成形 ●輪郭部の削り落し、内面の凹凸が付いて いる。粘土質の土台	やや密	良	灰(2.5YR8/3)	口縁・腹足下 まで1/10枚	●見込み部は、スペベペしている	119-02
386	縁釉小瓦	S Z55	口径: 9.7 集石部	●クロ口挽き、圓輪系切り ●見込み部はナデか?	密	良	灰(1.5YR8/3) 内: 灰(1.5YR8/3)	口縁1/10枚		120-07
387	縁釉小瓦	S Z55	口径: 9.6 集石部	●クロ口挽き、圓輪系切り ●見込み部はナデか?	やや密	良	灰(1.5YR8/3) 内: 灰(1.5YR8/3)	口縁1/10枚		120-08
388	縁釉陶器	S Z55	高台径: (8.0) 碗	●見込み部や底部外外面に、円形 にナデた痕跡が見られる ●削り出し高台	密	堅	灰地 内: 灰(10YR8/3) 内: 灰(10YR8/3)	底面 内: 灰(10YR8/3)		120-06
389	土師器皿	S Z55	口径: 8.2 高さ: 1.8	●口縁部ヨコナデ、体部~底部外 面指オサエのまま、内面ナデ	密	良	灰白(10YR8/1)	3 / 4 存		124-01
390	土師器皿	S Z55	口径:(10.7)	同 上	密	良	灰白(10YR8/1)	1 / 4		124-03
391	土師器皿	S Z55	口径:(25.0) 鍋	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	外: 灰(10YR8/3) 内: 灰(10YR8/3)	口縁~体部1/5枚	●外面にスス付着	124-05
392	土師器皿	S Z55	口径:(30.0) 鍋	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	外: 灰(7.5YR8/3) 内: 灰(10YR8/1)	口縁~体部1/5枚	●外面にスス付着	124-04
393	土師器皿	S Z55	口径:(33.1) 鍋	●素から口縁部「く」字型に削り下して窓/ ●口縁端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	外: 灰(7.5YR8/3) 内: (2.5YR8/3)	1 / 6 存	●外面にスス付着	125-01
394	土師器皿	S Z55	口径:(22.0)	●口縁部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	外: 灰(10YR8/1) 内: 灰(10YR8/1)	口縁~体部1/5枚	●外面にスス付着	124-06

第25表 遺物観察表(6)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
395	土師器 鍋	S D56	口径:(29.9)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部の内側は、ヨリ付でよく、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●体部、外側はハケメ、内面ナマ。	密	良	外:褐(1.5YR6/1-5/6) 内:淡青(10YR6/1-7/3)	[■-■-■]	●外面にスス付着	135-01
396	土師器 鍋	S D56	口径:(24.4)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:褐(1.5YR6/1-5/6) 内:淡青(10YR6/1-7/3)	[■-■-■]	●外面にスス付着	135-02
397	土師器 鍋	S D56	口径:(29.8)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:褐(1.5YR6/1-5/6) 内:淡青(10YR6/1-7/3)	[■-■-■]	●外面にスス付着	136-01
398	土師器 羽 蓋	S D56	口径:(24.4)	●口縁から底面下約10mmにはほぼ水平に肩。 ●肩部部はほとんど水平。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	淡青(10.5YR8/1)	[■-■-■]	●胎の表面が剥離している	137-01
399	土師器 羽 蓋	S D56	口径:(30.0)	●口縁部は6mmほど削り落しナメ。 ●口縁から底面下約10mmにはほぼ水平に肩。 ●肩部部はほとんど水平。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:米白(1.5YR8/1) 内:灰青(10YR8/1)	[■-■-■]	●外面にスス付着	137-02
400	土師器 鍋	S D57	口径:(29.8)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付コロコロに凹凸させてなく、口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	やや密	良	灰青(10.5YR8/1)	[■-■-■]	●外面にスス付着 ●外面に剥離多い	131-01
401	土師器 鍋	S D57	口径:(28.4)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	やや粗	良	外:米白(1.5YR8/1) 内:灰青(10YR8/1)	[■-■-■]	●外面にスス付着	132-01
402	土師器 羽 蓋	S D57	口径:(19.8)	●口縁部は「く」字状に膨らむ。内側に凹凸させる。 ●口縁から底面下約10mmにはほぼ水平に肩。 ●肩部部はほとんど水平。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	やや密	良	外:灰青(10.5YR8/1) 内:灰青(10YR8/1)	[■-■-■]	●外面にスス付着	132-01
403	土師器 羽 蓋	S D57	口径:(26.8)	●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁から底面下約10mmにはほぼ水平に肩。 ●肩部部はほとんど水平。	密	良	淡青(10YR8/1)	[■-■-■]		132-03
404	土師器 羽 蓋	S D57	口径:(19.6)	●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁から底面下約10mmにはほぼ水平に肩。 ●肩部部はほとんど水平。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	やや密	良	外:米白(1.5YR8/1) 内:米白(10YR8/1)	[■-■-■]	●体部外面は黒或濃む	132-02
405	土師器 鍋	S D58	口径:(21.0)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:米白(1.5YR8/1) 内:淡青(10YR8/4)	[■-■-■]	●体部外面にスス付着	126-01
406	土師器 鍋	S D58	口径:(27.0)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:灰青(10YR8/3) 内:淡青(10YR8/3)	[■-■-■]	●外面にスス・炭化物付着	130-01
407	土師器 鍋	S D58	口径:(33.0)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:褐灰(1.5YR4/1) 内:淡青(10YR8/3)	[■-■-■]	●体部外面にスス付着	129-01
408	土師器 鍋	S D58	口径:(33.0)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はコロコロ、口縁部を内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:灰(10YR5/1) 内:米白(10YR6/2)	[■-■-■]	●外面全体にスス付着 ●体部外面に指オサエ痕立つ	128-02
409	土師器 鍋	S D58	口径:(32.4)	●胎から口部が「く」字状に膨らむ。器壁はやや厚い。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	やや密	良	淡青(10YR8/1)	[■-■-■]		126-02
410	土師器 鍋	S D58	口径:(33.2)	●口縁部はヨリ付、外側は内側に斜めに削り落す。 ●口縁部はヨリ付、外側は内側に凹凸させた上に、ヨリ付、外側は内側に斜めに削る。	密	良	外:灰(10YR5/1) 内:米白(10YR6/2)	[■-■-■]	●外面全体にスス・炭化物付着 ●弱干、變形がみとめられる	128-01

第26表 遺物観察表(1)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
411	土師器 羽釜	S D58	口径:(32.6)	・口縁部41.8cmほど、持ち運び用コロナ ・口縁から4.6cm下にはほぼ水平方向の肩 ・腹部は少し上と下にびくとうなれ ・内面には、横縞文(アラカルト)のほか、斜縞文、網目文等の文様がある。	やや密	良	灰青(7.5YR8/4)	口縁・肩直下ご く・直のみ欠		127-01
412	縄文土器 鉢	包含層		・外側には刻文文、縄文。内面には幾文	やや密	やや良	灰青(7.5YR8/4)	口縁部のみ 5.0×3.0cm片		057-14
413	縄文土器 鉢	包含層		・外側には刻文文、連続C字状爪形文	やや密	やや良	外: 灰青(7.5YR4/1) 内: こぶ青(7.5YR7/3)	口縁部のみ 2.0×2.5cm片		045-04
414	縄文土器 深鉢	包含層		・外側には刻文文・キザミ・横縞上に削り込み ・内面には縄文	やや粗	やや良	外: 灰青(7.5YR5/1) 内: こぶ青(7.5YR7/3)	2.5×2.4cm片		042-07
415	縄文土器 深鉢	包含層		・外側には燃条文	やや粗	やや良	外: 灰青(7.5YR5/4) 内: 灰(5YR6/5)	2.4×2.1cm		014-07
416	縄文土器 深鉢	包含層		・外側には縄文	粗	やや良	外: 灰青(7.5YR6/3) 内: 灰(5YR6/6)	3.7×4.0cm片		042-04
417	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面、内側にキザミ ・外側には沈線文・刻突文	密	良	灰青(7.5YR8/5)	口縁部のみ 2.9×3.5cm片		042-08
418	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部・外周部上にC字状糸形文 ・樂部の両端には沈線文 ・口縁部内側には削り込みの痕跡があり	やや密	やや良	青青(7.5YR5/5)	口縁部のみ 9.1×7.0cm片		061-12
419	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部・外周部上にC字状糸形文 ・樂部の両端には沈線文 ・口縁部内側には削り込みの痕跡があり	粗	やや良	外: 灰青(7.5YR5/1) 内: こぶ青(7.5YR6/3)	口縁部のみ 7.8×6.0cm片		061-04
420	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部・外周部上に連続C字状糸形文 ・口縁・底部には深い凹溝が入る	やや粗	やや良	にい青(7.5YR8/2)	口縁部のみ 6.5×5.0cm片		061-03
421	縄文土器 深鉢	包含層		・外側の深溝に2本の並びぐらし、その間に連続C字状糸形文	やや粗	やや良	灰青(7.5YR5/2)	口縁部のみ 4.3×4.0cm片		057-03
422	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外側に、丸蓋・連続C字状糸形文	粗	不良	外: 灰青(7.5YR5/2) 内: 灰(7.5YR6/6)	口縁部のみ 4.0×3.5cm片	・全体的に磨滅進む	053-06
423	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部・外周部上に連続C字状糸形文 ・底部の両端には沈線	粗	やや良	橙(7.5YR6/6)	口縁部のみ 3.8×2.9cm片		068-17
424	縄文土器 深鉢	包含層		・外周部上に連続C字状糸形文	やや密	良	外: 灰青(7.5YR5/6) 内: 灰青(7.5YR6/6)	3.6×3.5cm片		086-03
425	縄文土器 深鉢	包含層		・外周部上に連続C字状糸形文 ・底部の両端には沈線	密	不良	青青(7.5YR5/1)	口縁部のみ 2.0×3.6cm片	・口縁端部は磨滅激しく調査は不明確	045-03
426	縄文土器 深鉢	包含層		・外周部上に連続C字状糸形文 ・底部の上端に沈線	密	良	外: 灰青(7.5YR4/2) 内: 灰(2.5YR6/6)	3.5×4.5cm片	・内面に損傷による凹凸多い	054-04
427	縄文土器 深鉢	包含層		・外側の二本の深溝はぶつかる形 ・底部上端に連続C字状糸形文	粗	不良	にい青(7.5YR5/3)	3.4×3.9cm片	・全体的に磨滅進む	059-01
428	縄文土器 深鉢	包含層		・外側にキャタピラー文	やや密	良	外: こぶ青(7.5YR7/3) 内: 灰(5YR7/5)	口縁部のみ 4.6×2.8cm片		055-05
429	縄文土器 深鉢	包含層		・内面にキャタピラー文	密	良	外: 灰青(7.5YR4/1) 内: こぶ青(7.5YR6/4)	7.6×5.8cm片		086-05
430	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部・口縁部外側に連続C字状糸形文	密	良	青青(7.5YR5/1)	3.9×1.9cm片		055-14
431	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部に縄文、口縁部外側に平行沈線・三角形の沈割	粗	不良	灰青(10YR6/1)	口縁部のみ 2.6×3.7cm片		059-09
432	縄文土器 浅鉢	包含層		・口縁端部内側に二連続C字状糸形文 ・口縁部内側に沈線・三角形の沈割	やや密	良	外: こぶ青(7.5YR5/3) 内: 灰青(7.5YR7/3)	口縁部のみ 4.6×3.7cm片		042-01
433	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部外側に連続C字状糸形文 ・底部の表面の裏面に沈線・刻突文	やや粗	やや不良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 3.9×5.0cm片	・全体的にもろく剥離進む	045-02
434	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部・外周部上にキザミ ・口縁端部と底部に沈線・三角形の沈割	密	良	青青(7.5YR5/1)	口縁部のみ 3.3×2.6cm片		042-06

第27表 遺物観察表⑩

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
435	縄文土器鉢	包含層		・外面の平行式範間に二段の邊縁刺突文	粗	やや不良	にじ黒(7.5YR5/4)	3.6×3.5cm片		053-07
436	縄文土器鉢	包含層		・外面邊縁上に連続C字状爪彫文 ・陰帯下部に平行沈線	粗	不良	青:にじ黒(7.5YR5/4) 肉:墨(1.5TR4/4)	4.5×3.5cm片	全体的に磨滅激しい	054-10
437	縄文土器鉢	包含層		・外面隆帯上に連続C字状爪彫文 ・陰帯両端に沈線	やや密	やや良	青(1.0TR1/1)	3.2×2.1cm片		059-10
438	縄文土器鉢	包含層		・外面の沈線間に三角形の沈刻	やや粗	やや不良	橙(7.5YR6/6)	4.5×2.0cm片		068-03
439	縄文土器鉢	包含層		・口縁部は僅く内折、内面は直角に面を作る ・外側に平行式範間に2段の邊縁刺突文 ・内側に平行式範間に2段の邊縁刺突文	やや密	良	黒(7.5TR5/4)	口縁部のみ 6.9×3.8cm片	440と同一個体	059-05
440	縄文土器鉢	包含層		・口縁部は僅く内折、内面は直角に面を作る ・外面に平行沈線	やや密	良	黒(7.5TR5/4)	口縁部のみ 1.5×2.4cm片	439と同一個体	042-05
441	縄文土器鉢	包含層		・体部に対し、口縁部は屈曲して聞く ・腹部外面に沈線	やや粗	良	灰青(16TR4/2)	口縁～頸部 7.0×4.3cm片	外面は磨滅激しく調整不明瞭	141-05
442	縄文土器鉢	包含層		・外面に沈線 ・沈線下部には縄文か	粗	不良	黒(7.5TR5/6)	口縁部のみ 5.2×4.9cm片	全体的に非常に磨滅激しい	053-15
443	縄文土器鉢	包含層		・外側には平行の沈線、その下部に斜め刺突文	密	やや良	暗紅(10YR6/2)	6.8×3.7cm片		045-07
444	縄文土器鉢	包含層		・口縁端部(肥厚部)直下にキザミ	やや粗	やや不良	にじ黒(15TR7/3)	口縁部のみ 5.6×3.5cm片		045-11
445	縄文土器鉢	包含層		・富士山形を呈する山形口縁部の側面に縄文、外面に平行沈線	やや密	不良	にじ黒(15TR7/4)	口縁部のみ 4.0×6.0cm片	全体的に磨滅が非常に激しい	055-15
446	縄文土器鉢	包含層		・肥厚部外面に刺突文	やや密	やや良	青:にじ黒(15TR7/2) 肉:墨(15TR4/4)	5.0×4.9cm片		045-01
447	縄文土器鉢	包含層		・口縁端部外面に刺突文	やや密	やや良	にじ黒(15TR8/2)	口縁部のみ 2.3×1.9cm片		045-05
448	縄文土器鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや密	やや良	青:茶白(10TR8/2) 肉:にじ黒(15TR7/3)	口縁～体部 6.0×8.6cm片		061-14
449	縄文土器鉢	包含層		・口縁端部は内擣して肥厚する ・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや密	やや良	青:にじ黒(15TR7/2) 肉:茶白(10TR5/1)	口縁～体部 6.5×5.7cm片		061-05
450	縄文土器鉢	包含層		・口縁部はミガキ ・体部外表面、沈線による曲線間に黒文	やや密	やや良	灰白(7.5TR8/2)	口縁～体部 7.3×6.8cm片		056-07
451	縄文土器鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや不良	青(10TR8/2)	口縁部のみ 2.8×5.3cm片		068-14
452	縄文土器鉢	包含層		・口縁端部は内擣して肥厚する ・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや不良	青(7.5TR7/1)	口縁部のみ 6.2×3.6cm片		057-08
453	縄文土器鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや良	にじ黒(7.5TR7/4)	口縁～体部 8.5×6.9cm片		053-01
454	縄文土器鉢	包含層		・口縁端部は波状に隆起し、肥厚する ・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや良	淡橙(5YR8/4)	口縁部のみ 5.3×3.3cm片		045-15
455	縄文土器鉢	包含層		・口縁端部は波状に隆起し、肥厚する ・外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや良	青:にじ黒(15TR7/2) 肉:茶白(10TR5/1)	口縁部のみ 4.5×4.1cm片	隆起部外面は欠損	054-08
456	縄文土器鉢	包含層		・外面は沈線による曲線間に条線か	やや粗	やや不良	青(10TR8/3)	口縁部のみ 3.7×3.6cm片	外面は磨滅進み、調整不明瞭	068-04
457	縄文土器鉢	包含層		・外面は沈線による曲線間に条線か	やや粗	やや不良	にじ黒(10TR8/3)	口縁部のみ 5.1×4.6cm片		055-09
458	縄文土器鉢	包含層		・外面は沈線による曲線間に縄文か	やや粗	やや良	にじ黒(10TR8/3)	口縁部のみ 4.6×4.9cm片	外面中央は欠損	060-04
459	縄文土器鉢	包含層		・外面は沈線による曲線間に縄文か	やや粗	やや良	青(10TR8/1)	口縁部のみ 7.4×4.0cm片		055-12

第28表 遺物観察表(18)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
460	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線による曲線間に縄文か	やや粗	やや良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 6.7×4.0cm片		065-02
461	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は縄文帯に刺突文 ・口縁部の波頂部外面は凸状	やや密	やや良	外:素白(10YR5/2) 内:青灰(10YR7/4)	口縁部のみ 5.4×5.6cm片	・口縁部の波状隆起 部直下に穿孔か	061-13
462	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部は強く内寄する ・外面は沈線間の縄文帯に刺突文	密	良	外:素白(1.5YR8/1) 内:青灰(2.5Y5/1)	口縁部のみ 4.7×3.2cm片		057-10
463	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は縄文帯に刺突文 ・口縁部の波頂部外面は凸状	やや粗	やや良	外:素白(10YR8/1) 内:青灰(10YR8/3)	口縁部のみ 4.0×3.0cm片		055-10
464	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部裏・外側において、沈線間に縦筋、斜 直筋に刺突	やや粗	やや良	橙(7.5YR6/6)	口縁部のみ 5.9×4.3cm片		055-13
465	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線間の縄文帯	やや粗	やや良	にい黄(7.5YR7/3)	口縁部のみ 5.9×3.5cm片		068-18
466	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間の条線帯	粗	やや良	橙(7.5YR7/6)	口縁・体部 8.0×7.3cm片		065-01
467	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間の条線帯	粗	やや良	青灰(10YR6/1)	口縁部のみ 4.5×3.0cm片		061-08
468	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間の条線帯	やや粗	やや不良	青灰(1.5YR8/3)	口縁部のみ 7.0×4.4cm片	・全体的にやや磨滅	053-09
469	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間の条線帯	やや密	やや良	外:素灰(7.5YR5/1) 内:青灰(7.5YR6/4)	口縁・体部 9.5×7.3cm片		068-10
470	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間の条線帯	やや密	良	にい黄(10YR6/4)	口縁部のみ 14.0×6.3cm片	・口縁部に穿孔 が一ヶ所あり	013-02
471	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間に、棒状工具による垂直壓	やや密	良	外:素青(10YR6/1) 内:青灰(10YR6/1)	口縁部のみ		062-01
472	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線による曲線間に条線 ・口縁に6位辺の波頂部をもつ	やや密	良	外:にい青(10YR5/2) 内:青灰(10YR5/1)	口縁・体部 24.0×16.0cm	・内・外面とも部分的に黒変する	074-01
473	縄文土器 深鉢	包含層		・外面に沈線文	密	良	にい黄(10YR7/4)	口縁部のみ 6.2×5.9cm片	・外側の一端黒変する	085-01
474	縄文土器 深鉢	包含層		・外面に沈線・条線	やや粗	不良	外:素青(7.5YR6/2) 内:青灰(5YR5/4)	口縁部のみ 4.5×5.7cm片	・全体的に磨滅激 しく調整不明瞭	048-04
475	縄文土器 深鉢	包含層		・外面にはば平行する沈線	密	良	にい黄(5YR7/4)	口縁部のみ 4.7×4.0cm片		053-08
476	縄文土器 深鉢	包含層		・外面にはば平行する沈線	やや密	良	にい黄(10YR5/3)	口縁部のみ 3.4×3.2cm片		015-04
477	縄文土器 深鉢	包含層		・外面に沈線	やや粗	やや不良	外:にい青(10YR5/3) 内:青灰(10YR7/6)	口縁部のみ 5.0×3.2cm片	・全体的に磨滅しい	015-05
478	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線間に縄文帯	密	良	黄灰(2.5Y4/1)	口縁部のみ 6.4×3.8cm片		061-06
479	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は直交する3条の沈線間に縄文帯 ・口縁部内面に平行沈線	粗	やや良	外:素青(7.5YR3/1) 内:素青(7.5YR3/4)	口縁・体部 22.0×16.0cm		142-01
480	縄文土器 深鉢	包含層		・既で解説を行った沈線間に縄文 ・既で解説を行った沈線間に縄文 ・既で解説を行った沈線間に縄文	やや粗	やや良	にい黄(10YR7/4)	口縁部のみ 6.7×5.5cm片	・480・485は同一箇所	061-09
481	縄文土器 深鉢	包含層		・既で解説を行った沈線間に縄文 ・既で解説を行った沈線間に縄文 ・既で解説を行った沈線間に縄文	粗	やや良	素灰(7.5YR7/1)	口縁部のみ 7.0×6.8cm片	・480・485は同一箇所	058-04
482	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部裏・外側に凹凸 ・口縁部外面は縄文	やや密	やや良	にい黄(10YR5/3)	口縁部のみ 8.2×5.2cm片	・480・485は同一箇所	060-08
483	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部裏・外側に凹凸 ・口縁部外面は縄文	やや粗	やや良	にい黄(10YR5/1)	口縁部のみ 8.5×6.4cm片	・480・485は同一箇所	060-06
484	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部裏・外側に凹凸 ・口縁部外面は縄文	やや粗	やや良	外:にい黄(10YR5/1) 内:にい黄(10YR5/4)	口縁・体部 15.0×11.0cm	・480・485は同一箇所	061-01
										060-07

第29表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
485	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部内面は、さざなみに整形成し、周縁に1巻の平行縦文 ・直書き式も、それに1巻の直書き式の異文文 ・口縁～体部外縁は繩文	やや粗	やや良	灰(10YR5/1) 12.3×7.6cm	口縁～体部 12.3×7.6cm片	・(1)～(5)は同一事	060-05
486	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部内面は、1巻の平行縦文 ・口縁～体部外縁は繩文	やや粗	やや良	灰(10YR5/4) 12.0×6.5cm	口縁部のみ 12.0×6.5cm片	・(1)～(5)は同一事	060-02
487	縄文土器 深鉢	包含層		・波頭部は肥厚し、中央付近に円孔を1ヶ所、内・外縁とも刺突文	粗	不良	灰(10YR8/8) 4.1×4.2cm	口縁部のみ 4.1×4.2cm片		048-09
488	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部内面は、1巻の平行縦文、それに1巻の直書き式。 ・直書き式は、それに1巻の直書き式。 ・口縁部外縁は、1巻の平行縦文	やや粗	良	灰・黒(10YR5/1) 灰・黒(10YR5/4) 8.4×9.5cm	口縁部のみ 8.4×9.5cm片		063-01
489	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部内面は、1巻の平行縦文、それに1巻の直書き式。 ・直書き式は、それに1巻の直書き式。 ・口縁部外縁には、波は平行する沈線	粗	不良	外・黒(10YR5/1) 外・黒(10YR5/4) 16.4×9.5cm	口縁部のみ 16.4×9.5cm片	・口縁部外縁は磨滅	141-02
490	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部は強く内彎 ・口縁端部外面は沈線・キザミ	やや密	やや良	灰黒(10YR5/1) 5.5×3.5cm	口縁部のみ 5.5×3.5cm片		055-16
491	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部の断面は直角を呈する。 ・口縁端部外面は沈線・キザミ	密	良	灰(10YR5/1) 5.0×3.1cm	口縁部のみ 5.0×3.1cm片		060-03
492	縄文土器 深鉢	包含層		・直書き式は、口縁部上面に沈線・押圧	やや粗	やや良	褐(7.5YR4/3) 5.5×4.6cm	口縁部のみ 5.5×4.6cm片		058-01
493	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に沈線・押圧	密	良	褐(7.5YR4/3) 5.4×4.0cm	口縁部のみ 5.4×4.0cm片		057-11
494	縄文土器 深鉢	包含層		・直書き式は1巻を呈し、直書き式に直書き文	やや密	やや不良	灰(10YR1/1) 8.5×8.3cm	口縁部のみ 8.5×8.3cm片		066-06
495	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面は直角を呈し、直書き式は、直書き式に直書き文	密	良	灰黒(10YR5/1) 7.0×6.0cm	口縁部のみ 7.0×6.0cm片		050-02
496	縄文土器 深鉢	包含層		・直書き式は、直書き式に直書き文、それに1巻の直書き	粗	不良	外・灰黒(10YR6/1) 内・灰(5YR7/6) 2.8×3.2cm	口縁部のみ 2.8×3.2cm片	・全体的に着色量多い	054-06
497	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に2巻の平行縦文、口縁端部に1巻の直書き	やや粗	やや不良	褐(7.5YR4/3) 5.3×3.1	口縁部のみ 5.3×3.1片		057-13
498	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に沈線	やや密	やや良	褐(10YR1/1-1/1) 3.9×2.4cm	口縁部のみ 3.9×2.4cm片		054-13
499	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部内面に、刺突文の両側に沈線 ・外面はナデ	やや密	やや良	灰(10YR5/1) 4.1×4.7cm	口縁部のみ 4.1×4.7cm片		054-07
500	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外面に、沈線・ミガキカ	やや密	やや良	灰黒(10YR5/4) 4.2×3.7cm	口縁部のみ 4.2×3.7cm片		055-02
501	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部外面に、沈線	やや粗	やや良	外・灰(10YR7/2) 内・灰黒(10YR6/3) 4.8×3.8cm	口縁部のみ 4.8×3.8cm片		057-05
502	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に沈線・外縁に擬縄文	密	良	灰(10YR6/4) 5.5×2.7cm	口縁部のみ 5.5×2.7cm片		048-11
503	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に沈線・外面に繩文	やや密	良	外・灰(7.5YR3/3) 内・灰(10YR7/3) 5.8×6.5cm	口縁部のみ 5.8×6.5cm片		048-10
504	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に刺突文	密	良	灰(5YR5/4) 5.0×4.2cm	口縁部のみ 5.0×4.2cm片		048-12
505	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部にキザミ、口縁端部に1巻の直書き	やや粗	やや良	外・灰(10YR4/1) 内・灰(10YR7/3) 5.8×4.5cm	口縁部のみ 5.8×4.5cm片		054-02
506	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外縁に、近縄端と沈線が平行する ・口縁端部内面は、段をつくる	やや密	やや良	外・灰(3.5YR3/3) 内・灰(10YR4/1) 4.5×2.9cm	口縁部のみ 4.5×2.9cm片		054-09
507	縄文土器 深鉢	包含層		・直書き式上面に直書き式前、その両側にこま 状突起を配する ・口縁端部上面に2巻の平行直書きをした後、直書き式に沿って外縁にキザミ	やや粗	やや良	褐(10YR4/1) 6.2×4.8cm	口縁部のみ 6.2×4.8cm片		054-03
508	縄文土器 深鉢	包含層		・外縁、2巻の平行直書きによる直書きに直書き	やや粗	やや不良	灰(5YR7/3) 13.2×10.0cm	口縁～体部 13.2×10.0cm		058-02

第30表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
509	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に繩文帯。	やや粗	良	にいき縄(10YR5/2) 7.9×7.5cm片	口縁部のみ		061-10
510	縄文土器 注口土器	包含層		・口縁部外側は、4条のはば平行する沈線が沈刷に突き当たる文様。	やや粗	やや不良	にいき縄(7.5YR5/4) 5.0×3.7cm片	口縁部のみ		062-02
511	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外側は、3条の平行凹線文。	粗	不良	にいき縄(7.5YR5/4) 8.0×4.0cm片	口縁部のみ	・全体的に磨滅激しい。	141-06
512	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、条線後、一部ナデ。 ・口縁部外面に粘土接合痕あり。	著	良	にいき縄(7.5YR7/4) 10.8×6.7cm片	口縁部のみ	・外面に指オサエ痕多い。	066-04
513	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、かすかに条線が残る。	粗	不良	外:にいき縄(10YR5/4) 内:灰黄(15Y7/2) 5.2×6.1cm片	口縁部のみ	・外面が特に磨滅激しく調整不明瞭。	059-07
514	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縱方向の細かい条線。	やや粗	やや不良	外:灰黄(7.5YR6/2) 内:浅青(10YR6/3) 10.5×7.2cm片	口縁部のみ		054-11
515	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、5条の平行条線による文様か。	やや密	やや良	灰黄(10YR5/2) 4.9×3.9cm片	口縁部のみ		057-02
516	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外側は、細かい条線が複数走り、口縫部裏面は、やや幅広の条縞が走る。	やや密	不良	外:灰(7.5YR7/6) 内:灰(7.5YR6/8) 6.5×5.5cm片	口縁部のみ	・全体的に磨滅が非常に激しい。	068-15
517	縄文土器 深鉢	包含層		・口縫部裏面は淡灰に沿った条縞。 ・口縁部外面は、縱方向の条線。	やや粗	不良	外:灰(7.5YR7/6) 内:にいき縄(10YR5/4) 4.7×5.0cm片	口縁部のみ	・全体的に磨滅が非常に激しい。	055-11
518	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縱方向のやや幅広な条縞と、斜方向の細い条縞。	やや粗	やや不良	外:灰(2.5Y4/1) 内:灰白(2.5Y7/1) 19.5×9.8cm片	口縁部のみ		018-01
519	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は縄文。	やや粗	やや良	外:にいき縄(7.5YR5/2) 内:灰灰(7.5YR5/1) 8.0×5.7cm片	口縁部のみ		055-01
520	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は縄文。 ・口縫部外面は、表をつくり耙する。	やや密	やや良	にいき縄(10YR5/4) 5.5×5.5cm片	口縁部のみ		051-05
521	縄文土器 深鉢	包含層		・口縫部上面に刺突文、口縁部外面に縄文か。	やや密	やや良	にいき縄(7.5YR7/3) 4.8×6.2cm片	口縁部のみ	・外面は磨滅進む。	056-09
522	縄文土器 深鉢	包含層		・口縫部内面に沈線。	密	良	にいき縄(7.5YR6/4) 5.0×4.6cm片	口縁部のみ		057-12
523	縄文土器 深鉢	包含層		・口縫部内面に沈線。	粗	不良	垂(2.5YR7/6) 5.5×5.4cm片	口縁部のみ	・外面は剥離、内面は磨滅激しい。	051-04
524	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で無文。	やや密	やや良	外:灰黄(7.5YR6/2) 内:灰黄(10YR5/2) 9.8×8.5cm片	口縁部のみ		060-03
525	縄文土器 深鉢	包含層		・外面はナデ調整だが、条痕残る。	著	良	にいき縄(10YR7/4) 5.8×9.0cm片	口縁部のみ		056-08
526	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。 ・口縫部に焼成前穿孔。	密	良	垂(7.5YR7/6) 5.5×5.3cm片	口縁部のみ		059-06
527	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや不良	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:浅青(10YR8/2) 8.6×5.1cm片	口縁部のみ	・外面は磨滅激しく調整不明瞭。	068-11
528	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや不良	外:垂(7.5YR6/6) 内:垂(7.5YR4/4) 16.0×7.8cm片	口縁部のみ	・報535と同一個体か。	051-14
529	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	外:灰黄(10YR5/2) 内:にいき縄(10YR5/1) 5.2×5.3cm片	口縁部のみ		054-15
530	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	粗	やや良	外:灰黄(10YR7/2) 6.0×5.6cm片	口縁部のみ	・全体的に磨滅激しい。	053-12
531	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	にいき縄(10YR7/2) 6.9×6.4cm片	口縁部のみ		055-03
532	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	外:灰黄(10YR6/1) 内:にいき縄(10YR7/4) 4.3×5.4cm片	口縁部のみ		068-01
533	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	灰黄(7.5YR5/2) 5.3×4.6cm片	口縁部のみ		057-01

第31表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
534	縄文土器 深鉢	包含層		・内・外面ともミガキで無文。	やや密	やや良	外:黒褐(7.5YR8/1) 内:こぶし(7.5YR8/1)	口縁部のみ 6.3×5.5cm片		052-01
535	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:茶褐(7.5YR6/6) 内:こぶし(7.5YR4/4)	口縁～体部 14.2×12.0cm片	・報528と同一個 体か。	058-03
536	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:黒褐(7.5YR8/1) 内:こぶし(7.5YR8/1)	口縁部のみ 5.0×4.5cm片		057-07
537	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:茶褐(7.5YR8/2) 内:こぶし(7.5YR7/4)	口縁部のみ 5.0×4.3cm片		058-06
538	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキで無文	やや密	良	にふく(7.5YR6/4)	口縁部のみ 5.2×4.0cm片		051-07
539	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキで無文	やや密	良	黒褐(7.5YR8/1)	口縁部のみ 5.4×5.0cm片		051-13
540	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキで無文	やや密	良	にふく(7.5YR6/3)	口縁部のみ 5.1×4.0cm片		053-13
541	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:黒褐(7.5YR8/1) 内:茶(7.5YR6/6)	口縁部のみ 3.9×4.0cm片		051-02
542	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや不良	外:黒褐(7.5YR8/1) 内:こぶし(7.5YR8/2)	口縁部のみ 12.6×9.2cm片		018-02
543	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	密	やや良	外:茶褐(7.5YR8/2) 内:こぶし(7.5YR7/4)	口縁部のみ 5.6×3.2cm片		055-02
544	縄文土器 深鉢	包含層		・ミガキ調整で、無文。	やや密	やや良	灰褐(7.5YR8/2)	口縁部のみ 5.1×3.8cm片		051-11
545	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキで、無文。	やや密	やや不良	灰黒褐(10YR8/2)	口縁部のみ 6.0×3.8cm片	・口縁端部の一部は剥離。	068-08
546	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	佳(7.5YR7/5)	口縁部のみ 3.5×3.2cm片		051-09
547	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	外:黒褐(7.5YR8/1) 内:こぶし(7.5YR7/4)	口縁部のみ 3.9×5.2cm片		053-16
548	縄文土器 深鉢	包含層		・ミガキ調整で、無文。	やや密	やや良	明黒褐(7.5YR7/2)	口縁部のみ 6.5×3.0cm片	・外面下部は剥離。	051-12
549	縄文土器 深鉢	包含層		・ミガキ調整で、無文。	密	良	にふく(7.5YR8/3)	口縁部のみ 3.5×4.2cm片		068-05
550	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:茶白(7.5YR8/1) 内:灰褐(7.5YR8/2)	口縁部のみ 3.6×3.9cm片		051-10
551	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	良	にふく(7.5YR7/4)	口縁部のみ 3.1×2.7cm片		068-06
552	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。 ・口縁端部外面は、段をもつ肥厚する。	やや粗	やや良	外:灰褐(7.5YR8/2) 内:灰褐(7.5YR8/3)	口縁部のみ 4.2×2.6cm片		053-10
553	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。 ・口縁端部は、内側へ折り返す形。	やや粗	良	灰黒褐(10YR8/2)	口縁部のみ 2.7×3.0cm片		068-12
554	縄文土器 深鉢	包含層		・ミガキ調整で、無文。	やや密	やや良	褐(7.5YR8/1)	口縁部のみ 5.5×2.5cm片		057-04
555	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外面はナデ、口縁端部～口縁部内面はミガキか。	やや粗	やや良	外:褐(7.5YR8/2) 内:灰褐(7.5YR8/2)	口縁部のみ 5.5×2.5cm片		057-09
556	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に 櫛状工具による条線文か。	粗	やや不良	外:浅黄(7.5YR8/4) 内:浅黄(7.5YR8/3)	体部のみ 5.5×6.1cm片		068-07
557	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に 櫛文帯。	粗	やや不良	浅黄(10YR8/3)	体部のみ 6.2×7.2cm片		055-08
558	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に 櫛文帯。	粗	やや不良	外:灰青(10YR8/2) 内: (10YR4/1)	体部のみ 6.2×5.5cm片	・外面の一部剥離。	053-06

第32表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
559	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	粗	やや良	外:淡青(10Y8/3) 内:褐灰(2.5Y5/2)	体部のみ 5.3×5.9cm片		053-11
560	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に条線帯か。	粗	不良	褐青(10YR7/6)	体部のみ 6.3×6.2cm片	全体的に非常に磨滅激しい。	059-04
561	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に縄文帯か。	やや密	やや良	白(10YB8/2)	体部のみ 4.8×5.1cm片		048-02
562	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文帯か。	やや密	やや良	灰青(10YR5/2)	体部のみ 5.7×5.3cm片		051-06
563	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや粗	やや良	灰青(7.5YR5/2)	体部のみ 7.0×4.4cm片	内面の一部黒変する。		048-07
564	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に縄文帯。	密	良	外:灰青(10YR5/2) 内:こぶし青(10YR5/1)	体部のみ 7.5×5.4cm片		013-03
565	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	やや粗	やや良	にぼい青(10YR7/3)	体部のみ 4.9×8.0cm片		054-05
566	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや粗	やや良	灰白(10YR8/2)	体部のみ 3.5×3.2cm片			045-13
567	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや密	良	にぼい青(10YR7/1)	体部のみ 3.5×3.0cm片			045-12
568	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に縄文帯。	密	良	外:こぼい青(10YR7/2) 内:灰青(7.5YR6/2)	体部のみ 5.2×4.2cm片		055-04
569	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	やや密	良	外:こぼい青(10YR5/2) 内:黒褐(2.5Y3/1)	体部のみ 4.8×3.6cm片		048-01
570	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや粗	やや不良	外:褐灰(5YR8/1) 内:こぼい青(10YR5/2)	体部のみ 4.4×4.7cm片			045-14
571	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや密	やや良	灰青(7.5YR5/1)	体部のみ 5.0×3.3cm片			059-03
572	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に縄文帯。	やや密	やや良	外:淡青(10YR8/3) 内:にぼい青(10YR5/2)	体部のみ 3.9×3.9cm片		045-06
573	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、2条の沈線による区画内に条線文。	やや密	やや良	灰青(10YR5/2)	体部のみ 4.2×3.2cm片		045-09
574	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に葉状工具による条線文か。	やや粗	やや不良	浅青(10YR8/4)	体部のみ 5.0×5.7cm片	全体的に磨滅激しい。	055-07
575	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや密	やや良	にぼい青(10YR7/4)	体部のみ 5.0×6.3cm片			054-16
576	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや密	やや良	青(7.5YR7/5)	体部のみ 6.1×5.1cm片			059-08
577	縄文土器 深鉢	包含層	同上	やや粗	やや良	外:淡青(2.5Y8/4) 内:灰青(2.5Y6/2)	体部のみ 7.5×5.1cm片			053-14
578	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に条線文帯。	やや粗	やや良	浅青(10YR8/3)	体部のみ 9.4×9.9cm片		053-02
579	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、横走する沈線下部に条線文。	やや粗	やや良	外:にぼい青(10YR7/4) 内:こぼい青(10YR5/2)	体部のみ 6.8×5.0cm片		042-09
580	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線に沿った条線文帯。	やや密	やや良	外:灰青(10YR8/1) 内:こぼい青(10YR5/3)	体部のみ 5.0×4.7cm片		053-17
581	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線下部に条線文。	やや密	やや良	外:灰青(10YR8/3) 内:褐灰(10YR5/1)	体部のみ 3.0×4.5cm片		048-05
582	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に条線文。	やや密	やや良	浅青(10YR8/3)	体部のみ 4.5×4.2cm片	内面はほとんど剥離。	048-08
583	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線文。	粗	やや不良	青(7.5YR6/6)	体部のみ 4.5×5.1cm片	外面は磨滅進む。	054-01

第33表 遺物観察表24

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
584	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線文	やや密	やや良	外: 黒褐 (10YR4/1) 内: にじ黒 (10YR7/1)	体部のみ 6.1×5.6cm片		048-06
585	縄文土器 注口土器	包含層		同 上	やや粗	やや良	後素燒 (10YR8/3)	体部のみ 6.0×6.0cm片		053-03
586	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや密	やや良	にじ黒 (5YR7/4)	体部のみ 6.5×5.5cm片		153-04
587	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや密	やや良	外: 黒褐 (10YR7/1) 内: 黑褐 (10YR6/2)	体部のみ 5.2×5.6cm片		014-01
588	縄文土器 深鉢	包含層		・外面に沈線文	やや粗	やや良	にじ黒 (5YR5/4)	体部のみ 5.0×4.7cm片		045-10
589	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや粗	やや良	灰黒褐 (10YR6/2)	体部のみ 4.9×5.5cm片		045-08
590	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや粗	やや良	にじ黒 (7SYR7/4)	体部のみ 4.8×5.0cm片	内面の一部剥離	013-01
591	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや密	やや不良	にじ黒 (7SYR7/1)	体部のみ 5.0×3.6cm片	内面の一部剥離	048-03
592	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	粗	不良	後素燒 (10YR8/4)	体部のみ 3.1×2.5cm片	全体的に磨滅しい	014-05
593	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に 縄文帯	粗	やや不良	外: 黑褐 (10YR6/2) 内: にじ黒 (10YR8/3)	体部のみ 3.1×3.0cm片		050-06
594	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は 3 条の沈線の各々の両 端に縄文か	密	良	にじ黒 (10YR5/2)	体部のみ 4.8×4.5cm片		053-18
595	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による区画内に 縄文や、中央に凹部をもつ	やや粗	良	外: 黑褐 (10YR4/1) 内: にじ黒 (10YR7/1)	体部のみ 5.9×7.1cm片	外にスス付着か	061-11
596	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に 斜方向の縄文	やや粗	やや良	にじ黒 (7SYR5/3)	体部のみ 5.7×5.4cm片		048-13
597	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に 縄文帯	やや粗	やや良	外: にじ黒 (5YR5/4) 内: 黑褐 (10YR8/2)	体部のみ 5.8×6.5cm片		054-14
598	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、3条の沈線下部に縄文	やや密	やや良	外: 黑褐 (10YR4/2) 内: にじ黒 (7SYR7/4)	体部のみ 5.9×4.5cm片		051-03
599	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、3条の沈線による直 線間に縄文・刺突文	やや粗	やや良	外: 黑褐 (10YR4/2) 内: にじ黒 (7SYR7/1)	体部のみ 6.4×4.6cm片		061-02
600	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に 縄文	やや密	やや良	灰褐 (7.5YR5/2)	体部のみ 5.2×3.2cm片		050-04
601	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、6条の沈線による直 線間に縄文帯	密	良	外: にじ黒 (10YR7/3) 内: 黑褐 (10YR8/1)	体部のみ 10.7×10.0cm片	外に一部にスス付着	055-06 059-12 059-13
602	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に 縄文帯	密	良	褐灰 (10Y5/1)	体部のみ 3.4×3.6cm片		059-11
603	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや密	やや良	外: 黑褐 (10YR6/1) 内: 黑白 (10YR8/2)	体部のみ 5.6×5.3cm片		056-06
604	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による直線間に縄文帯 ・外面上端はナデによる内彫	やや密	やや良	外: にじ黒 (10YR7/3) 内: 黑褐灰 (10YR7/1)	体部のみ 14.1×7.5cm片	外に一部にスス付着	064-01
605	縄文土器 深鉢	包含層		・背面は、横方向の波状3条により区隔される、 区隔上段に斜方向の彫刻、区隔下段に、横方向の 彫刻、彫刻が交差する部分の波状彫	やや粗	良	にじ黒 (10YR7/3)	体部のみ 7.1×8.8cm片		058-06
606	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縱方向の条線	やや粗	やや良	黑褐 (7.5YR7/2)	体部のみ 9.3×5.8cm片		050-11
607	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、条線	やや粗	やや良	外: 褐褐 (7SYR8/3) 内: 黑褐 (10YR5/2)	体部のみ 6.7×7.4cm片		050-09
608	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縱方向の条線	密	やや良	褐灰 (5YR5/1)	体部のみ 6.1×8.4cm片	外面上部は一部欠損	059-02

第34表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
609	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縱方向に弧を描く格好の条線	粗	やや不良	外:灰黒(10YRA/2) 内:灰青(10YR8/3)	体部のみ 8.5×6.3cm片		050-08
610	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縱方向にやや弧を描く格好の条線	密	良	外:褐灰(15YRA/1) 内:浅青(10YR8/3)	体部のみ 7.1×5.7cm片		058-07
611	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縦方向の沈線・その下部に籌状工具による曲線状の条線	やや粗	やや良	外:浅青(10YR8/3) 内:灰青(10YR8/4)	体部のみ 7.0×6.9cm片		061-07
612	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、条線	密	やや不良	浅青(7.5YRA/3) 8.9×4.1cm片	体部のみ 外側にスス付着		058-08
613	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや密	やや良	外:黒褐(7.5YRA/1) 内:浅青(10YR8/3)	体部のみ 6.9×5.7cm片	外側はやや磨滅気味	050-10
614	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	粗	やや良	灰黒(10YRA/2)	体部のみ 4.1×3.5cm片		051-01
615	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや粗	やや良	内:灰青(10YR8/3) 3.4×4.0cm片	体部のみ		014-03
616	縄文土器 深鉢	包含層		同 上	やや粗	やや良	外:赤灰(15YR8/1) 内:灰白(10YR8/2)	体部のみ 3.0×4.0cm片	外側に打ち欠きが多い	068-09
617	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、ほぼ直角に交わる格好の3条の沈線	粗	やや強	灰黒(2.5YR8/2)	体部のみ 4.0×4.8cm片		050-01
618	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縄文か	やや密	やや強	外:LSV-黒(10YR7/2) 内:浅青(10YR8/3)	体部のみ 4.0×4.1cm片		068-02
619	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縄文	やや粗	やや良	外:赤灰(15YR8/1) 内:LSV-黒(10YR7/2)	体部のみ 8.3×6.6cm片		050-05
620	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキ	やや密	やや良	内:灰青(7.5YR7/3)	底部のみ 4.5×3.0cm片		052-03
621	縄文土器 深鉢	包含層		・内外面ともナデ	やや粗	やや不良	外:灰青(5YR7/3) 内:灰白(5YR8/1)	底部のみ 6.5×3.2cm片	全体的に磨滅進む	062-12
622	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキ	やや粗	やや良	灰黒(7.5YR8/2)	底部のみ 5.3×3.0cm片が欠損		052-04
623	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ミガキ・内面ナデ	やや密	やや良	外:灰青(10YR8/3) 内:灰青(10YR7/4)	底部のみ 5.5×2.4cm片		013-04
624	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ミガキ内面ナデ ・外面の接地面はナデ	やや粗	やや不良	褐灰(5YR4/1)	底部のみ 3.0×2.0cm片	626-629と同一個体か	056-04
625	縄文土器 深鉢	包含層		・内・外面ともナデ	粗	不良	外:浅灰(3.5YR8/4) 内:灰灰(3.5YR8/1)	底部のみ 5.0×3.0cm片が非常に欠け		068-19
626	縄文土器 深鉢	包含層		・内・外面ともナデ	やや密	やや不良	褐青赤褐色(5YR1/3)	底部のみ 4.0×4.5cm片	624-629と同一個体か	052-02
627	縄文土器 深鉢	包含層		・外面沈線直下に縄文、外面の接地面ナデ ・内面ナデ	やや粗	やや良	灰黒(2.5YR7/2)	底部のみ 4.0×1.5cm片		054-12
628	縄文土器 深鉢	包含層		・外面の接地面に網代模様あり ・内面はミガキ	やや密	やや良	褐(2.5YR6/6)	底部のみ 4.5×3.2cm片		051-08
629	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線内に結節構文 ・内面、外面の接地面はナデ	やや密	やや不良	褐青(5YR5/2)	底部のみ 4.5×2.6cm片	624-626と同一個体か	042-02
630	縄文土器 鉢	包含層 底径:(6.0)		・内・外面ともナデ	やや粗	やや不良	浅青(10YR8/2) 1 / 4 存	底部のみ 1 / 4 存	624-626と同一個体か	052-09
631	縄文土器 深鉢	包含層 底径:(4.6)		・外面ミガキ、外面の接地面ナデ ・内面ナデ	やや粗	やや良	浅青(10YR8/3) 1 / 4 存	底部のみ 1 / 4 存		052-11
632	縄文土器 深鉢	包含層 底径:(5.9)		・内・外面ともミガキ	やや粗	やや良	外:灰青(10YR8/3) 内:褐灰(10YR5/1)	底部のみ 1 / 4 存		052-10
633	縄文土器 深鉢	包含層 底径:(7.2)		・内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰白(10YR8/1)	底部のみ ほほ完形		052-07

第33表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
634	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.0)	・内・外面ともナデ	粗	不良	灰白(5YR7/1) 内:橙(5YR7/6)	底部のみ 1 / 4 存		056-01
635	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.3)	・内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰白(2.5YR7/2)	底部のみ 1 / 4 存		056-03
636	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.7)	・内・外面ともナデ	粗	不良	浅黄(7.5YR8/4)	底部のみ 1 / 4 存	全体的に磨滅激しい	056-02
637	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.1)	・内・外面ともナデ	粗	不良	灰白(10YR7/3)	底部のみ 2 / 3 存	全体的に磨滅激しい	052-05
638	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(8.0)	・内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰白(7.5YR6/4)	底部のみ 2 / 3 存		141-01
639	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(9.0)	・内・外面ともナデ	やや粗	やや不良	灰白(7.5YR7/3)	底部のみ 1 / 3 存		052-08
640	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(6.6)	・内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰白(7.5YR6/2)	底部のみ 1 / 2 存		052-06
641	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(9.0)	・外面ミガキ、外面の接地面ナデ ・内面ナデ	やや密	やや良	外:灰白(2.5Y7/1) 内:灰白(2.5Y6/1)	底部のみ 1 / 6 存	内・外面とも欠損多い	018-03
642	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(9.4)	・内・外面ともナデ	やや密	やや良	灰白(10YR7/4)	体部～底部 1 / 2 存	全体的に磨滅進む	056-06
643	縄文土器 深鉢	包含層		・全体的にナデ ・口縁部外面に、突宍文	やや粗	やや良	灰白(7.5YR7/4)	口縁部のみ 3.5×4.1cm片		141-07
644	縄文土器 土製円盤	包含層		・外面には平行する沈線間に ギザギザ	やや粗	やや良	橙(5YR6/6)	3.1×3.3cm片	外面の中央に5mm の大い小石含む。	042-03
645	縄文土器 深鉢	包含層	口径:(28.0)	・口縁部外側は、沈線による表裏間に横文。 その後、部分的に擦り削し ・体部表面ナデ、内面ヨコナデ ・底盤、内・外側ともナデ	やや密	やや良	外:灰白(10YR5/3) 内:浅黄(10YR8/3)	2 / 3 存	口縁部～頸部外面 にスス付着	012-01
646	弥生土器 広口壺	包含層	口径:(13.6)	・口縁部外側ナデ、内面は加工による横文 ・底盤・脚部外側、5つの横溝と豊富な、彫刻 工具による削文、内面、底盤ヨコナデ ・脚部下の外側へうさぎ耳、内面ナデ	密	良	灰白(10YR7/3)	口縁部は半形 体部3/4存		067-01
647	弥生土器 広口壺	包含層	口径:(16.0)	・口縁端部ヨコナデ ・口縁部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	淡黄(5YR8/4)	口縁部のみ 1 / 5 存		046-01
648	弥生土器 広口壺	包含層	底径:(3.8)	・体部外面ハケメ、内面板ナデか ・底部横面ヨコナデ、外側指オサエ	密	良	外:灰白(5Y8/1) 内:淡黄(2.5Y8/1)	体部～底部 1 / 2 存		047-02
649	弥生土器 高杯	包含層		・杯部・内・外側ともギザ ・脚部底ヨコナデのち彫刻・彫刻工具による 削文、内面、脚部表面ヨコナデ	密	良	浅黄(7.5YR8/4)	脚部(底部) 2 / 3 存 脚部 存	脚部に4ヶ所の穿孔あり	069-01
650	弥生土器 高杯	包含層	底径:(14.5)	・部外面ハケメ後ミガキ、内面 ハケメ後ナデ・口縁端部ヨコナデ	密	良	外: 橙(5YR7/6) 内: 橙(5YR6/6)	部 1 / 3 存 孔あり	部 脚部に1ヶ所の穿孔あり	069-02
651	弥生土器 台付壺	包含層	底径:(6.5)	・全体的にナデ	やや粗	やや良	灰白(10YR8/2)	胸部のみ 完形		038-01
652	弥生土器 台付壺	包含層	口径:(14.8)	・口縁部外側ハケメ後ナデ、内面ヨコナデ ・体部内・外側ともハケメ	やや密	やや不良	外: 褐灰(10Y4/1) 内: 褐灰(2.5Y8/1)	口縁～体部 1 / 3 存	体部外面は広く 剥離している	043-01
653	弥生土器 壺	包含層	底径:(3.6)	・外面ハケメ、内面ハケメ	やや粗	やや不良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ 完形		038-03
654	土師器 壺	包含層	口径:(11.2) 高:(12.7)	・全体的にハケメ後ミガキ	やや粗	やや不良	灰白(5Y7/1)	2 / 3 存	・全体的に磨滅(跡跡不鮮明) ・脚部の一部に剥離	069-03
655	土師器 壺	包含層	口径:(13.6) 高:(6.5) 高:(14.8)	・口縁部・体部外側ハケメ後ナデ、体部内裏 は削文のため調査不鮮明 ・底盤ヨコナデのうち2ヶ所、底部外側ナデ	粗	不良	灰白(5Y7/2)	1 / 3 存	・脚部に2ヶ所の 削文、底盤は完形	069-04
656	土師器 鉢	包含層	口径:(17.0) 高:(6.4) 高:(15.5)	・口縁端部ヨコナデ ・体部内・外側ともハケメ後ナデ ・底部ナデ	やや密	やや良	外:灰白(10YR8/1) 内:灰白(5Y8/1)	1 / 3 存	全体的に磨滅激しく 調整不明瞭	070-01
657	土師器 碗	包含層	口径:(17.2)	・口縁端部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄(10YR8/3)	1 / 5 存		046-04

第36表 遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
658	土師器 杯	包含層	口径:(11.8) 高さ:4.0	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	密	良	橙(5YR7/6)	1／3存	全体的に打ち欠き痕多	039-03
659	土師器 杯	包含層	口径:(15.3) 高さ:4.0	同上	密	やや良	外:淡橙(5YR8/4) 内:淡橙(5YR8/3)	1／6存	口縁部外面に粘土接合痕あり	046-03
660	土師器 皿	包含層	口径:(17.3) 高さ:2.2	同上	密	やや良	橙(5YR7/8)	1／5存	底部内・外面ともスス付着	046-02
661	土師器 皿	包含層	口径:(16.8) 高さ:2.6	同上	密	良	外:淡橙(5YR8/6) 内:橙(5YR7/8)	1／8存	口縁・底部内面にスス付着か	047-01
662	土師器 杯	包含層	口径:(9.0) 高さ:4.0	・杯部～脚部外面ハケメ、内面ナデ ・裾部端部ヨコナデ	密	良	橙(5YR7/8)	はぼ完形	・脚部面に粘土接合痕あり ・外表面や底面進化	134-04
663	土師器 杯	包含層	口径:(9.4) 高さ:4.0	・底部外側ヨコナデ、内面ミギキ ・脚部外側ハメ、内面着色ナデ ・底部外側と内側向のハメヨコナデ	密	良	淡黄橙(7.5YR8/4) 脚底(7.5YR5/1) 灰白(10YR8/1)	1／3存	底部内面のみ黒変する	134-03
664	須恵器 杯	包含層	口径:(9.4)	・口縁～体部ヨコナデ	密	やや不良	脚底(7.5YR5/1) 灰白(10YR8/1)	1／3存		047-03
665	須恵器 杯	包含層	高台径:(11.0)	・基盤外側ハメ、内面ハラケヅイ ・脚部外側ヨコナデ、内側ハラケヅイ ・高台はつりけ	密	良	灰(N5/0)	はぼ完形	・底部は定形 ・体部1／3存	047-04
666	土師器 甕	包含層	口径:(15.5)	・口縁部ヨコナデ、体部ハメ ・口縁部は水手方向に打ち出し ・高台はつりけ	やや密	やや良	灰白(10YR8/2)	1／3存	口縁部外面にスス付着	139-01
667	灰釉陶器 椀	包含層	口径:(14.3) 底径:(6.8) 高さ:(4.1)	・口縁～底部内面ヨコナデ、底部 外側回転式切り後高台はつりけ	やや密	良	灰白(5YR8/2)	1／3存	口縁～体部外面に 灰釉つけかけか 底部は定形	139-03
668	綠釉 陶器	包含層	高台径:(6.0)	・底部ヨコナデ後、外面に高 台はつりけ	やや粗	不良	灰白(2.5YR8/2) 底、外蓋の一部は オーバーブル(5YR8/1)	はぼ	全体的に青緑が非常 に激しく、繊維は外 面にわざかに残る	017-09
669	山皿	包含層	口径:(9.8) 底径:(5.2) 高さ:3.3	・口縁～底部内面ヨコナデ、底部外側回転式切 り後、高台はつりけ	やや密	良	灰白(N8/1) 底部外蓋は部分的に 赤紫(10R8/5)	1／6存	・底部底面に粘土接合 ・高台ミギキ ・底部外蓋の一部は 赤紫(10R8/5)	038-05
670	山皿	包含層	口径:(8.5) 底径:(4.0) 高さ:2.8	同上	やや粗	良	灰白(7.5YR8/1)	1／3存	・内面にうすく底面付着 ・底部外蓋は部分的に 赤紫(10R8/5)	039-02
671	綠釉 小皿	包含層	口径:(10.2) 底径:(4.1) 高さ:(2.6)	・口縁～底部内面ヨコナデ、 底部外側回転式切り	やや密	やや良	淡黄(2.5YR8/3)	はぼ完形	口縁部に灰釉つ けかけ	138-01
672	陶器 甕	包含層	口径:(26.0)	・口縁部は外側に折り返し	やや粗	良	にじ青(5YR5/3)	1／3存	口縁～体部 常滑漬	139-02
673	平瓦片	包含層		・凸面はハラケヅイ、凹面は布目痕	密	不良	古:青緑(5YR8/3) 凸:灰白(2.5YR7/2)	6.1×5.9cm片	全体的に磨滅非 常に激しい	049-07
674	加工円盤	包含層		・外表面はタタキ、内面は青海波文	密	良	外:淡紫(5P6/1) 内:灰白(N7/6)	3.5×4.2cm片	須恵器を転用	049-05
675	加工円盤	包含層		・内・外面ともナデ ・断面は部分的に研磨	やや密	やや良	外:灰白(7.5YR8/2) 内:青白(5YR8/3)	3.2×3.9cm片	中世陶器の体 部を転用	049-06

（注）321～350については本報告書で新たに遺構番号は与えていないので、調査時のものを示す。

第37表 遺物観察表(2)

報告書抄録

ふりがな	うえのがいといせき						
書名	上ノ垣外遺跡						
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告						
卷次	II						
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	123-2						
編著者名	伊藤克幸、田村陽一、西村修久						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732						
発行年月日	西暦 1996年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上ノ垣外遺跡	三重県多気郡 大字荒蒔字上 ノ垣外・大字 相可字茶木ノ 下	22441	276	34° 29' 36"	136° 33' 15"	19900723～ 19900912 19930128～ 19930201 19930823～ 19940127 19940418～ 19940831	試掘 6.8 試掘 9.6 1,950 3,050 計 5,146	一般国道42号 松阪・多気バ イパス建設に 伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
上ノ垣外遺跡	集落跡	縄文～室町	土坑 前方後方型周溝墓 方形周溝墓 竪穴住居 掘立柱建物 溝 井戸	縄文土器、石器、大珠 弥生土器 土師器、須恵器 灰釉陶器、綠釉陶器 山茶碗、中世陶器	縄文後期の大珠（梗玉 ？製）が出土 古墳前期（欠山式期） の前方後方型周溝墓を 検出

平成 8(1996) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 5 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 123-2

・般国遺42号松坂・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅱ

上ノ垣外遺跡

1996年3月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
